

鳥取県西伯郡岸本町

久古第3遺跡・貝田原遺跡・林ヶ原遺跡  
発掘調査報告書

中国横断自動車道岡山・米子線建設工事及び  
主要地方道名和岸本線道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1984

財団法人 鳥取県教育文化財団

## 序 文

秀峰大山を東に望み、その西麓に位置する岸本町は、大寺廃寺等に代表されるごとく古くから文化遺産の数多い町であります。町内を流れる日野川本支流の清流は悠久の歴史の流れを伝え、両岸の緑豊かな台地は古代の人々の素朴な生活の場であったことがうかがえます。

このたび、日本道路公団による中国横断自動車道岡山・米子線建設工事、鳥取県による主要地方道名和岸本線道路改良工事が実施されることに伴い、事前の発掘調査を当財団が起業者から委託を受けて行ってきました。

調査の結果、久古第3、貝田原、林ヶ原の各遺跡で数多くの遺構の実態が明らかとなり古代史に新たな資料を加えることができました。なお調査範囲が遺跡地内の一部分であり今後の調査により詳細な郷土古代史が解明されることを期待するものであります。そしてこの報告書が多くの人への文化財保護の啓発となり、伯耆の古代史解明の一助ともなれば誠に幸いです。

末尾ながら、この調査に全面的な協力をいただいた、地元久古、林ヶ原部落をはじめ関係の各位に対して心から感謝し厚くお礼を申し上げます。

昭和59年3月

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 西 尾 邑 次

## 例 言

1. 本報告書は、日本道路公団による中国横断自動車道岡山・米子線（以下、中国横断道）建設工事に先だつ久古第3、貝田原、林ヶ原遺跡、および鳥取県土木部による主要地方道名和岸本線（以下、主要地方道）道路改良工事に先だつ久古第3遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 久古第3遺跡は西伯郡岸本町久古字下向田、向田に、貝田原遺跡は同所字ハバタ、草田畑、御休堂、草田、宮ノ前に、林ヶ原遺跡は同町清原字狐塚原に所在する。
3. 調査は、鳥取県文化財保護審議会、鳥取県教育委員会文化課、鳥取県埋蔵文化財センターの指導のもとに、昭和57年度は中国横断道分については坂本敬司、高口勝人、長岡充展、主要地方道分については野崎正美が行い、昭和58年度は高口勝人、賀須井智、長岡充展、大賀靖浩、笹尾千恵子が行った。
4. 本報告書の執筆並びに編集は、久古第3遺跡については坂本、高口、長岡、野崎の4名、貝田原、林ヶ原遺跡については高口、賀須井、長岡、大賀、笹尾の5名の討議にもとづいて行った。
5. 本報告書編集に際し、「青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」、「伯耆国庁発掘調査報告書（第5・6次）」、「陶色Ⅲ」、「太田十二社遺跡発掘調査報告書」を参考にした。
6. 遺物の実測及びトレースは、鳥取県埋蔵文化財センター並びに各調査員が行った。
7. 本報告書に使用した方位は、すべて磁北をさす。
8. 調査に関し、岸本町、岸本町教育委員会、岸本中学校、八郷小学校の協力、久古、林ヶ原、真野、福原、番原、清山、丸山、吉定、立岩、口別所、坂長、岸本、押口部落の方々から参加、援助を得た。銘記して感謝いたします。

## 調査関係者一覧

調査指導 鳥取県文化財保護審議会  
鳥取県教育委員会文化課  
鳥取県埋蔵文化財センター

鳥取県教育文化財団 西部埋蔵文化財調査事務所  
所長 永原 功

調査員 中国横断自動車道岡山・米子線関係  
坂本敬司・高口勝人・長岡充展  
県道名和岸本線関係  
野崎正美（昭和57年10月6日～11月30日）  
（以上、昭和57年度）

中国横断自動車道岡山・米子線関係  
高口勝人・賀須井智・長岡充展・笹尾千恵子  
大賀靖浩（昭和58年9月15日退職）  
（以上、昭和58年度）

## 凡 例

1. 遺物番号については下記の記号を便宜上使用した。Po：土器、D：土製品、F：鉄器・鉄製品、S：石器・石製品。
2. 遺構図におけるは焼土、は炭を表現した。特に、ローム特殊土坑においてはローム・ローム系の層をで表現した。
3. 一般に地表面を掘りくぼめて一定の容積を有する円形・方形等の平面形を呈し機能の限定されない穴を土坑とし、墓としての機能が想定される場合を土塚と表現した。
4. 貝田原、林ヶ原遺跡の掘立柱建物跡の柱穴規模、柱穴間距離は下記のような表を使用した。（単位：cm）。

ビット番号	長軸×短軸-深さ

P 1	26 × 25 - 30
P 2	40 × 36 - 29

ビット番号	柱穴間距離	ビット番号
柱穴間距離	柱穴間距離	柱穴間距離
ビット番号	柱穴間距離	ビット番号

P 2	363	P 1
400		400
P 3	363	P 4

# 目 次

序 文

例 言

調査関係者一覧・凡 例

本文目次

挿図・図版・表目次

第 1 章	位置と環境	1
第 2 章	久古第 3 遺跡	4
第 1 節	概 要	4
第 2 節	発掘調査の結果	7
第 3 節	ま と め	45
第 3 章	貝田原遺跡	47
第 1 節	概 要	47
第 2 節	発掘調査の結果	51
第 3 節	ま と め	108
第 4 章	林ヶ原遺跡	110
第 1 節	概 要	110
第 2 節	発掘調査の結果	115
第 3 節	ま と め	221
第 5 章	考 察	
第 1 節	林ヶ原遺跡の貯蔵穴群	224
第 2 節	ローム特殊土坑について	233

図 版

# 挿図・図版・表目次

## 挿図目次

第1図	周辺遺跡地区	1
<b>久古第3遺跡</b>		
第2図	久古第3遺跡全体図・ トレンチ配置図	4
第3図	久古第3遺跡全体遺構図・ 断面図	5・6
第4-①図	第1竪穴住居跡遺構図	8
第4-②図	“ “	9
第5-①図	“ “ 遺物図	8
第5-②図	“ “	9
第6図	第2竪穴住居跡遺構図	11
第7-①図	第2竪穴住居跡遺物図	11
第7-②図	“ “	12
第8図	第4竪穴住居跡遺構図	13
第9図	第6竪穴住居跡遺構図	14
第10図	“ “ 遺物図	15
第11図	第7竪穴住居跡遺物図	15
第12図	“ “ 遺構図	16
第13図	第8竪穴住居跡遺物図	17
第14図	“ “ 遺構図	18
第15図	第9竪穴住居跡遺物図	18
第16図	“ “ 遺構図	19
第17図	第10竪穴住居跡遺構図	19
第18図	“ “ 遺物図	20
第19図	第1土坑遺構図	20
第20図	第1掘立柱建物跡遺物図	21
第21図	“ “ 遺構図	21
第22図	第2掘立柱建物跡遺構図	22
第23図	第3掘立柱建物跡遺構図	23
第24図	第4掘立柱建物跡遺構図	24
第25図	第5掘立柱建物跡遺構図	24
第26図	第6掘立柱建物跡遺構図	25

第27図	第7掘立柱建物跡遺構図	26
第28図	第8掘立柱建物跡遺構図	27
第29図	第9掘立柱建物跡遺構図	27
第30図	第10掘立柱建物跡遺構図	28
第31図	第11掘立柱建物跡遺構図	29
第32図	第12掘立柱建物跡遺物図	29
第33図	第12・13掘立柱建物跡遺構図	30
第34図	第1溝状遺構遺物図	31
第35図	“ “ 遺構図	31
第36図	第2溝状遺構遺構図	32
第37図	第3溝状遺構遺構図	33
第38図	久古第3遺跡縄文土器実測図	35
第39図	“ “ 弥生土器実測図	36
第40図	古墳時代前期土器実測図	37
第41図	“ “ 後期土器実測図①	38
第42図	“ “ ②	39
第43図	“ “ ③	40
第44図	奈良時代～中世の土器実測図	41
第45図	鉄製品実測図	43
第46図	石製品実測図	44

## 貝田原遺跡

第47図	貝田原遺跡全体図・ トレンチ配置図	48
第48図	貝田原遺跡全体遺構図	49～52
第49図	第1竪穴住居跡遺構図	53
第50-①図	第1竪穴住居跡遺物図	54
第50-②図	“ “	54
第51図	第2竪穴住居跡遺構図	55
第52図	“ “ 遺物図	56
第53図	第1掘立柱建物跡遺構図	56
第54図	“ “ 遺物図	57
第55図	第1～3掘立柱建物跡遺構図	57
第56図	第2掘立柱建物跡遺構図	57

第57图	第3掘立柱建物跡遺構図	.....	58	第92图	第36掘立柱建物跡遺構図	.....	81
第58图	第4掘立柱建物跡遺構図	.....	59	第93图	第37掘立柱建物跡遺構図	.....	82
第59图	第5掘立柱建物跡遺構図	.....	60	第94图	第38掘立柱建物跡遺構図	.....	83
第60图	第6~8掘立柱建物跡遺構図	...	60	第95图	第38掘立柱建物跡遺物図	.....	83
第61图	第6掘立柱建物跡遺構図	.....	61	第96图	第39掘立柱建物跡遺構図	.....	84
第62图	第7掘立柱建物跡遺構図	.....	61	第97图	第40掘立柱建物跡遺構図	.....	85
第63图	第8掘立柱建物跡遺構図	.....	62	第98图	第41掘立柱建物跡遺構図	.....	86
第64图	第9掘立柱建物跡遺構図	.....	63	第99图	第42掘立柱建物跡遺構図	.....	86
第65图	第10掘立柱建物跡遺構図	.....	63	第100图	第43掘立柱建物跡遺構図	.....	87
第66图	第11掘立柱建物跡遺構図	.....	64	第101图	第44掘立柱建物跡遺構図	.....	87
第67图	第12掘立柱建物跡遺構図	.....	64	第102图	第45掘立柱建物跡遺構図	.....	88
第68图	第13掘立柱建物跡遺構図	.....	65	第103图	第46掘立柱建物跡遺構図	.....	89
第69图	第14掘立柱建物跡遺構図	.....	65	第104图	第47掘立柱建物跡遺構図	.....	90
第70图	第15掘立柱建物跡遺構図	.....	66	第105图	第48掘立柱建物跡遺構図	.....	91
第71图	第17掘立柱建物跡遺構図	.....	67	第106图	第48掘立柱建物跡遺物図	.....	91
第72图	第16掘立柱建物跡遺構図	.....	68	第107图	第49掘立柱建物跡遺構図	.....	91
第73图	第18掘立柱建物跡遺構図	.....	69	第108图	第50掘立柱建物跡遺構図	.....	92
第74图	第19掘立柱建物跡遺構図	.....	70	第109图	第2土坑遺物図	.....	93
第75图	第20掘立柱建物跡遺構図	.....	71	第110图	" 遺構図	.....	93
第76图	第21掘立柱建物跡遺構図	.....	72	第111-①图	第3土坑遺物図	.....	93
第77图	第22掘立柱建物跡遺構図	.....	73	第111-②图	" "	.....	94
第78图	第23掘立柱建物跡遺構図	.....	74	第112图	" 遺構図	.....	94
第79图	第24掘立柱建物跡遺構図	.....	74	第113图	第7土坑遺構図	.....	95
第80图	第25掘立柱建物跡遺構図	.....	75	第114-①图	" 遺物図	.....	95
第81图	第26掘立柱建物跡遺構図	.....	75	第114-②图	" "	.....	96
第82图	第27掘立柱建物跡遺物図	.....	76	第115图	第8土坑遺構図	.....	96
第83图	第27掘立柱建物跡遺構図	.....	76	第116图	第9土坑遺構図	.....	97
第84图	第28掘立柱建物跡遺構図	.....	77	第117图	第10土坑遺構図	.....	97
第85图	第29掘立柱建物跡遺構図	.....	78	第118图	" 遺物図	.....	97
第86图	第30掘立柱建物跡遺構図	.....	78	第119图	第11土坑遺構図	.....	98
第87图	第31掘立柱建物跡遺構図	.....	79	第120图	第12土坑遺構図	.....	98
第88图	第32掘立柱建物跡遺構図	.....	79	第121图	第14土坑遺構図	.....	99
第89图	第33掘立柱建物跡遺構・遺物図	...	80	第122图	第15土坑遺構図	.....	99
第90图	第34掘立柱建物跡遺構図	.....	80	第123图	第17土坑遺構図	.....	99
第91图	第35掘立柱建物跡遺構図	.....	81	第124图	第18土坑遺構図	.....	99

第125図	第19土坑遺物図	99
第126図	" 遺構図	100
第127図	第20土坑遺構図	100
第128図	第21土坑遺構図	101
第129図	第1溝状遺構遺物図	101
第130図	" 遺構図	101
第131図	第2溝状遺構遺構図	101
第132図	第3～5溝状遺構遺構図	102
第133-①図	遺構外縄文土器実測図	103
第133-②図	" 弥生土器実測図	103
第133-③図	" 土師器実測図	104
第133-④図	" 須恵器実測図	105
第133-⑤図	" 石器・土鍬実測図	105
第133-⑥図	" 不明土器実測図	106
第133-⑦図	" 鉄器・鉄製品実測図	106
第134-①図	岸本町教育委員会保管員田原 遺跡出土遺物実測図	107
第134-②図	" " "	107
<b>林ヶ原遺跡</b>		
第135図	林ヶ原遺跡全体図・ トレンチ配置図	110
第136図	林ヶ原遺跡全体遺構図	111～114
第137図	第1竪穴住居跡遺構・ 遺物図	115
第138図	第2竪穴住居跡遺構図	116
第139図	" 第1～4段階 柱穴配置図	117
第140-①図	第2竪穴住居跡遺物図	119
第140-②図	" " "	120
第141図	第3竪穴住居跡遺構図	121
第142図	第4竪穴住居跡遺構図	121
第143図	" 遺物図	122
第144図	第5竪穴住居跡遺構図	123
第145図	" 遺物図	124
第146図	第6竪穴住居跡遺構図	124

第147図	第7竪穴住居跡遺構図	125
第148図	" 遺物図	125
第149図	第8竪穴住居跡・第78土坑 遺構図	126
第150図	第8竪穴住居跡概念図	126
第151-①図	第8竪穴住居跡・第78土坑 遺物図	127
第151-②図	" " "	128
第152図	第9竪穴住居跡遺構図	129
第153図	" 遺物図	129
第154図	第10竪穴住居跡遺構図	130
第155-①図	" 遺物図	131
第155-②図	" " "	132
第155-③図	" " "	133
第156図	第11竪穴住居跡遺構図	134
第157図	" 遺物図	134
第158図	第1掘立柱建物跡遺構・ 遺物図	135
第159図	第2掘立柱建物跡遺構・ 遺物図	136
第160図	第3掘立柱建物跡遺構図	136
第161図	第5掘立柱建物跡遺構図	137
第162図	第6掘立柱建物跡遺構図	138
第163図	第7掘立柱建物跡遺構図	138
第164図	第8掘立柱建物跡遺構図	139
第165図	第9掘立柱建物跡遺構図	139
第166図	第10掘立柱建物跡遺構図	140
第167図	" 遺物図	140
第168図	第11掘立柱建物跡遺構図	141
第169図	第12掘立柱建物跡遺物図	141
第170図	" 遺構図	142
第171図	第13掘立柱建物跡遺構図	142
第172図	第14掘立柱建物跡遺構図	143
第173図	第15掘立柱建物跡遺構図	144
第174図	第16掘立柱建物跡遺構図	144

第175图	第17掘立柱建物跡遺構図	……	145	第208图	第58土坑遺構・遺物図	……	161
第176图	第18掘立柱建物跡遺構図	……	145	第209图	第59土坑遺構・遺物図	……	162
第177图	第19掘立柱建物跡遺構図	……	146	第210图	第63土坑遺構図	……	162
第178图	第20掘立柱建物跡遺構図	……	147	第211图	第60土坑遺構・遺物図	……	163
第179图	第21掘立柱建物跡遺構図	……	147	第212图	第65土坑遺構・遺物図	……	163
第180图	“ 遺構図	……	148	第213图	第67土坑遺構図	……	164
第181图	第22掘立柱建物跡遺構図	……	149	第214图	“ 遺物図	……	164
第182图	第23掘立柱建物跡遺構・遺物図	……	149	第215图	第68土坑遺構図	……	165
第183图	第24掘立柱建物跡遺構図	……	150	第216图	“ 遺物図	……	165
第184图	第1木棺墓遺構図	……	151	第217图	第69土坑遺構・遺物図	……	166
第185图	第2木棺墓遺構図	……	151	第218图	第70土坑遺構・遺物図	……	166
第186图	第3木棺墓遺構図	……	151	第219图	第71土坑遺構図	……	167
第187图	“ 遺物図	……	152	第220图	第72土坑遺構・遺物図	……	167
第188图	第9土坑遺構図	……	152	第221图	第73土坑遺構図	……	168
第189图	“ 遺物図	……	153	第222-①图	第73土坑遺物図	……	168
第190-①图	第1土坑遺物図	……	153	第222-②图	“ “	……	169
第190-②图	“	……	154	第223图	第75土坑遺構・遺物図	……	169
第191图	第1土坑遺構図	……	154	第224图	第77土坑遺構・遺物図	……	170
第192图	第2土坑遺構図	……	155	第225图	第79土坑遺構・遺物図	……	170
第193图	“ 遺物図	……	155	第226图	第80土坑遺構・遺物図	……	171
第194图	第29土坑遺構・遺物図	……	156	第227图	第81土坑遺構・遺物図	……	171
第195图	第30土坑遺構図	……	156	第228图	第82・83・84土坑遺構図	……	172
第196图	“ 遺物図	……	157	第229图	“ 遺物図	……	173
第197图	第31土坑遺構図	……	157	第230图	第85土坑遺構図	……	174
第198图	“ 遺物図	……	157	第231图	第86土坑遺構図	……	174
第199图	第32土坑遺構図	……	158	第232图	“ 遺物図	……	174
第200图	第36土坑遺構図	……	158	第233图	第87土坑遺構図	……	175
第201图	第52土坑遺構図	……	159	第234图	“ 遺物図	……	175
第202图	第53土坑遺構図	……	159	第235图	第89土坑遺構図	……	176
第203图	“ 遺物図	……	159	第236图	第90土坑遺構図	……	176
第204图	第54土坑遺構・遺物図	……	160	第237图	“ 遺物図	……	177
第205图	第55土坑遺構図	……	160	第238图	第91土坑遺構・遺物図	……	177
第206图	“ 遺物図	……	161	第239图	第92土坑遺構図	……	177
第207图	第56土坑遺構図	……	161	第240图	第94土坑遺構・遺物図	……	178
				第241图	第95土坑遺構・遺物図	……	178

第242図	第97土坑遺構図	179	第276図	第25土坑遺構図	192
第243図	第98土坑遺構図	179	第277-①図	“ 遺物図	192
第244図	“ 遺物図	179	第277-②図	“ “	193
第245図	第99土坑遺構図	180	第278図	第26土坑遺構図	193
第246図	“ 遺物図	180	第279図	第28土坑遺構図	194
第247図	第100土坑遺構図	181	第280図	第51土坑遺構図	194
第248図	第101土坑遺構図	181	第281図	第62土坑遺構図	194
第249図	“ 遺物図	181	第282図	“ 遺物図	195
第250図	第104土坑遺構図	182	第283図	第66土坑遺構図	195
第251図	第107土坑遺構図	182	第284図	第74土坑遺構・遺物図	195
第252図	“ 遺物図	182	第285図	第76土坑遺構・遺物図	196
第253図	第108土坑遺構図	182	第286図	第88土坑遺構図	196
第254図	第22土坑遺構図	183	第287図	“ 遺物図	197
第255図	第39土坑遺構図	183	第288図	第96土坑遺構図	197
第256図	第40土坑遺構図	184	第289図	第106土坑遺構図	197
第257図	第44・45・46・47土坑全体 遺構図	184	第290図	第2溝状遺構遺構図	198
第258図	第44土坑遺構図	185	第291図	“ 遺物図	198
第259図	第45・46土坑遺構図	185	第292図	8 H地区ビット1遺物図	198
第260図	第47土坑遺構図	185	第293図	“ 遺構図	199
第261図	第44土坑遺構図	186	第294図	14 J地区ビット1遺構図	199
第262図	第48土坑遺構図	186	第295図	16 K地区ビット1遺構・ 遺物図	199
第263図	第49土坑遺構図	186	第296図	第3土坑遺構・遺物図	200
第264図	第103土坑遺構図	187	第297図	第4・5土坑遺構図	200
第265図	第7土坑遺構・遺物図	188	第298図	第11土坑遺構図	201
第266図	第10土坑遺構図	188	第299図	第12土坑遺構図	201
第267図	第14土坑遺構図	188	第300図	第13土坑遺構図	202
第268図	“ 遺物図	189	第301図	第16土坑遺構図	202
第269図	第15土坑遺構図	189	第302図	第24土坑遺構図	203
第270図	“ 遺物図	190	第303図	第27土坑遺構図	203
第271図	第17土坑遺構図	190	第304図	第33土坑遺構図	204
第272図	“ 遺物図	191	第305図	第34土坑遺構図	204
第273図	第18土坑遺構図	191	第306図	第37土坑遺構・遺物図	205
第274図	第19土坑遺構・遺物図	191	第307図	第38土坑遺構・遺物図	205
第275図	第20土坑遺構・遺物図	192	第308図	第42土坑遺物図	205

第309図	第42土坑遺構図	206
第310図	第43土坑遺構図	206
第311図	第50土坑遺物図	207
第312図	“ 遺構図	207
第313図	第93土坑遺構図	207
第314図	第102土坑遺構・遺物図	208
第315図	縄文土器実測図 (S I・S II群)	209
第316図	縄文土器実測図	210
第317図	弥生土器実測図	211
第318図	“	212
第319図	“	213
第320図	“	214
第321図	“	215
第322図	土師器実測図	216
第323図	分銅形土製品実測図	216

## 図版目次

### 久古第3遺跡

図版1	現況
図版2	B区全景、B・C区全景
図版3	D区全景
図版4	第1竪穴住居跡
図版5	第1竪穴住居跡・第2竪穴住居跡
図版6	第2竪穴住居跡
図版7	第2竪穴住居跡
図版8	第4・6・7竪穴住居跡
図版9	第8竪穴住居跡
図版10	第9・10竪穴住居跡、第1掘立柱建物跡
図版11	第1～8掘立柱建物跡
図版12	第9～13掘立柱建物跡、第1溝状遺構
図版13	第2・3溝状遺構、第1土坑 D区土層断面
図版14	縄文土器、弥生土器
図版15	弥生土器、古墳時代前期土器
図版16	古墳時代後期土器

第324図	紡錘車実測図	217
第325図	石器実測図①	218
第326図	“ ②	219
第327図	岸本町教育委員会保管遺物実測図	220
第328図	林ヶ原遺跡貯蔵穴群分布図	224
第329図	林ヶ原遺跡貯蔵穴タイプ	225
第330図	林ヶ原遺跡ピットを持つ 土坑	230
第331図	林ヶ原遺跡ローム 特殊土坑配置図	233
第332図	林ヶ原遺跡ローム 特殊土坑のタイプ分け	234
第333図	各遺跡のローム特殊土坑	235
第334-①図	倒木痕形成模式図	236
第334-②図	倒木痕想定図	236

### 図版17 古墳時代後期土器

奈良時代～中世の土器

### 図版18 鉄製品

### 図版19 石製品

#### 貝田原遺跡

図版20	現況、昭和57年度調査地区
図版21	昭和58年度調査地区
図版22	第1竪穴住居跡
図版23	第2竪穴住居跡、第1・2掘立柱建物跡
図版24	第3～6掘立柱建物跡
図版25	第7～10掘立柱建物跡
図版26	第11～14掘立柱建物跡
図版27	第15～18掘立柱建物跡
図版28	第19～22掘立柱建物跡
図版29	第23～26掘立柱建物跡
図版30	第27～30掘立柱建物跡
図版31	第31～34掘立柱建物跡
図版32	第35～38掘立柱建物跡

- 図版33 第39~42掘立柱建物跡  
 図版34 第43~46掘立柱建物跡  
 図版35 第47~50掘立柱建物跡  
 図版36 第16~25掘立柱建物跡  
 掘立柱建物跡柱穴内出土遺物  
 図版37 第2土坑、第3土坑  
 図版38 第7土坑、第8・9土坑  
 図版39 第10~12・14・15・17・18土坑  
 図版40 第19~21土坑、第1・2溝状遺構  
 縄文土器、弥生土器  
 図版41 土師器、須恵器  
 図版42 鉄製品、岸本町教育委員会保管遺物

林ヶ原遺跡

- 図版43 現況、A区東側全景  
 図版44 B区・C区全景  
 図版45 C区・D区全景  
 図版46 D区全景、第1竪穴住居跡  
 図版47 第2竪穴住居跡  
 図版48 第2竪穴住居跡  
 図版49 第2~4竪穴住居跡  
 図版50 第4・5竪穴住居跡  
 図版51 第6・7竪穴住居跡、D区断面  
 図版52 第8竪穴住居跡  
 図版53 第8・9竪穴住居跡  
 図版54 第9・10竪穴住居跡、第78土坑  
 図版55 第10・11竪穴住居跡  
 図版56 第1~3・5~9掘立柱建物跡  
 図版57 第10~17掘立柱建物跡  
 図版58 第18~24掘立柱建物跡、  
 掘立柱建物跡出土遺物

表 目 次

表1	久古第3遺跡、掘立柱建物跡一覧表	20
表2	貝田原遺跡、トレンチー一覧表①	47
表3	“ “ “ ②	48
表4	“ 掘立柱建物跡主軸方向	109

- 図版59 掘立柱建物跡出土遺物  
 第1・第3木棺墓  
 図版60 第9・1・2土坑  
 図版61 第29~32土坑  
 図版62 第36・52~55土坑  
 図版63 第55・56・58・59・60・63土坑  
 図版64 第65・67・68土坑  
 図版65 第68~70・72土坑  
 図版66 第73・75土坑  
 図版67 第77・79~81土坑  
 図版68 第82~86土坑  
 図版69 第87・89・90土坑  
 図版70 第91・92・94・95・97~99土坑  
 図版71 第98~101土坑  
 図版72 第101・104・107・108・22・39土坑  
 図版73 第40・44~49・103土坑  
 図版74 第10・14・15・17土坑  
 図版75 第18~20・25・26・28・51・62土坑  
 図版76 第62・66・74・76・88・96・106土坑  
 図版77 第88土坑、第2溝状遺構、8H地区P-1、14J地区P-1、16K地区P-1  
 図版78 第3~5・11~13・16・24土坑  
 図版79 第27・33・34・37・38・42土坑  
 図版80 第43・50・93・102土坑  
 図版81 遺構・遺構外出土の縄文土器  
 図版82 遺構外出土の弥生土器・紡錘車  
 分銅形土製品  
 図版83 遺構外出土の石鏃・石斧・磨石  
 岸本町教育委員会保管遺物

表5 貝田原遺跡、規模別・地区別主軸方向…109

表6 “ 主たる掘立柱建物跡一覧表 …… 109

貝田原遺跡・第1掘立柱建物跡計測表 … 57

“ 第2掘立柱建物跡計測表 … 58

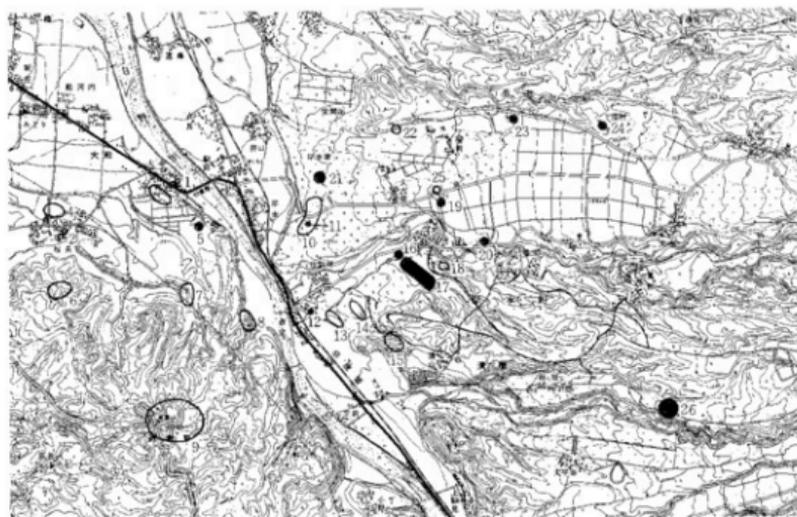
“ 第3掘立柱建物跡計測表 … 58

貝田原遺跡	第4掘立柱建物跡計測表	… 59	貝田原遺跡	第39掘立柱建物跡計測表	… 84
”	第5掘立柱建物跡計測表	… 60	”	第40掘立柱建物跡計測表	… 85
”	第6掘立柱建物跡計測表	… 61	”	第41掘立柱建物跡計測表	… 86
”	第7掘立柱建物跡計測表	… 62	”	第42掘立柱建物跡計測表	… 86
”	第8掘立柱建物跡計測表	… 62	”	第43掘立柱建物跡計測表	… 87
”	第9掘立柱建物跡計測表	… 63	”	第44掘立柱建物跡計測表	… 88
”	第10掘立柱建物跡計測表	… 63	”	第45掘立柱建物跡計測表	… 88
”	第11掘立柱建物跡計測表	… 64	”	第46掘立柱建物跡計測表	… 89
”	第12掘立柱建物跡計測表	… 64	”	第47掘立柱建物跡計測表	… 90
”	第13掘立柱建物跡計測表	… 65	”	第48掘立柱建物跡計測表	… 91
”	第14掘立柱建物跡計測表	… 66	”	第49掘立柱建物跡計測表	… 92
”	第15掘立柱建物跡計測表	… 67	”	第50掘立柱建物跡計測表	… 92
”	第16掘立柱建物跡計測表	… 69	林ヶ原遺跡	第1掘立柱建物跡計測表	… 135
”	第17掘立柱建物跡計測表	… 67	”	第2掘立柱建物跡計測表	… 136
”	第18掘立柱建物跡計測表	… 69	”	第3掘立柱建物跡計測表	… 137
”	第19掘立柱建物跡計測表	… 70	”	第5掘立柱建物跡計測表	… 137
”	第20掘立柱建物跡計測表	… 71	”	第6掘立柱建物跡計測表	… 137
”	第21掘立柱建物跡計測表	… 72	”	第7掘立柱建物跡計測表	… 138
”	第22掘立柱建物跡計測表	… 73	”	第8掘立柱建物跡計測表	… 139
”	第23掘立柱建物跡計測表	… 74	”	第9掘立柱建物跡計測表	… 140
”	第24掘立柱建物跡計測表	… 74	”	第10掘立柱建物跡計測表	… 140
”	第25掘立柱建物跡計測表	… 75	”	第11掘立柱建物跡計測表	… 141
”	第26掘立柱建物跡計測表	… 75	”	第12掘立柱建物跡計測表	… 141
”	第27掘立柱建物跡計測表	… 77	”	第13掘立柱建物跡計測表	… 143
”	第28掘立柱建物跡計測表	… 77	”	第14掘立柱建物跡計測表	… 143
”	第29掘立柱建物跡計測表	… 78	”	第15掘立柱建物跡計測表	… 143
”	第30掘立柱建物跡計測表	… 78	”	第16掘立柱建物跡計測表	… 144
”	第31掘立柱建物跡計測表	… 79	”	第17掘立柱建物跡計測表	… 145
”	第32掘立柱建物跡計測表	… 79	”	第18掘立柱建物跡計測表	… 146
”	第33掘立柱建物跡計測表	… 80	”	第19掘立柱建物跡計測表	… 146
”	第34掘立柱建物跡計測表	… 80	”	第20掘立柱建物跡計測表	… 147
”	第35掘立柱建物跡計測表	… 81	”	第21掘立柱建物跡計測表	… 148
”	第36掘立柱建物跡計測表	… 82	”	第22掘立柱建物跡計測表	… 148
”	第37掘立柱建物跡計測表	… 82	”	第23掘立柱建物跡計測表	… 149
”	第38掘立柱建物跡計測表	… 83	”	第24掘立柱建物跡計測表	… 150

# 第1章 位置と環境

岸本町は国立公園大山の西麓に位置し、東は大山町、西は米子市、会見町に接し、南は溝口町、北は一部を米子市及び大山町に接している。町の西部を日野郡日南町に源を発する日野川が、南から北西に貫流して米子市に入り日本海に注いでいる。岸本町の地形は、日野川をはさんで左側と右側の山麓台地と、日野川付近の平野に大別される。日野川右岸台地は大山山麓の西麓にあたり、日野川流域に向かって下降する傾斜地で、別所川、清山川が西流して日野川に注いでいる。左右兩岸台地とも大山の外輪山や寄生火山高麗山の諸岩石及び大山火山山頂から流入した軽石流、熱雲堆積物、大山上部火山灰（クロボク）が堆積している。また日野川沿岸には段丘堆積物がみられるが、特に別所川右岸から岸本原、米子市の石州府にかけては岸本礫層と呼ばれる堆積層をなしている。

周辺の遺跡を概観すると、縄文時代の遺跡としては、今回調査をした貝田原遺跡（草創期か）で以前に有舌尖頭器が表採されている。これは大山町坊領、荘田で出土した有舌尖頭器と岩質、形態とも同じことで注目される。今後、貝田原遺跡近辺で旧石器時代にまで



- |                      |            |            |             |            |
|----------------------|------------|------------|-------------|------------|
| 1. 大寺庵寺              | 6. 坂長古墳群   | 12. 吉定1号墳  | 18. 久古古墳群   | 24. 須村遺跡   |
| 2. 坂中庵寺              | 7. 泊瀬塚古墳群  | 13. 吉定古墳群  | 19. 久吉北川山遺跡 | 25. 長塚原古墳群 |
| 3. 越敷が丘遺跡<br>越敷が丘古墳群 | 8. 越敷野原古墳群 | 14. 口別所古墳群 | 20. 善原第1遺跡  | 26. 林ヶ原遺跡  |
| 4. 長者原古墳群            | 9. 越敷山古墳群  | 15. 清山古墳群  | 21. 岸本遺跡    |            |
| 5. 大寺原遺跡             | 10. 岸本古墳群  | 16. 久吉第3遺跡 | 22. 福岡古墳群   |            |
|                      | 11. 岸本7号墳  | 17. 貝田原遺跡  | 23. 福岡第2遺跡  |            |

第1図 周辺遺跡地図

遇れる遺跡が発見される可能性がある。久古北田山、久古第5、須村、番原第1・第5遺跡（いずれも早期）では県内最古の土器である押型文土器が出土し、遺跡の立地も近接しており、この地帯の1つの文化圏の存在を推察できる。日野川水系沿いには、折渡遺跡（日野郡日南町）、長山、井後草里遺跡（日野郡溝口町）でも押型文土器が出土していて、古代の瀬戸内・日本海ルートの関連遺跡として、岸本町内のこれらの遺跡も注目される。他に久古北田山、須村遺跡（いずれも後期）、番原第6、草田、林ヶ原の各遺跡がある。縄文時代の遺跡は、日野川右岸台地に集中しているようである。

弥生時代になると、日野川左右両岸台地上に急速に遺跡が増加していき、生活圏の大幅な拡張と、稲作による安定した生産力の向上が伺える。岸本遺跡（中期）、大寺原、岩屋谷字荒神上遺跡（いずれも後期）では竪穴住居跡が検出されている。また標高380mに位置する藍野遺跡、標高220mに位置する林ヶ原遺跡（いずれも中期）では石廬丁、石斧等が出土しており、高原での陸耕が考えられる。長者原台地は県内屈指の集落跡である青木遺跡（米子市）につながるものとして注目される。

古墳時代になると、土器散布地に対応して古墳群がみられる。前期では菅段寺古墳群（会見町）、長者原台地北部には30m級の前方後円墳4基がある。中期、横穴式石室がいはやく採用されていくのが日野川流域である。特に吉定1号古墳（直径21m、高さ約1.5m）は、石室が割石小口積みの持ち送り式であり、県内最古の横穴式石室とされる。この吉定1号墳の北約1.5kmに岸本7号墳（直径45m、高さ5m）を中心とする岸本古墳群がある。大山町から岸本町にかけての山麓周辺には、切石造の石棺式石室をもつものと、板石と割石で築かれた石室をもつ古墳が存在する。これら横穴式石室の構造の違いはその地域の支配者層の違いを反映しているものとされ、その勢力圏は佐陀川を境としていると推察されている。岸本町内には他に、越敷山、越敷原、吉定、口別所、久古、清山等、後期古墳群がある。特に大寺廃寺、坂中廃寺周辺は後期古墳群の密集地であり、これらの古墳群を築造した集団が、大寺廃寺、坂中廃寺を造りだした勢力となったことが考えられる。

大寺廃寺は昭和41年以来、4度にわたる調査が行われ、県内では数少ない、伽藍配置がわかった古代寺院の1つである。中門や東大門の遺構は未確認だが、金堂を南に、塔を北に、講堂を西に配置する変形の法起寺式伽藍配置である。講堂跡から出土した石製鴟尾は現在は福樹寺境内にあり、昭和34年に国の重要文化財に指定されている。

坂中廃寺は坂長地内にあり、舍利孔をもった礎石が基壇とともに残り周辺からは布目瓦が出土している。軒丸瓦は伯耆国分寺と同範のものもあり、平安時代の豪族紀氏の氏寺とも言われる。

古墳時代以降の集落の調査例としては、昭和46年に調査された越敷ヶ丘遺跡は古墳時代から奈良時代にかけてのものであり、大寺原、岩屋谷字荒神上遺跡でも住居跡等が検出さ

れている。

平安時代以後で注目されるのは大山寺の存在である。承安2年(1171年)に、長者原に居を構えたと伝えられる紀成盛が大山寺に対し金銅の地藏尊及び鉄製厨子を奉納している。紀氏は大山権現を中心とする大山信仰と結びつき、大山寺の権威を背景として勢力圏を拡大していったとされる。ところで、昭和54年から昭和57年にかけて岸本町教育委員会によって発掘調査された長者屋敷遺跡では大規模な建物跡遺構が検出され、紀氏の屋敷跡とも「会見郡衛」跡とも言われている。

中世において、久古一帯は大山寺領の荘園馬牧として管理されることになる。室町時代観応2年(1351年)に、伯耆守護山名時氏が大山寺西明院衆徒中に久古御牧を寄進し、次に応永10年(1403年)に、伯耆守護山名右馬頭氏のは、久古御牧地頭職を西明院雑掌に与えるように守護代佐々木信濃入道清高に命じている。

中世、武士と軍馬は不離一体の関係をもち、地方豪族の武装化は騎兵化で馬牧を所有することが重要であり、こういった大山の裾野を中心とする「牧」の存在が中世武士団の形成に大きな役割を果たしたものと考えられる。

久古第3遺跡は、国鉄岸本駅の南東1.5km、国道181号線の八郷入口から西へ1km、久古部落の下手、別所川の河岸段丘上に位置する。付近の遺跡としては、貝田原、久古北田山遺跡等、久古、口別所、吉定古墳群等がある。従来の分布調査では、土器の散布をみており、中世の遺跡ではないかとされている。

貝田原遺跡は、久古第3遺跡のすぐ南東、久古神社の西方に広がって位置する。付近の遺跡の状況は、久古第3遺跡とほぼ同様である。従来の分布調査では、有舌尖頭器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石鏃等の散布、出土をみている。

林ヶ原遺跡は、国鉄岸本駅の南東4km、林ヶ原部落から約1km上手、標高220mに位置する。遺跡のすぐ南は清山川によって深い谷になっており、東から西へ緩く傾斜している。付近の遺跡としては、番原遺跡群、清山古墳群等がある。従来の分布調査では、縄文土器、弥生土器、石斧、石棒、石庖丁等の出土をみている。

- 参考 「鳥取県史1 原始古代」 鳥取県  
「大山西麓埋蔵文化財分布調査報告書」 鳥取県教育委員会  
「岸本町誌」 岸本町  
「長者原遺跡群発掘調査報告書」 岸本町教育委員会

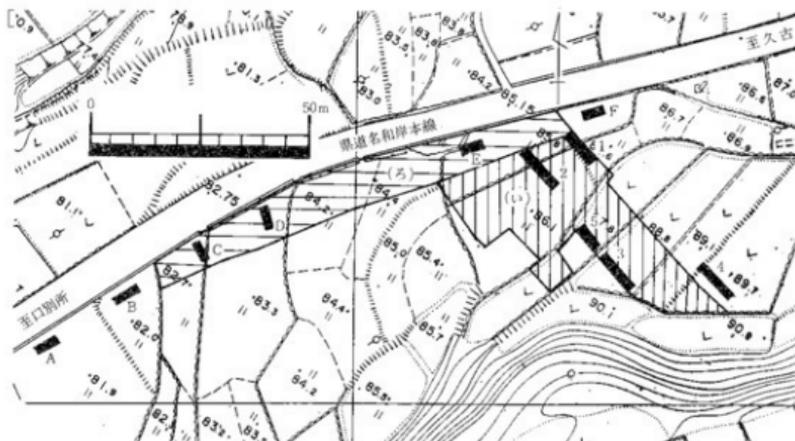
## 第2章 久古第3遺跡

### 第1節 概 要

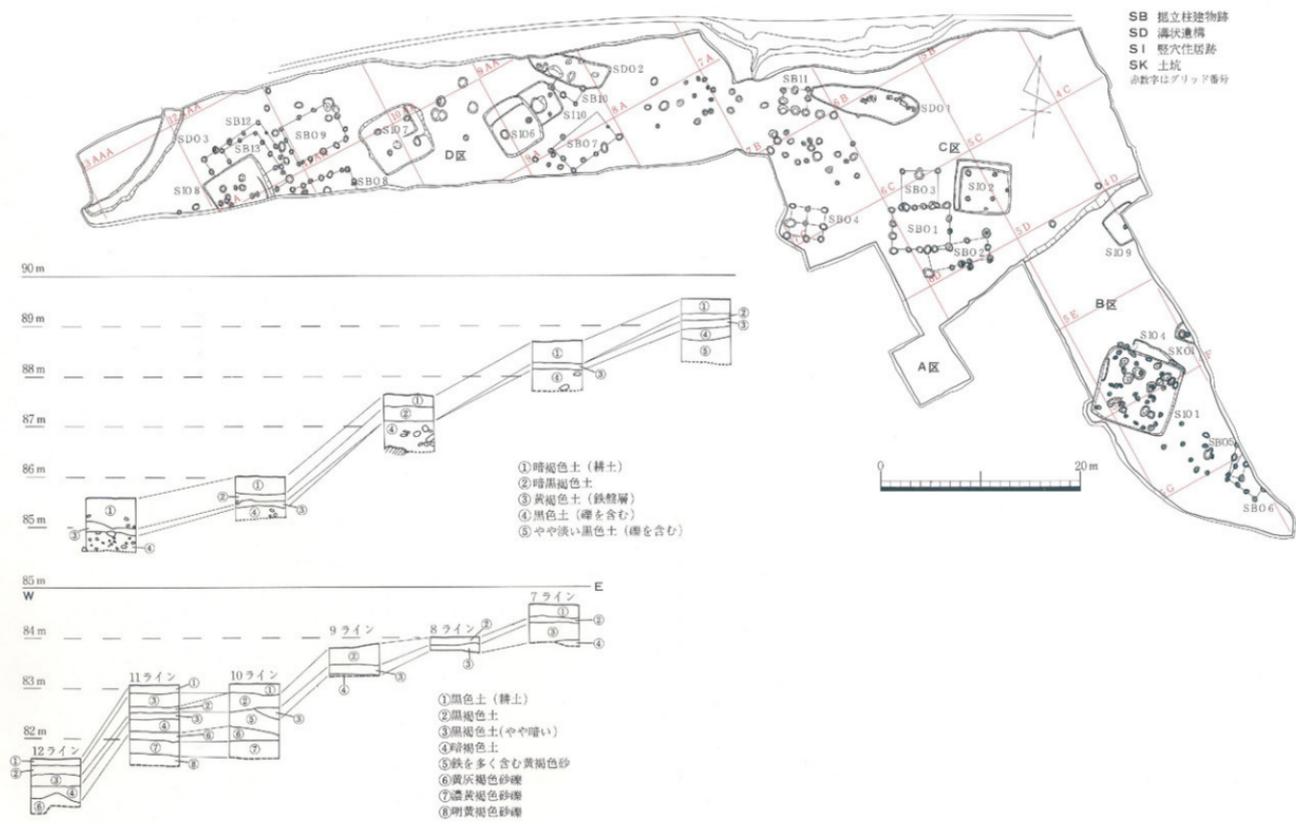
久古第3遺跡は、岸本町久古字向田、下向田に所在する。

日本道路公団による中国横断道建設工事に伴い、事前の発掘調査の必要が生じた。日本道路公団は、鳥取県の文化財担当部局と協議し、財団法人鳥取県教育文化財団が発掘調査の委託を受け、調査員3名で調査を行うこととした。また、中国横断道建設工事に先だって、主要地方道の道路改良工事が生じ、道路改良部分の発掘調査が必要となった。そのため、鳥取県教育文化財団は鳥取県土木部から委託を受け、新たに調査員1名を増員して調査を行った。

調査はまず、横断道、主要地方道ともにトレンチによる試掘調査を行い、遺跡の範囲を確認することにした。中国横断道は第2図1～5のトレンチ、主要地方道はA～Fのトレンチを調査した。その結果、横断道は3トレンチで竪穴住居跡、2・4トレンチでピット、5トレンチで石列を検出し、全トレンチで土器片を検出した。主要地方道ではA・Cトレンチで溝、Eトレンチでピットを検出し、B・D・Fトレンチでは遺構は検出されなかった。試掘調査の結果から、遺跡の範囲は両地区共に工事区全域に及ぶものと考えられ、工法等を考慮して、中国横断道は(い)、主要地方道は(は)部分を全面発掘調査することとした。調査期間は、中国横断道は試掘調査も含めて昭和57年8月4日から11月9日までであった。主要地方道は試掘調査が昭和57年8月30日から9月8日まで、全面発掘調査が同年10月6日から11月30日までであった。



第2図 久古第3遺跡トレンチ配置図・全体図



第3図 久古第3遺跡全体遺構図・断面図

## 第2節 発掘調査の結果

### (1) 竪穴住居跡

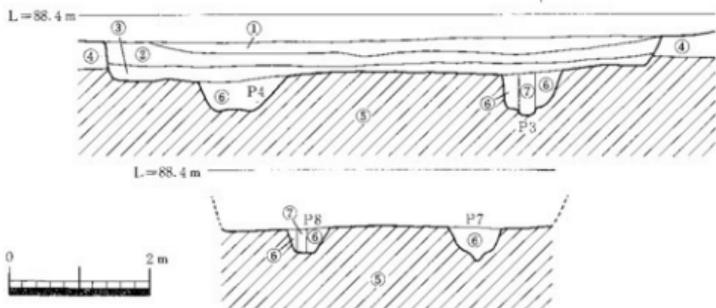
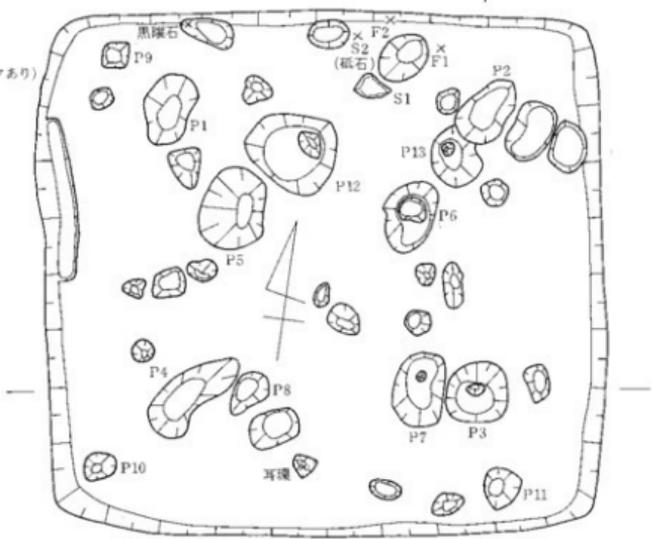
#### 第1 竪穴住居跡 (図版4・5)

5 F、5 G、6 F、6 G地区にわたって位置している。主軸はN-82°-Eにとり、遺構検出面における長辺は7.88m、短辺は7.46mを測り、東西方向にやや長い方形である。床面は、長辺7.48m、短辺7.12mを測り、面積はおよそ53㎡である。床面では、ピットが37個確認されており、うち大型のピットはP1~P4・P5~P8・P12・P13の10個であった。このうち、第1 竪穴住居跡の柱穴と考えられるものは、P1~P4の4個である。各柱穴の規模は、P1(102×67-43)、P2(104×65-45)、P3(86×85-67)、P4(153×67-56)cmである。P3は2段掘りで柱痕が確認されている。柱穴間距離は、P1-P2間より順に、4.40m、4.00m、4.12m、4.12mを測り、南北方向にやや長くなっている。旧表土面より60cm程度、最下層の礫を多く含む黄褐色土層を15cm程度掘り込む形で壁が造られている。床として、硬くしまった黄白色のブロックを含む黒褐色土が、5cm程度の厚さで敷かれている。P9(40×36-25)、P10(50×38-31)、P11(58×53-28)cmの小型のピットが3方の隅で検出される。北東隅では検出されていないが、補助柱の可能性が考えられる。また、東壁際では、幅25cm、長さ2.9m、深さ22cmの溝が検出されている。他の壁際では溝状のものは確認されていないが、側溝の一部と考えられる。

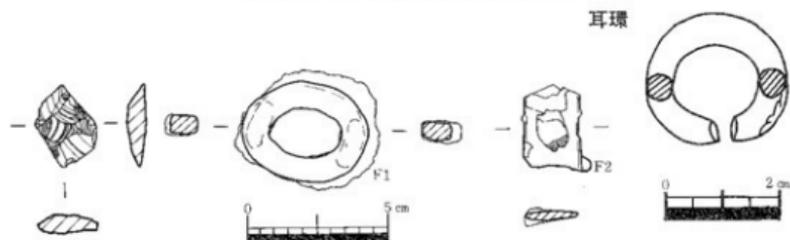
遺物は、北壁際で、黒曜石1片、砥石1点、鉄器2点(F1・F2)が出土している。F1はリング状になっており、鋳ではないかと考えていたが、用途は不明である。F2は破片であるため、器形、用途とも不明である。北壁の近くで、長さ49cm、幅40cm、厚さ9cmの、表裏に数条の線刻が施された平らな石が出土している。床面上にあったこと、壁の近くにあったことなどから、出入口がこの位置にあり、その踏み石ではないかと考えていたが、わらなどを叩く台石の可能性も考えられよう。土器はほとんど破片であったが、第3トレンチの調査中に、第1 竪穴住居跡の床面と考えられる所から、須恵器高坏(Po1)、蓋坏身(Po2)が出土している。これらの遺物から考えると、第1 竪穴住居跡は6世紀後半のものであろう。

また、南側の断面確認用のベルトを取り外す際、床面近くのレベルで金銅製の耳環が出土している。平面では確認できなかったが、断面では、床面(第③層)より幅16cm、深さ6cm程度の落ち込みが確認されており、耳環はこの中に落ち込む形で検出されている。第1 竪穴住居跡の遺物は、多くの土師器、須恵器を出土した第2 竪穴住居跡に比べて大変少ないことから、第1 竪穴住居跡から他の住居へと移動する際、使用した土器も一緒に持ち運んだものと考えられる。しかし、耳環は2個セットで使用され、かなりの貴重品であったであろうが、なぜ片方だけ残されていたのか、また、なぜ床面にいた落ち込みの中に

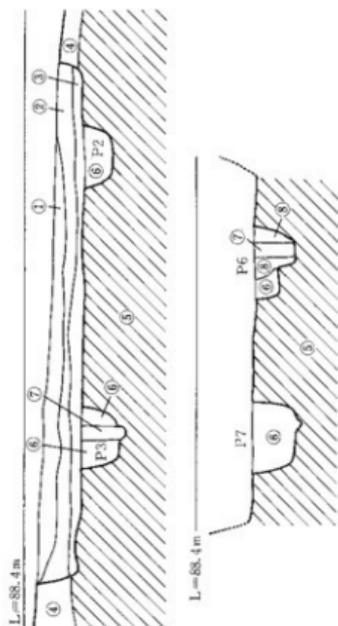
- ① 淡黒褐色土
- ② 濃黒褐色土
- ③ 黒褐色土  
(黄白色のブロックあり)
- ④ 黒褐色土
- ⑤ 黄褐色土  
(礫を多く含む)
- ⑥ 暗褐色土
- ⑦ 黒灰茶褐色土
- ⑧ 暗黒灰茶褐色土



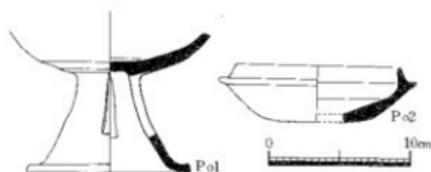
第4図—① 第1竖穴住居跡遺構図



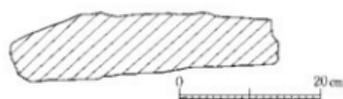
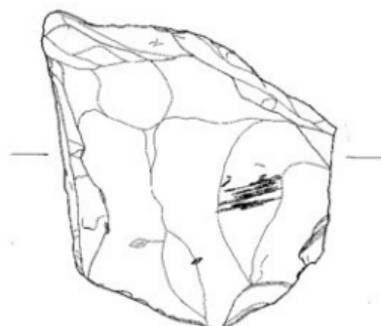
第5図—① 第1竖穴住居跡遺物図



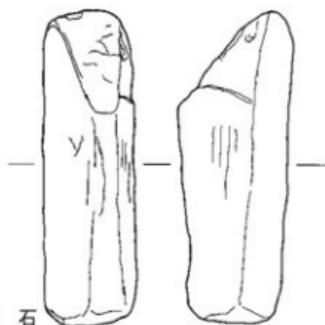
第4図—② 第1竪穴住居跡遺構図



第5図—② 第1竪穴住居跡遺物図



用途不明石製品



砥石

あったのかなど疑問点が残る。第1竪穴住居の住人はこの耳環を粉失していたのではないかと考えられる。

P1～4の方形の柱穴配置の内側に、軸をほぼ同一にして1回り小さくP5～8の方形の柱穴配置が確認されており、小型の竪穴住居跡があったものと考えられる。第1竪穴住居跡は、もともとこの小型のものであったが、家族の増員等により、大型の住居へ拡張したものであろう。

この竪穴住居跡の規模は、柱穴間距離と黄褐色土に掘りこまれた部分が、第1竪穴住居

跡の内側（小型竪穴住居跡の床面と考えられる範囲）ではあらく、壁に近い部分では、硬くしまっていたことから一辺が4.6mの方形であると推測される。ピットのプランは、P 5 (116×93-51)、P 6 (107×75-61)、P 7 (105×73-50)、P 8 (74×46-36) cmを測り、P 6とP 7は2段掘り、P 6～8に柱痕が残っている。柱穴間距離は、P 5-P 6間より順に、2.36 m、2.52 m、2.36 m、2.52 mを測る。

また第1竪穴住居跡の調査が終了した後、北側の黒褐色土を除去した所、第4竪穴住居跡が検出された。これはトレンチの断面調査では確認できなかったもので、黒褐色土の下層の黄褐色土が掘り込まれていたことによって当初第1竪穴住居跡の貯蔵穴ではないかと考えていた。P 2と切り合うP 13は第4竪穴住居跡の2本柱の柱穴跡と判明した。P 2とP 13の切り合い関係より、第4竪穴住居跡は第1竪穴住居跡より古いものである。(13頁、第4竪穴住居跡参照) 以上の事より、これらの3つの竪穴住居跡は、第4竪穴住居跡(2本柱)→小型第1竪穴住居跡(4本柱)→大型第1竪穴住居跡(4本柱)の順に造られたものと考えられる。

また第1竪穴住居跡の南側でトレンチ調査を行った際落ち込みが検出されたため、第3竪穴住居跡、第5竪穴住居跡として調査を行ったが、結局遺構でないことが判明した。

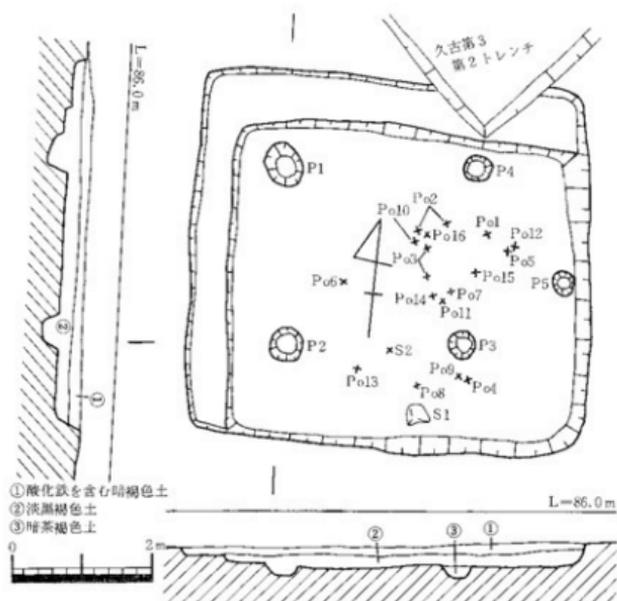
#### 第2竪穴住居跡(図版5・6・7)

5 D地区と6 D地区にまたがって位置し、平面形は長方形である。床面の大きさは、長辺4.8 m、短辺4.2 mを測り、主軸はN-83°-Wである。床面積は約20.7 m<sup>2</sup>である。壁高は東側で最大値41 cm、南側で最小値34 cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で5個検出した。4本柱の建物跡で、柱穴と考えられるものはP 1～P 4の4個である。各柱穴の規模はP 1より(65×52-36)、(47×43-30)、(44×38-27)、(42×39-37) cmを測り、P 5 (37×35-33) cmは支持柱と考える。また第2竪穴住居跡は北に約60 cm、西に約40 cmの幅をもつベッド状の遺構をもつ。これは休息のための施設と考える。ベッド状の遺構を含めた床面の大きさは長辺5.6 m、短辺5.2 mを測る。床面からベッド状の遺構までの高さは、北・西ともに約8 cmである。

遺物は床面の東半分集中して検出した。内訳は土師器3個体、須恵器13個体、石製品2個体である。以下それらの遺物について記述する。

土師器の器種は甕である。甕(Po 1)は口縁部が外反し端部は丸い。甕(Po 2・3)は口縁部がラッパ状に開き端部は丸い。いずれも口縁部内外面横ナデ、胴部外面ハケ、内面ヘラ削り調整。口径は21～23 cm。

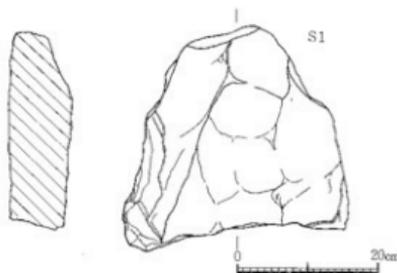
須恵器は、蓋坏、高坏、甕、長頸壺の器種がある。蓋坏甕(Po 4・5)はいずれも天井部外面はヘラ起し後ナデ調整。内外面とも横ナデ調整。坏身(Po 6～9)は立ちあがり内傾し伸び、底部外面未調整。内外面ナデ調整。口径は10～13 cm。坏身(Po 10～12)



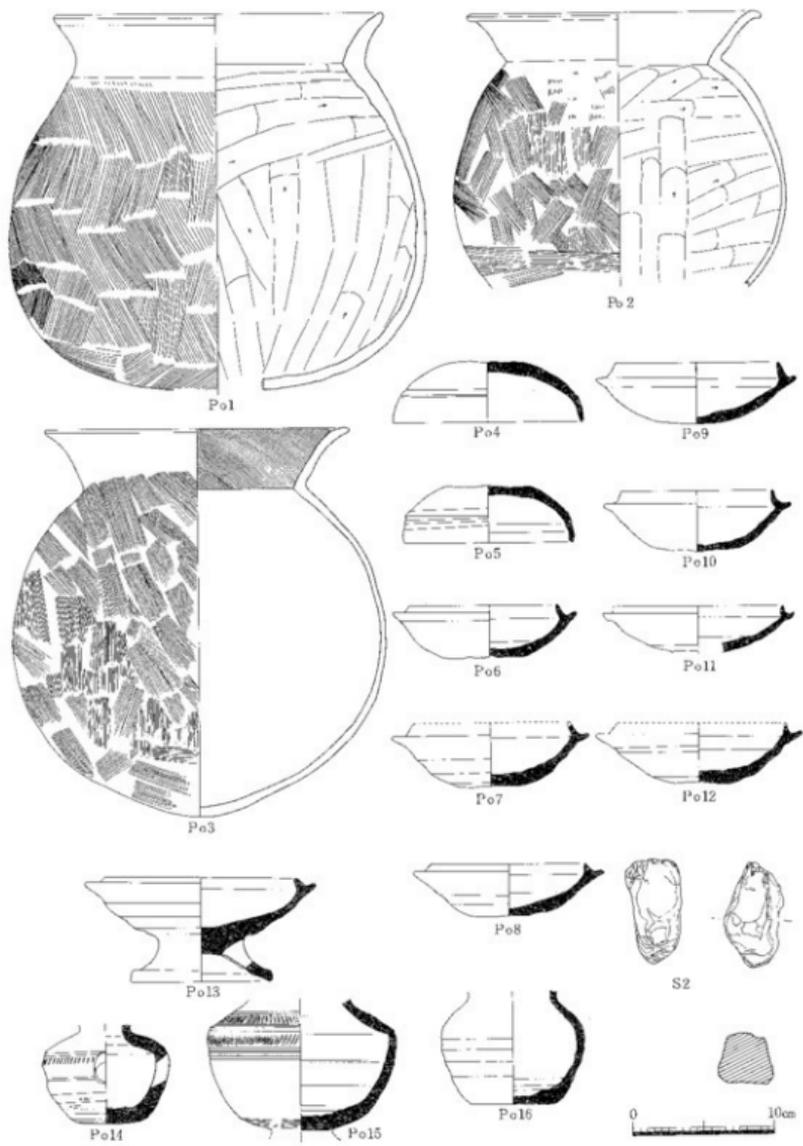
第6図 第2竪穴住居跡遺構図

は立ちあがり直立気味で、底部外面未調整。口径は10~13cm。内外面ナデ調整。高坏(Po13)は坏部の立ちあがりは内傾し、脚は短かく三方に四角形の透し孔がある。内外面ナデ調整。甕(Po14)は口縁部、頸部を欠く。肩部には木口状工具による刻み目が施される。長頸壺(Po15・16)はいずれも口縁部、頸部を欠く。Po15は肩部に木口状工具による刻み目が施されている。台付であったが台はとれている。

石製品(S1)は用途不明であるが、第1竪穴住居跡でも同様な用途不明の石製品がでており、その関連性が注目される。石製品(S2)も用途不明であるが火打ち石と考えたい。前に北側で2トレンチ掘り下げ中に重なり合った竈・甕各1個体を検出した。第2竪穴住居跡では、炉跡を検出していないことから、煮炊きは屋外で行っていた可能性がある。以上の遺物から第2竪穴住居跡の時期は7世紀初頭であり、今回の調査では一番新しい住居跡である。



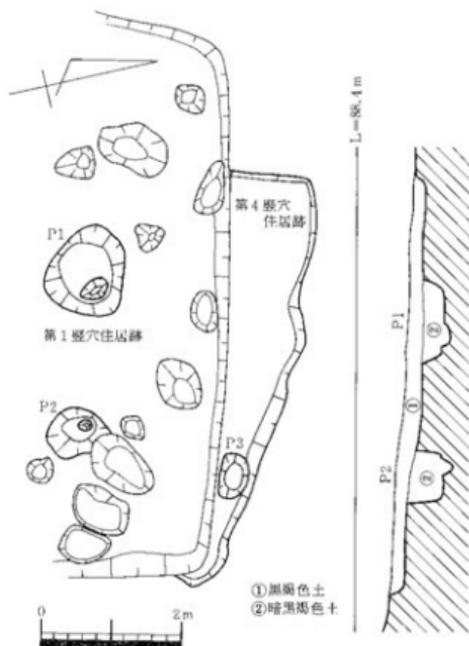
第7図一① 第2竪穴住居跡遺物図



第7图一② 第2竖穴住居跡遺物図

#### 第4 竪穴住居跡 (図版 8)

5 F 地区の南に位置し、西半分以上が第1 竪穴住居跡と切り合う。新旧関係は、第4 竪穴住居跡の方が断面の切り合い関係から第1 竪穴住居跡よりも古いと考える。平面形は長方形になると考える。床面の大きさは、東西方向で6 mを測り、主軸はN-78°-Wである。壁高は北側で最大値22cm、西側で最小値6 cmを測る。遺構に確実に伴うと考えられるピットを3個検出した。柱穴と考えられるものはP1とP2の2個で、いずれも2段の掘り方をもち第1 竪穴住居跡の床面上に存在する。各柱穴の規模はP1 (128×103-52)、P2 (88×65-65) cmを測り、P3 (68×44-22) cmは補助柱と考え

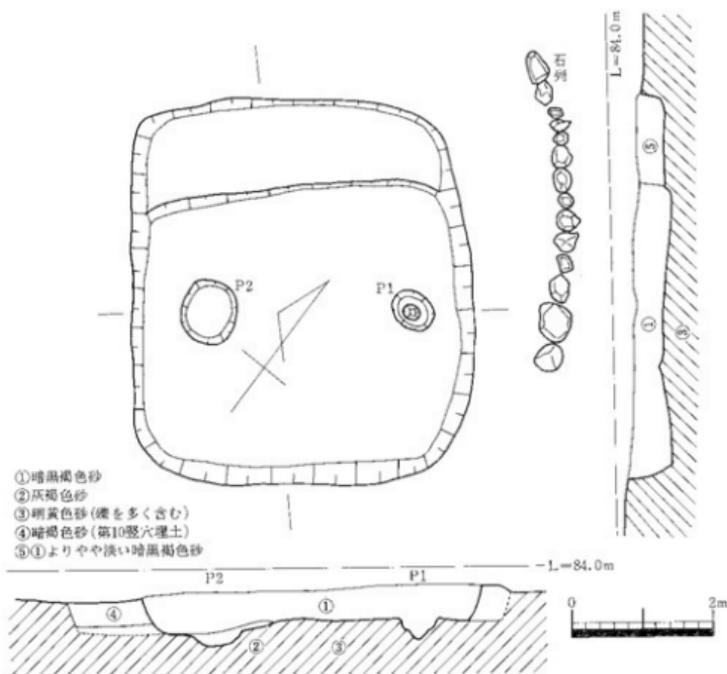


第8図 第4 竪穴住居跡遺構図

られる。P1とP2の柱穴間距離は1.92mを測る。遺物は床面上から土師器片、須恵器片を数点検出したが図化できなかった。時期は遺物より古墳時代後期と考えられる。

#### 第6 竪穴住居跡 (図版 8)

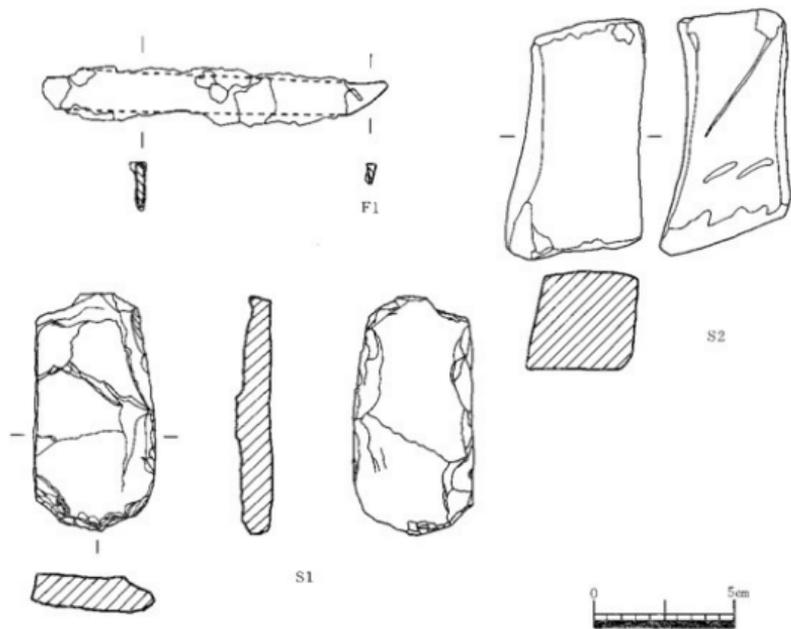
9 A、10 A地区に位置し、第7 竪穴住居跡の東にあり、第10 竪穴住居跡とは東側で重複している。第6 竪穴住居跡が第10 竪穴住居跡を切ってつくられており、本住居跡のほうが新しい。主軸方向はN-40°-Wで、遺構の規模は長軸5.47m、短軸4.83mを測り床面積は約21.1㎡であるが、北側に長辺4.50m、短辺1.30m、面積約4.6㎡のベッド状の遺構をもつ2本柱の住居跡である。柱穴はP1 (58×53-27)、P2 (86×77-25) cmの2個で、柱穴間の距離は2.90mである。住居跡の東側に、住居跡に沿う形で大小15個の自然石が並列されていたが、その意図は不明である。遺構内から土師器、須恵器片が出土し、P1から土師器片が検出されているが、図化できなかった。また埋土中より、打製石斧、砥石、刀子が検出されている。この建物跡の時期は周辺の第7・8 竪穴住居跡と同方向で、同時期にたっていたものと思われるので、第7・8 竪穴住居跡と同じく、古墳時代後期の6世紀後半と思われる。



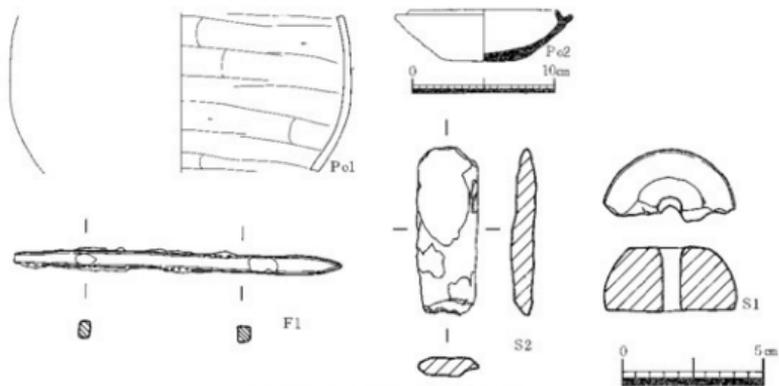
第9図 第6竪穴住居跡遺構図

第7竪穴住居跡（図版8）

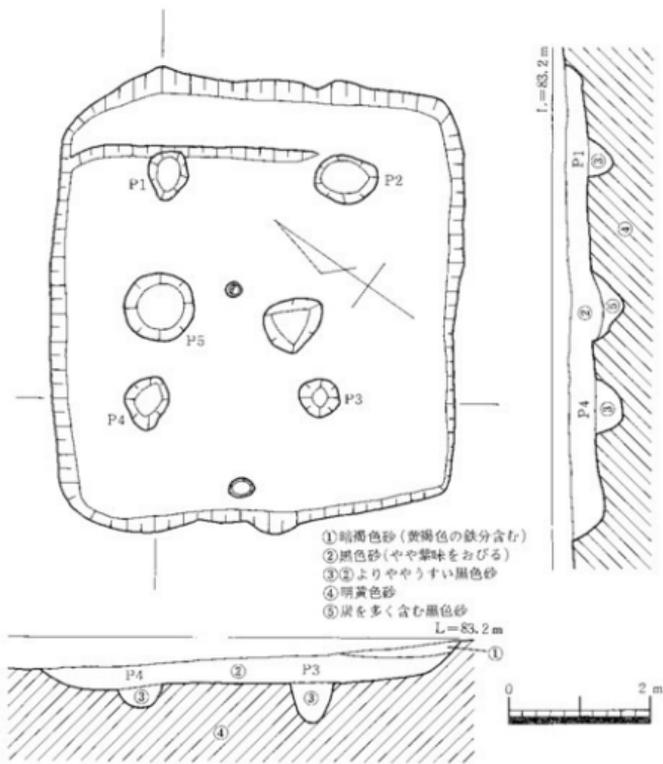
10A、10AA、11A、11AA地区に位置し、東に第6竪穴住居跡、西に第8・第9掘立柱建物跡がある。主軸方向はN-34°-Wで、長軸6.28m、短軸5.60m、床面積約32㎡の4本柱の竪穴住居跡で、東側には北より長さ約5.4m、幅約0.96mのベッド状遺構がある。P1とP4間にP5（98×98-44）cmの貯蔵穴らしき落ち込みがあり埋土中より多くの炭が出土した。各柱穴の規模はP1より（71×54-30）、（87×66-33）、（54×52-57）、（74×61-31）cmを測り、各柱穴間の距離はP1より2.52、3.11、2.45、3.25mを測る。柱穴底の絶対高差は26cmである。遺構内より滑石製紡錘車（S1）、不明石製品（S2）、黒曜石、鉄鏃片（F1）、土師器、須恵器片が、床面から土師器甕片（Po1）が出土しているが、各柱穴からの遺物は検出されなかった。この住居跡の時期は古墳時代後期の新しい時期（6世紀末頃）と思われる。



第10图 第6竖穴住居跡遺物図



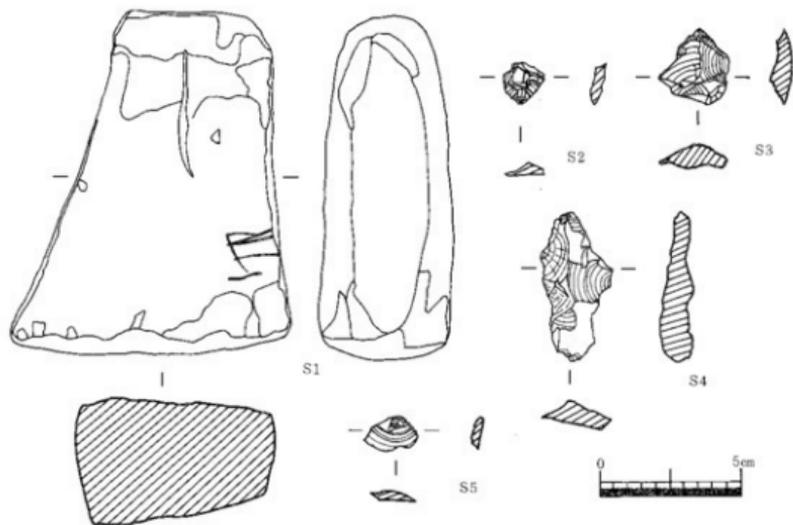
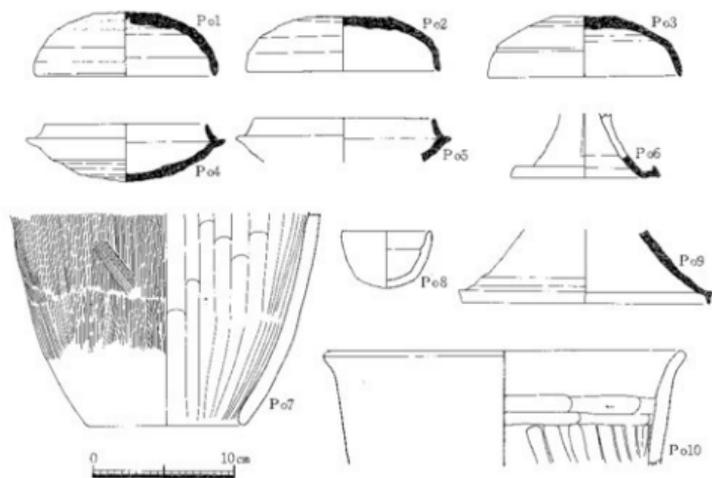
第11图 第7竖穴住居跡遺物図



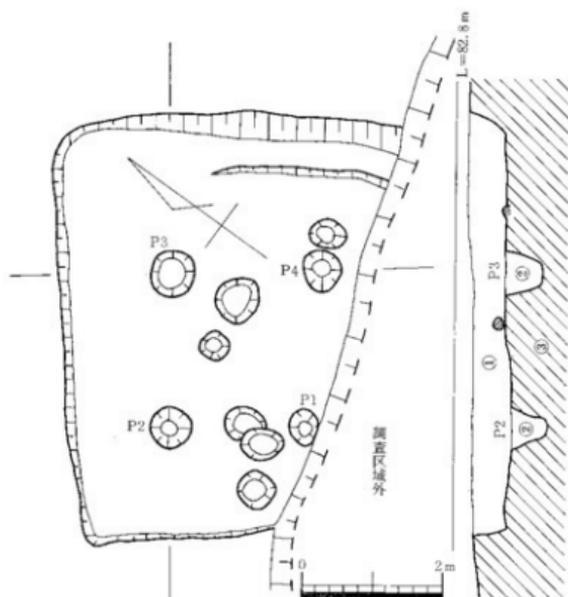
第12図 第7 堅穴住居跡遺構図

第8 堅穴住居跡 (図版9)

12A地区に位置し、第7 堅穴住居跡、第8・9 掘立柱建物跡の西にあり、第12・13掘立柱建物跡と一部重複する。遺構の規模は南側の一部が調査地区外となっており、全容を知ることにはできないが、長軸約5.95m、短軸3.35mと推定される4本柱の堅穴住居跡である。主軸方向はN-54°-Eで、発掘されている床面積は約17.3㎡である。柱穴はP1より(62×47-62)、(58×57-57)、(66×63-52)、(56×54-42)cmを測り、各柱穴間の距離はP1より、1.90、2.18、2.12、2.22mを測る。柱穴底の絶対高差は20cmである。遺構内の埋土から土師器、須恵器片、黒曜石が出土し、床面から土師器、須恵器片とともに須恵器の蓋(Po1・2・3)、環(Po4・5)、砥石(S1)が出土している。各柱穴からの遺物はP1より土師器片、須恵器片が検出されている。この堅穴住居跡の時期は6世紀後半と考えられる。



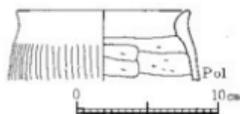
第13圖 第8 豎穴住居跡遺物圖



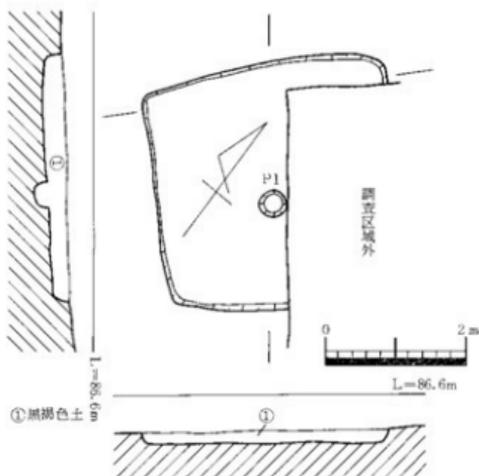
第14図 第8堅穴住居跡遺構図

第9堅穴住居跡 (図版10)

4 E地区と5 E地区にまたがって位置し、第2堅穴住居跡の東にある。平面形を方形とする小型の住居跡である。床面の大きさは長辺3.52m、短辺3.52m(推定)で、床面積は約10.7㎡である。主軸はN-42°-Wである。壁高は南側で最大値26cm、西側で最小値7cmを測る。ピットは床面中央で1個検出し、1本柱の堅穴住居跡と考える。柱穴の規模はP1(36×36-19)cmである。遺物は床面直上で土器(Po1)、須恵器片を検出した。Po1は小型の甕で、口縁部内外面は横ナデ、胴部外面は縦方向の粗いハケ目、胴部内面はヘラ削りで調整されている。時期は出土遺物から古墳時代後期と考えられる。



第15図 第9堅穴住居跡遺物図

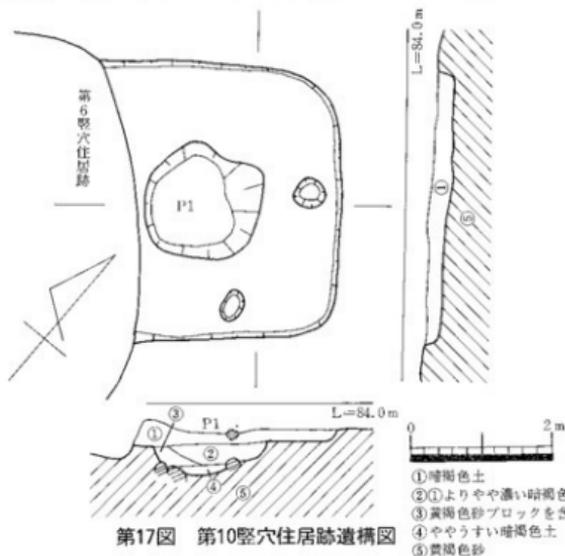


第16図 第9堅穴住居跡遺構図

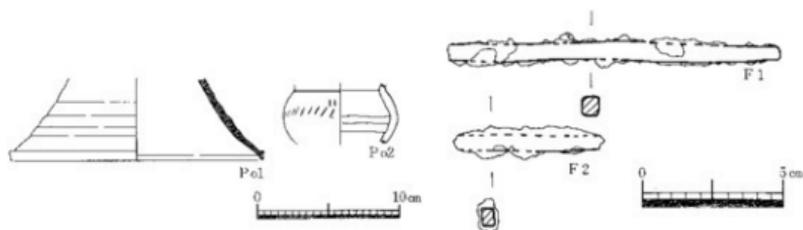
れている。この建物跡の時期は、第6堅穴住居跡より古く、6世紀中頃と思われる。

### 第10堅穴住居跡 (図版10)

9A地区に位置し、東は第10掘立柱建物跡と接し、西は第6堅穴住居跡と重複しており、全容は明らかでない。主軸方向は $N-40^{\circ}-W$ で、発掘された遺構の規模は長軸3.86m、短軸2.90mを測り、床面積は約11 $m^2$ である。柱穴の規模はP1(162×160-44)cmを測り、東側と西側には各1個の支柱穴とも考えられるビットがある。遺構内の遺物は埋土より土師器、須恵器、鉄鍔が出土し、中央柱穴から土師器片、須恵器片が検出された。



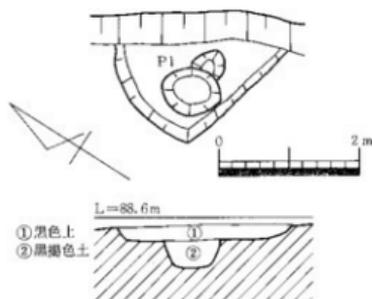
第17図 第10堅穴住居跡遺構図



第18図 第10堅穴住居跡遺物図

第1土坑 (図版13)

4 F・5 F地区に位置し、第1堅穴住居跡、第4堅穴住居跡の北にある。大部分が発掘調査範囲外にあるため調査できなかったが、堅穴住居跡の一部と思われる。抜きとり痕のあるP1 (87×62-38) cmを検出した。柱穴底は標高87.32mである。遺構内からは遺物を検出なかった。時期は周辺の遺構との関係から、古墳時代後期のものと思われる。



第19図 第1土坑遺構図

(3) 掘立柱建物跡

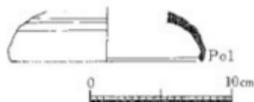
	柱間規模	主 軸
第1掘立柱建物跡	3×4	N-80°-E
第2 "	1×3	N-70°-E
第3 "	1×2	N-80°-E
第4 "	2×2 (総柱)	N-90°-W
第5 "	1×2 (以上)	N-9°-E
第6 "	3×2 (以上)	N-30°-E
第7 "	2×4 (推定)	N-45°-E
第8 "	2×4 (推定)	N-63°-E
第9 "	3×4	N-56°-E
第10 "	1×2 (以上)	N-61°-W
第11 "	2×2	N-84°-E
第12 "	3×4 (推定)	N-50°-E
第13 "	2×4 (推定)	N-43°-W

表1 久古第3遺跡掘立柱建物跡一覧表

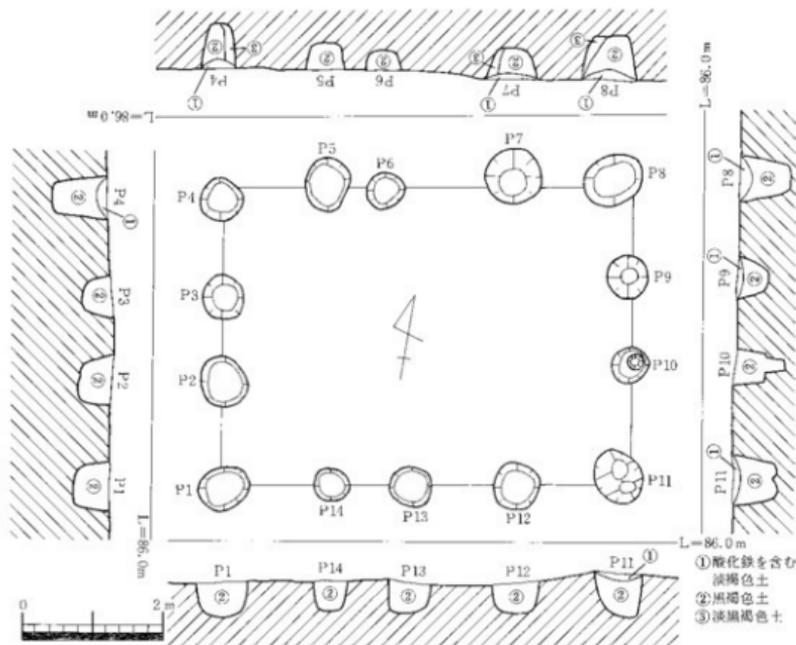
### 第1 掘立柱建物跡 (図版10・11)

6 D地区と7 D地区にまたがって位置し、第2 掘立柱建物跡、第3 掘立柱建物跡と切り合う。柱穴の切り合い関係より、新旧関係は古い方から、第3 掘立柱建物跡・第1 掘立柱建物跡・第2 掘立柱建物跡の順である。

主軸方向はN-80°-Eで、梁行3間、桁行4間の建物跡である。長軸5.76m、短軸4.20mを測り、床面積は約24.2㎡である。各柱穴の規模はP1より(72×65-53)、(74×66-51)、(68×56-48)、(64×62-67)、(84×55-32)、(59×51-31)、(79×78-52)、(87×65-63)、(67×54-52)、(57×49-78)、(86×66-67)、(70×61-42)、(62×52-45)、(51×46-43)cmである。柱穴は14個で、柱穴間距離はP1-P2間より順に1.44、1.2、1.56、1.36、0.84、1.8、1.44、1.36、1.2、1.84、1.6、1.48、1.12、1.44mを測る。柱穴底の絶対高差は36cmである。遺物はP9内より須恵器(Po1)を検出した。Po1は須恵器蓋坏の蓋で明瞭な稜線をもつ。建物跡の時期はこの遺物だけでは判断できないのが古墳時代後期であろう。



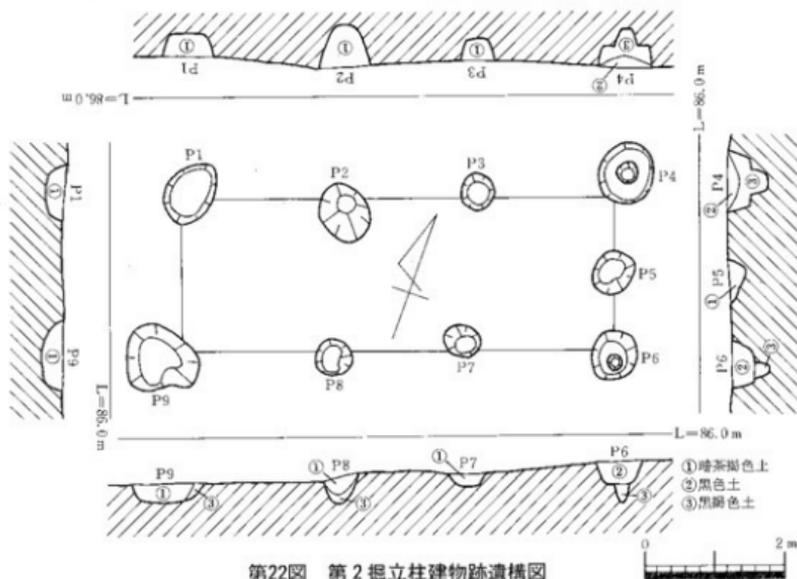
第20図 第1 掘立柱建物跡遺物図



第21図 第1 掘立柱建物跡遺構図

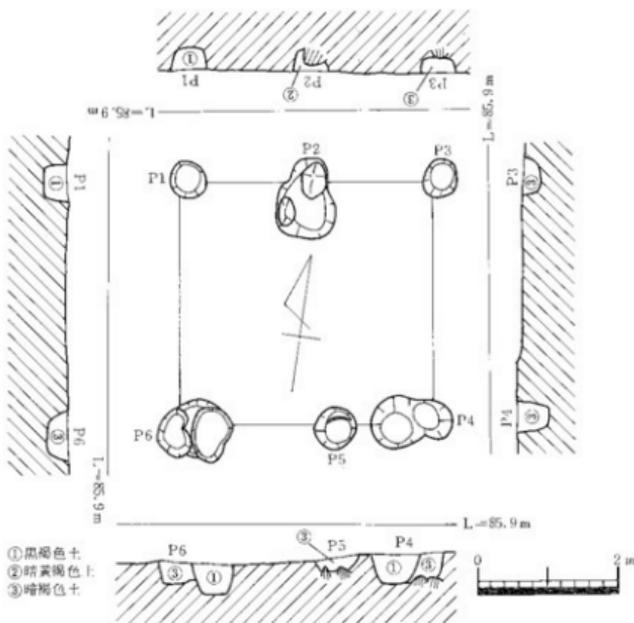
## 第2掘立柱建物跡 (図版11)

6 D、6 E、7 D地区に位置し、第1掘立柱建物跡と切り合う。新旧関係は第2掘立柱建物跡の方が、ピットの切り合い関係から新しいと考える。主軸方向はN-70°-Eで、梁行1間、桁行3間であるが、東側梁行は2間となっている。長軸6.08m、短軸2.16mを測り、床面積は約13.1㎡である。各柱穴の規模はP1より(90×67-33)、(86×66-65)、(60×47-31)、(90×77-54)、(60×56-25)、(74×65-51)、(52×50-47)、(104×85-29)cmである。柱穴間距離はP1-P2間より1.84、1.88、2.16、1.4、1.28、2.08、1.84、2.24、2.24mを測る。柱穴底の絶対高差は53cmである。遺物は何も検出されなかった。この建物跡の時期は、古墳時代後期ごろと考えられる。



## 第3掘立柱建物跡 (図版11)

6 C、6 D地区に位置し、第1掘立柱建物跡と切り合う。新旧関係は第3掘立柱建物跡の方が、ピットの切り合い関係から古いと考える。主軸方向はN-80°-Eで、梁行1間、桁行2間の建物跡である。長軸3.52m、短軸3.4mを測り、床面積は約12㎡である。各柱穴の規模はP1より(55×49-36)、(109×52-36)、(55×47-21)、(67×42-41)、(57×53-25)、(65×35-36)cmである。柱穴間距離はP1-P2間より、1.8、1.72、3.4、1.4、2.12、3.4mを測る。柱穴底の絶対高差は、27cmである。遺物は何も検出されなかった。この建物跡の時期は、古墳時代後期であろう。



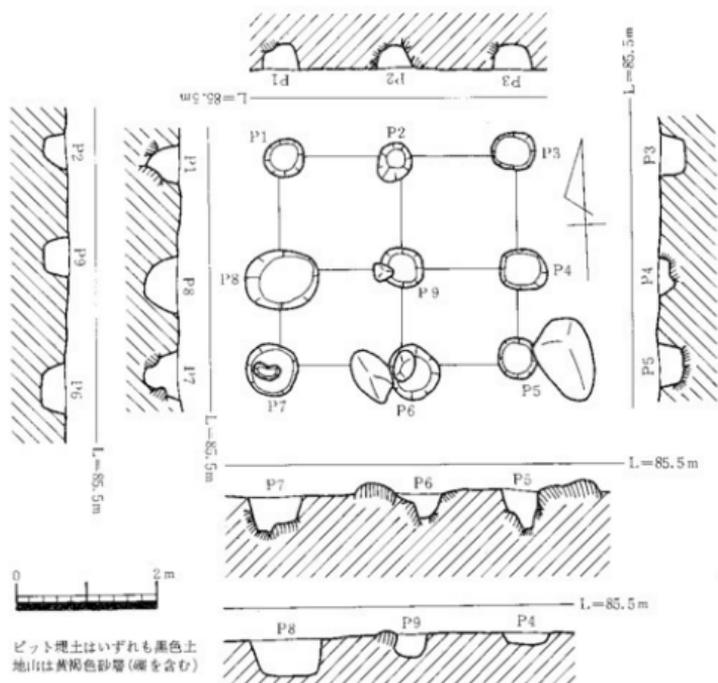
第23図 第3掘立柱建物跡遺構図

第4掘立柱建物跡（図版11）

7 C、7 D、8 C地区に位置し、第1・第2・第3掘立柱建物跡の西にある。主軸方向はN-90°-Wで、梁行2間、桁行2間の総柱の建物跡である。長軸3.2m、短軸2.8mを測り、床面積は約9㎡である。各柱穴の規模はP1より(55×48-36)、(52×42-33)、(66×55-37)、(66×58-32)、(61×55-60)、(76×63-36)、(76×68-51)、(105×85-36)、(55×50-34)cmである。柱穴間距離はP1-P2間より外周は、1.64、1.6、1.6、1.36、1.4、1.6、1.6、1.36mを測り、内周はP2-P9間1.44、P4-P9間1.6、P6-P9間1.36、P8-P9間1.6mを測る。柱穴底の絶対高差は27cmである。各柱穴からは、遺物を検出しなかった。建物跡の時期は、古墳時代後期であろう。

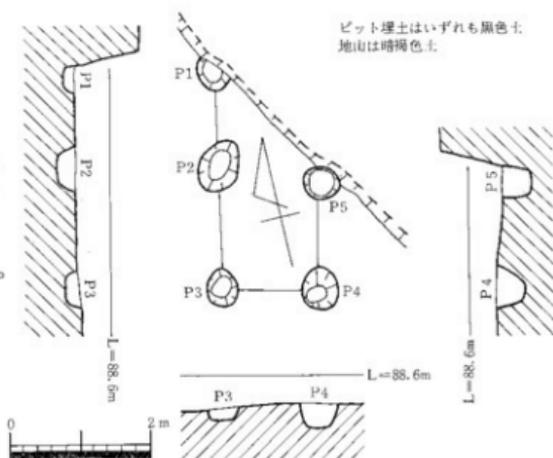
第5掘立柱建物跡（図版11）

5 H地区の北東に位置し、第6掘立柱建物跡と重なり合うが、新旧関係は不明である。主軸方向はN-9°-Eで、梁行1間、桁行2間、もしくは2間以上の建物跡である。長軸3.04m以上、短軸1.20mを測る。各柱穴の規模はP1より(-)、(75×54-26)、(51×



第24図 第4掘立柱建物跡遺構図

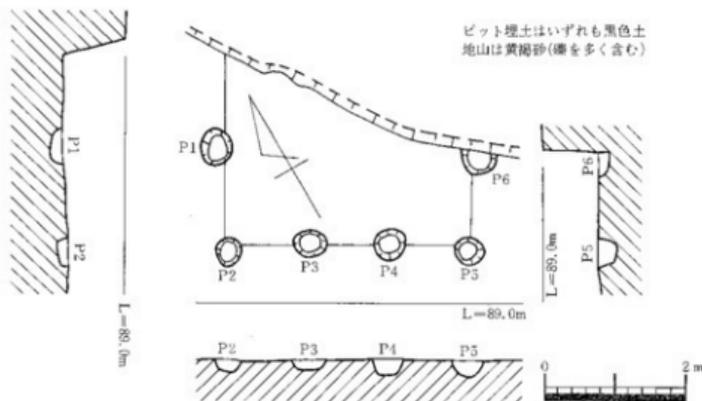
47-19)、(59×50-39)、  
 (52×44-39) cmである。  
 柱穴間距離はP1-P2間  
 より、1.32、1.8、1.36、  
 1.52mを測る。柱穴底の絶  
 対高差は22cmである。遺物  
 はP1より土師器片を検出  
 したが、図化できなかった。  
 時期は、古墳時代後期であ  
 る。



第25図 第5掘立柱建物跡遺構図

### 第6 掘立柱建物跡 (図版11)

5 H地区の北東にあり、第5 掘立柱建物跡と重なり合うが、新旧関係は不明である。主軸はN-30°-Eで、梁行3間、桁行2間以上の建物跡である。長軸2.80m以上、短軸3.44mを測る。各柱穴の規模はP1より(50×40-20)、(40×35-20)、(47×35-14)、(46×43-24)、(42×37-27)、(-)cmである。柱穴間距離はP1-P2間より1.44、1.2、1.2、1.2、1.2mを測る。各柱穴とも遺物を検出しなかった。時期は、古墳時代後期であろう。



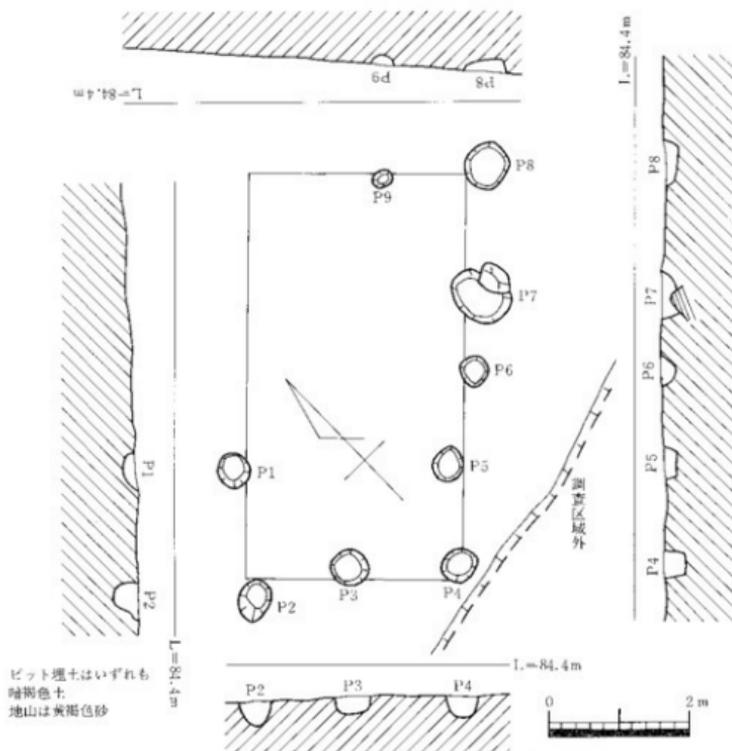
第26図 第6 掘立柱建物跡遺構図

### 第7 掘立柱建物跡 (図版11)

9 A・B地区に位置し、北に第10掘立柱建物跡、第2 溝状遺構、西に第6・第10竪穴住居跡がある。主軸方向はN-45°-Eで、梁行2間、桁行4間と推定されるが、梁柱穴3個のうち北側の1個、北側桁柱の柱穴3個が消失している。長軸5.59m、短軸2.96m、床面積は約17.0㎡である。各柱穴の規模はP1より(48×44-16)、(61×44-36)、(54×50-24)、(55×46-22)、(50×43-18)、(44×41-20)、(87×34-20)、(67×57-20)、(28×22-12)cmで、P1よりP9までの各柱穴間距離は1.88、1.48、1.58、1.44、1.44、1.10、1.80、1.44mとなっている。柱穴底の絶対高差は24cmである。遺構上から土師器、須恵器片が出土したが、柱穴から遺物は検出されていない。この建物跡の時期は不明であるが集落の営まれた古墳時代後期であろう。

### 第8 掘立柱建物跡 (図版11)

11A地区に位置し、北に第9 掘立柱建物跡、西に第8 竪穴住居跡がある。梁間2間以上、桁行5間の建物跡と推定されるが、1/2以上の遺構が調査地区外となっているので全容は不明である。主軸方向はN-63°-Eで、確認できるものは北側長軸5.91m、短軸2.24m、

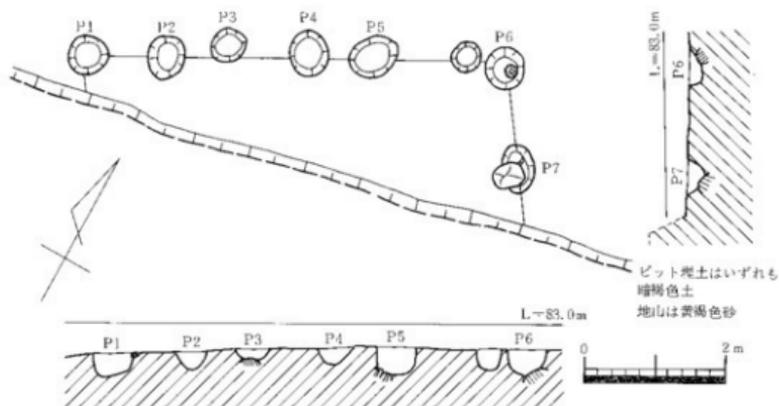


第27図 第7掘立柱建物跡遺構図

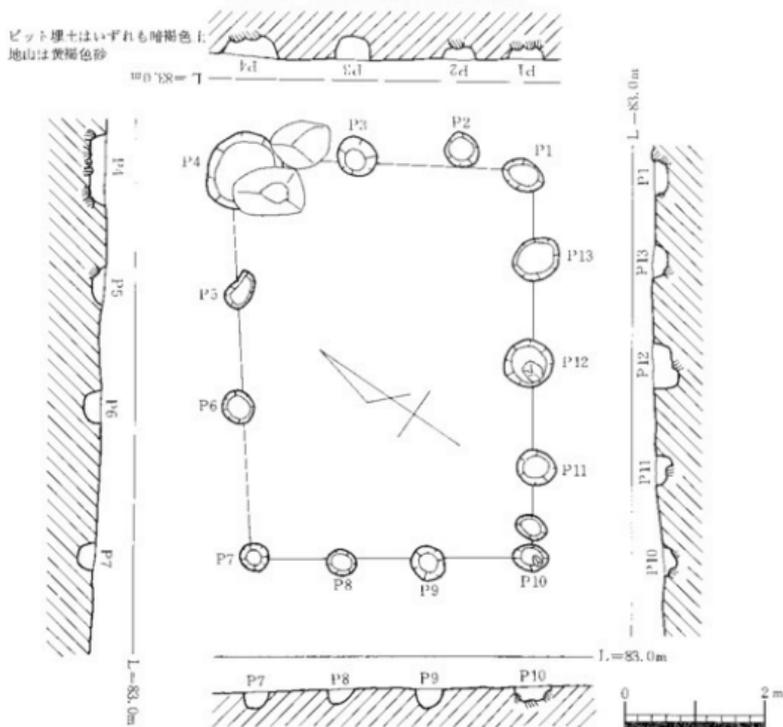
床面積約6.6㎡である。各柱穴の規模はP1より(54×48-24)、(60×56-26)、(50×46-14)、(63×54-24)、(70×58-38)、(60×56-38) cmである。P1よりP7までの各柱穴間距離は1.12、0.84、1.18、0.88、1.89、1.53 mとなっている。柱穴底の絶対高差は24 cmである。遺構上面から土師器、須恵器片が出土している。各柱穴内より遺物は検出されていないが、この建物跡の時期は周辺の遺構、遺物から推定すれば古墳時代後期のものと思われる。

#### 第9掘立柱建物跡(図版12)

11A地区に位置し、東に第7竪穴住居跡、南に第8掘立柱建物跡、西に第12・第13掘立柱建物跡がある。主軸方向はN-56°-Eで、梁間3間、桁行4間の掘立柱建物跡である。長軸は南側5.48 m、北側5.80 m、短軸東側4.30 m、西側3.99 mを測り、床面積は約23㎡である。P1よりの各柱穴の規模は(61×46-20)、(52×50-16)、(58×56-36)、(106×106-30)、(52×38-18)、(48×44-24)、(42×40-22)、(50×38-24)、(56×50-



第28図 第8掘立柱建物跡遺構図

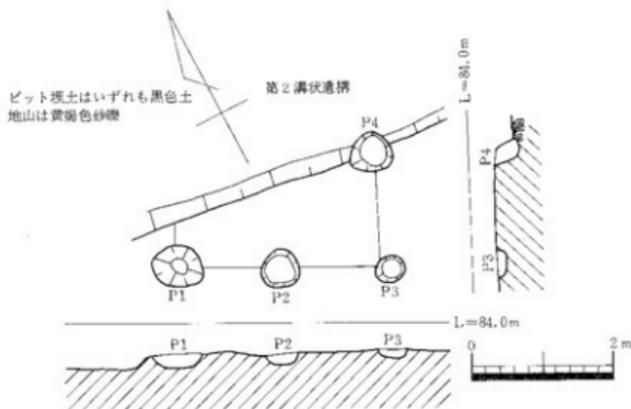


第29図 第9掘立柱建物跡遺構図

24)、(70×68-28)、(56×50-22) cmである。P 1 から各柱穴間の距離は0.89、1.51、1.80、1.97、1.61、2.14、1.28、1.21、1.50、1.30、1.45、1.50、1.27 mを測る。柱穴底の絶対高差は18cmである。遺構上から土師器、須恵器片が出土し、各柱穴からの遺物はP 7 から土師器片が検出されている。この建物跡の時期は柱穴の遺物、周辺の遺構の関係から古墳時代後期と推定される。

#### 第10掘立柱建物跡 (図版12)

9 A地区に位置し、第7掘立柱建物跡の北にある掘立柱建物跡で、第10竪穴住居跡、第2溝状遺構と重複している。主軸方向はN-61°-Wで、梁間1間以上、桁間2間であるが、北側の桁柱穴2個が第2溝状遺構におち、南側の桁柱穴1個は第10竪穴住居跡と重複しており全容は不明である。確認できる長軸は2.86 m、短軸1.63 m、床面積約3.2 m<sup>2</sup>である。各柱穴の規模はP 1 (72×62-18)、(56×54-16)、(44×36-14)、(59×57-36) cmを測り、P 1 よりP 4 の柱穴間距離は1.44、1.60、1.63 mを測る。柱穴底の絶対高差は22cmである。各柱穴から遺物は検出しなかった。第2溝状遺構より新しいが、第10竪穴住居跡との新旧ははっきりつかめなかった。時期は古墳時代後期であることはまちがいないが、それ以上は不明である。

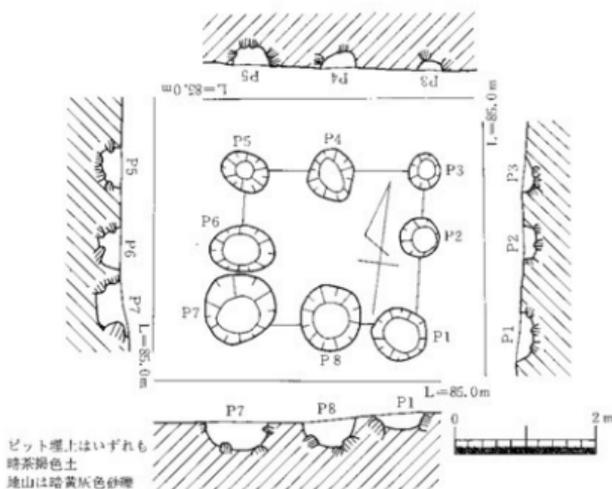


第30図 第10掘立柱建物跡遺構図

#### 第11掘立柱建物跡 (図版12)

7 B地区に位置し、第1溝状遺構の西にある。主軸方向はN-84°-Eで、梁間2間、桁行2間の建物跡である。長軸は北側2.51 m、南側2.50 m、短軸は東側2.14 m、西側2.20 mで床面積は約5.4 m<sup>2</sup>である。各柱穴の規模はP 1 より(78×72-26)、(58×54-18)、

(52×44-15)、(76×70-24)、(68×54-26)、(92×68-32)、(100×97-42)、(87×71-39) cmである。P 1からの各柱穴間距離は1.24、0.90、1.31、1.20、1.12、0.80、1.30、1.20 mとなっている。各柱穴底の絶対高差は55cmである。遺構内から土師器片、須恵器片が出土しており、P 6から土師器片が検出されているが図化できなかった。他の掘立柱建物跡と同様古墳時代後期の建物跡と思われる。



第31図 第11掘立柱建物跡遺構図

### 第12掘立柱建物跡 (図版12)

12 A地区に位置し、南側で第13掘立柱建物跡、第8竪穴住居跡と重複している。主軸方向はN-50°-Eで、梁間3間、桁行4間と推定される掘立柱建物跡であるが、西側梁柱穴2個、南側桁柱穴2個が第8竪穴住居跡に落ちており全容は明らかでない。北側長軸6.66m、東側短軸4.80mを測り、床面積は約32㎡と推定される。各柱穴の規模はP 1より(46×44-34)、(73×60-40)、(48×44-16)、(28×27-12)、(48×34-22)、(40×33-22)、(67×58-34)、(67×65-36)、(64×54-29)、(55×52-27) cmを測り、P 1よりP 10までの各柱穴間距離は1.34、1.71、1.68、1.36、1.91、1.75、1.76、1.42、1.60 mを測る。柱穴底の絶対高差は28cmである。遺構内から土師器、須恵器片を検出しP 7内からは土師器の甕の口縁部片が検出されている。この掘立柱建物跡の時期は、他の遺構と同様古墳時代後期と思われる。



第32図 第12掘立柱建物跡遺物図

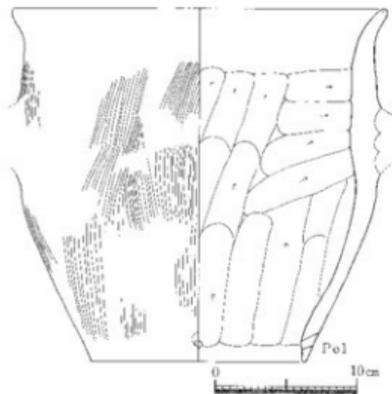


り(48×46-16)、(81×80-22)、(48×48-34)、(56×45-20)、(40×39-19)、(40×38-22)、(34×34-12)、(46×44-32)、(57×40-16) cmを測り、P1よりP9までの各柱穴間距離は1.70、1.45、1.75、1.37、1.20、1.78、2.00、1.36mを測る。遺構上面から土師器、須恵器片を検出しているが、各柱穴内から遺物は検出されていない。時期は、古墳時代後期と思われる。

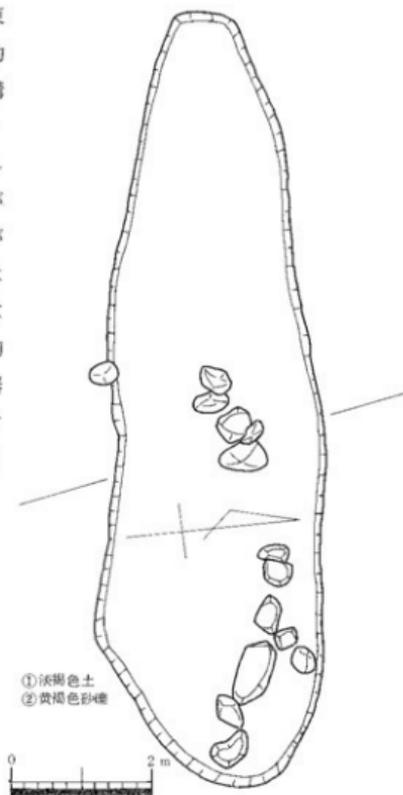
### (3) 溝状遺構

#### 第1溝状遺構(図版12)

6C地区に位置し、第11掘立柱建物跡の東隣にある。主軸方向はN-87°-Wで、幅約3m、深さ約40cm、面積約27㎡の溝状の遺構である。周辺の第2竪穴住居跡、第1・2・3・4・11掘立柱建物跡の方向とほぼ平行している。遺構の埋土から土師器、須恵器片が検出されており、埋土の上層で第34図の甗がほぼ完型に近い形で検出された。埋土中にはきわめて隙が多く埋土もクロボクの混じらない土であり、他の遺構と異なるため、人為的な遺構かどうか疑わしい。埋土中より須恵器片が出上している。住居への水の流入を防ぐための溝とも考えられるが、性格ははっきりしない。



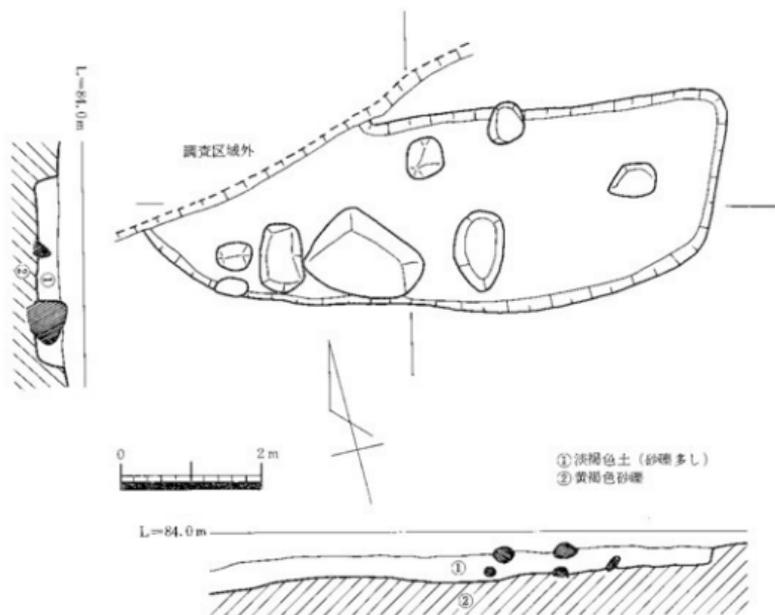
第34図 第1溝状遺構遺物図



第35図 第1溝状遺構遺構図

### 第2溝状遺構（図版13）

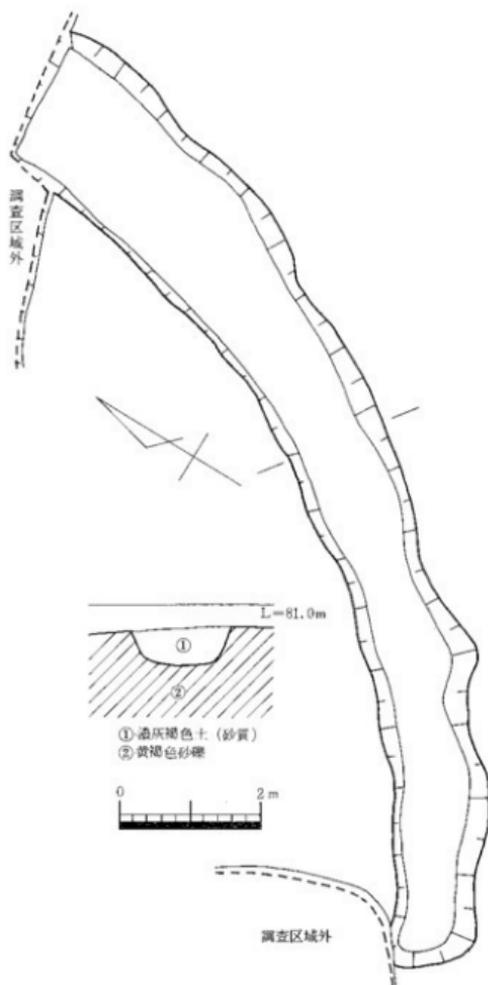
9 A地区に位置し、第10掘立柱建物跡、第10竪穴住居跡、第7掘立柱建物跡の北にあり、南側で第10掘立柱建物跡と重複している。主軸の方向はN-76°-Wで、幅約2.80m、深さ約40cm、現存長約8m、面積約18.4㎡の溝状の遺構であるが、遺構の西北部が久古第3遺跡に沿って流れる調査区域外の用水路に入っており全容は不明である。この遺構の時期は、遺構から検出された土師器、須恵器片、周辺の遺構との関係で古墳時代後期のものと思われる。第1溝状遺構とよく似ている。



第36図 第2溝状遺構遺構図

### 第3溝状遺構（図版13）

13 A地区に位置し、第8竪穴住居跡、第12・13掘立柱建物跡の西にある。方向は北北東-南南西方向で、西向きに緩やかな弧をなしており、幅約1.5m、深さ約50cm、現存長約14m、面積約21㎡の溝状遺構であるが、東端はこの久古第3遺跡の北側に沿って流れる調査区域外の用水路に入っているため全容は不明である。遺構の埋土上層から弥生時代前期、中期の土器が出土しているが、この地区は縄文時代晩期の土器、弥生土器が上面で多くみつかっており、遺構の時期を判断するのはむずかしい。また、埋土も周囲よりやや黒



第37図 第3溝状遺構遺構図

ずんでいる程度で、クロボクの堆積を認めないし、下層で遺物もみつかっておらず土層の変色あるいは氾濫時における流水によって生じた一時的な水路ではないかと思われる。遺物は、第37、38図に掲載したが破片はかなり大きいものの遺構にともなうような出土のしかたでなく、流入によるものと思われる。

#### (4) 遺構外出土の遺物

##### 縄文土器 (図版14)

久古第3遺跡で出土した縄文土器はわずかであるが、D区西側でかなり大きな破片が検出されており、周辺での縄文時代の生活が推測される。

##### 後期の土器

B区で検出された口縁部(Po1)1点のみである。緑帯文土器と思われ、3条の沈線をもち、その上下に縄文がある。

##### 晩期の土器

いずれもD区西側で出土しており、深鉢である。凸帯をもたないもの(Po4・5・6・7)と、凸帯をもつもの(Po2・3・8)がある。前者は、外面は条痕であるが、内面はナデ仕上げのものと、ヘラ状工具による磨きをほどこしたものの2種類がある。色は内外面ともに暗褐色を呈する。後者のPo3は凸帯に刻み目をもたず弥生土器かもしれない。Po7は刻み目凸帯をもち、外面削り、内面はヘラ状工具による磨きか?外面は灰茶褐色、内面は淡黄褐色を呈する。前者、後者は時期差とも考えられるが、出土している層は同一である。

##### 弥生土器 (図版14・15)

久古第3遺跡で出土した弥生土器は前期・中期のもので、D区で大部分が検出されている。

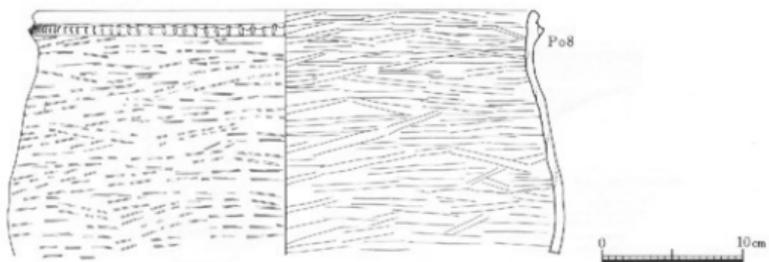
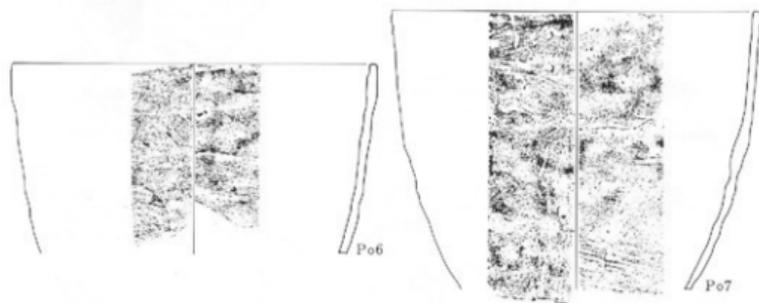
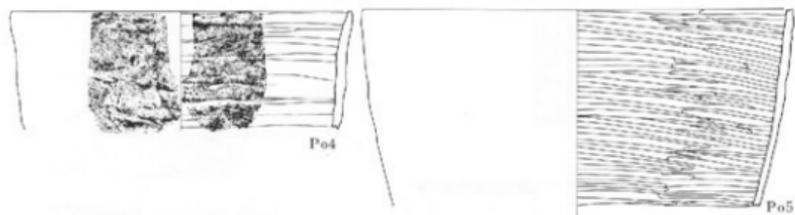
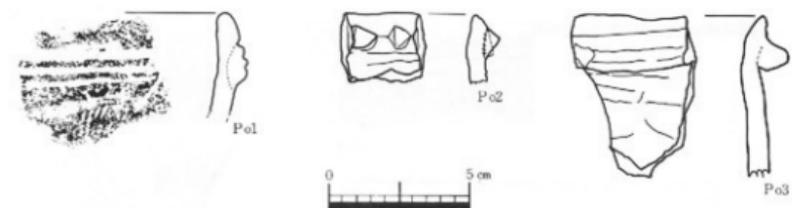
##### 前期の土器

甕の口縁部を4点検出している。口縁部に刻み目をもつもの(Po13)と、もたないもの(Po2・4)があり、いずれも外反する口縁をもつ。底部では、Po13・14の外面に横方向の磨きがみられ、前期に属するものかもしれない。また、Po19は壺肩部と思われるが、外面に木葉文があり、前期の土器と考えられる。

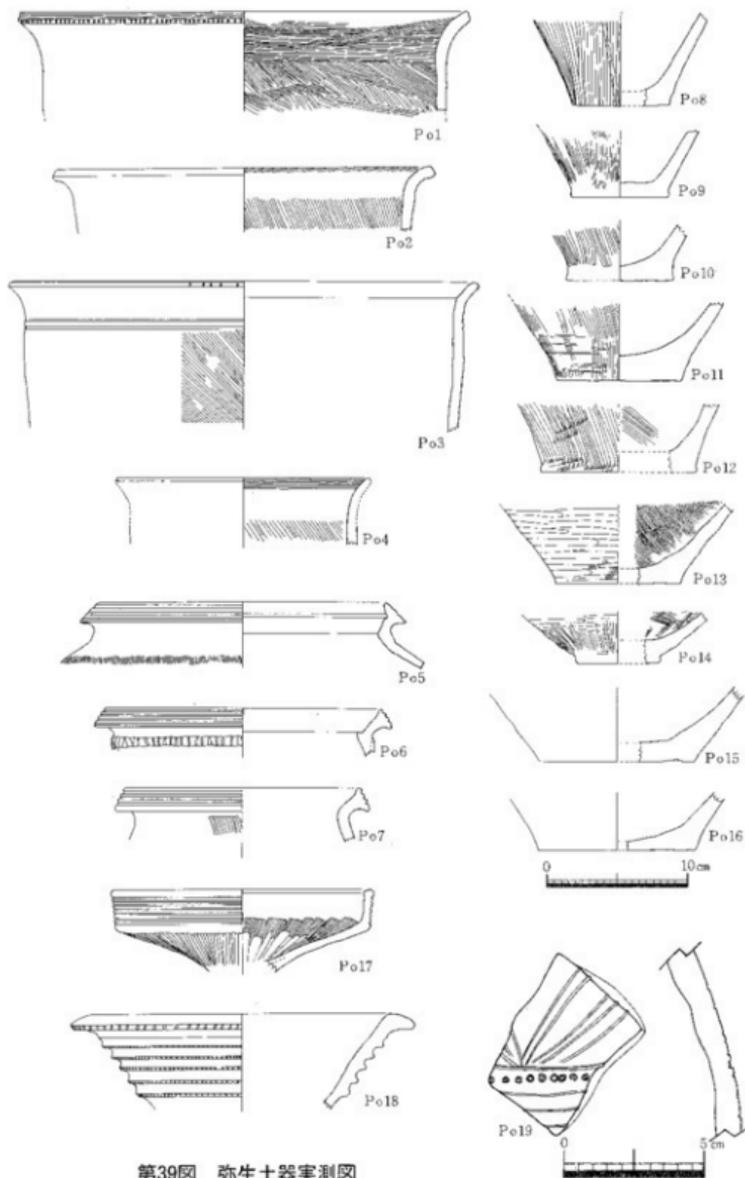
##### 中期の土器

甕・高環・器台がある。甕(Po5~7)はいずれも外反する口縁をもち、口縁外側に3条の凹線が入る。Po6・7の口縁の断面が三角形であるのに対し、Po5は「く」の字状に近くなっている。Po6は頸部に貼付凸帯を持つ。高環(Po17)は口縁外側に7条の凹線をもち、その他はヘラ磨きが施されている。器台(Po18)は口唇部に刻み目をもち、下方にも現存する限りでは5条の刻み目凸帯を有する。

前期・中期の土器ともに完形のものはないがかなり大きな破片があり、また縄文時代晩期の遺物と同じ層で検出されている。この時期の遺構は、調査範囲内では検出されておらず、久古第3遺跡が河岸段丘の堆積上に立地していることから、河川の氾濫によって上流の遺物が流れこんだことを推測させる。

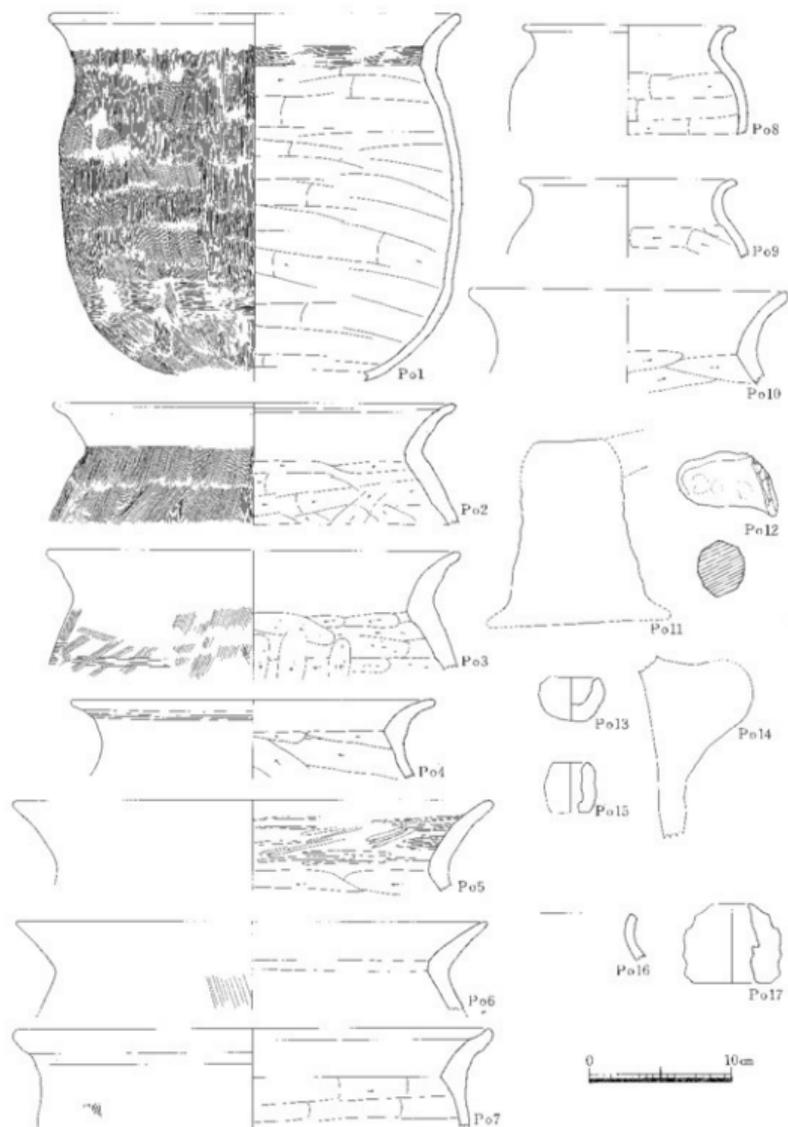


第38図 縄文土器実測図

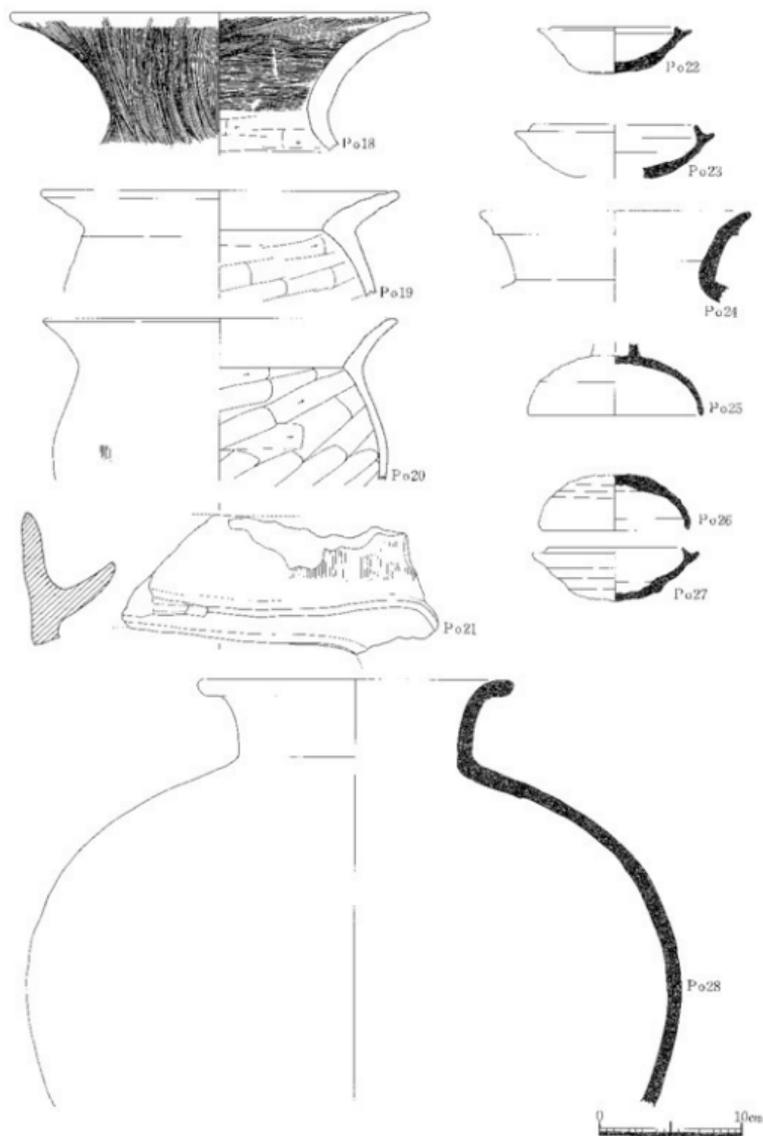


第39图 弥生土器实测图

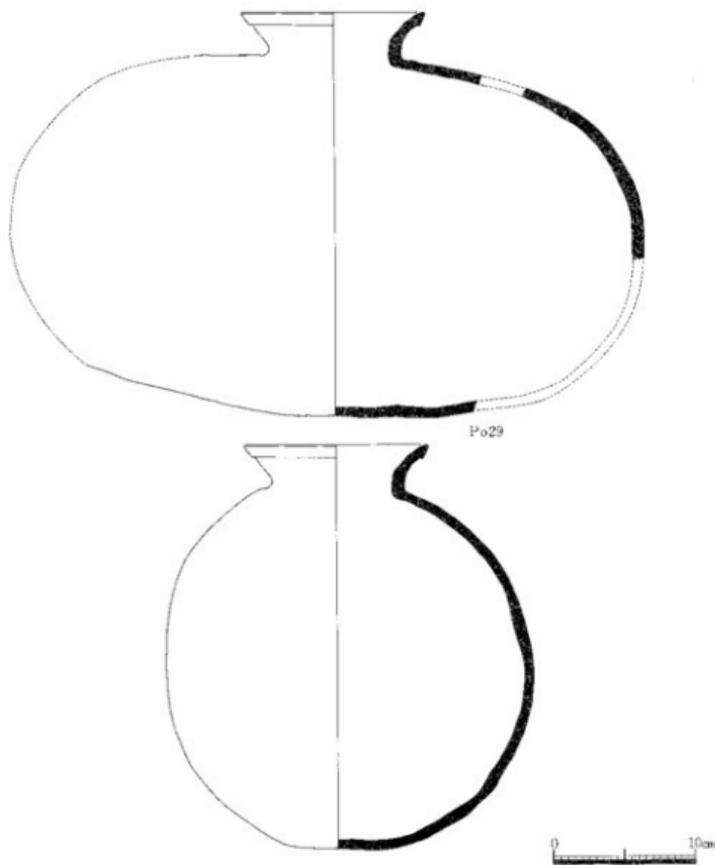




第41图 古墳時代後期土器実測図①



第42図 古墳時代後期土器実測図②



第43図 古墳時代後期土器実測図③

部下半を欠いている。

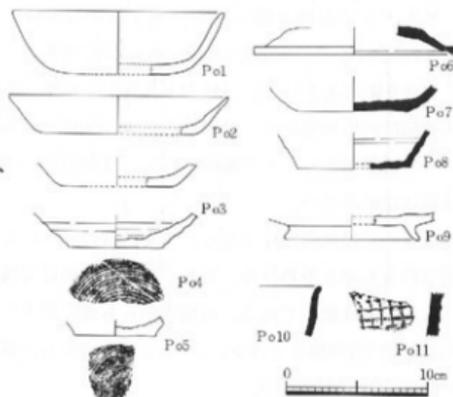
以上のような遺物から、久古第3遺跡で営まれた集落は6世紀前～中頃に始まり7世紀初頭まで存続したと考えられる。

### 奈良時代～中世の土器（図版17）

土師質土器（Po 1～5）、須恵器（Po 6～9）、陶磁器（Po 10・11）がわずかずつであるが出土している。

土師質土器は椀と皿が出土しているが、Po 4・5は底部に回転糸切り痕を持ち、10世紀以降のものである。Po 1～3はそれより古いものと思われる。（Po 1は8世紀後半くらいか？）須恵器は4点を実測できた。Po 9は底部に回転糸切り痕を持つ。陶磁器は、青磁のPo 10と勝間田焼と思われるPo 11である。Po 11は外面に格子叩き目をもち、内面は横方向のナデである。

久古第3遺跡の位置する岸本町久古は、中世において久古御牧・久古御厨として文献に見え、周辺の村を含む荘園の中心地であった。これらの遺物は、久古御牧（久古御厨）の形成過程等を知る上で非常に興味深い資料である。



第44図 奈良～中世の土器実測図

### 鉄製品（図版18）

久古第3遺跡で出土した鉄器は少数であり、遺存状態は悪かった。実測図を掲載した以外に出土した鉄器は、錆が全体をおおい内部も原形をとどめていないものが多い。

F 1は鉄製紡錘車であり、第2トレンチで出土した。第2堅穴住居跡と近接しており、その出土状況から考えて第2堅穴住居跡に伴うものと考えられる。紡錘車は滑石製のものが2点検出されているが、鉄製の紡錘車はこれ1点で、第2堅穴住居跡に伴うとすれば、時期は7世紀初頭である。

F 2は、刃先をもつ板状で鉄の両端を折りまげたものである。木製の板にはめこんで使用していたものと思われるが、鎌としてはやや小型すぎるきらいがある。第1堅穴住居跡北側の石群中で検出されており、古墳時代後期のものである。

F 3は、鉄斧でかなり錆がはげしい。F 2とはほぼ同じ位置で検出されている。

F 4は、第2堅穴住居跡付近で検出された細長い板状の鉄器で、かなり湾曲している。用途は不明である。

F 5は、破片であるが刃をもっており、刀子片か？第1堅穴住居跡南側で検出された。

F 6は、うすい板状の破片である。F 2、3とはほぼ同じ位置で検出されている。鎌の破片か？

この他に、遺構内から出土した鉄鏝と思われる破片等があり、器種は豊富である。鉄器がかなり普及していたことを想像させる。

#### 石製品 (図版19)

久古第3遺跡で出土した石器の量は多くはない。利器として利用されたものはほとんどなく、鉄器の利用によって石器が減少していったことを示すと思われる。

S 1・2は石皿と思われる。S 1は半分欠けているが中央部がややくぼんでおり、ほとんど剥離しているが一部なめらかな面がのこる。S 2もくぼみをもつが、使用痕らしきものはあまりない。S 1・2ともに石皿であるとするには疑問があり、出土地のC区北側は河川堆積によって礫が多くはこばれている所でもあり自然石の可能性もある。

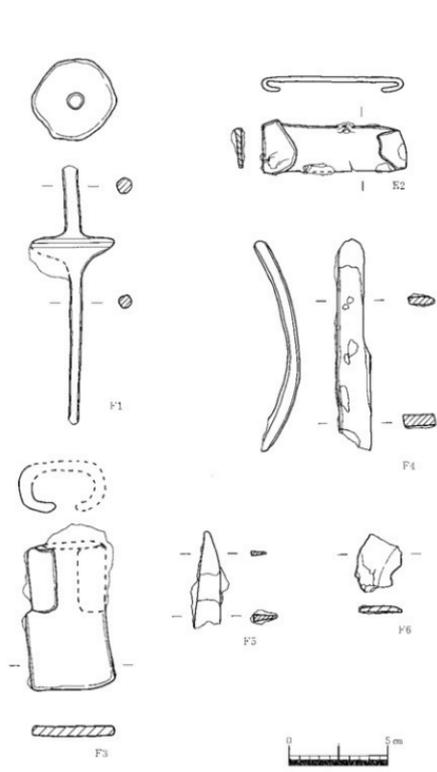
S 3は第1トレンチで検出された。打製石斧の可能性はある。遺構にともなっておらず時期は決めがたい。

S 4～7は黒曜石片である。S 4のみ打ちかいて刃を作った痕跡があり、利器として使用されたものと思われる。第8堅穴住居跡付近で検出されている。

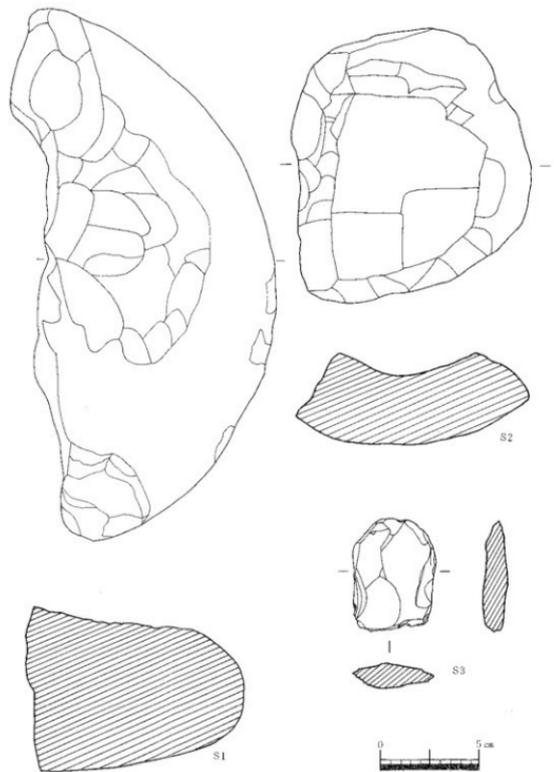
S 8・11は砥石である。遺構内からも他に出土しており、鉄器の普及に伴い、砥石の使用も各堅穴住居跡まで普及していたと考えられる。S 8・11ともかなり使用されており、湾曲する擦り面をもつ。

S 9は滑石製紡錘車で、第7堅穴住居跡内で半分欠いた同形の紡錘車が出土している。上面と下面はきれいに磨かれており、側面は、ヘラ磨き状に2～3mmの幅で面取りされている。穴は両側から穿孔されている。本遺跡では鉄製の紡錘車も出土しており、滑石製紡錘車から鉄製紡錘車へ移行する時期が、6世紀末～7世紀初頭であることがわかる。

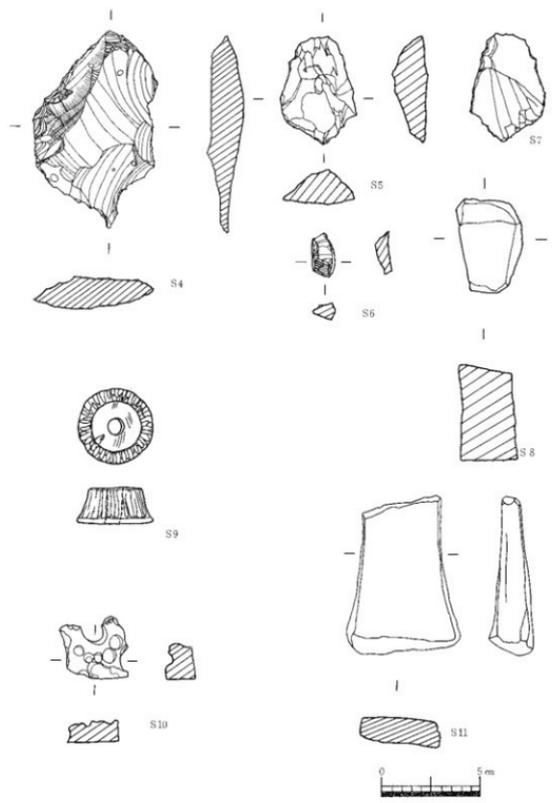
S 10は用途不明の石製品であるが、片面に5個の半球状のくぼみをもっている。自然石の可能性もあるが、遺跡内のかなり高いところから出土しており、河川からの流入ではないと思われる。



第45图 鉄製品実測図



第46图 石製品実測図



### 第3節 ま と め

久古第3遺跡の調査を通じて古墳時代後期の竪穴住居跡8棟、掘立柱建物跡13棟をはじめとする遺構を検出し、縄文時代から中世に至る遺物を検出した。

本遺跡の特徴は、第1に古墳時代後期の集落跡ということである。調査範囲が限定されていたため、集落の全容はつかみえなかったが、遺構遺物から判断すると、6世紀前～中頃から始まり6世紀末、7世紀初頭までの期間、集落が営まれていたことが推察できる。第2竪穴住居跡床面で、6世紀末から7世紀初頭の遺物を大量に検出したが、遺存状態から生活に使用していた土器がそのまま残されているものと判断され、生活用具を持ち去ることもできないまま集落を放棄せざるをえないような状況があったことが推測される。河川氾濫かと思われるが、集落放棄の原因は明確にはわからない。第2の特徴は、集落が河岸段丘上に立地していることである。そのため河川によって運ばれた礫、砂が地山を形成しており、調査は礫との間であった。集落を営んでいた時期には、河川が安定しており、表面は土がおおっていたことが土層断面よりわかるが、しかし、かなりの礫が表面にもあらわれていたものと思われる。第1竪穴住居跡では、遺構を掘った際に出たと思われる礫が周辺にかたままって出土しており、竪穴住居跡を作ることも容易でなかったと思われる。なぜこのような条件の地に集落を作ったのか、すなわち、集落を営んだ人々は何を生活基盤としていたかは、よくわかっていない。

遺跡の全容が不明であるため、集落全体の構造を明らかにすることはできないが、興味深いことは、第1竪穴住居跡で検出した耳環である。耳環の検出と住居の規模の大きいことから、この住居跡に住んだ人は古墳の被葬者、いかえれば、村落の首長か、数棟の住居からなる家族の家父長であったと推定される。しかし、第1竪穴住居跡(小)と(大)はほぼ床面を共有しており、第4竪穴住居跡→第1竪穴住居跡(小)→第1竪穴住居跡(大)へと住居が変遷したことがわかる。住居跡に時期差があまりないことから同一家系によって住居は営まれたと考えられ、とすると、首長あるいは家父長は、最初2本柱の狭い竪穴住居に居住していたが、4本柱の竪穴住居にうつり、さらにこの住居を拡張していることになる。2本柱の竪穴住居(第4竪穴住居跡)に住んでいた時代に、首長、家父長であったと考えられないから、首長、家父長となるのは、大きな竪穴住居を作った後のことであると考えられる。とすれば、首長権あるいは、家父長権というもの、一つの竪穴住居に住む人の間で継承されるとは限らない。いかえれば、首長権や家父長権というもののはかならずしも世襲的に継承されるものではない、ということである。

首長権、家父長権に関連して問題となるのは、掘立柱建物跡の意味である。掘立柱建物跡と竪穴住居跡が同一遺跡に並存することは、山陰東部では珍しいことではなく、一般的

な現象であるが、掘立柱建物跡を住居跡と考えればその居住者は、竪穴居住者とは質的差をもつものと思われる。本遺跡では、掘立柱建物跡に伴う遺物をほとんど検出できなかったため、掘立柱建物跡の性格を知る資料はほとんどないが、掘立柱建物跡に首長層の住居という性格を認めれば、先に述べた第1竪穴住居跡の性格とやや矛盾する。掘立柱建物跡の中には、第4掘立柱建物跡のように明確に倉庫と推定されるものもあり、小型のものは納屋として、大型のものも共同の作業場としての性格を持っていたと考えるほうが妥当であるように思える。本遺跡で検出した集落は、いわば「開拓村」であり、「枝村」であろうから、内部に顕著な階級差を持ちえなかったのではないかと考える。

一般的に、山陰東部では、弥生時代から古墳時代中期の集落は、古墳時代後期に至ると住居数が激減、あるいは消滅する。今回の調査で古墳時代中期までの集落到住んだ人々の、その後を推測する資料が得られたが、その移動の背景には鉄製農具の普及と、それによる湿田から乾田への移行という傾向があるだろうが、本遺跡に住んだ人々が水田を基盤にしていたかどうかははっきりせず、中世には「牧」として周辺の台地が利用されている事実を考えると、簡単に水田に結びつけることはできないと考える。

久古第3遺跡に集落を営んだ人々の古墳は久古神社裏の2基の古墳が想定される。現在までに知られている古墳では本遺跡に一番近いのがその久古古墳群である。現況から推測すると、この古墳群は古墳時代後期のもので、一部箱式石棺が露出している。久古部落の1km西に吉定という部落があり、そこに鳥取県内最古の横穴式石室とされる吉定1号墳がある。また、別所川の対岸になるが、同じく1km離れて径45mの大円墳である岸本7号墳があり、横穴式石室をもつ。それらの古墳の被葬者が、周辺の本遺跡のような集落を支配していたものと思われる。

本遺跡では古墳時代後期以外の遺物も少量ではあるが検出している。縄文土器・弥生土器を多く検出したD区では、第3図の土柱図の③層の上面が古墳時代後期の面であり、⑥層の上面で縄文・弥生土器を検出した。弥生時代～古墳時代前期には、河川の氾濫によってクロボクは形成されていないが、その後クロボクの堆積があり、生活できる場所となっていたようである。

以上のような、多くの成果を得た調査であったが、調査範囲が限定されており、この遺跡の範囲は不明のままである。調査中常に問題になった礫の多さであるが、このような集落の立地は、古墳時代後期の一般的なものか、それとも特殊な立地なのか等、今後の課題として残される。この時期の集落の発掘例は少なく、今後の発掘調査により事例の増加が期待される。

### 第3章 貝田原遺跡

#### 第1節 概 要

貝田原遺跡は、岸本町古字ハバタ、草田畑、草田、御休堂、宮ノ前に所在する。

日本道路公団による中国横断道建設工事に伴い、事前の発掘調査の必要が生じた。日本道路公団は、鳥取県の文化財担当部局と協議し、財団法人鳥取県教育文化財団が発掘調査の委託を受けた。発掘調査は昭和57・58年度にわたって実施された。

昭和57年度調査は、まずトレンチ（2m×10m）による試掘調査を行い、遺跡の範囲を確認することとした。その結果は以下の表の通りである。

試掘調査の結果から、遺跡の範囲は工事区ほぼ全域に及ぶものと考えられ、工法等を考慮して約9,000㎡の全面発掘調査をすることとした。

この内、昭和57年度は調査員3名で、トレンチを含めて約4,000㎡を昭和57年8月4日から12月23日まで行った。調査地区は、礫が広く分布しており調査は困難をきわめた。また開墾で、かなり地盤が削平され、遺構の検出は難しく遺物もほとんど検出せず、42トレンチ周辺で目立つ程度であった。

次に昭和58年度調査は調査員5名で、約5,000㎡を昭和58年4月4日から5月13日まで行った。便宜上、調査地区をA～D区に分けてA区から調査した。A区東側からB区にかけて遺構が集中し、遺物のほとんどをこの場所で検出した。

トレンチ	遺 構	遺 物	トレンチ	遺 構	遺 物
1	—	土師器 他	17	—	—
2	—	—	18	溝	須恵器 他
3	—	—	19	—	—
4	—	—	20	—	—
5	—	—	21	設定するも、調査せず	
6	—	—	22	ピット	土師器 他
7	溝 か ?	—	23	ピット	—
8	ピット	須恵器 他	24	—	—
9	ピット	—	25	—	弥生土器他
10	—	—	26	設定するも、調査せず	
11	—	—	27	—	—
12	ピット	弥生土器他	28	—	土師器 他
13	—	—	29	設定するも、調査せず	
14	ピット	—	30	ピット	土師器 他
15	石 列	土師器 他	31	溝	須恵器 他
16	ピット、溝	—	32	ピット	—

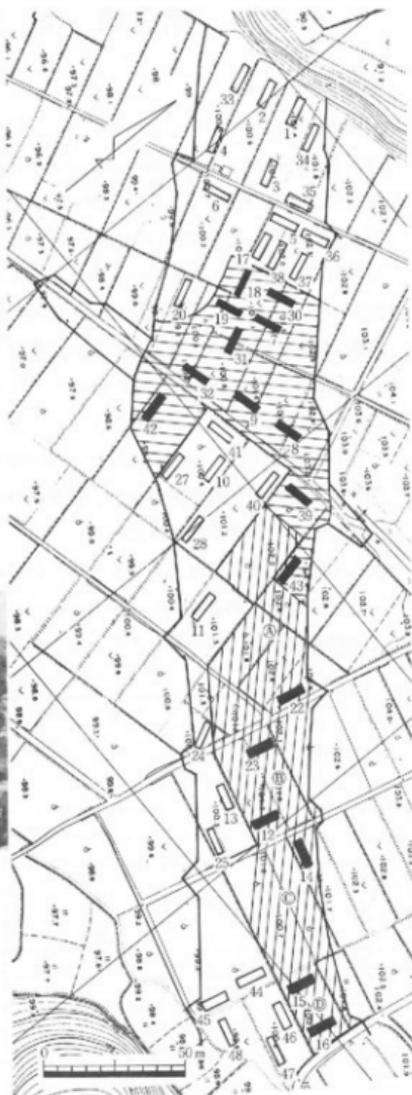
表2 貝田原遺跡トレンチ一覧表①

トレンチ	遺構	遺物
33	—	—
34	—	—
35	—	—
36	—	—
37	—	—
38	—	—
39	ピット	—
40	—	—
41	—	須恵器 他
42	ピット	土師器、鉄器
43	ピット	土師器 他
44	—	—
45	—	—
46	—	—
47	—	—
48	—	—

表3 貝原遺跡トレンチ一覧表②



発掘風景



第47図 貝原遺跡全体図・トレンチ配置図

▨ 昭和57年度調査地区

□□ 昭和58年度調査地区

■ 遺構を検出したトレンチ

□ 遺構を検出なかったトレンチ



第48図 貝田原遺跡全体遺構図

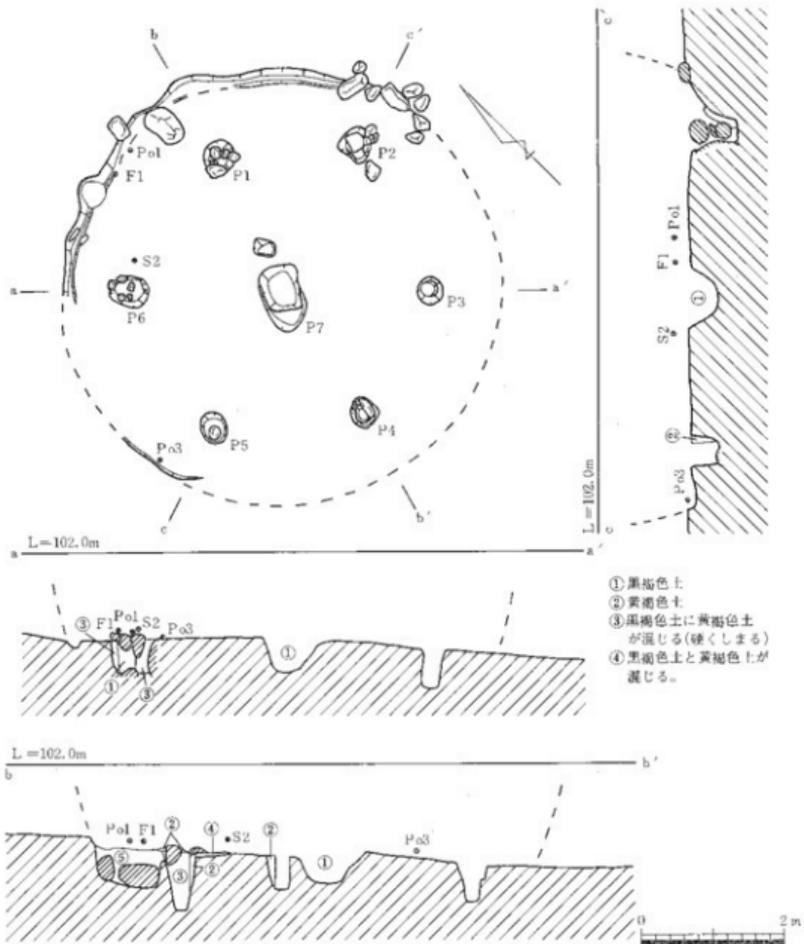
(等高線はmを示す)

## 第2節 発掘調査の結果

### (2) 竪穴住居跡

#### 第1竪穴住居跡 (図版22)

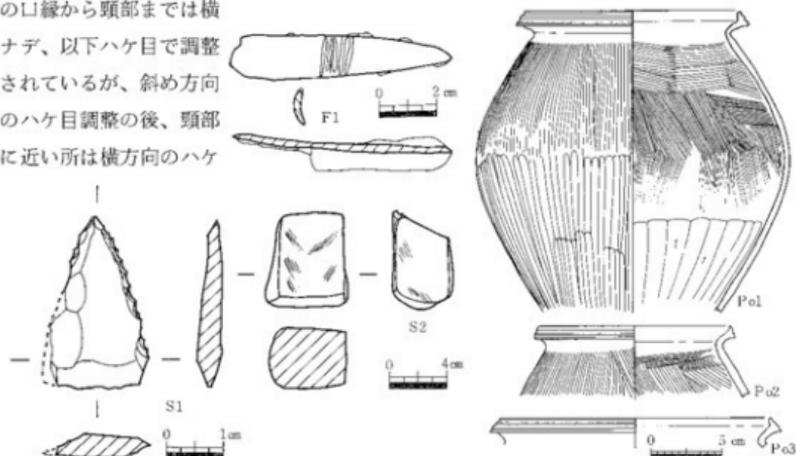
130・P地区にわたって位置しており、西側で第38掘立柱建物跡と切り合っている。平面プランは、南側が耕作により削られていたため、完全な形での検出はできなかったが、北壁、西壁の残っている部分、ピットの配置等から、ほぼ円形を呈するものと考えられ、径



第49図 第1竪穴住居跡遺構図

約6.2m、床面積約30.2㎡と推定される。検出面から床面までの壁高は、北側で約13cmを測り、側溝は幅20cm、深さ9cm程度である。西側でも壁面と考えられる所は数箇所あったが、側溝はめぐらされていない。南側は削られており確認できなかった。柱穴は6個で、規模はP 1 (43×40-44)、P 2 (46×45-32)、P 3 (40×35-29)、P 4 (45×42-28)、P 5 (45×33-20)、P 6 (55×43-15) cmで、柱穴間距離はP 1 から順に右廻りで、1.95、2.30、2.00、2.12、2.37、2.28 mを測る。床面中央部には(67×50-19) cmの特殊ピットがある。特殊ピット北東部近くに(33×23-25) cmのやや小型のピットが認められる。焼土面は認められなかった。柱穴には、柱痕と考えられる黒褐色の部分(幅20~28cm)と、その周囲の黒褐色土と黄褐色土の混じった、硬くしまった層が認められる。外側の層は、柱を固定するために硬くしめられているものと考えられる。P 1・P 6では、柱痕周囲に、柱固定用の石がリング状に配されている。この石も、黒褐色土と黄褐色土の混じった土で固められていた。また、床面と考えられる面より下層(第49図、①層)も埋められた土であるが、これは住居を建てる際に、邪魔になった石を取り上げた後、土を埋めて床を造ったものと考えられる。遺物は甕(Po 1~3)、石鎌(サヌカイト製)、砥石、鉄製刀子(F 1)が出土している。いずれも床面近くからの出土であった。Po 1は、底部を欠く甕であるが、外面は口縁部に3条の凹線、頸部下~胴部上半にハケ目、以下ヘラ磨き、内面は口縁部~頸部は横ナデ、頸部~胴部上半よりやや下方まで斜め方向のハケ目であるが、頸部近くは横方向のハケ目が施されている。以下ヘラ削りである。Po 2の口縁はやや立ち上り気味で外面には凹線がゆるく施されている。頸部はナデ、頸部下はハケ目、内面の口縁から頸部までは横

ナデ、以下ハケ目で調整されているが、斜め方向のハケ目調整の後、頸部に近い所は横方向のハケ



第50-①図 第1堅穴住居跡遺物図

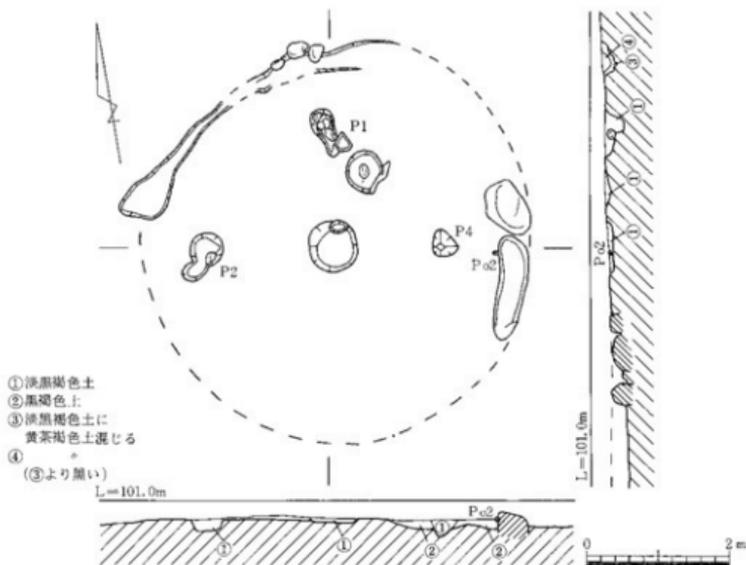
第50-②図 第1堅穴住居跡遺物図

目が施されている。外面にはススが付着している。Po3は口縁部のみであるが、口縁部外面には凹線、内面は横ナデが施され、外面にススが付着している。これらの遺物よりこの竪穴住居跡は弥生時代中期後葉の住居跡と考えられる。

## 第2竪穴住居跡（図版23）

15Q地区北東部、15R地区北西部にわたって位置しており、第1竪穴住居跡の東側、第19土坑の北西にあたる。耕作等による攪乱が激しく、地山にも大きな石が多数あったため住居北西部の側溝及び、柱穴を3個、中央特殊ピット1つしか確認できなかった。側溝の形も歪であるが、柱穴と考えた3つのピットが、中央のピットを中心にほぼ90°毎に配されているため、4本柱の円形の竪穴住居跡であろうと推定した。柱穴規模はP1（64×31-22）、P2（46×45-14）、P4（37×32-7）cmでP3は消失していた。柱穴間距離はP1～P2は2.42m、P1～P4は2.36m、中央ピット（69×66-8）cmを測る。住居跡の推定径は5.5m、側溝の幅18cm、深さ2cm程度である。住居南側は削られており、地山内に含まれた石が露出していたが、一部断面より判断すると、地山の上に、黒褐色土の硬くしまった層があり、この上で平らな面を形成して床を造っていたものと考えられる。焼土面は確認できなかった。

遺物は、住居跡北側の床面より弥生時代中期の甕口縁部（Po1）が出土している他、



第51図 第2竪穴住居跡遺構図

底部 (Po 2) が出土している。Po 1 は口縁部に凹線をもち、外面縦方向のハケ目調整、口縁部から頸部にかけては横ナデ、内面頸部下には斜め方向のハケ目調整が施されており、青木 I 期の土器と考えられる。Po 2 も同様の時期と考えられ、これらの遺物より、弥生時代中期後葉の竪穴住居跡と考えられる。



第52図 第2 竪穴住居跡遺物図

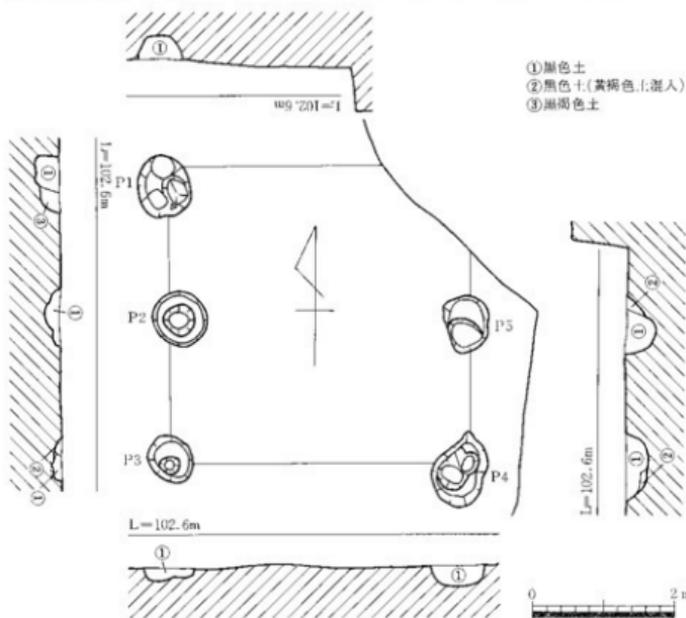
## (2) 掘立柱建物跡

### 第1・2・3 掘立柱建物跡 (図版23・24・36)

4 I 地区の南東に位置し、第10掘立柱建物跡の南にあり、第9掘立柱建物跡とも切り合う。第1・2・3掘立柱建物跡は切り合うが、新旧関係は古い順に、第3→第2→第1掘立柱建物跡である。

第1掘立柱建物跡は、主軸がほぼ南北で、梁行1間、桁行2間の建物跡である。長軸、短軸とも4.2mを測る。遺物はP2内より底部に承切り痕のある土師器 (Po 1) を検出した。建物跡の時期は、遺物から10世紀前半代のものと考えられる。

第2掘立柱建物跡は主軸がN-12°-Wで、北梁行1間、南梁行2間、桁行3間、長軸



第53図 第1 掘立柱建物跡遺構図



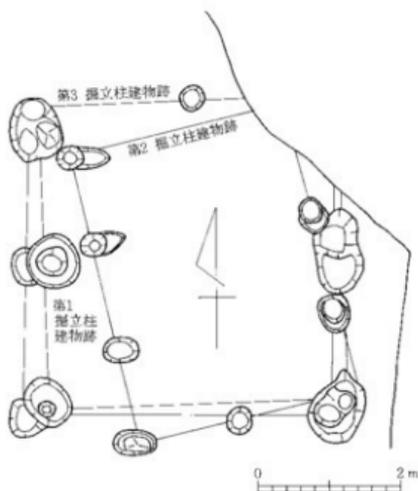
第54図 第1掘立柱建物跡遺物図

P 1	85 × 40 - 33
P 2	76 × 75 - 24
P 3	71 × 59 - 29
P 4	108 × 75 - 39
P 5	81 × 55 - 41

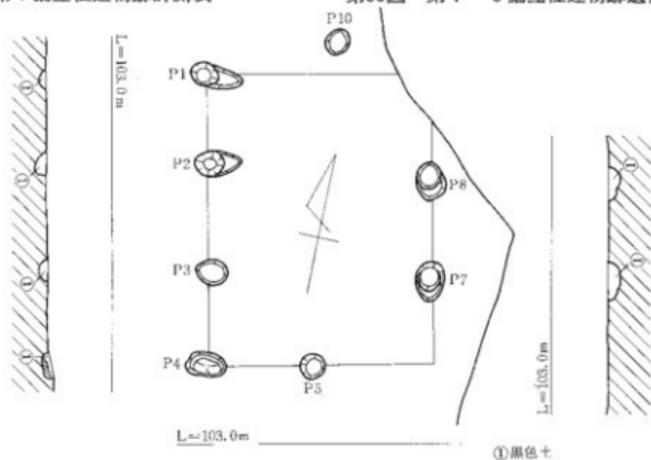
P 1	—	P 6	—
216		P 5	—
P 2		160	
204		P 4	
P 3	420		

P 1 ~ P 3	420
P 3 ~ P 4	420

第1掘立柱建物跡計測表



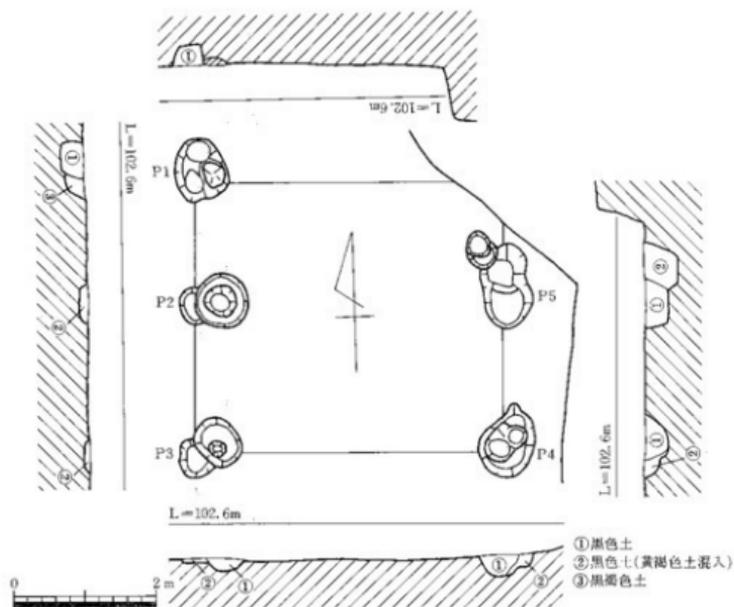
第55図 第1～3掘立柱建物跡遺構図



第56図 第2掘立柱建物跡遺構図

4.12mの建物跡である。P 6は消失しP 9は調査範囲外にあると考えられる。P 1・2・7には柱の抜きとり痕がある。P 4の柱穴底には扁平な石が置かれていた。P 1は支持柱の可能性ある。各柱穴からは遺物を検出しなかった。時期は不明である。

第3掘立柱建物跡は主軸がほぼ南北で、梁行1間、桁行2間の建物跡である。長軸4.32



第57図 第3掘立柱建物跡遺構図

第2掘立柱建物跡計測表

P 1	40 × 32 - 11
P 2	40 × 35 - 19
P 3	46 × 33 - 11
P 4	57 × 33 - 17
P 5	36 × 34 - 17
P 6	42 × 40 - 19
P 7	35 × 35 - 19
P 8	40 × 32 - 18

P 1	—	P10	—	P 9
128				—
P 2	P 1 ~ P 4		413	P 8
153				148
P 3				P 7
132				—
P 4	148	P 5	—	P 6

第3掘立柱建物跡計測表

P 1	—
P 2	48 × — - 15
P 3	52 × — - 8
P 4	—
P 5	—

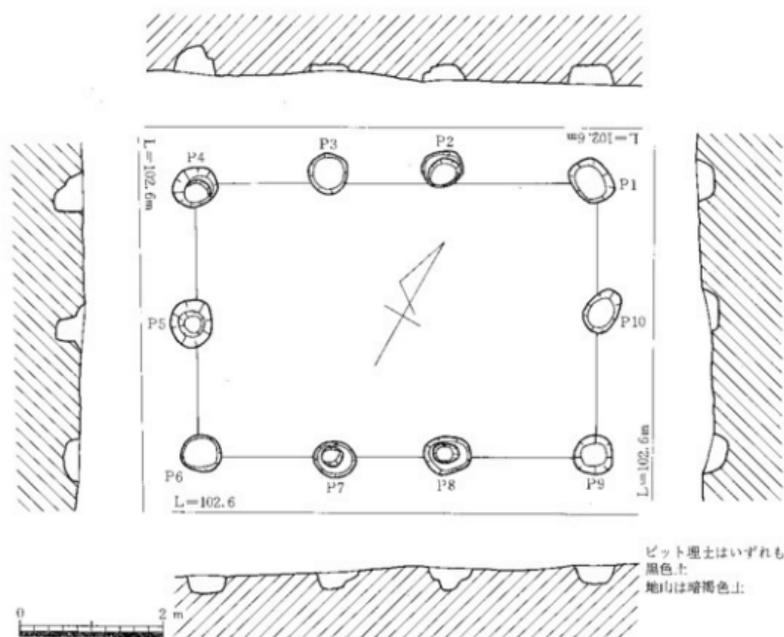
P 1	—	P 6
180		—
P 2		P 5
210		230
P 3	432	P 4

P 1 ~ P 3	390
P 3 ~ P 4	432

m、短軸3.9mを測る。各柱穴からは遺物を検出しなかった。時期は不明である。

第4掘立柱建物跡(図版24)

4 H地区の北西に位置する。主軸はN-59°-Eで、梁行2間、桁行3間の建物跡である。長軸5.60m、短軸3.88mを測る。各柱穴より遺物を検出しておらず時期不明である。



第58図 第4掘立柱建物跡遺構図

第4掘立柱建物跡計測表

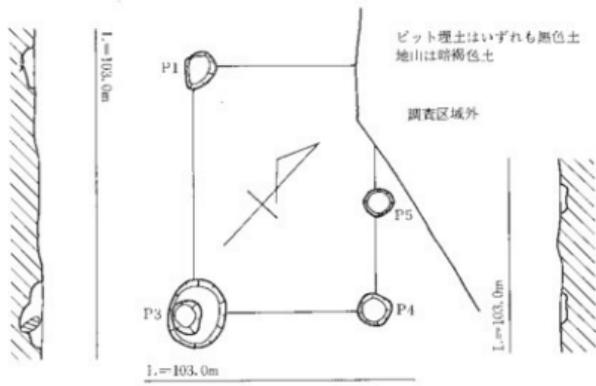
P 1	66 × 54 - 28	P 4	184	P 3	160	P 2	220	P 1	
P 2	66 × 50 - 21								184
P 3	58 × 56 - 11								P10
P 4	63 × 58 - 43								204
P 5	65 × 58 - 44								P 9
P 6	56 × 52 - 25	P 6	188	P 7	160	P 8	212		
P 7	58 × 50 - 30								
P 8	65 × 50 - 33	P 1 ~ P 4	560						
P 9	56 × 54 - 34	P 4 ~ P 6	388						
P10	65 × 47 - 26	P 6 ~ P 9	560						
		P 9 ~ P 1	388						

第5掘立柱建物跡 (図版24)

3 G地区の北東に位置する。主軸はN-42°-Wで、梁行1間、桁行2間の建物跡である。P 2は消失している。P 6は調査範囲外にあると考える。長軸3.52m、短軸2.56mを測る。各柱穴より遺物は検出されなかった。時期は不明である。

第6・7・8掘立柱建物跡 (図版24・25)

4 F地区と4 G地区にまたがって位置し、各掘立柱建物跡はそれぞれ切り合っているが、明確な新旧関係はつかめなかった。



第59図 第5掘立柱建物跡遺構図

P 1	55 × 44 - 20
P 2	—
P 3	96 × 80 - 31
P 4	49 × 44 - 9
P 5	42 × 40 - 10

P 1	—	P 6	—
352		P 5	152
P 3	256	P 4	

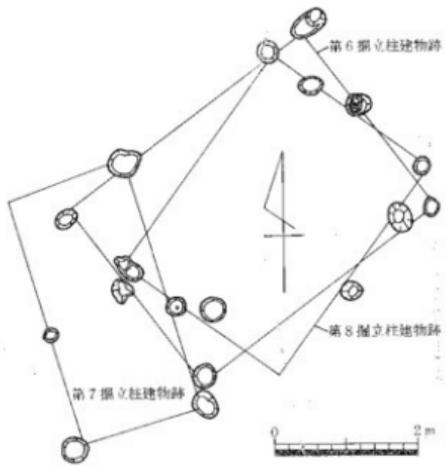
P 1 ~ P 3	352
P 3 ~ P 4	256

第5掘立柱建物跡計測表

第6掘立柱建物跡は主軸がN-53°-Eで、梁行2間、桁行1間の建物跡である。長軸4.12m、短軸3.08mを測る。各柱穴から遺物は出土していず、時期は不明である。

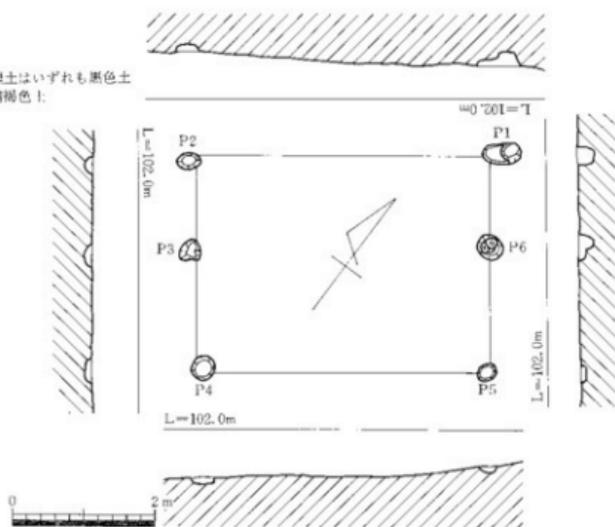
第7掘立柱建物跡は主軸がN-17°-Wで、梁行1間、桁行2間の建物跡である。P1は消失している。建物跡の規模は長軸3.60m、短軸1.72mを測る。遺物は出土していない。

第8掘立柱建物跡は、主軸がN-36°-Eで、梁行2間、桁行2間の建物跡である。長軸3.60m、短軸2.68mを測る。各柱穴から遺物は出土していない。時期は不明である。



第60図 第6・7・8掘立柱建物跡遺構図

ピット埋土はいずれも黒色土  
地山は暗褐色土



第61図 第6掘立柱建物跡遺構図

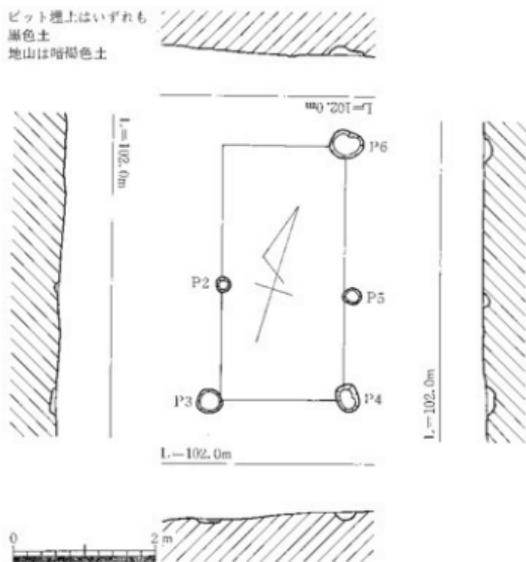
第6掘立柱建物跡計測表

P 1	66 × 30	- 22
P 2	32 × 24	- 15
P 3	27 × 26	- 11
P 4	34 × 33	- 12
P 5	27 × 22	- 9
P 6	34 × 31	- 18

P 2	412	P 1
132		124
P 3		P 6
176		184
P 4	412	P 5

P 1	~	P 2	412
P 2	~	P 4	308
P 4	~	P 5	412
P 5	~	P 1	308

ピット埋土はいずれも  
黒色土  
地山は暗褐色土



第62図 第7掘立柱建物跡遺構図

P 1	—
P 2	21 × 20 - 8
P 3	34 × 32 - 6
P 4	40 × 30 - 11
P 5	27 × 24 - 12
P 6	45 × 39 - 16

P 1	—	P 6
—	—	212
P 2	—	P 5
160	—	148
P 3	172	P 4

P 3 ~ P 4	172
P 4 ~ P 6	360

第7掘立柱建物跡計測表

### 第8掘立柱建物跡計測表

P 1	30 × 27 - 8
P 2	—
P 3	45 × 23 - 14
P 4	26 × 26 - 13
P 5	—
P 6	30 × 25 - 15
P 7	23 × 22 - 11
P 8	35 × 30 - 17

P 1 ~ P 3	360
P 7 ~ P 1	268

### 第9掘立柱建物跡

(図版25)

4 I 地区の南東に位置し、第1・2・3掘立柱建物跡と切りあうが、新旧関係は不明である。主軸はN-38°-W

で、梁行1間、桁行1間以上の建物跡になると考えられる。短軸2.4mである。各柱穴からは遺物を検出しなかった。時期は不明である。

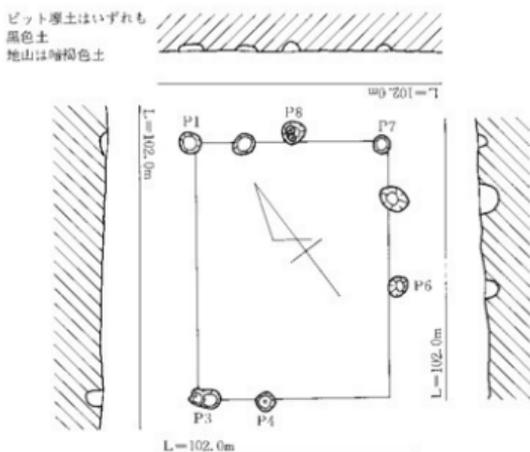
### 第10掘立柱建物跡 (図版25)

4 I 地区の北に位置する。主軸はN-19°-Eで、梁行1間、桁行1間以上の建物跡になると考える。短軸1.76mである。各柱穴からは遺物を検出しなかった。時期は不明である。

### 第11掘立柱建物跡 (図版26)

5 E 地区に位置し、第12掘立柱建物跡の西にある。主軸はN-6°-Wで、梁行1間、桁行1間以上の建物跡である。短軸2.96mを測る。各柱穴からは遺物を検出しなかった。時期は不明である。

ビット塚土はいずれも  
黒色土  
地山は暗褐色土



第63図 第8掘立柱建物跡遺構図

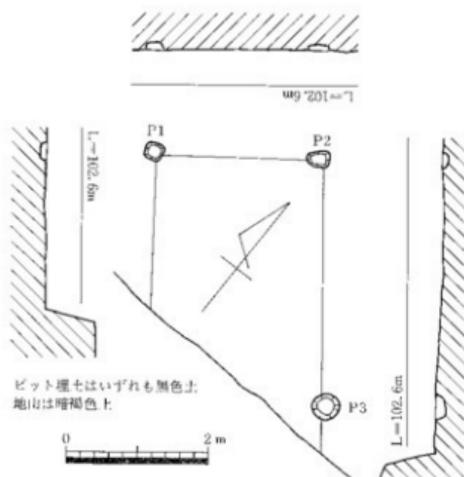
P 1	136	P 8	132	P 7
360	—	—	—	200
P 3	92	P 4	—	P 6
—	—	—	—	—
—	—	—	—	P 5

第8掘立柱建物跡計測表

第9掘立柱建物跡計測表

P 1	28 × 28	- 11
P 2	33 × 25	- 9
P 3	38 × 33	- 10

P 1	240	P 2
—	—	348
P 4	—	P 3

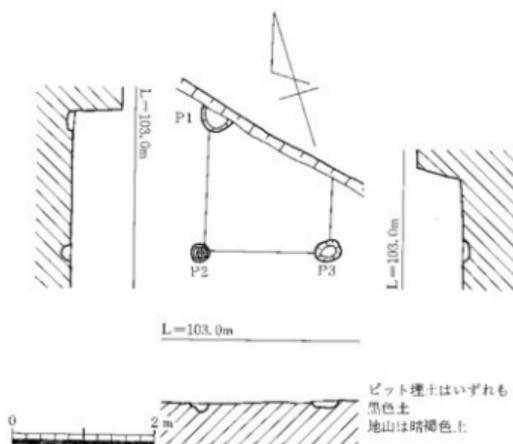


第64図 第9掘立柱建物跡遺構図

第10掘立柱建物跡計測表

P 1	—
P 2	26 × 23 - 14
P 3	39 × 26 - 6

P 1	—	P 4
192	—	—
P 2	176	P 3

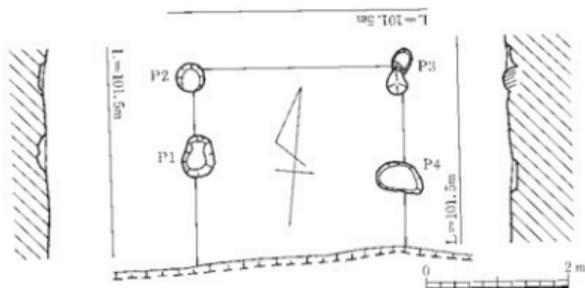


第65図 第10掘立柱建物跡遺構図

第12掘立柱建物跡 (図版26)

5 F地区の北東に位置し、第11掘立柱建物跡の東にある。主軸はN-86°-Eで、梁行1間以上、桁行4間の建物跡である。各柱穴からは遺物は検出されなかった。建物跡の時期は不明である。

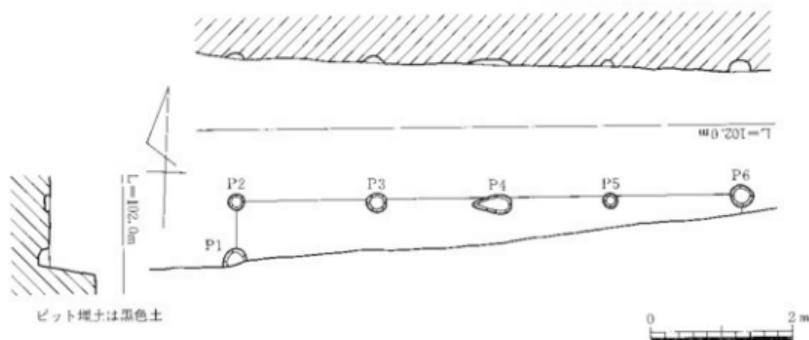
ピット埋土はいずれも黒色土  
地山は暗褐色土



第66図 第11掘立柱建物跡遺構図

P 1	60 × 46 - 10	P 2	296	P 3
P 2	42 × 38 - 6	P 1	120	160
P 3	40 × 27 - 6	P 1	296	P 4
P 4	65 × 42 - 7			

第11掘立柱建物跡計測表



ピット埋土は黒色土

第67図 第12掘立柱建物跡遺構図

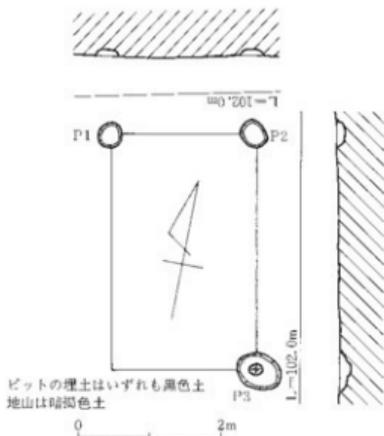
P 1	—	P 2	196	P 3	172	P 4	160	P 5	184	P 6
P 2	22 × 11 - 4	84								
P 3	30 × 27 - 12	P 1	—	P 10	—	P 9	—	P 8	—	P 7
P 4	54 × 25 - 7									
P 5	21 × 10 - 11									
P 6	30 × 28 - 17									

第12掘立柱建物跡計測表

### 第13掘立柱建物跡 (図版26)

1 D地区の北に位置し、第14掘立柱建物跡の西にある。主軸はN-13°-Wで、梁行1

間、桁行1間の建物跡である。柱穴はP1～P3を検出し、P4を消失していた。各柱穴からは遺物を検出しなかった。長軸3.35m、短軸2.00mを測る。時期は不明である。



第68図 第13掘立柱建物跡遺構図

第13掘立柱建物跡計測表

P 1	35 × 34	- 13
P 2	39 × 31	- 13
P 3	62 × 51	- 17

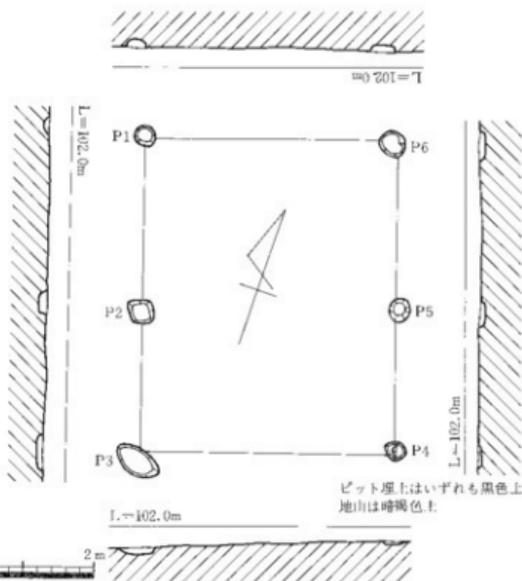
P 1	200	P 2
—	—	335
P 4	—	P 3

P 1	~	P 2	200
P 2	~	P 3	335

第14掘立柱建物跡

(図版26)

0 E 地区、1 E 地区にまたがって位置し、第13掘立柱建物跡の東にある。主軸はN-18°-Wで、梁行1間、桁行2間の建物跡である。長軸4.44m、



第69図 第14掘立柱建物跡遺構図

短軸3.56mを測る。各柱穴より遺物は出土しておらず、時期は不明である。

P 1	29 × 27 - 10
P 2	42 × 38 - 10
P 3	68 × 37 - 8
P 4	32 × 26 - 11
P 5	33 × 29 - 8
P 6	37 × 34 - 6

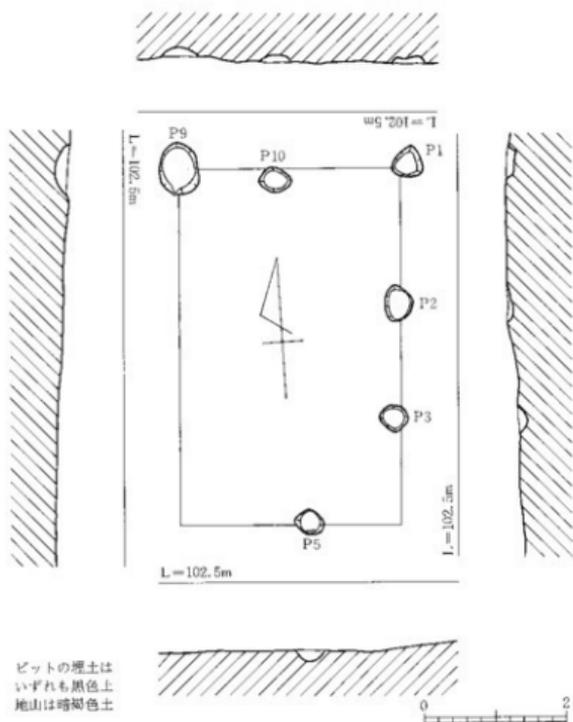
P 1	228	P 2	216	P 3
358				356
P 6	236	P 5	208	P 4

P 1~P 3・P 4~P 6	444	P 3~P 4・P 1~P 6	356
-----------------	-----	-----------------	-----

第14掘立柱建物跡計測表

第15掘立柱建物跡（図版27）

5 I、6 I地区の東側に位置する。梁行2間、桁行3間の建物跡で、主軸はN-3°-Eにとる。P 4・6~8は消失しており確認されなかった。長軸5.04(推定)m、短軸3.1mを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第70図 第15掘立柱建物跡遺構図

第16掘立柱建物跡（図版27）

6 D地区の南西に位置し、一部6 C、7 C、7 D地区にかかるとる。梁行2間、桁行3間の総柱の建物跡で、主軸はN-19°-Wにとる。長軸5.6(推定)m、短軸3.84(推定)m

P 1	41 × 40	- 2
P 2	52 × 36	- 8
P 3	35 × 33	- 11
P 4	-	-
P 5	42 × 30	- 10
P 6	-	-
P 7	-	-
P 8	-	-
P 9	72 × 53	- 21
P 10	45 × 32	- 15

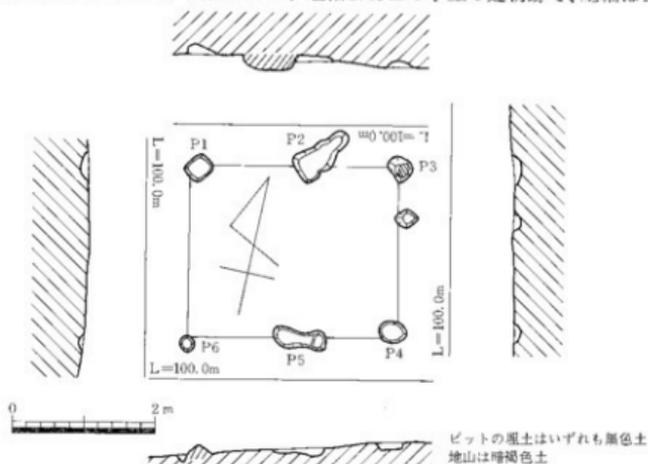
P 1	225	P 2	260	P 3	-	P 4	-
180							-
P10							P 5
225							-
P 9	-	P 8	-	P 7	-		P 6
P 1 ~ P 4				485 以上			
P 9 ~ P 1				405			

第15掘立柱建物跡計測表

を測る。P 1・5・6は確認されなかった。周辺ピットより土師器片が出土しているが、時期は不明である。第16掘立柱建物跡のP 11は、第17掘立柱建物跡のP 2と切り合っているが、新旧関係は不明である。

第17掘立柱建物跡 (図版27)

6 D地区南東部に位置し、一部6 C、7 D地区にかかる。第16掘立柱建物跡と切り合っている。梁行1間、桁行2間、長軸2.90m、短軸2.40mの小型の建物跡で、主軸はN-77°



第71図 第17掘立柱建物跡遺構図

第17掘立柱建物跡計測表

P 1	40 × 30	- 12
P 2	86 × 39	- 14
P 3	42 × 29	- 4
P 4	35 × 28	- 13
P 5	75 × 20	- 16
P 6	23 × 20	- 10

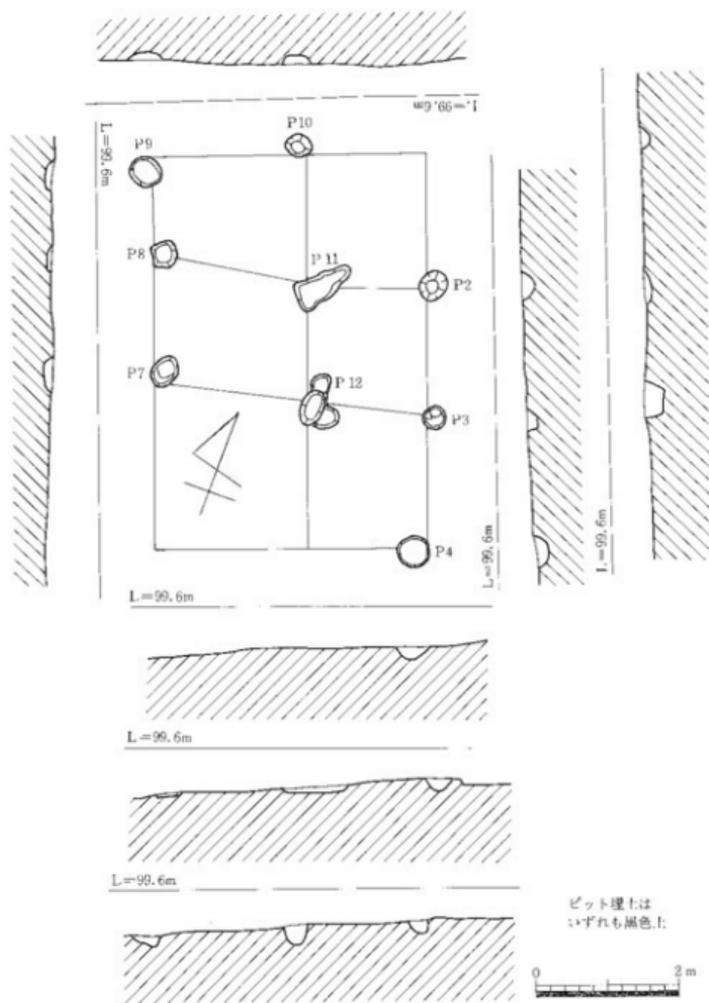
P 1	160	P 2	125	P 3	
244					240
P 6	150	P 5	140	P 4	

P 1 ~ P 3		285	P 3 ~ P 4		240
P 4 ~ P 6		290	P 6 ~ P 1		244

一にとる。柱穴からは遺物は検出されておらず、時期は不明である。

### 第18掘立柱建物跡 (図版27)

7 D地区北西に位置し、一部7 C地区にかかる。北側には第16掘立柱建物跡があり、南



第72図 第16掘立柱建物跡遺構図

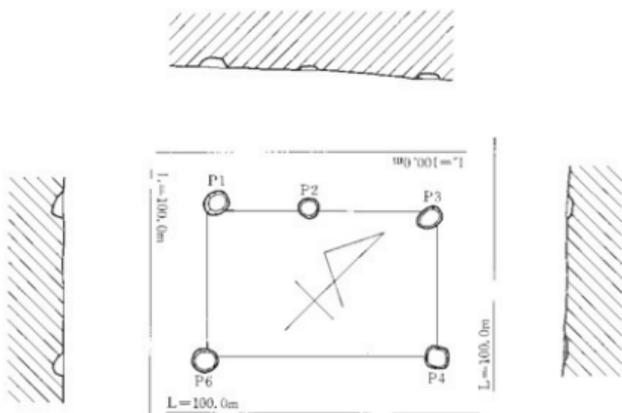
P 1	-
P 2	42 × 38 - 23
P 3	34 × 29 - 22
P 4	50 × 45 - 25
P 5	-
P 6	-
P 7	49 × 35 - 13
P 8	42 × 35 - 10
P 9	46 × 40 - 11
P 10	40 × 36 - 14
P 11	86 × 39 - 14
P 12	50 × 34 - 28

P 1	-	P 2	184	P 3	188	P 4	-
-	-	168	-	168	-	-	-
P 10	-	P 11	-	P 12	-	P 5	-
216	-	220	-	216	-	-	-
P 9	120	P 8	172	P 7	-	P 6	-

P 1 ~ P 4	560 (推定)
P 4 ~ P 6	384 (推定)
P 6 ~ P 9	560 (推定)
P 9 ~ P 1	384 (推定)

第16掘立柱建物跡計測表

側で第19・20掘立柱建物跡と切り合っているが、柱穴内からは遺物は検出されておらず、時期、新旧関係は不明である。梁行1間、桁行2間の建物跡で、主軸をN-38°-Eにとる。P5は消失していた。長軸3.24m、短軸2.0mを測る。



ピット裡上はいずれも黒色土  
地山は暗褐色土



第73図 第18掘立柱建物跡遺構図

第18掘立柱建物跡計測表

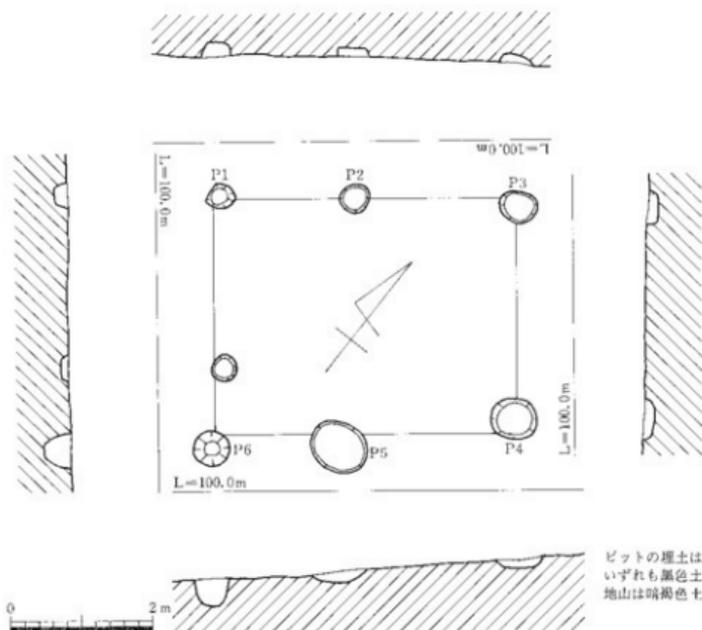
P 1	36 × 32 - 11
P 2	27 × 25 - 6
P 3	32 × 24 - 8
P 4	32 × 35 - 11
P 5	-
P 6	33 × 32 - 15

P 1	140	P 2	184	P 3	-
208	-	-	-	200	-
P 6	-	320	-	P 4	-

P 1 ~ P 3	324	P 3 ~ P 4	200
P 4 ~ P 6	320	P 6 ~ P 1	208

### 第19掘立柱建物跡（図版28）

7 D地区の西側に位置し、一部7 C地区にかかる。北側では第18掘立柱建物跡と、南側では、第20・23掘立柱建物跡と切り合う。また、東側には第21掘立柱建物跡があり、西側には南北に第2溝状遺構が走る。主軸はN-50°-E、梁行1間、桁行2間の建物跡である。建物跡の規模は長軸4.28m、短軸3.34mである。P1は、第20掘立柱建物跡のP6と切り合っており、P1・P10より土師器が出土しているが、時期、新旧関係は不明である。



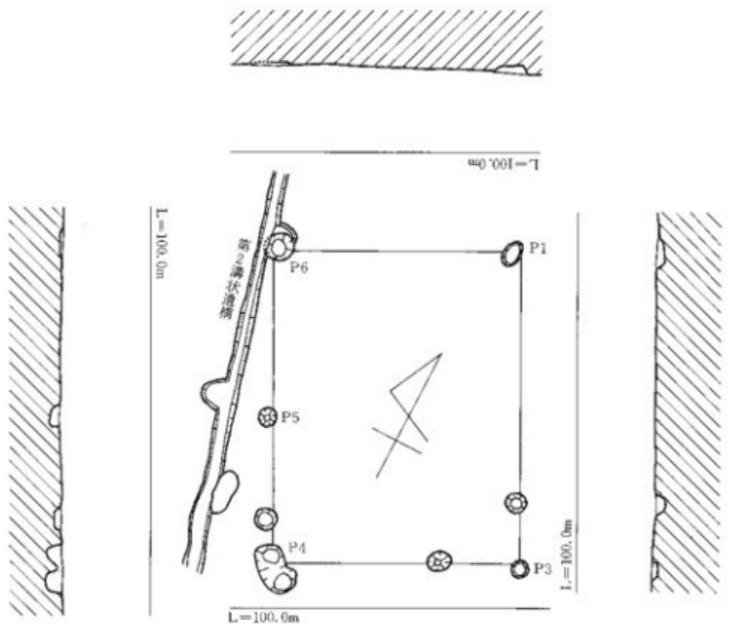
第74図 第19掘立柱建物跡遺構図

### 第19掘立柱建物跡計測表

P 1	38 × 35 - 19
P 2	42 × 38 - 9
P 3	46 × 42 - 17
P 4	62 × 58 - 19
P 5	75 × 62 - 9
P 6	47 × 42 - 39

P 1	200	P 2	228	P 3	
	336				334
P 6	180	P 5	242	P 4	

P 1 ~ P 3	428	P 3 ~ P 4	334
P 4 ~ P 6	422	P 6 ~ P 1	336



ピットの埋土はいずれも黒色土  
地山は暗褐色土



第75図 第20掘立柱建物跡遺構図

第20掘立柱建物跡計測表

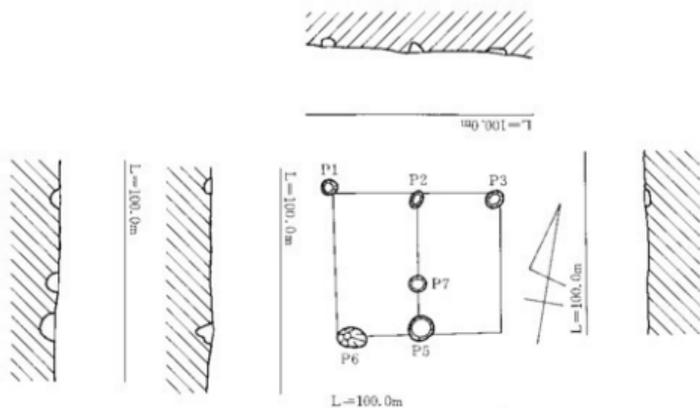
P 1	40 × 25 - 19
P 2	—
P 3	25 × 23 - 9
P 4	45 × 45 - 26
P 5	26 × 25 - 22
P 6	38 × 35 - 19

P 1	440	P 3		
350		350		
P 6	240	P 5	200	P 4

P 1 ~ P 3	440	P 3 ~ P 4	350
P 4 ~ P 6	440	P 6 ~ P 1	350

第20掘立柱建物跡 (図版28)

7 D地区西側にあり、一部7 C地区にかかる。北側では、第18・19掘立柱建物跡と、南側では第23掘立柱建物跡と切り合っている。また、P 4は、第25掘立柱建物跡のP 3と切り合っており、P 6は第19掘立柱建物跡のP 1及び第2溝状遺構と切り合っているが、時期、新旧関係は不明である。主軸をN - 27° - Wにとる梁行1間、桁行2間の建物跡であるがP 2は消失していた。建物の規模は長軸4.40m、短軸3.50 mである。



第76図 第21掘立柱建物跡遺構図

ピットの埋土は  
いずれも黒色土  
地山は暗褐色土

P 1	21 × 20 - 10
P 2	28 × 18 - 13
P 3	23 × 21 - 7
P 4	...
P 5	32 × 28 - 23
P 6	41 × 27 - 23
P 7	25 × 22 - 18

P 1	119	P 2	116	P 3	
200		128		-	
		P 7			
		72			
P 6	116	P 5	-	P 4	

P 1 ~ P 3	235
P 6 ~ P 1	200

第21掘立柱  
建物跡計測表

#### 第21掘立柱建物跡 (図版28)

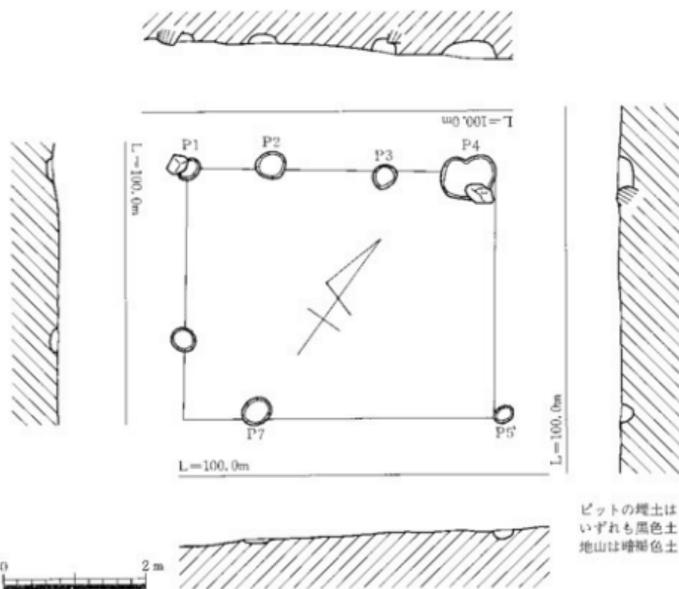
7 D地区のはぼ中央部北よりに位置し、西側に第19掘立柱建物跡がある。梁行1間、桁行2間の建物跡で、長軸2.35m、短軸2.0mを測る。P 2とP 5の間に東柱としてP 7があるが、P 4は消失していた。主軸は、N-79°-Eである。P 1・P 5より土師器片を出土しているが時期は不明である。

#### 第22掘立柱建物跡 (図版28)

7 D地区南東にあり、第21掘立柱建物跡の南側に位置する。西側で第23掘立柱建物跡と切り合っている。主軸をN-54°-Eにとり、梁行1間、桁行は3間である。長軸4.05m、短軸3.4mを測る。P 6・P 8は消失しており、確認されなかった。P 2は、第25掘立柱建物跡のP 4と切り合っているが、新旧関係は不明である。近くから鉄製の鏝先が出土している。柱穴内から遺物は出土しておらず、時期は不明である。

#### 第23掘立柱建物跡 (図版29)

7 D地区の南西に位置し、東側でP 4と第22掘立柱建物跡のP 2が切り合っている。北



第77図 第22掘立柱建物跡構造図

P 1	33 × 18 - 9
P 2	38 × 33 - 4
P 3	38 × 30 - 14
P 4	85 × 55 - 24
P 5	27 × 23 - 10
P 6	-
P 7	40 × 31 - 5
P 8	-

第22掘立柱建物跡計測表

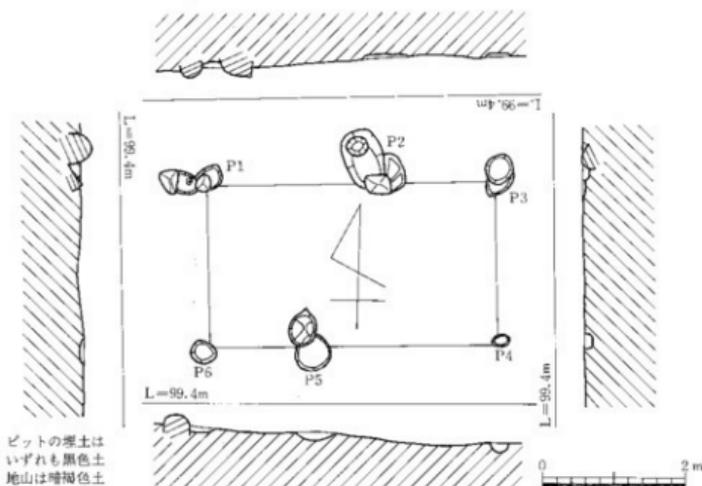
P 1	125	P 2	160	P 3	120	P 4	
							340
P 8	-	P 7	-	P 6	-	P 5	

P 1 ~ P 4	405
P 4 ~ P 5	340

側では第19・20掘立柱建物跡と切り合う。西側には、第2溝状遺構と第25掘立柱建物跡がある。主軸をN-82°-Eにとり、梁行1間、桁行2間の建物跡である。長軸4.1m、短軸2.3mである。P2より土師器片が出土しているが、時期は不明である。また、第19・20・22掘立柱建物跡との新旧関係も不明である。

#### 第24掘立柱建物跡（図版29）

7C地区の北側に位置し、一部6C地区にかかる。検出されたのは、東側の梁と考えられる柱穴3個のみであった。西側は削平されており、桁行は不明である。主軸をN-89°-Eにとる梁行2間の建物跡である。長軸3.48mを測る。柱穴内からは遺物は検出されておらず、時期は不明である。また、P3と第2溝状遺構の北側端部が切り合っているが、新旧関係は不明である。



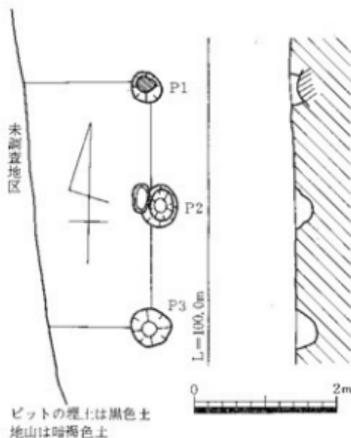
第78図 第23掘立柱建物跡遺構図

第23掘立柱建物跡計測表

P 1	38 × 33 - 13
P 2	84 × 55 - 5
P 3	40 × 31 - 4
P 4	23 × 19 - 5
P 5	50 × 45 - 5
P 6	40 × 30 - 4

P 1	230	P 2	180	P 3	
	240				230
P 5	150	P 5	260	P 4	

P 1 ~ P 3	410
-----------	-----



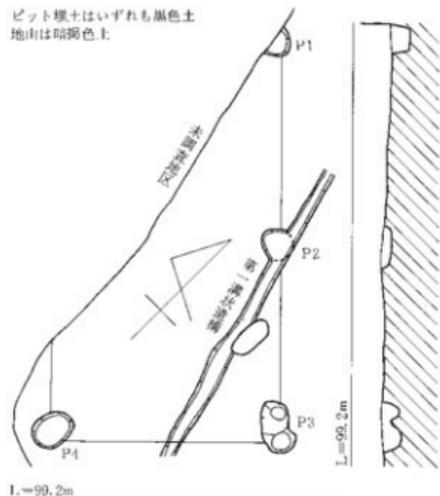
第24掘立柱建物跡計測表

P 1	49 × 40 - 22
P 2	56 × 46 - 27
P 3	60 × 55 - 29

-	-	P 1
-	-	168
-	-	P 2
-	-	180
-	-	P 3

第79図 第24掘立柱建物跡遺構図

ピット痕はいずれも黒色土  
地山は暗褐色土



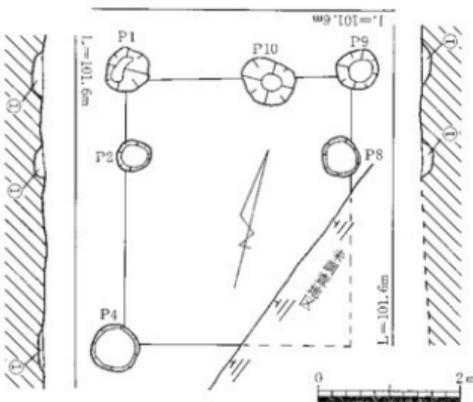
L=99.2m



第80図 第25掘立柱建物跡遺構図



①黒色土



第81図 第26掘立柱建物跡遺構図

第25掘立柱建物跡計測表

P 1	?	?	-	28
P 2	49	×	45	- 8
P 3	46	×	44	- 28
P 4	59	×	50	- 20

P 1	280	P 2	280	P 3	
-					320
P 6	-	P 5	-	P 4	

P 1	~	P 3	560
P 3	~	P 4	320

第25掘立柱建物跡 (図版29)

7 C地区の南西に位置し、一部7 D、8 C地区にかかる。第20・23掘立柱建物跡の西側にある。梁行1間、桁行2間以上の建物跡であると考えられる。主軸はN-43°-Wにとる。P2と切り合う形で第1溝状遺構が南北に走り、またP3と第20掘立柱建物跡のP4が切り合っている。P2より土師器片が出土しているが図化できず、時期、新旧関係とも不明である。

第26掘立柱建物跡計測表

P 1	79	×	68	- 20
P 2	47	×	43	- 15
P 4	65	×	65	- 4
P 8	54	×	53	- 13
P 9	58	×	58	- 17
P10	76	×	67	- 22

P 1	204	P10	112	P 9	
108					120
P 2		P 1 ~ 4	376	P 8	
268		P 1 ~ 9	316	P 7	
					-
P 4	-	P 5	-	P 6	

### 第26掘立柱建物跡 (図版29)

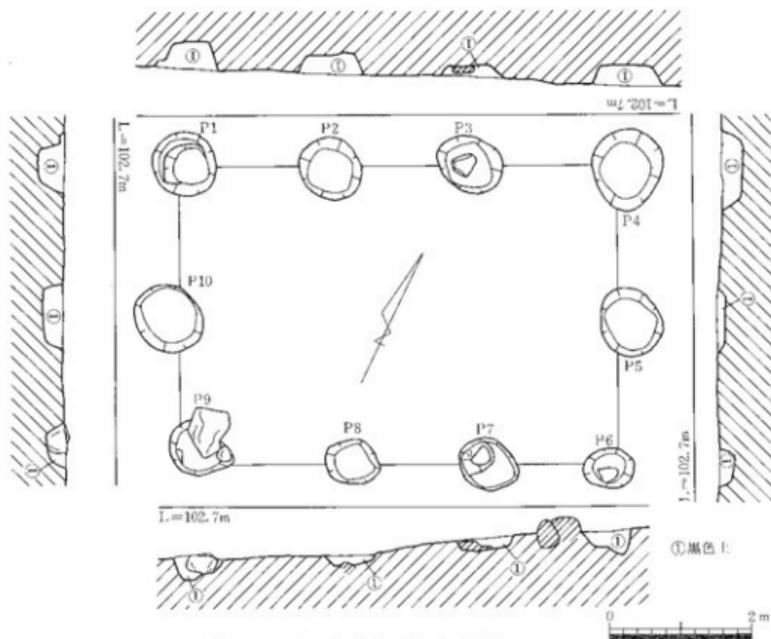
12・13M地区にまたがり、第28掘立柱建物跡の東にあたる。南東側が未調査地区に入り全体を調査できなかったが、梁行2間、桁行3間の建物跡と思われる。長軸3.76m、短軸3.16mを測る。主軸はN-14°-Wをとる。ピットはどれも浅く、P3・5は地山に達しないものである。遺物は出土せず、時期は不明である。

### 第27掘立柱建物跡 (図版30・36)

10M地区南東部に位置し、一部10N地区にかかる。周囲に第33~37掘立柱建物跡がある。主軸をN-65°-Eにとる。梁行2間、桁行3間の建物跡である。長軸6.4m、短軸4.2mを測る。当遺跡では、第4掘立柱建物跡と並び最大規模の掘立柱建物跡である。P4は第37掘立柱建物跡のP4と、P8は第34掘立柱建物跡のP2と、P3は第4溝状遺構と切り合っているが、第27掘立柱建物跡の方が新しいものと判断される。P1~4、8~10より土師器、須恵器が出土しているが、P1より出土したもの以外は図化できなかった。時期は奈良時代と推定される。



第82図 第27掘立柱建物跡遺物図



第83図 第27掘立柱建物跡遺構図

P 1	92 × 56 - 37
P 2	88 × 67 - 24
P 3	80 × 64 - 12
P 4	82 × 70 - 25
P 5	130 × 86 - 32
P 6	95 × 80 - 35
P 7	90 × 84 - 27
P 8	98 × 74 - 16
P 9	116 × 99 - 29
P 10	100 × 85 - 11

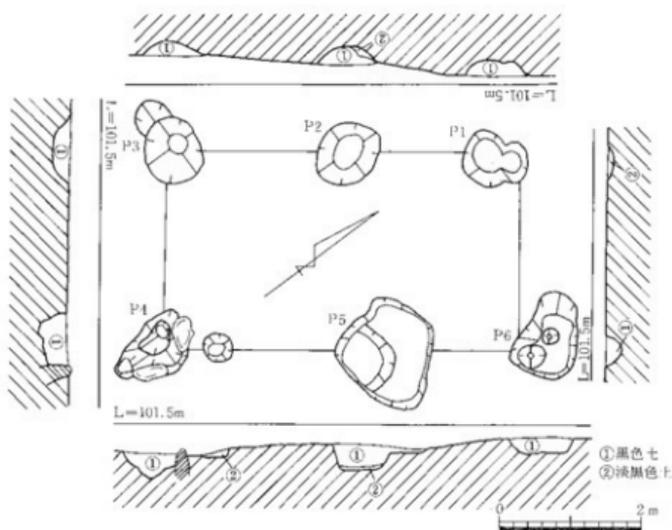
P 1	212	P 2	200	P 3	200	P 4	220
P 10						P 5	204
P 9	240	P 8	200	P 7	200	P 6	

P 1 ~ P 4	612
P 4 ~ P 6	424
P 6 ~ P 9	640
P 1 ~ P 9	420

第27掘立柱建物跡計測表

第28掘立柱建物跡 (図版30)

12L地区に位置し、第29掘立柱建物跡の東、第26掘立柱建物跡の西にあたる。周辺には石が多く、第28掘立柱建物跡はこれらの石群の合間を深く掘り込んでつくられている。建物跡の軸はN-37°-Eで、梁行1間、桁行2間。長軸4.9m、短軸2.8mを測り、



第84図 第28掘立柱建物跡遺構図

P 1	60 × 43 - 16
P 2	96 × 81 - 29
P 3	97 × 75 - 25
P 4	120 × 73 - 42
P 5	97 × 80 - 34
P 6	112 × 88 - 17

P 3	253	P 2	237	P 1	280
P 4	270	P 5	220	P 6	
P 1 ~ P 3	490				
P 4 ~ P 6	490				

第28掘立柱建物跡計測表

やや細長いものである。遺物は弥生上器が少量出土しているが、この付近は耕作による攪乱が著しいことから、これを第28掘立柱建物跡の遺物とするには無理がある。

第29掘立柱建物跡計測表

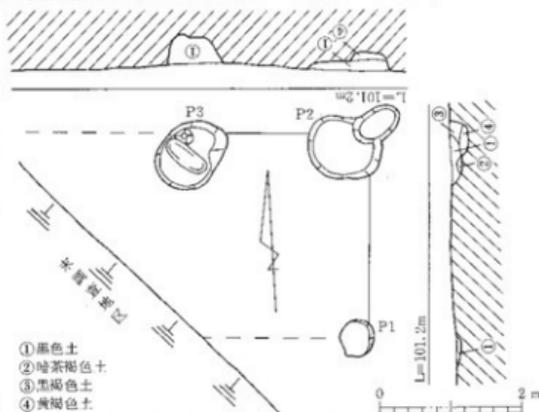
P 1	55 × 47 - 13
P 2	134 × 97 - 26
P 3	117 × 79 - 43

P 3	230	P 2
-	-	300
P 4	-	P 1

第29掘立柱建物跡

(図版30)

12K・L、13K・L地区に  
 渡り、南西側は未調査地区に  
 入る。主軸はN-87°-Wで、  
 梁行1間、桁行2間以上の建  
 物跡であろう。短軸3.00mと推定される。遺物は出土しておらず時期は不明である。



第85図 第29掘立柱建物跡道構図

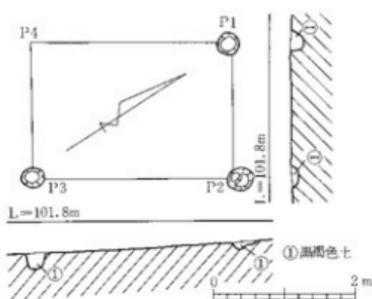
第30掘立柱建物跡 (図版30)

8 J、9 J地区に位置する梁行1間、  
 桁行1間の建物跡であろう。P 4は検  
 出できなかったが、これは建物をつ  
 くる時、柱穴を  
 あまり深く掘り  
 込まなかったた  
 めであろう。建  
 物跡の主軸はN  
 -33°-Eである。  
 長軸2.82m、短  
 軸1.94mを測る。遺物は検出できなかった。

P 1	30 × 29 - 16
P 2	35 × 33 - 9
P 3	36 × 27 - 8

P 4	-	P 1
-	-	194
P 3	282	P 2

第30掘立柱建物跡計測表



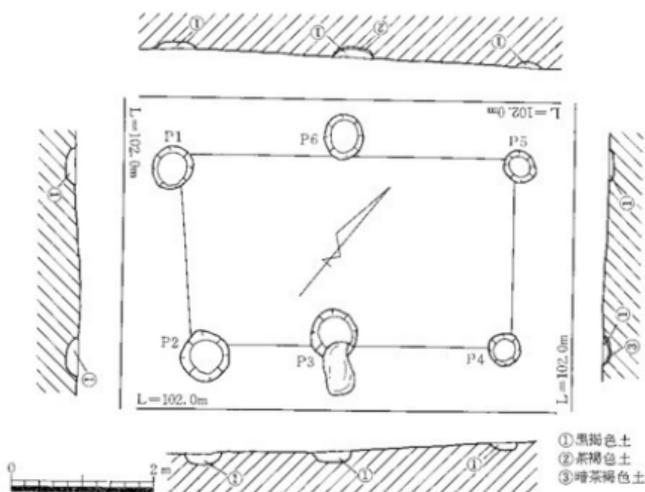
第86図 第30掘立柱建物跡道構図

第31掘立柱建物跡 (図版31)

7 I、8 I地区にまたがり、第32掘立柱建物跡の南に位置する。主軸はN-52°-Eで、  
 梁行1間、桁行2間を数える。北桁側が長い。短軸2.60mである。遺物は出土していない。

第32掘立柱建物跡 (図版31)

7 I・J地区に位置し、第31掘立柱建物跡の北にある。軸方向はN-67°-Wで、梁行  
 桁行とも1間である。長軸、短軸とも不統一である。遺物は検出できなかった。



第87図 第31掘立柱建物跡遺構図

第31掘立柱建物跡計測表

P 1	62 × 55	- 14
P 2	71 × 71	- 22
P 3	70 × 65	- 25
P 4	45 × 43	- 12
P 5	47 × 43	- 13
P 6	65 × 55	- 13

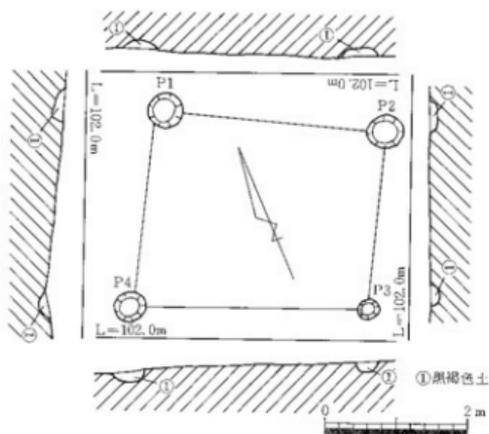
P 1	240	P 6	240	P 5
260				260
P 2	190	P 3	240	P 4

P 1 ~ P 5	480	P 1 ~ P 2	260
P 2 ~ P 4	430	P 5 ~ P 4	260

第32掘立柱建物跡計測表

P 1	50 × 49	- 15
P 2	52 × 45	- 14
P 3	30 × 30	- 14
P 4	46 × 40	- 18

P 1	312	P 2
282		254
P 4	336	P 3



第88図 第32掘立柱建物跡遺構図

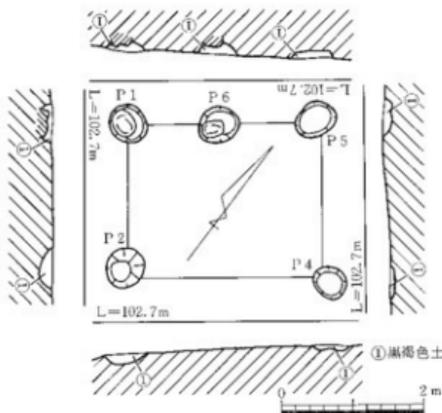
### 第33掘立柱建物跡 (図版31・36)

10N地区南西側に位置し、一部11N地区にかかる。梁行1間、桁行2間、長軸2.8m、短軸2.17mの小型の建物跡であるが、P3は検出できなかった。主軸はN-53°-Eにとる。第34掘立柱建物跡と切り合うが、新旧関係は不明である。P1・6より土師器片が出土しているが図化できなかった。P5より土師器の坏(Po1)が出土している。奈良時代のもとと推定される。

#### 第33掘立柱建物跡計測表

P 1	52 × 52 - 16
P 2	56 × 55 - 20
P 4	48 × 41 - 5
P 5	60 × 46 - 11
P 6	56 × 52 - 16

P 1	140	P 6	140	P 5
217				217
P 2	280			P 4



第89-①図 第33掘立柱建物跡遺物図

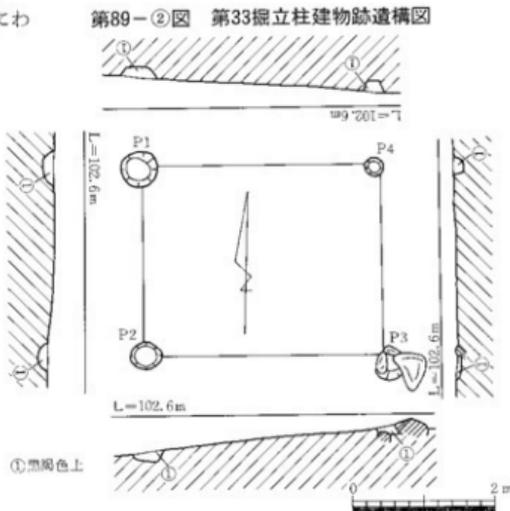
#### 第34掘立柱建物跡 (図版31)

10M地区南東、10N地区南西にわたって位置している。梁行1間、桁行1間の長方形の建物跡で、主軸をN-87°-Eとはぼ東西にとる。長軸3.36m、短軸2.72mを測る。P2は、第27掘立柱建物跡のP8と切り合っている

#### 第34掘立柱建物跡計測表

P 1	50 × 45 - 17
P 2	45 × 38 - 16
P 3	70 × 55 - 35
P 4	27 × 26 - 14

P 1	336	P 4
272		272
P 2	336	P 3



第90図 第34掘立柱建物跡遺物図

るが、第34掘立柱建物跡の方が古いものと考えられる。P1は第3溝状遺構と切り合っており、また、第33・36掘立柱建物跡とも切り合うが、新旧関係は不明である。周辺の遺構から、土師器、須恵器等の破片が出土しているため、奈良時代の建物跡ではないかと推測されるが、明確な所は不明である。

第35掘立柱建物跡計測表

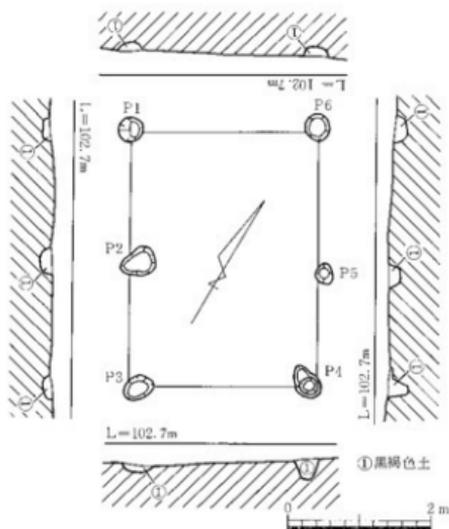
P 1	35 × 33 - 3
P 2	50 × 40 - 18
P 3	44 × 32 - 14
P 4	35 × 31 - 24
P 5	32 × 25 - 32
P 6	38 × 38 - 15

P 1	260	P 6	203
P 2		P 5	162
P 3	260	P 4	

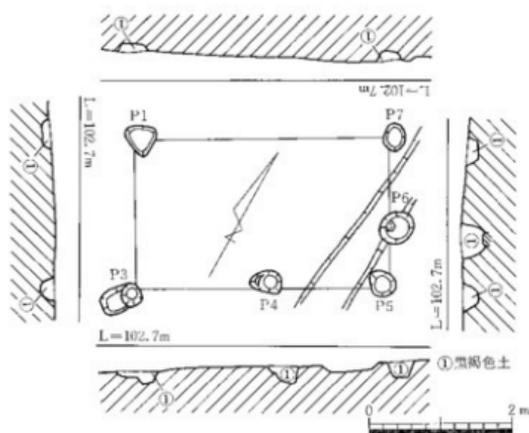
P 1 ~ P 3	365
P 4 ~ P 6	365

第35掘立柱建物跡 (図版32)

10N地区西側に位置し、第36掘立柱建物跡とは、ほぼ直角に切り合っている。また西側に第27掘立柱建物跡、第34掘立柱建物跡がある。主軸はN-30°-W、梁行2間、桁行1間の建物跡である。長軸3.65m、短軸2.60mを測る。P6と、第36掘立柱建物跡のP7は重複しているが、新旧関係は判断できなかった。P1・P3より土師器、須恵器が出土しているが、時期は不明である。



第91図 第35掘立柱建物跡遺構図



第92図 第36掘立柱建物跡遺構図

P 1	43 × 38 - 10
P 3	58 × 35 - 23
P 4	44 × 32 - 24
P 5	38 × 36 - 20
P 6	46 × 46 - 32
P 7	38 × 33 - 15

P 1	356		P 7
212			128
			P 6
			84
P 3	188	P 4	168
			P 5

第36掘立柱建物跡計測表

### 第36掘立柱建物跡（図版32）

10N地区西側に位置しており、第27・34・35掘立柱建物跡と切り合っている。梁行2間、桁行2間の建物跡で、主軸はN-60°-Eにとる。長軸3.56m、短軸2.12mを測る。P2は第27掘立柱建物跡のP5に切られた形で消失している。P8も検出できなかった。P7は第35掘立柱建物跡より古いものと考えられるが、第34掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

### 第37掘立柱建物跡（図版32）

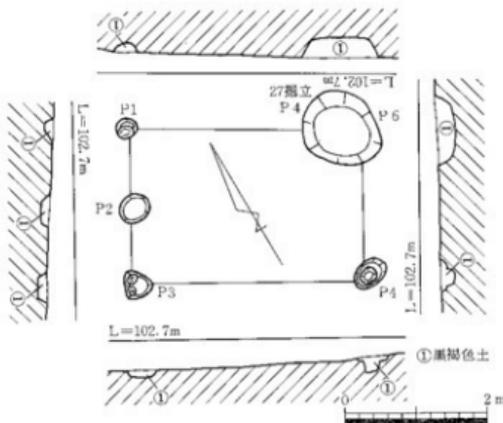
10M地区東側に位置する、梁行1間、桁行1間、長軸3.28m、短軸2.20mの長方形の建物跡である。主軸はN-60°-Wにとる。P6は第27掘立柱建物跡のP4に切られている。第37掘立柱建物跡の方が、古いものと考えられる。P2は梁行にあること、対辺にないことなどから補助柱跡と考えたい。P1・2より土師器、須恵器の破片が出土しているが、明確な時期は不明である。

### 第37掘立柱建物跡計測表

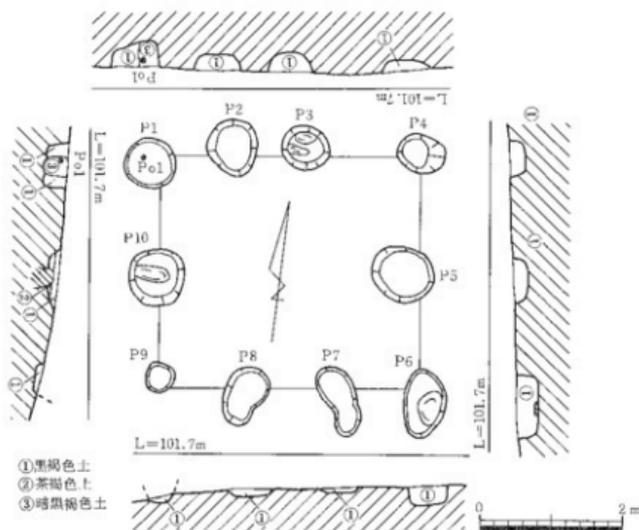
P 1	32 × 28 - 13
P 2	46 × 40 - 11
P 3	40 × 40 - 14
P 4	50 × 35 - 22

P 1	328	P 6
110		220
P 2		
110		
P 3	328	P 4

P 1	~ P 3	220
P 1	~ P 5	328



第93図 第37掘立柱建物跡構図



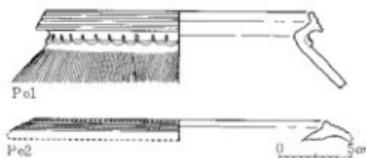
第94図 第38掘立柱建物跡遺構図

第38掘立柱建物跡計測表

P 1	74 × 73 - 35	P 1	120	P 2	100	P 3	150	P 4	170
P 2	78 × 74 - 21	P 10	175					P 5	170
P 3	64 × 60 - 28							P 6	170
P 4	68 × 52 - 27	P 9	165						
P 5	88 × 76 - 24			P 8	124	P 7	120		
P 6	97 × 56 - 32								
P 7	180 × 50 - 8								
P 8	84 × 50 - 12	P 1 ~ P 4	370						
P 9	46 × 40 - 8(推定)	P 4 ~ P 6	340						
P 10	71 × 56 - 16	P 6 ~ P 9	370						
		P 9 ~ P 1	340						

第38掘立柱建物跡 (図版32・36)

130地区に位置し、北東側で第1竪穴住居跡と切り合う。新旧関係は第38掘立柱建物跡の方が新しいが、遺物等から考えて両者に大きな時期差はないように思われる。建物跡は主軸をN-82°-Eにとる。梁行2間、桁行3間の方形に近いものである。長軸3.70m、短軸3.40mを測る。各柱穴とも深くしっかり掘り込まれている。遺物はP1・10より出土している。Po1は口縁部に3条の凹線が施され、外面



第95図 第38掘立柱建物跡遺物図

第95図 第38掘立柱建物跡遺物図

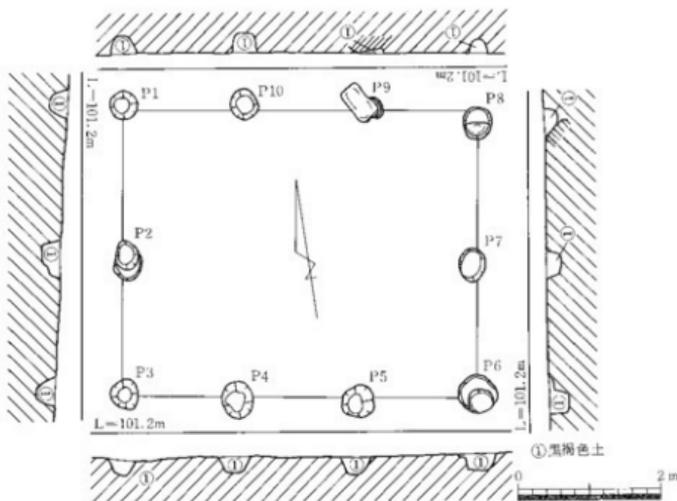
頸部に貼付凸帯がめぐる。肩部はハケ目調整である。P<sub>o</sub>2は口縁端部の破片で外面に4条の凹線が施されている。時期は遺物から弥生時代中期と推定される。

### 第39掘立柱建物跡 (図版33)

14N・O地区に位置し、西の第42掘立柱建物跡、東の第40掘立柱建物跡と隣接する。軸方向はN-81°-Wで、梁行2間、桁行3間を数える。長軸5.0m、短軸4.04mを測る。遺物は検出できなかった。

### 第40掘立柱建物跡 (図版33)

14O地区に位置し、東側で第43掘立柱建物跡と切り合う。遺物から判断して第40掘立柱



第96図 第39掘立柱建物跡遺構図

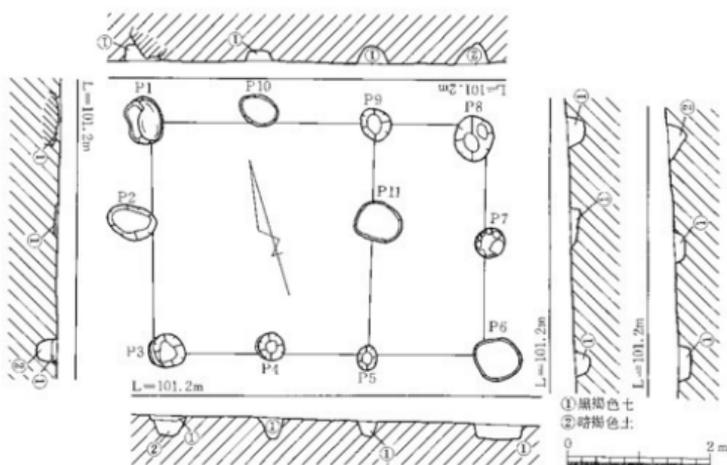
### 第39掘立柱建物跡計測表

P 1	40 × 38 - 23
P 2	54 × 37 - 26
P 3	45 × 40 - 29
P 4	52 × 43 - 23
P 5	47 × 45 - 38
P 6	55 × 52 - 23
P 7	47 × 36 - 21
P 8	46 × 37 - 17
P 9	28 × 25 - 10
P 10	41 × 38 - 29

P 1	170	P 10	180	P 9	150	P 8
P 2	200					216
P 3	204					P 7
						192
P 3	160	P 4	168	P 5	172	P 6

P 1 ~ P 3	404
P 3 ~ P 6	500
P 6 ~ P 8	408
P 8 ~ P 1	500

建物跡の方が古かろう。建物跡は主軸をN-73°-Wにとり、梁行2間、桁行3間を数える。長軸4.75m、短軸3.28mを測る。P11は場所的にみて建物跡に関係するものかも知れない。遺物はP8・9より弥生土器が出土している。



第97図 第40掘立柱建物跡遺構図

第40掘立柱建物跡計測表

P 1	64 × 47 - 23
P 2	66 × 47 - 6
P 3	52 × 50 - 29
P 4	41 × 40 - 31
P 5	39 × 32 - 20
P 6	68 × 58 - 21
P 7	38 × 36 - 13
P 8	60 × 55 - 25
P 9	48 × 44 - 22
P 10	52 × 40 - 19
P 11	65 × 55 - 5

P 1	168	P 10	164	P 9	143	P 8	
P 2	140			P 11	136	P 7	160
P 3	188			P 5	192	P 6	170
P 4	155	P 4	145	P 5	175	P 6	

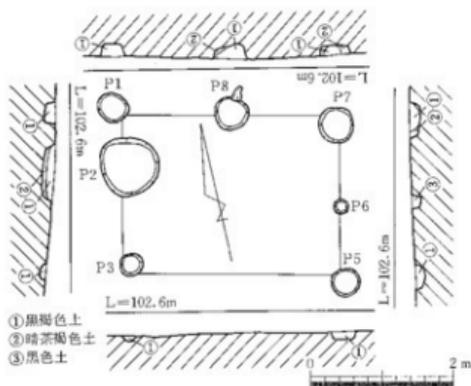
P 1 ~ P 3	328
P 3 ~ P 6	475
P 6 ~ P 8	330
P 8 ~ P 1	475
P 9 ~ P 5	328

第41掘立柱建物跡 (図版33)

13N、O地区にまたがる、梁行2間、桁間2間の建物跡である。主軸はN-77°-Wをとる。各ピットのプランは整わず、深さも浅いものばかりである。長軸3.2m、短軸2.3mを測る建物跡である。遺物は検出できなかった。

第42掘立柱建物跡 (図版33)

14N地区の北側に位置し、第39掘立柱建物跡の西側にあたる。梁行2間、桁行2間の建物跡で、主軸をN-65°-Eにとる。長軸4.25m、短軸3.2mを測る。P2は検出できな

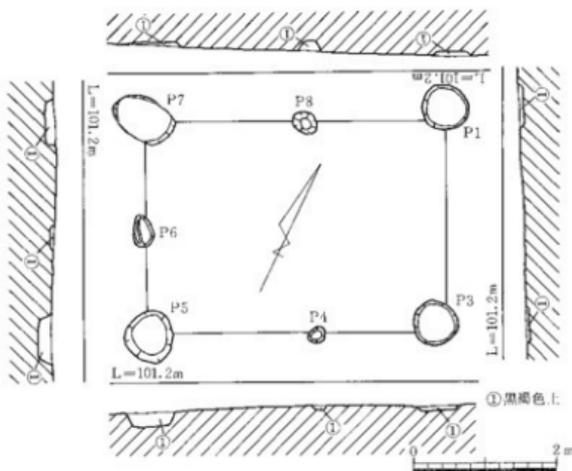


第98図 第41掘立柱建物跡遺構図

第41掘立柱建物跡計測表

P 1	50 × 44 - 13
P 2	90 × 78 - 16
P 3	34 × 32 - 21
P 5	47 × 35 - 13
P 6	20 × 18 - 10
P 7	50 × 35 - 10
P 8	47 × 45 - 11

P 1	170	P 8	150	P 7	120
100					P 6
P 2					110
130					
P 3	320				P 5



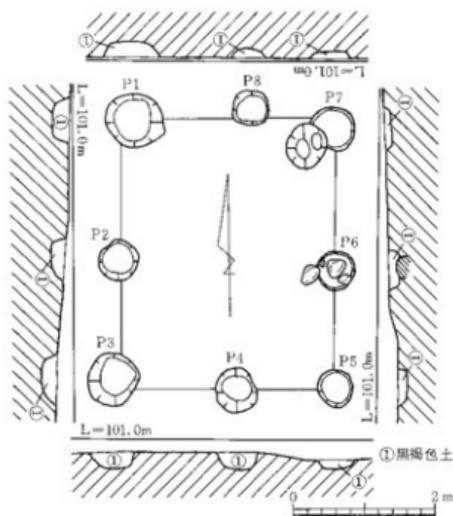
第99図 第42掘立柱建物跡遺構図

P 1	66 × 62 - 46
P 3	63 × 62 - 9
P 4	25 × 23 - 7
P 5	73 × 66 - 19
P 6	41 × 26 - 5
P 7	91 × 53 - 14
P 8	34 × 25 - 16

P 7	230	P 8	195	P 1	168
P 6					320
152					
P 5	240	P 4	166	P 3	
P 1 ~ P 3		320		P 7 ~ P 1	
				425	

第42掘立柱建物跡計測表

かった。P 4・6・8は四隅の柱穴と比べて小さい。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



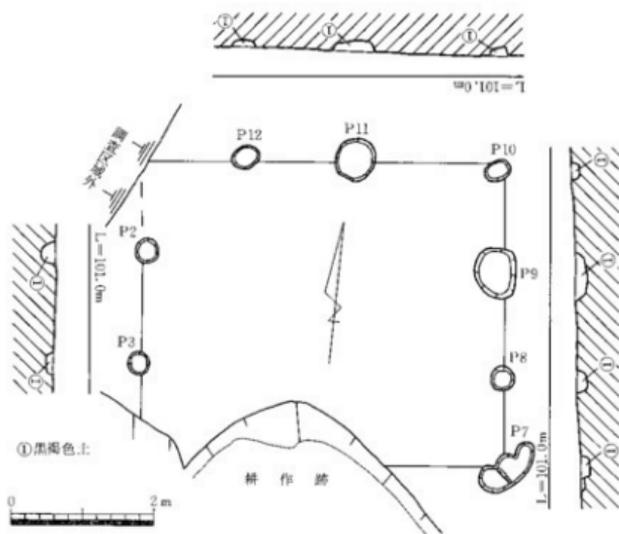
第43掘立柱建物跡計測表

P 1	78 × 75 - 24
P 2	58 × 55 - 22
P 3	74 × 70 - 32
P 4	63 × 60 - 24
P 5	54 × 50 - 15
P 6	55 × 50 - 17
P 7	65 × 60 - 9
P 8	50 × 49 - 15

P 1	175	P 8	130	P 7	200
P 2				P 6	180
P 3	170	P 4	135	P 5	

P 1 ~ P 3	380
P 3 ~ P 5	305
P 5 ~ P 7	380
P 7 ~ P 1	305

第100図 第43掘立柱建物跡遺構図



第101図 第44掘立柱建物跡遺構図

### 第43掘立柱建物跡 (図版34)

14O地区の東に位置する梁行2間、桁行2間の建物跡である。南東側には第44掘立柱建物跡がある。主軸は南北方向で、長軸3.8m、短軸3.05mを測る。P2より土師器片、P7より須恵器片、P1・3より土器片を検出した。時期は奈良時代と推定される。

### 第44掘立柱建物跡 (図版34)

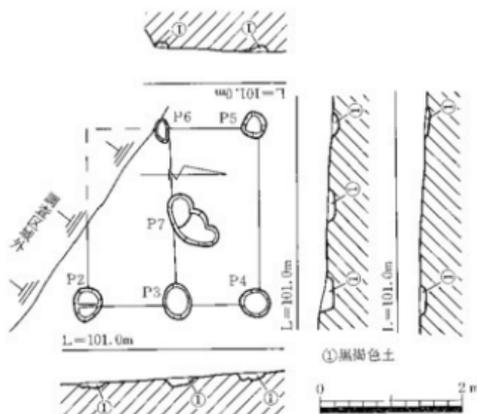
15P地区北西に位置している。南側は耕作により削られているが、梁行3間、桁行3間の掘立柱建物跡と考えられる。主軸をN-84°-Eにとる。長軸5.12m、短軸4.2mを測る。P7は第45掘立柱建物跡のP7と切り合っており、その断面から第44掘立柱建物跡の方が先に建てられたものと推定される。P1・4~6は耕作等により消失し、検出できなかった。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

### 第44掘立柱建物跡計測表

P 2	34 × 31 - 19
P 3	34 × 33 - 10
P 7	65 × 44 - 23
P 8	34 × 30 - 17
P 9	70 × 50 - 21
P 10	33 × 28 - 12
P 11	56 × 51 - 18
P 12	41 × 27 - 10

P 1	—	P 12	155	P 11	200	P 10
—						140
P 2						P 9
164						150
P 3						P 8
—						130
P 4	—	P 5	—	P 6	—	P 7

P 7 ~ P 10	420
P 1 ~ P 12	512(推定)



第102図 第45掘立柱建物跡遺構図

### 第45掘立柱建物跡計測表

P 2	58 × 40 - 11
P 3	50 × 38 - 18
P 4	44 × 40 - 7
P 5	38 × 36 - 7
P 6	36 × 18 - 9
P 7	90 × 46 - 9

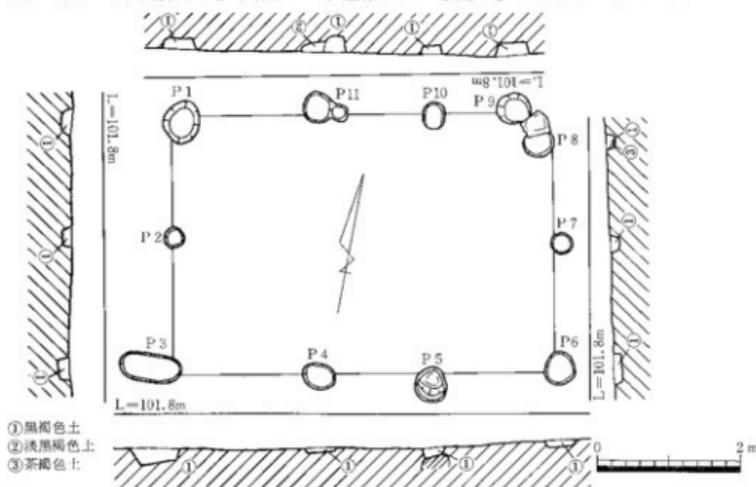
P 1	—	P 6	130	P 5
250		130		250
		P 7	130	
P 2	130	P 3	120	P 4

### 第45掘立柱建物跡 (図版34)

15P地区東よりに位置している。南側は耕作のために削られており確認できなかったが、梁行1間、桁行2間、主軸は南北方向の建物跡と考えられる。中央に東柱跡とみられるP7があり、建物跡も長軸2.5m、短軸2.5mと小型であることから、倉庫ではないかと推定される。このP7は、第44掘立柱建物跡のP7を切る形で検出されており、第44掘立柱建物跡よりも新しくなるものと考えられる。各柱穴より遺物は出土しておらず、時期は不明である。

### 第46掘立柱建物跡 (図版34)

13P・Q地区の中央に位置する比較的大きな建物跡である。主軸はN-79°-Eである。梁行2間、桁行3間を数える。長軸5.4m、短軸3.04mを測る。建物跡の中央は開墾による



第103図 第46掘立柱建物跡遺構図

### 第46掘立柱建物跡計測表

P 1	57 × 50 - 22
P 2	34 × 32 - 10
P 3	90 × 39 - 20
P 4	45 × 35 - 6
P 5	50 × 43 - 17
P 6	48 × 42 - 12
P 7	33 × 30 - 14
P 8	45 × 44 - 23
P 9	45 × 42 - 20
P 10	40 × 35 - 11
P 11	60 × 37 - 20

P 1	200	P11	136	P10	120	P 8・9
160						136
P 2						P 7
190						168
P 3	216	P 4	160	P 5	164	P 6

P 1 ~ P 3	350	P 6 ~ P 8	304
P 3 ~ P 6	540	P 9 ~ P 1	456

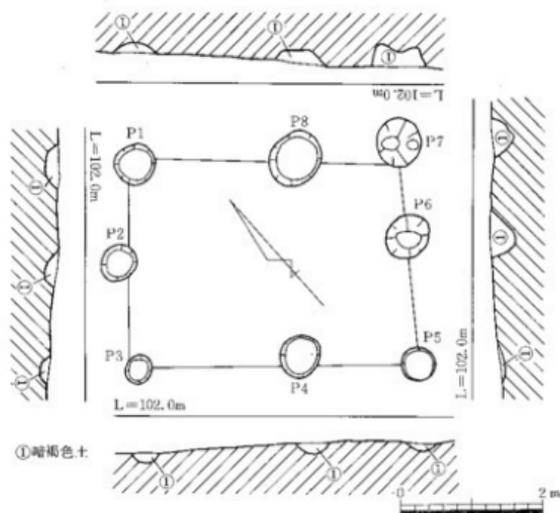
る大きな石の抜き取り跡で壊されているが、そこから弥生土器の小片が出土している。建物跡の時期は主軸の方向、形態等から弥生時代の可能性もある。

#### 第47掘立柱建物跡 (図版35)

17U・V、18U・V地区に渡る梁行2間、桁行2間の建物跡である。南西側に第49・50掘立柱建物跡があるが、その他の遺構は周辺にない。主軸はN-49°-Wである。長軸は南が長い。短軸3.0mを測る。遺物は出土していない。

#### 第48掘立柱建物跡 (図版35・36)

16Q・R地区に位置し、第20・21土坑の北にあたる。主軸をN-80°-Eにとる。P7は検出できなかったが、梁行1間、桁行3間(?)の建物跡であろう。長軸4.83m、短軸4.0mを測る。P2の低位から弥生土器の底部が出土している。時期は弥生時代中期であろう。



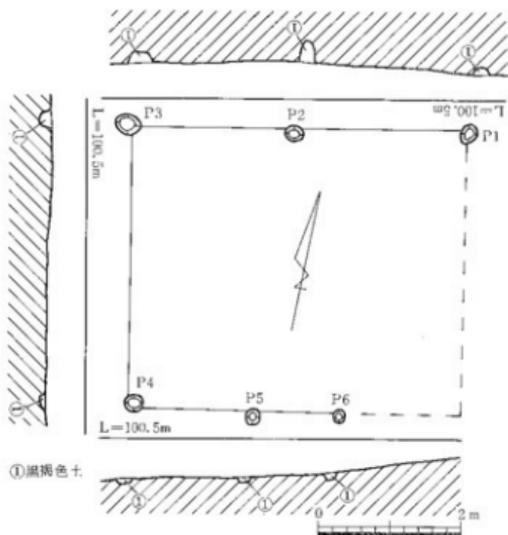
第104図 第47掘立柱建物跡遺構図

#### 第47掘立柱建物跡計測表

P 1	60 × 58 - 15
P 2	52 × 44 - 13
P 3	40 × 35 - 13
P 4	63 × 51 - 14
P 5	50 × 46 - 8
P 6	68 × 57 - 33
P 7	68 × 63 - 33
P 8	72 × 70 - 22

P 1	240	P 8	140	P 7
	145			144
P 2				P 6
	155			184
P 3	240	P 4	160	P 5

P 1 ~ P 3	300	P 5 ~ P 7	328
P 3 ~ P 5	400	P 7 ~ P 1	380



第105图 第48掘立柱建物跡遺構図

第48掘立柱建物跡計測表

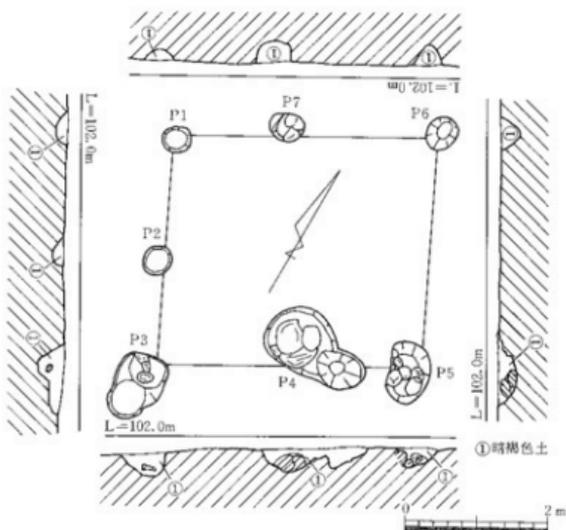
P 1	27 × 23 - 10
P 2	28 × 21 - 33
P 3	38 × 31 - 17
P 4	25 × 21 - 6
P 5	23 × 22 - 7
P 6	20 × 17 - 8

P 3	235	P 2	248	P 1		
400				--		
P 4	170	P 5	120	P 6	--	P 7

P 1	~	P 3	483
P 3	~	P 4	400



第106图 第48掘立柱  
建物跡遺物図



第107图 第49掘立柱建物跡遺構図

#### 第49掘立柱建物跡（図版35）

18V、19V地区に位置し、東には第50掘立柱建物跡がある。この辺りは水田として利用されていたため、地山は整地され平坦に削られている。土器もほとんど出土していない。第49掘立柱建物跡は主軸をN-61°-にとる梁行2間、桁行2間の建物跡である。各柱穴はしっかり掘り込まれ、P3・5・7には石が入っている。長軸3.76m、短軸3.5mを測る。遺物は検出されていない。

#### 第49掘立柱建物跡計測表

P 1	40 × 38 - 15
P 2	44 × 38 - 11
P 3	100 × 67 - 21
P 4	66 × 53 - 16
P 5	88 × 57 - 21
P 6	50 × 40 - 28
P 7	49 × 40 - 30

P 1	160	P 7	216	P 6
185				
P 2				350
165				
P 3	200	P 4	176	P 5

P 1 ~ P 3	350	P 6 ~ P 1	376
P 3 ~ P 5	376	P 6 ~ P 5	350

#### 第50掘立柱建物跡（図版35）

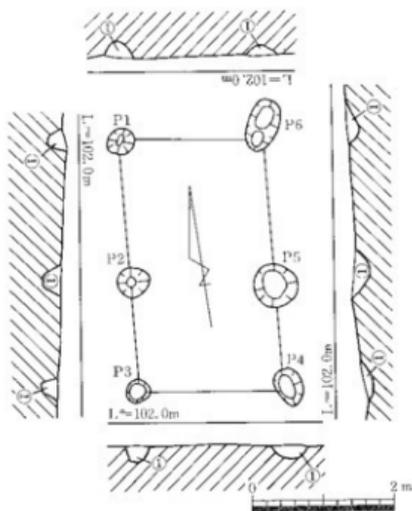
19W地区の西隅に位置し、調査地区の最東端にあたる。西には第49掘立柱建物跡がある。建物跡は東側は水田整地時の攪乱を受け、ピットの残りは良くないが、梁行1間、桁行2間の建物跡と考えた。主軸はN-3°-Eで、長軸3.55m、短軸2.00mを測る。遺物は全く出土しておらず、時期は不明である。

#### 第50掘立柱建物跡計測表

P 1	42 × 38 - 25
P 2	47 × 40 - 28
P 3	35 × 31 - 25
P 4	52 × 37 - 20
P 5	63 × 60 - 23
P 6	77 × 44 - 25

P 1	200	P 6
200		200
P 2		P 5
155		155
P 3	216	P 4

P 1 ~ P 3	355
P 4 ~ P 6	355



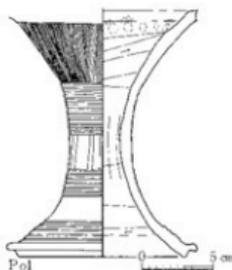
第108図 第50掘立柱建物跡遺構図

### (3) 土塚・土坑

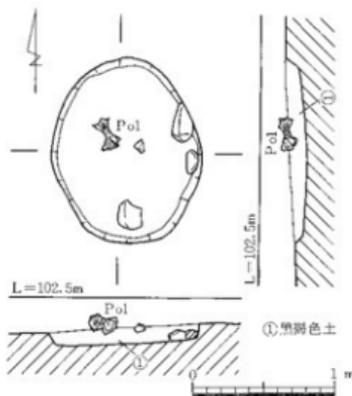
#### 第2土塚 (図版37)

10N、11N地区の第27掘立柱建物跡の東に位置し、南には第3土塚がある。遺構は楕円形を呈する土塚で長軸1.32m、短軸1.06mを測る。主軸は南北方向にとる。土塚内北

西寄りに丹塗りの器台(Po1)を検出した。器台は受部が欠損している。丹塗りが施されていることから供献土器とみられ、



第2土塚は土塚 第109図 第2土塚遺物図

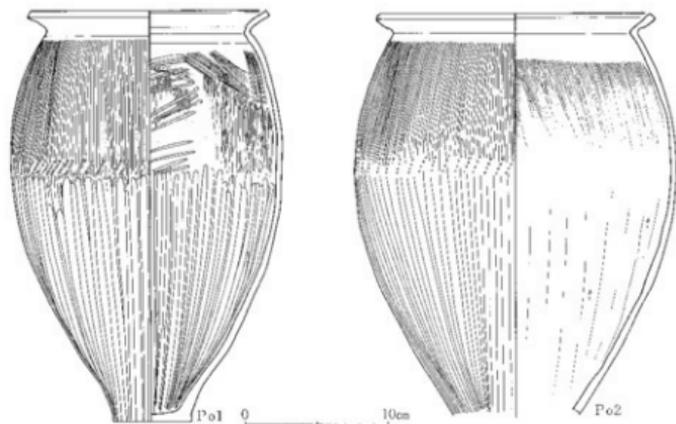


第110図 第2土塚遺構図

第2土塚は土塚 第109図 第2土塚遺物図 第110図 第2土塚遺構図  
 墓と考えられる。時期は器台より弥生時代中期後葉と考えられる。

#### 第3土坑 (図版37)

11M・N地区に位置し、第2土塚の南にある。遺構は楕円形を呈する土坑で、長軸2.68m、短軸1.82mを測る。主軸はN-73°-Wをとる。土坑内からはPo1~5の甕を検出した。検出した甕は5個体分ていずれも外面に炭化物、あるいはススの付着がみられる。

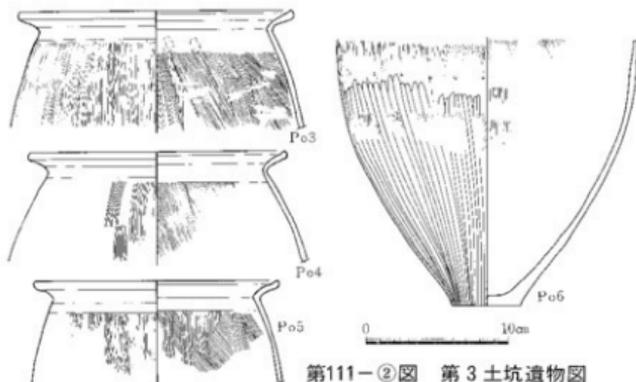


第111-①図 第3土坑遺物図

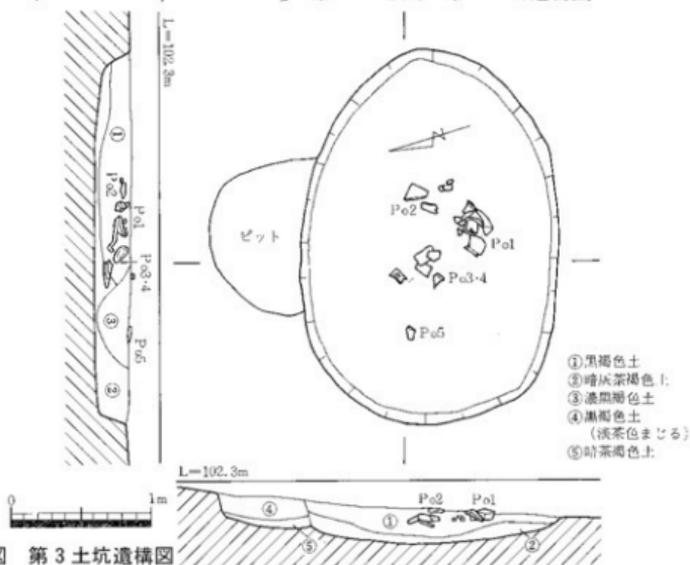
Po5のみ第③層（濃黒褐色土）より検出し、他の遺物は黒褐色土層より検出した。甕（Po1・2）は外面胴部中位に櫛状工具による刺突文がめぐり、胴部上半ハケ目、下半ヘラ磨きと外面調整が同じであるが、内面調整に違いが認められる。かなり上位までヘラ削りの残るPo2と丁寧なヘラ磨きで仕上げられているPo1の違いである。これらの遺物から第3土坑の時期は弥生時代中期中葉～後葉と考えられる。

### 第7土坑（図版38）

12P地区に位置し、第1竪穴住居跡の北、第46掘立柱建物跡の北西にあたる。遺構は楕



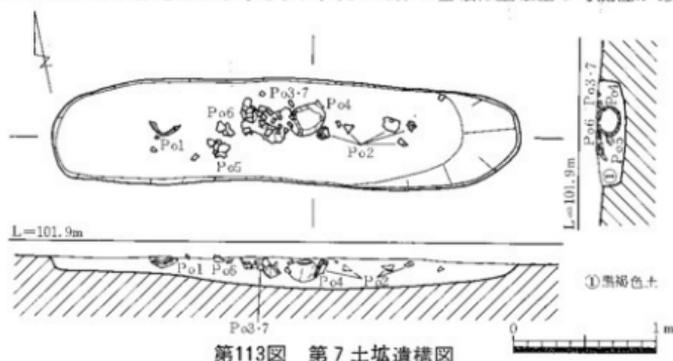
第111-②図 第3土坑遺物図



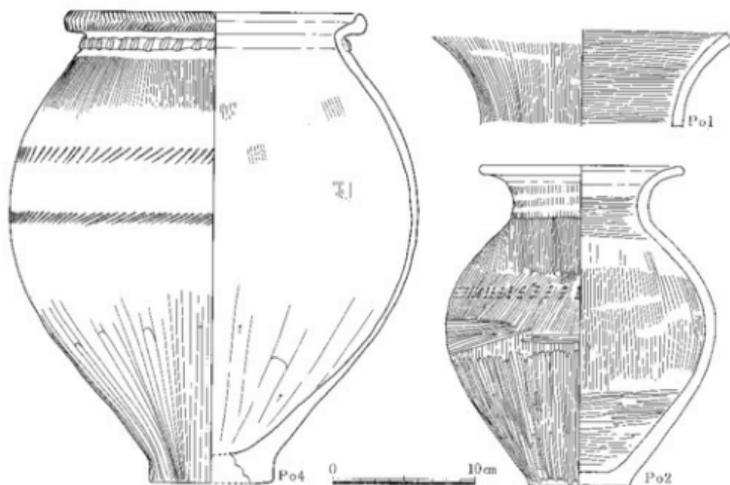
第112図 第3土坑遺構図

- ① 黒褐色土
- ② 暗灰茶褐色土
- ③ 濃黒褐色土
- ④ 黒褐色土  
(淡茶色まじる)
- ⑤ 暗茶褐色土

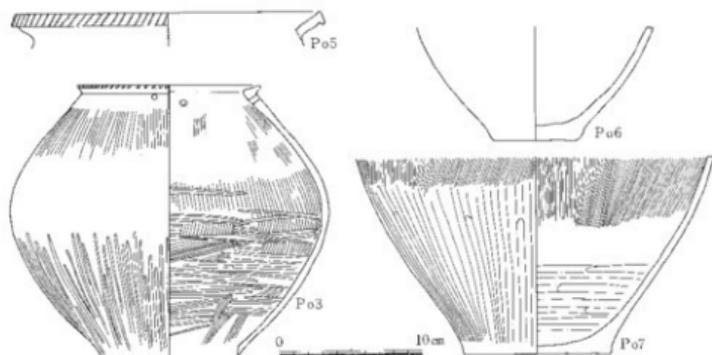
円形を呈する東西に長い土塚で、長軸3.32m、短軸0.74m、深さ約22cmを測る。七軸はN-78°-Wをとる。土塚内からはPo1～7の弥生土器を検出した。Po1は壺の頸部と思われる。Po2は口縁部が大きく外反する小型の壺で、外面調整は頸部ハケ後ナデ、胴部上半縦方向のハケ目、以下へら磨きである。胴部上位に櫛状工具による刺突文がめぐる。内面は低い所までハケ目調整が認められる。Po3は1対の紐孔を持つ無頸壺で、口縁端部に刻み目が施されている。Po4は頸部に貼付凸帯を持ち、指頭圧痕が明瞭にみられる。外面口縁端部に綾杉文状に刻み目を施し、胴部中位にも木口状工具による刻み目を2列めぐらせている。Po7は壺の底部であろう。このように土塚内より、まとまって土器が出土していることから供献土器とも考えられ、従って第7土塚は土塚墓の可能性が有る。時



第113図 第7土塚遺構図



第114-①図 第7土塚遺物図



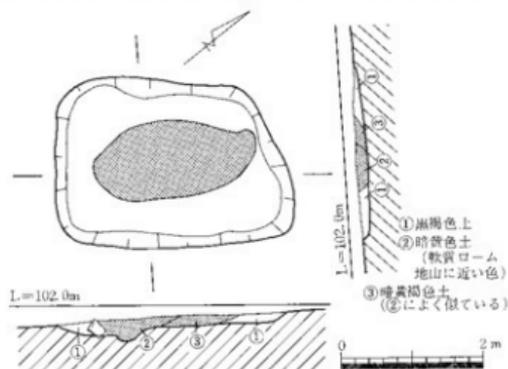
第114-②図 第7土坑遺物図

期は周辺の遺構、出土遺物から弥生時代中期と思われる。

#### 第8土坑 (図版38)

8 K地区のほぼ中央に位置する、やや方形がかった土坑である。この土坑は平面的には黄褐色土 (いわゆる大山ローム) を黒褐色土が取り巻くようにして検出した。また層的には黄褐色土が黒褐色土の上に位置するものである。このような土坑は58年度調査分の貝田原遺跡で他に1例、林ヶ原遺跡で17例ある。(詳しくは本報告書P 233~240参照。)

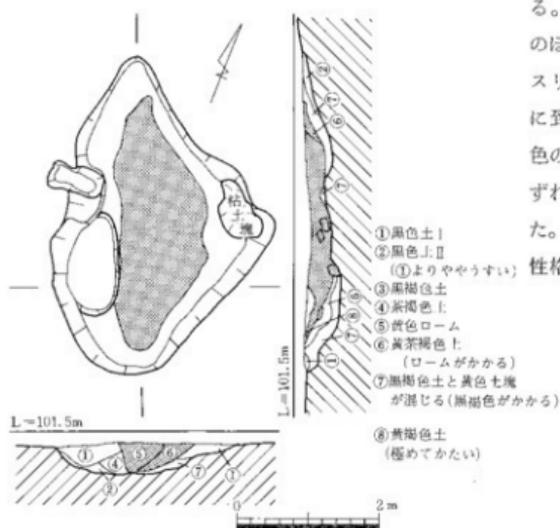
第8土坑は主軸をN-39°-Eにとる。長辺3.34m、短辺2.40mで、深さは最深部で14cmを測る。埋土には小石が多く含まれ、底からも小石が多く出土している。底、壁とも凹凸の著しいスリパチ状である。遺物は何も検出できなかった。



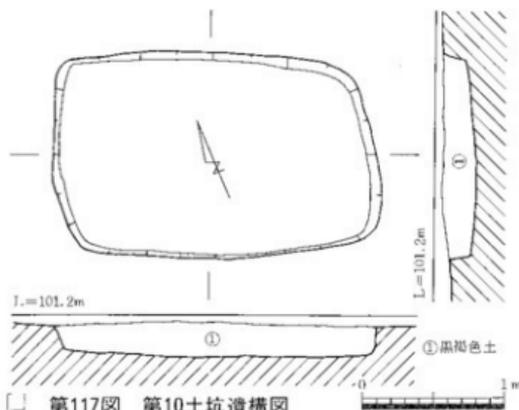
第115図 第8土坑遺構図

#### 第9土坑 (図版38)

13N地区の北東隅より検出した土坑で、第8土坑同様、黄褐色土が黒褐色土の上に位置するものである。切り合う遺構はない。東隣りに第41掘立柱建物跡があるが関係するかどうか分からない。主軸はN-22°-Wであり、長軸4.46m、短軸2.52m、深さ66cmを測



第116図 第9土坑遺構図



第117図 第10土坑遺構図



第118図 第10土坑遺物図

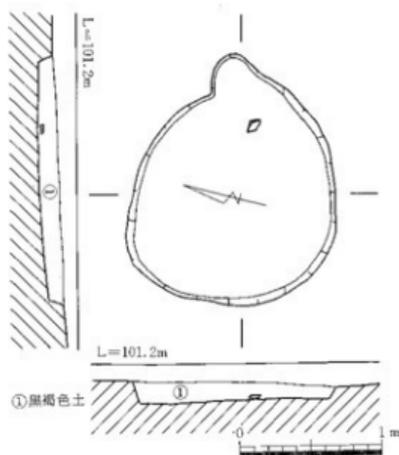
る。黄褐色土(ローム)は土坑のほぼ中央に位置し、低い所は、スリパチ状を呈する土坑の底部に到っている。土坑の底には黒色の上塊が各所にみられる。いずれも堅くしまった土塊であった。遺物は出土しておらず、時期、性格は分からない。

第10土坑(図版39)

14P地区の北東隅に位置し、第1堅穴住居跡の東側にあたる。遺構は隅丸長方形を呈する土坑で、長辺2.3m、短辺1.46mを測る。主軸はN-67°-Wをとる。遺構検出時、埋土上層よりPo1・2の壺を検出した。いずれも口縁部に2条(Po2)、3条(Po1)の凹線の入る壺の破片である。土坑の時期はこれらの遺物、周辺遺構から弥生時代中期と推定される。

### 第11土坑 (図版39)

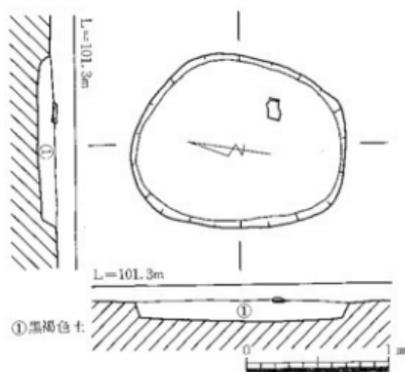
14Q地区の北側に位置し、第12土坑の南側にあたる。遺構は垂な楕円形を呈する土坑で、長軸1.6m、短軸1.4mを測る。主軸はN-77°-Eをとる。床面近くより甕の胴部破片を検出した。時期は弥生時代中期と考えられる。



第119図 第11土坑遺構図

### 第12土坑 (図版39)

14Q地区の北西隅に位置し、第10土坑の東側にあたる。遺構は楕円形を呈する土坑で、長軸1.50m、短軸1.22mを測る。主軸はN-10°-Wをとる。埋土上層より甕の胴部破片を検出した。時期は弥生時代中期と考えられる。



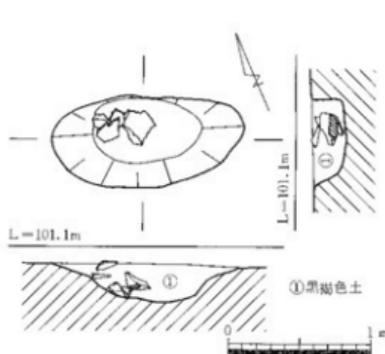
第120図 第12土坑遺構図

### 第14・15・17・18土坑 (図版39)

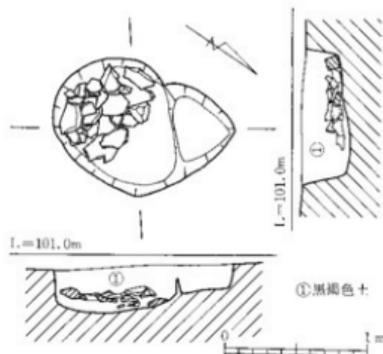
これら4基の土坑は総て14Q地区に位置し、第46掘立柱建物跡の南、第2竪穴住居跡の北西にあたる。周辺は石が多く露出しており、これらの土坑からも石が多く出土している。

第14土坑は長軸1.36m、短軸0.64m、深さ28cmを測る。主軸はN-69°-Wである。土坑内西側に、底に密着した状態で板石を検出した。

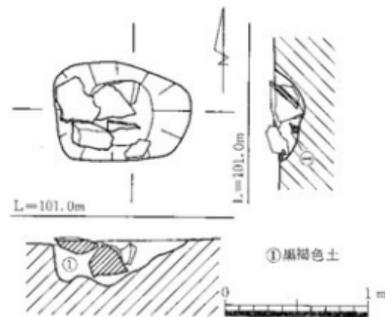
第15土坑は長軸1.28m、短軸0.96m、深さ36cmを測る。主軸はN-35°-Wである。土坑内の南側に底に密着した状態で細かい板石を多数検出した。



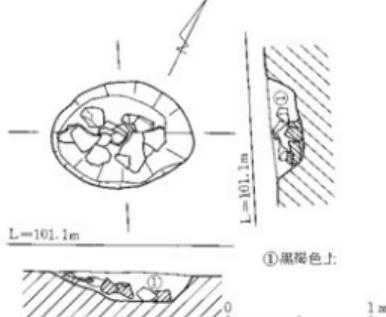
第121図 第14土坑遺構図



第122図 第15土坑遺構図



第123図 第17土坑遺構図



第124図 第18土坑遺構図

第17土坑は長軸0.94m、短軸0.68m、深さ20cmを測る。主軸はN-89°-Wである。  
 第18土坑は長軸1.0m、短軸0.74m、深さ21cmを測る。軸方向はN-64°-Eである。  
 検出した石は角礫ばかりで、土坑の南東側に集中する。

これら4基の土坑からは石の他土器等の遺物は出土していない。石は周辺にころがっている安山岩であり、焼成痕等も認められないが、その状態から人為的に割られていることは間違いない。

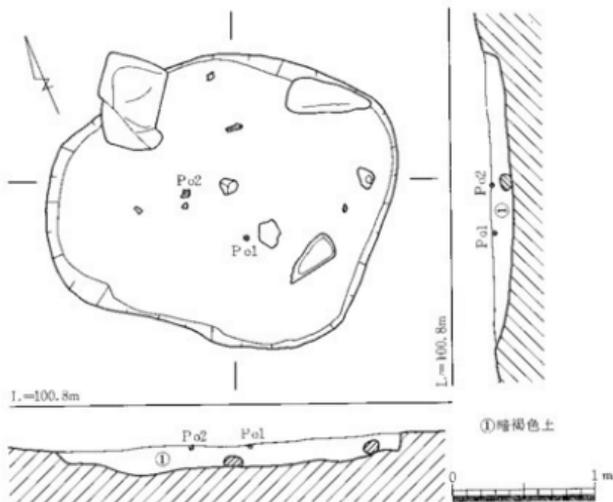
#### 第19土坑 (図版40)

15R地区に位置し、第2窪穴住居跡の南東にあたる。平面プランは不整隅丸方形で、長軸2.42m、短軸2.00m、深さ15cmを測る。出土遺物は、弥生土器の甕口縁部 (Po1)



第125図 第19土坑遺構図

器台脚部 (Po2) の他、甕の胴部の破片が出土している。Po1は口縁部がかなり立ち上がり気味であるが、凹線は施されておらず、また、内面は横ナデ調整がなされている。外面にはススが付着している。Po2は外面は丹塗りで、凹線が施されており、刻み目が平行

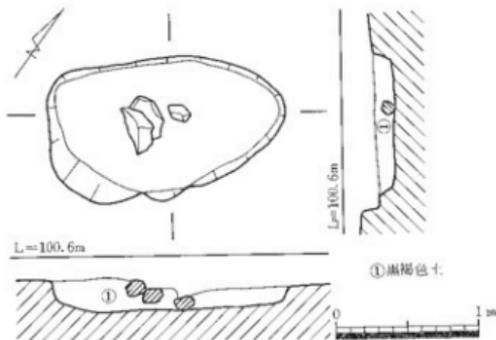


第126図 第19土坑遺構図

に入れられている。内面はヘラ削りである。これらの土器よりこの土坑は弥生時代中期後葉のものと考えられる。

#### 第20土坑 (図版40)

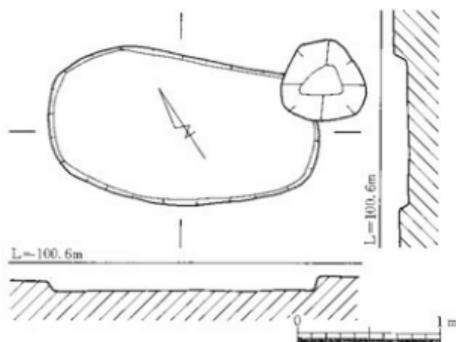
17Q地区に位置する楕円形の土坑である。軸方向はN-54°-Eで、規模は長軸1.66m、短軸1.00m、深さ24cmを測る。底面は安定している。土坑の中央付近、底面より小石を3個検出した。使用痕等はなく、性格は分からない。出土した弥生土器の小片から、弥生時代中期の遺構と思われる。



第127図 第20土坑遺構図

#### 第21土坑 (図版40)

17Q地区の北に位置し、第20土坑の東にあたる。北には第48掘立柱建物跡がある。平面形は楕円形で、東側はピットにより切られている。主軸はN-57°-Wで、長軸1.92m、短軸1.04m、深さ13cmを測る。遺物は出土していない。



第128図 第21土坑遺構図

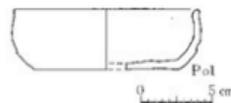
#### (4) 溝状遺構

##### 第1溝状遺構 (図版40)

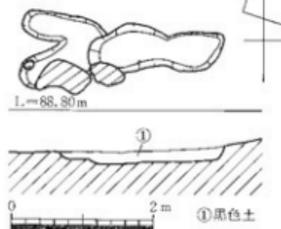
6 D地区中央部やや南より、第16掘立柱建物跡の東側に位置する東西に走る小型の溝で長さ約2.8m、幅約0.7m、深さ12cmを測る。須恵器(Po1)の破片が出上している。時期は奈良時代のもと考えられる。

##### 第2溝状遺構 (図版40)

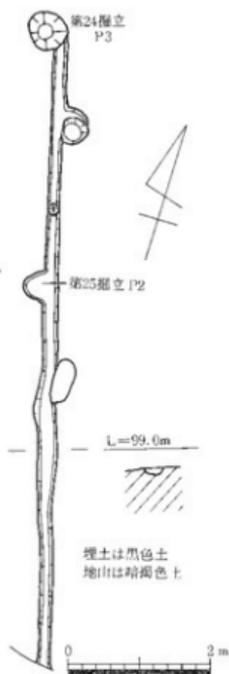
7 C、8 C、8 D地区を南北方向にのびる溝である。北端は第24掘立柱建物跡のP3と切り合う。第20掘立柱建物跡のP1、第25掘立柱建物跡のP2とも切り合っているが、いずれも新旧関係は不明である。南側は、調査範囲外であったため、未確認であるが、検出した部分のみの長さは8.85m、幅20cm、深さ8.6cmであった。土師器片が出上しているが、時期は不明である。



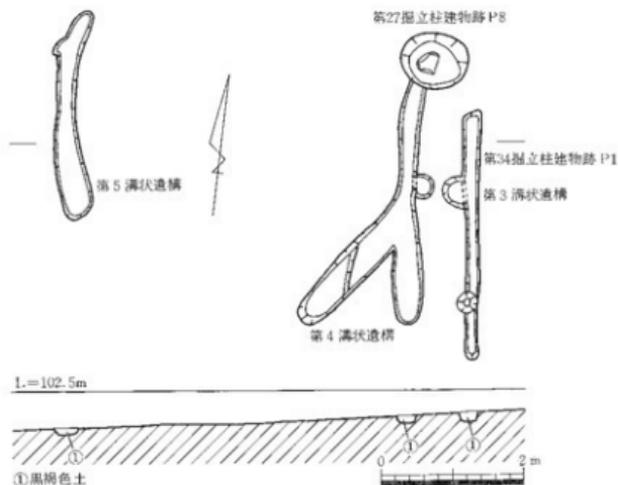
第129図 第1溝状遺構遺構図



第130図 第1溝状遺構遺構図



第131図 第2溝状遺構遺構図



第132図 第3～5溝状遺構遺構図

### 第3～5溝状遺構

10M地区南側に位置する3本のほぼ平行に走る溝状の遺構で、第27・34掘立柱建物跡と切り合っている。第4溝状遺構は南側で二股に分かれており、北側は第27掘立柱建物跡のP8と切り合っているが、第4溝状遺構の方が先行しているものと考えられる。第3溝状遺構と第34掘立柱建物跡のP1は切り合っているが、新旧関係は不明である。第3溝状遺構からは、土師器坏片、第4溝状遺構からは土師器甕口縁部片が出土している。第5溝状遺構からは遺物は出土していない。各溝状遺構は、各々ほとんど平行であること、遺物にさして時期差のみられないことから、同時期と考えられる。時期は奈良時代であろう。

第3溝状遺構は長さ3.52m、幅23cm、深さ13cm、第4溝状遺構は長さ3.44m、幅40cm、深さ12cm、第5溝状遺構は長さ2.95m、幅35cm、深さ7cmを測る。

### (5) 遺構外出土遺物

#### A 縄文土器 (図版40)

調査により縄文土器を2点検出した。いずれも遺構に伴わず、クロボク層内に散在していたものである。Po1は内外面に条痕が認められるが、所々そのナデ消しが施されている。中期のものであろう。Po2は外面に櫛状工具による長さ4～6mmの刺突文が施される。内面はナデである。前期のものであろう。

#### B 弥生土器 (図版40)

弥生土器は調査区の東側の第1竪穴住居跡と第2土城、3土坑の間に集中して検出され

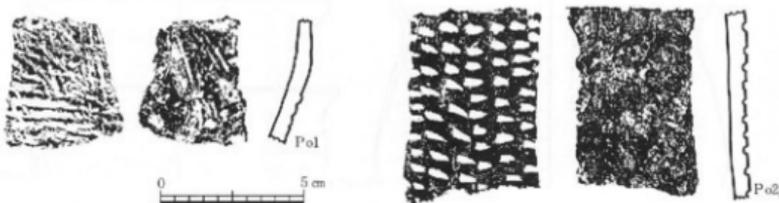
他地域よりの出土は少ない。いずれも弥生時代中期の特徴をそなえている。Po3・4は頸部に刻目凸帯を貼付し、口縁部に凹線が施されている。Po5～7はいずれも口縁部に3条の凹線がめぐり、外面頸部ナデ、肩部(Po7)にハケ目が施されている。内面はナデである。Po8は器台脚部で、脚端部外面に1条、その上方に5条の凹線が施されている。脚部径は推定で16.5cmである。Po9～12は底部であるが、ほとんどが平底であり、Po9のような上げ底のものは1点であった。

### C 土師器(図版41)

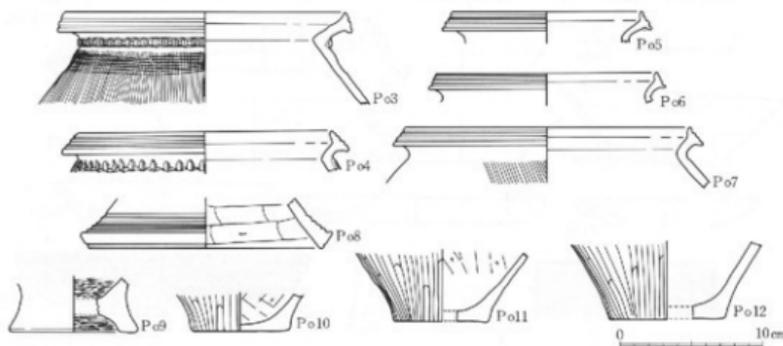
検出した土師器は全て歴史時代のものであり、遺跡の北西側(6D、7D地区)に集中している。器種には甕、坏、皿があり、坏は高台の有るものと無いものがある。

甕(Po13～19)は口縁部のみのもが多く全体の形を窺えるものはない。口径は最大のもの(Po13)で29.2cm、最小のもの(Po17)で19.7cmを測る。いずれも外反してのびる口縁部を持つが、端部の角ばるものと丸味を帯びるものがある。Po15は口縁部の立ち上がりが強く、端部は尖り気味に終わる。器壁も薄く、他の甕とはかなり異なる。

坏(Po20～30)は高台の有るものと無いものがあり、調整的には内外面横ナデ、底部外面未調整のものが多い。底部はヘラ切り、ヘラおこしのものが共伴する。Po21・25に



第133-①図 遺構外縄文土器実測図



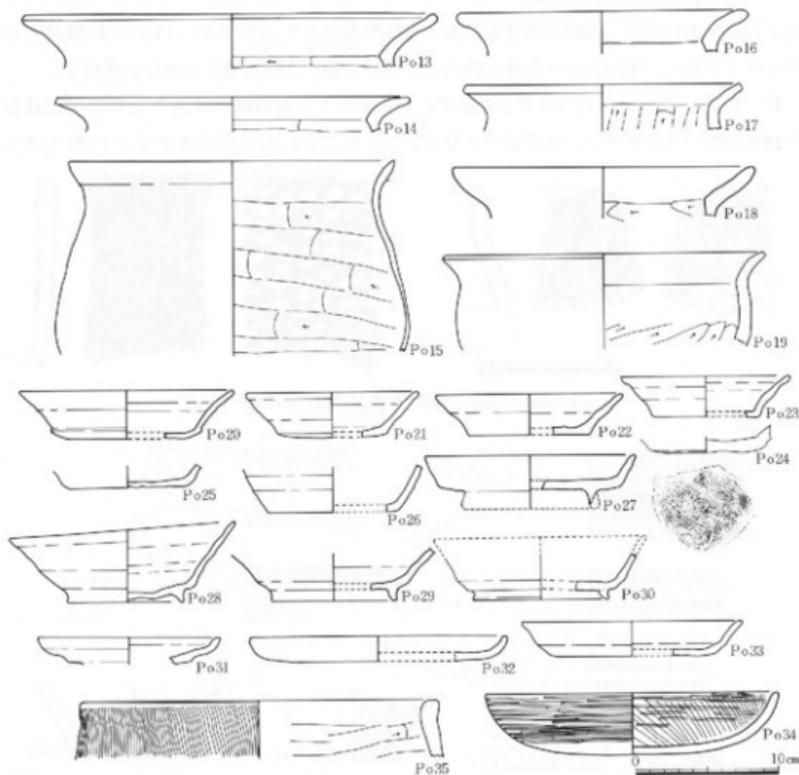
第133-②図 遺構外弥生土器実測図

は赤色塗彩が施されている。高台を持つ杯 (Po27~30) は口縁部が広く開き、高台は断面三角形を呈するものが多いが、Po27は口縁部が短く、かつ内湾気味に開いて、形態を異にする。Po27・28・30は赤色塗彩が認められる。口径は11.8 (Po23) ~15.9 (Po28) cmである。

皿 (Po31~34) には比較的平坦な底部を持つものと、丸味を帯びる底部を持つものがある。Po31は強い横ナデによる稜が入る。Po33は口縁部が外反して開き、端部は丸味を帯びる。この土器には赤色塗彩が認められる。Po34は椀状の皿で、外面へら磨き、内面縦ハケ目後へら磨きを施している。口径20.5cm、器高4.3cmを測る。

Po35は小片であるが、甌であろう。

これらの土師器は7~8世紀のものと考えられる。

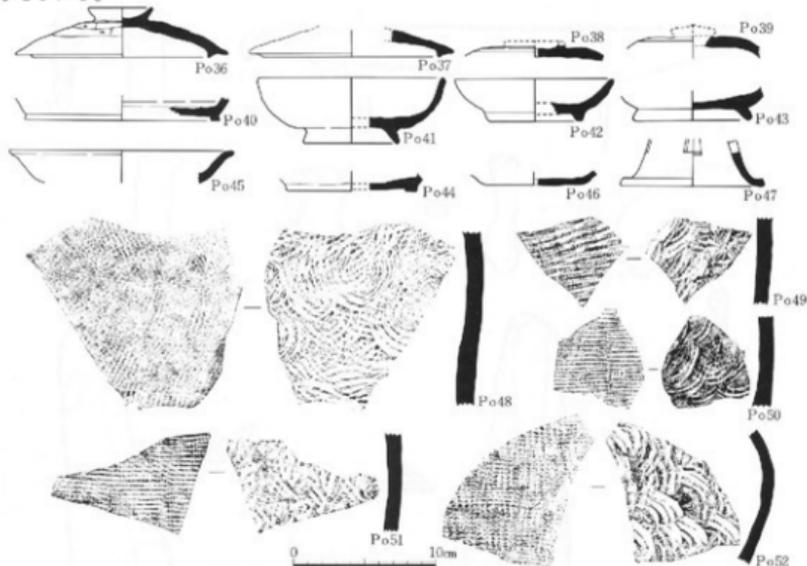


第133-③図 遺構外土師器実測図

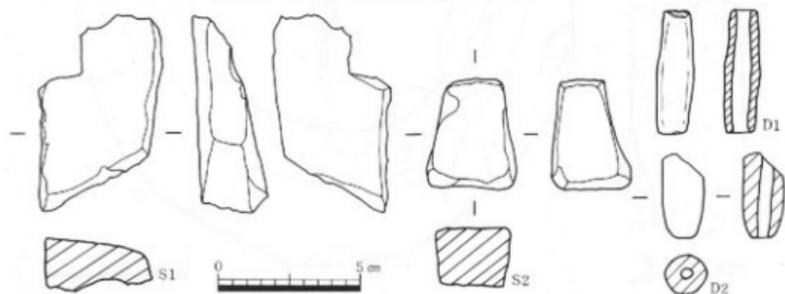
#### D 須恵器 (図版41)

須恵器も遺跡の北西側と、第27掘立柱建物跡の近辺に集中して検出されている。器種は蓋、坏、甕、高坏がある。

蓋 (Po36~39) には環状つまみがつくもの (Po36・38)、宝珠つまみがつくもの (Po39) がある。Po36・37には内面にかえりがあり、その下端は蓋の口縁端部より下方にのびている。Po40~46は坏である。高台を持つものが多いが、その断面は矩形、三角形、半円形と様々である。これらの須恵器の時期はその形態、手法等から7~8世紀と考えられる。



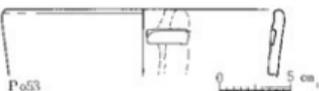
第133-④図 遺構外須恵器実測図



第133-⑤図 遺構外石器・土錘実測図

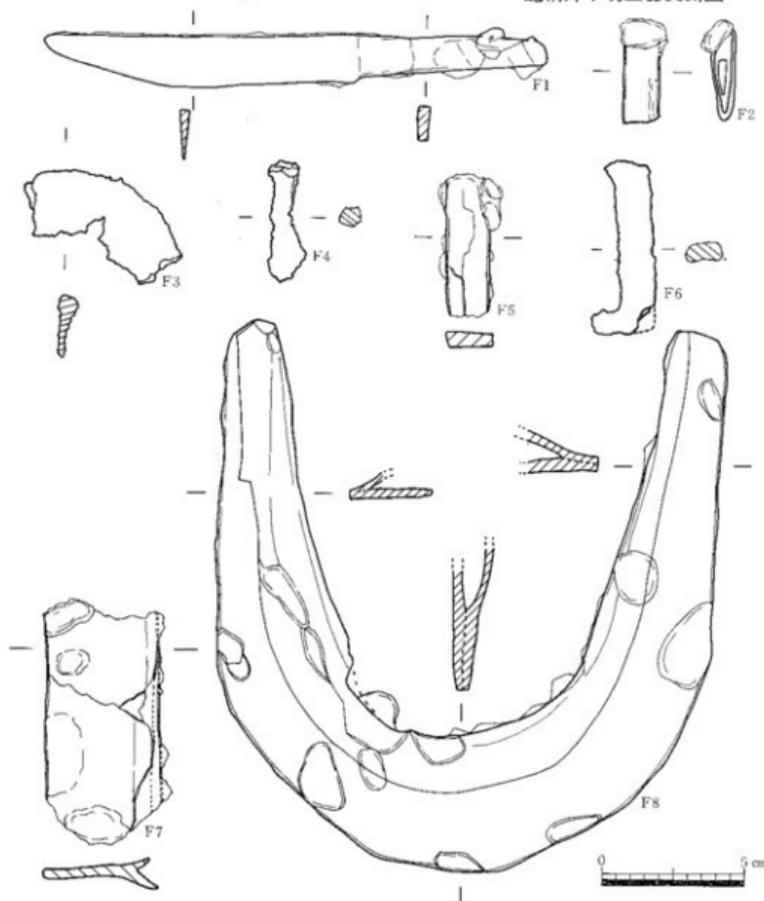
### E 石器・土製品 (図版42)

貝田原遺跡は、安山岩の非常に多い所であるが、石器として判定できるものは数少ない。また、石器として認められるものもサヌカイト、黒曜石等いずれも外来の石材から作られている。かつてここで旧石器時代の有舌尖頭器が表採されているが、それに類する石器も検出できなかった。ここでは砥石を載せたが、双方ともあまり使用されていない。



第133-⑥図

遺構外不明土器実測図



第133-⑦図 遺構外鉄器・鉄製品実測図

土製品として土錘を2点載せた。いずれも小型軽量の管状土錘である。耕土中の出土遺物であり現代のものかも知れない。Po53は不明土器である。外面は丁寧なナデが施されるが、内面は上から下へ指痕が判断できるくらい強くナデ、その後一部をへら状工具で挟っている。口径は推定で19.4cm、色調は内外面暗褐色である。

#### F 鉄器・鉄製品 (図版42)

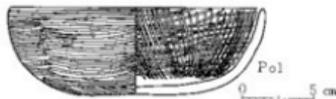
鉄器は6D、7D、10M地区に集中している。第1 堅穴住居跡(弥生時代中期)からも刀子が1点出土しているが、ここで載せたものはほとんど前述した土器器、須恵器の時期のものと思われる。

F 1は刀子で第27掘立柱建物跡の近くから出土している。遺存状態は極めて良い。刀身17.8cm、刃部長11cmを測る。F 2は側面がリング状を呈し鎌の柄をとめる金具と推定する。

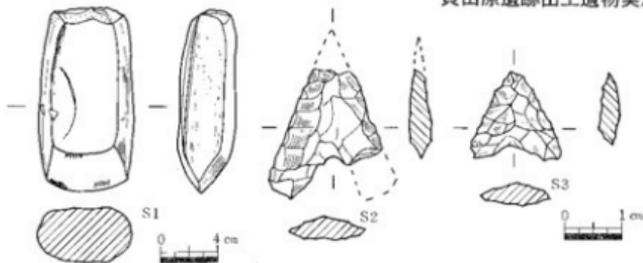
F 3は鎌の刃の一部であろう。F 4～6は釘、あるいは止め金具の一部であろう。いずれもF 8のそばで検出されている。F 7・8は鉄製鋤先である。F 7は第29掘立柱建物跡、F 8は第24掘立柱建物跡の近くより検出した。F 8は完全な形で検出されたが、板挿入部や先端部から長期間使用されたことが分かる。2枚重ねにした薄い鉄板を接合してつくられたもので、全長19.5cmを測る。

#### 岸本町教育委員会保管貝田原遺跡出土遺物 (図版42)

貝田原は昭和時代初めまでは原野であり、その後開墾によって調査前のような水田、畑、果樹園等に利用されて来たが、その間に、土器や石器が数多く出土している。ここで載せた遺物はその内岸本町へ寄贈されたもので、貝田原出土と記されているものである。Po 1は完形の坏で、内湾気味に開く口縁部と、丸味を帯びた底部を持つ。内外面とも丁寧なへら磨き、丹塗りが施されている。坏底部内面は剥離のため調整不明である。S 1は太型給刃石斧で、刃こぼれが少なく、あまり使用されていないようだ。S 2・3は石鏃である。材質は黒曜石である。



第134-①図 岸本町教育委員会保管  
貝田原遺跡出土遺物実測図



第134-②図 岸本町教育委員会保管貝田原遺跡出土遺物実測図

### 第3節 ま と め

貝田原遺跡の調査によって検出した遺構の内72遺構と出土遺物を報告してきた。その内50遺構が掘立柱建物跡であるが、当遺跡の地山が、安山岩の多く含まれるローム層のため、クロボク排除後多数の石が露出し、掘立柱建物跡のピット等、遺構の検出、判定が困難であった。その上耕作、削平によって地山に達するまで掘乱された場所もあり、50棟の掘立柱建物跡の内、柱穴が総てそろそろものは20棟しかなかった。また調査区域外に入り、全体を把握できないピット列も、安易に建物跡として報告している感もぬぐえない。土坑についても同じ事が言えるが、埋土、遺物等から、最近の耕作によるものとして、第1・4～6・13・16土坑の報告を省いた。

貝田原遺跡では今回の調査で、弥生時代中期と7～8世紀に集落が営まれていたことが分かったが、遺物の中には縄文時代前期にさかのぼる刺突文土器が含まれている。また表採ではあるが、かつて有舌尖頭器も検出され、先人の足跡が、古く旧石器時代～縄文時代草創期にまでさかのぼることを推測させる。これらを含む遺構を発見できなかったが、形態的には今回調査した、第14・15・17・18土坑は角礫を用いた集石炉（～縄文時代中期）の可能性がある。しかし石の焼成痕、炭化物とも認められず、積極的根拠に欠けている。

貝田原に人間生活が明確に認められるのは、弥生時代中期になってからである。竪穴住居跡2棟、土城墓・土坑6基がその頃の遺構である。第38・46・48掘立柱建物跡もその候補にあげられるが断定はできない。これらの遺構は近接しており、利用地が狭い限られた枠内であることを思わせる。一般に西日本では、弥生時代中期は丘陵、高原地域で集落が営まれるようになる。貝田原遺跡の近くでは、青木遺跡（米子市）がその最たるものであるが、岸本町内の藍野、越敷ヶ丘、岸本遺跡、後述する林ヶ原遺跡もその類である。貝田原遺跡は、標高100mの丘陵に位置し、平坦地の少ない、水利の不便な所である。しかも住居跡は2棟しか検出されておらず、多くの労力を要する水田経営は覚つかない。小単位・小規模の陸耕を生活基盤として想定した方がよからう。

貝田原に、本格的な集落が営まれるようになるのは7～8世紀である。集落は総て掘立柱建物から構成され、内3棟の総柱の倉庫が内包されている。これらの掘立柱建物の内、柱穴全部が検出されているものは20棟しかない。これは、柱穴自体が浅かったにしても少なすぎる棟数である。中でも4隅の柱穴のそろわないものは建物として疑わしく、それらを除く26棟を中心に、集落の有様を考えていかねばならない。表6に列挙したのがそれである。内訳は1間×1間が3棟、1間×2間が12棟、2間×2間が5棟、2間×3間が6棟である。軸方向は2間×2間以外に規則性が認められる。特に2間×3間の建物には強く作用しているようだ。（表5）

貝田原遺跡の遺構配置図をみると、建物跡の集中する所が4ヶ所ある。即ち第4・24・

27・44掘立柱建物の各々をとりまく地域である。これを便宜上順にA・B・C・D区とする。いずれの区からも7～8世紀の上器が出土しているが特にB・C区は多い。この両区からはU字型鋤先も出土している。更に、各区の特色をながめれば、建物群はA・B区とC・D区の2つに分類可能である。つまり1間×2間が多く、柱穴がまばらなA・B区とプランの様々な、柱穴のしっかり掘り込まれているC・D区の違いである。軸方向もA・B区では北東―南西方向が多いのに対し、C・D区では北西―南東方向も多くなっている。これらの相違はどこから生じるのだろうか。両区出土の遺物を比べると、C・D区のものに若干の新しさが認められる。また均一的な単位集団で集落が構成されるものは、不均等な単位集団で集落が構成されるものに先行すると言う<sup>23</sup>。これらの事から、A・B区集落はC・D区のそれに先行し、従って集落は何らかのつながりをもって、南東へ移っていったものと思われる。この進行を促す要因に、鉄製農耕具所有、あるいは貸与による農業生産力の発展、三世一身法、聖徳太子私財法等の下における首長層（大寺麿寺、坂中麿寺等の築造勢力）による荒地の開拓があったと推定される。こうして利用可能となった貝田原も9世紀には一部の建物を除き多くの住居は廃棄され、集落としての姿を消し、以後は耕地として活用され、中世の久古牧へと続くものと思われる<sup>24</sup>。

註1 「歴史・古代」『厚木町誌』(1983)

註2 第1掘立柱建物跡出土のP・01は10世紀代のものであるが、本遺跡全体の遺構内外を通じて10世紀代の土器の出土例はこれ1点のみである。また遺跡で9世紀代の土器らしいものも出土したが断片的な資料ではなかった。だから7～8世紀に集落が営まれたとすべきであり、それ以後はこの地で集落が存続したとは思われない。

註3 小笠原好成「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」『考古学研究』第25巻―4号、(1979) P98～102

註4 「中世各時代」P191～193『厚木町誌』、「久内教」役所になると以後は武士団、大山寺とのつながりで文獻に登場するようになるが、今回の発掘調査ではその頃の遺構、遺物が出土せず、現段階では、中世の貝田原については触れないでおく。

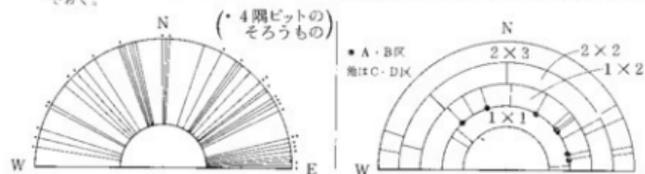


表4 掘立柱建物跡軸方向

表5 規模別・地区別掘立柱主軸方向

(・4間ピットのそろつもの)

掘立	プラン	主軸(m)	長軸(m)	短軸(m)	掘立	プラン	主軸(m)	長軸(m)	短軸(m)
4	2×3	59°-E	5.6	3.88	35	1×2	30°-W	3.65	2.60
6	2×1	53°-E	4.12	3.08	36	2×2	60°-E	3.56	2.12
14	1×2	18°-W	4.44	3.56	37	1×1	60°-W	3.28	2.20
17	1×2	77°-E	2.9	2.35	38	2×3	82°-E	3.7	3.4
19	1×2	50°-E	4.28	3.34	39	2×3	81°-W	5.0	4.4
20	1×2	27°-W	4.40	3.50	40	2×3	73°-W	4.75	3.28
21	1×2	79°-E	2.35	2.0	41	2×2	77°-W	3.2	2.3
25	1×2	43°-W	5.6	3.2	42	2×2	65°-E	4.25	3.2
27	2×3	65°-E	6.4	4.28	43	2×2	0°-E	3.8	3.05
28	1×2	37°-E	4.9	2.8	46	2×3	79°-E	5.4	3.04
31	1×2	52°-E	4.8	2.6	47	2×2	49°-W	4.00	3.0
32	1×1	67°-W	3.36	2.54	49	2×2	61°-E	3.76	3.5
34	1×1	87°-E	3.36	2.72	50	1×2	3°-E	3.55	2.0

表6 貝田原遺跡・主たる掘立柱建物跡一覧表

## 第4章 林ヶ原遺跡

### 第1節 概 要

林ヶ原遺跡は、岸本町清原字孤塚原にある。発掘調査にいたる経過は貝田原遺跡と同様である。

昭和57年度は、まずトレンチ（2 m×10 m）による遺跡確認調査を行い、遺跡の範囲を確認することとした。そして第135図中の1トレンチでは土城墓、2トレンチでは若干量の遺物、3・4トレンチでは貯蔵穴、5・7・12・13トレンチではピット並びに遺物を検出した。その他のトレンチでは遺構、遺物とも検出しなかった。

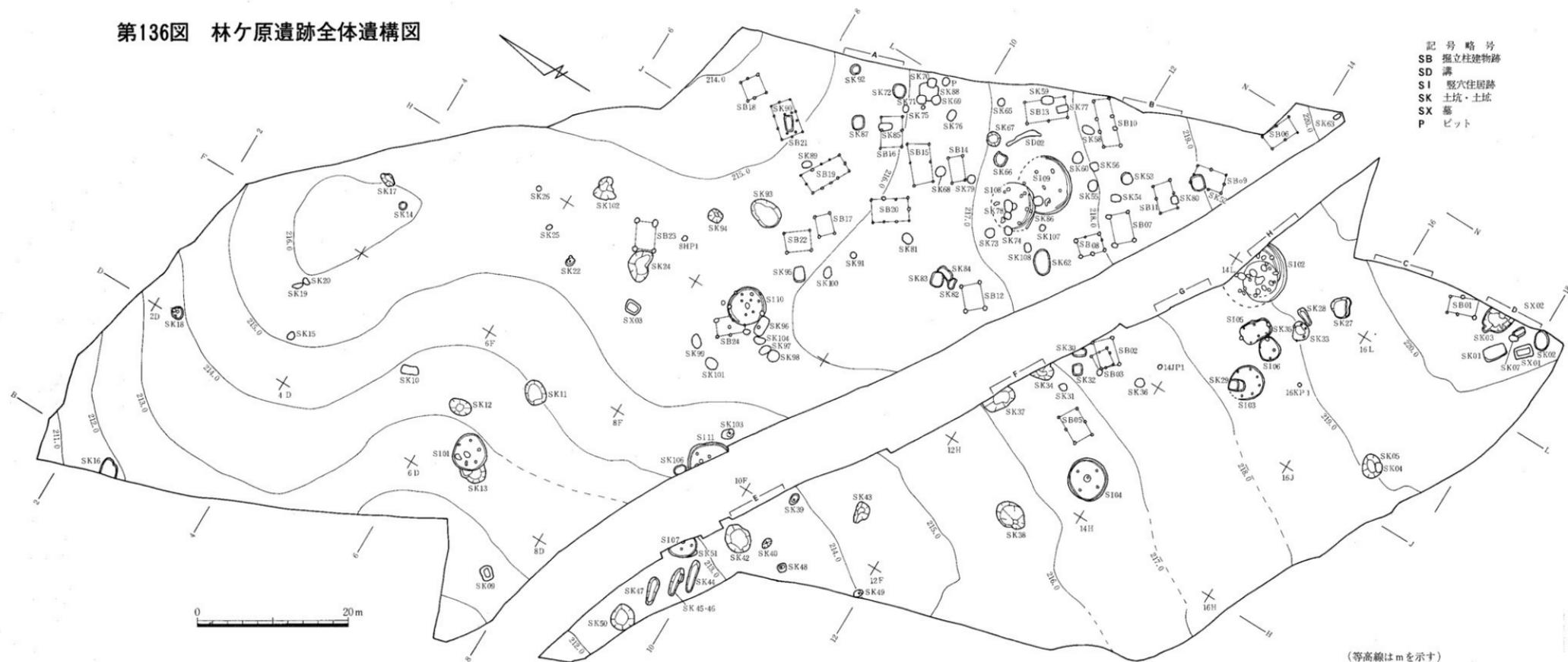
試掘調査の結果から、遺跡の範囲は工事区全域に及ぶものと考えられ、工法等を考慮して約10,500 m<sup>2</sup>の全面発掘調査をすることとした。

昭和58年度に全面発掘調査にかかり、A～D区に4区分し、A→B→D→Cの順で調査を行った。調査期間は昭和58年5月4日から8月29日までであった。整理期間は昭和58年8月30日から昭和59年3月31日まで行った。



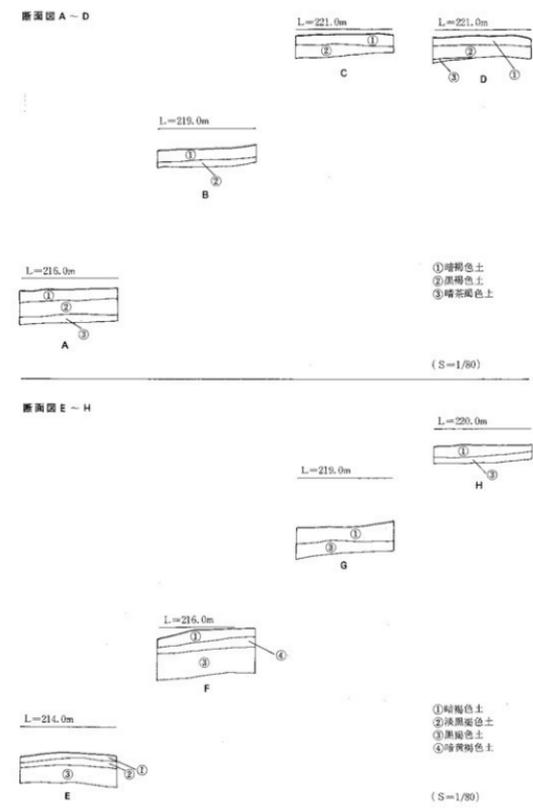
第135図 林ヶ原遺跡全体図・トレンチ配置図 (S=1/2000)

第136図 林ヶ原遺跡全体遺構図



記号略号  
 SB 独立柱建物跡  
 SD 溝  
 S 竪穴住居跡  
 SK 土坑・土埴  
 SX 墓  
 P ピット

(等高線はmを示す)

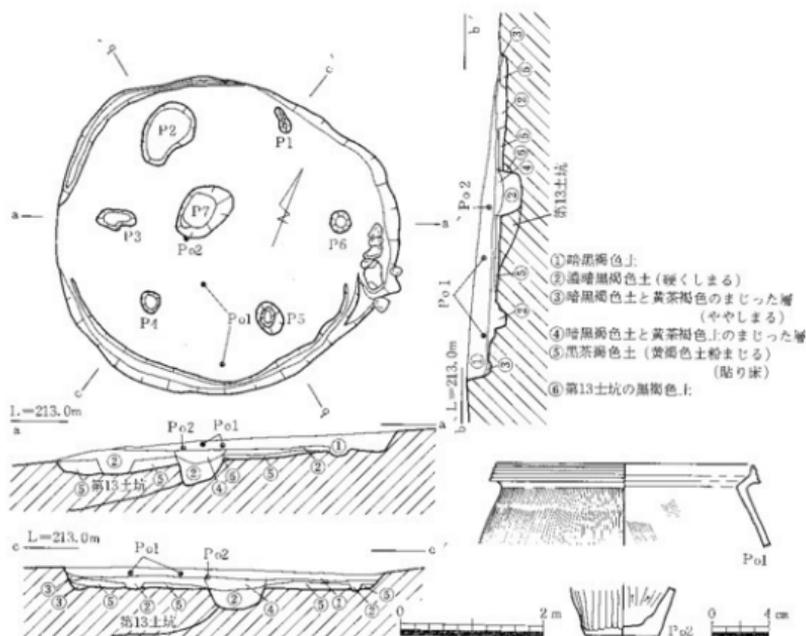


## 第2節 発掘調査の結果

### (1) 竪穴住居跡

#### 第1竪穴住居跡 (図版46)

7D地区、北側と東側からの傾斜がほぼ交わる位置にあり、この辺りから、傾斜がゆるくなりながら、さらに西側へと下っていく。平面プランは、北東側がやや突出しているものの、ほぼ円形で、長軸4.80m、短軸4.45m、床面は長軸4.40m、短軸4.00mを測り、床面積は約13.8㎡である。検出面からの壁高は西壁で約30cm、南壁で約20cmを測る。側溝は幅10~20cm、深さ3cm、住居跡南側によく残っていた。柱穴は6個で、P1 (37×14-12)、P2 (96×61-12)、P3 (53×27-19)、P4 (31×27-8)、P5 (45×33-17)、P6 (38×38-11)cm、柱穴間距離はP1より1.56、1.45、1.44、1.65、1.68、1.54mである。中央特殊ピットP7は(93×57-35)cm。埋土と考えられる黒褐色土の下層に、厚さ5cm程度のごくしまった暗黒褐色土層があり、この上部で土器が出上しているため、この層を床面と判断した。またこの層の下層にも、暗黄褐色の層が存在しているが、これは、第1竪穴住居跡が、第13土坑上に位置しているため、第13土坑の軟

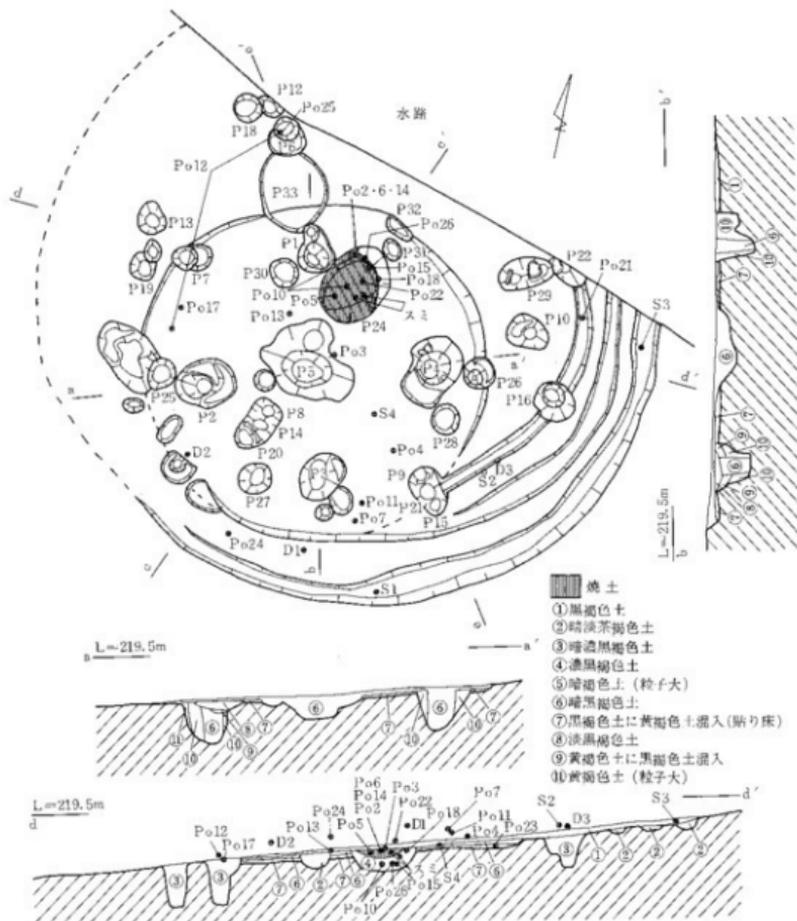


第137図 第1竪穴住居跡遺構・遺物図

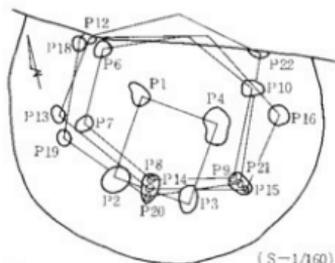
かい黒褐色土中に床面が落ち込まないように、上を貼ったものと考えられるが、硬くしまっており、また第13土坑上ではかなり下側に厚くなっている。第1竪穴住居跡は2重の貼り床を持つことになる。焼土面は確認できなかった。

遺物は弥生時代の甕の口縁部片(Po1)と、底部(Po2)が出土している。Po1は口縁部に3条の凹線をもつ。頸部以下内外面ハケ目。内面一部ナデ。時期は土器より、弥生時代中期後葉のものと考えられる。

第2 竪穴住居跡 (図版47・48・49)

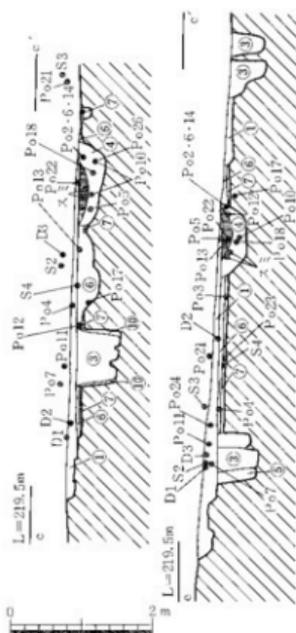


第138図 第2 竪穴住居跡遺構図



第139図 第2 堅穴住居跡

第1～4段階柱穴配置図



補助柱と考えられよう。また、この住居跡に限り、黄褐色土と黒褐色土の硬くしまった貼り床が確認されている。

第2～4段階に中央特殊ビット(P24)を共有する形で、外側へ広がっていく。P24(113×88-30)cmでは、焼土面、炭、土器が検出されている。推定径はP24を中心とした各溝の外縁までの距離の2倍である。

15K・L地区に位置している。一部14K・L地区にかかると考えられるが、水路によって破壊されているため、調査できなかった。東側から緩く続く斜面に造られた大型の堅穴住居跡である。北側には第6～11掘立柱建物跡が並び、南西側には第3・第5・第6堅穴住居跡がある。

楕円形の黒褐色の落ち込みが検出され、当初はこれが平面プランと考えられたが、

平面プラン外から柱穴と思われるビットが検出されたこと、中央特殊ビットとの距離等から、ほぼ円形の平面プランを持った堅穴住居跡であったものが、西側床面を耕作等で削られたため、楕円形に見えたものと判明した。さらに東側では三重に掘られた溝を確認し、中央ではやや南よりに、小型の円形の堅穴住居跡を検出した。柱穴の検出状況、規模、断面等からみて、小型の堅穴住居から、外側の側溝に向かって四段階に建て替え、拡張が行われたものと考えられる。以下各段階における柱穴の配置及び規模等を見ていく。

まず第1段階は、中央部の小型の円形堅穴住居跡である。径約4.8mを測りP1～4の4個の柱穴を持つもので、中央に特殊ビットがある。柱穴の規模はP1(66×47-54)、P2(82×65-60)、P3(72×55-48)、P4(100×65-55)cmで、柱穴間距離はP1より順に2.35m、2.24m、2.20m、2.25mを測る。中央の特殊ビットP5(140×110-25)cmで、焼土面は検出されていない。壁高は最大13cmを測るが、側溝は検出されていない。P25(45×38-57)、P26(43×42-50)cmは、

第2段階は、一番内側の溝を側溝とするもので、推定径6.40m、P6～11までの6個の柱穴を持つものと考えられる。但しP11は調査範囲内であったが、確認はできなかった。P6(50×50-50)、P7(52×34-58)、P8(79×45-54)、P9(73×40-38)、P10(60×44-51)cm、柱穴間距離はP6より順に2.10、2.50、2.38、2.63mを測る。側溝の幅は20cm内外、深さ8cm程度である。

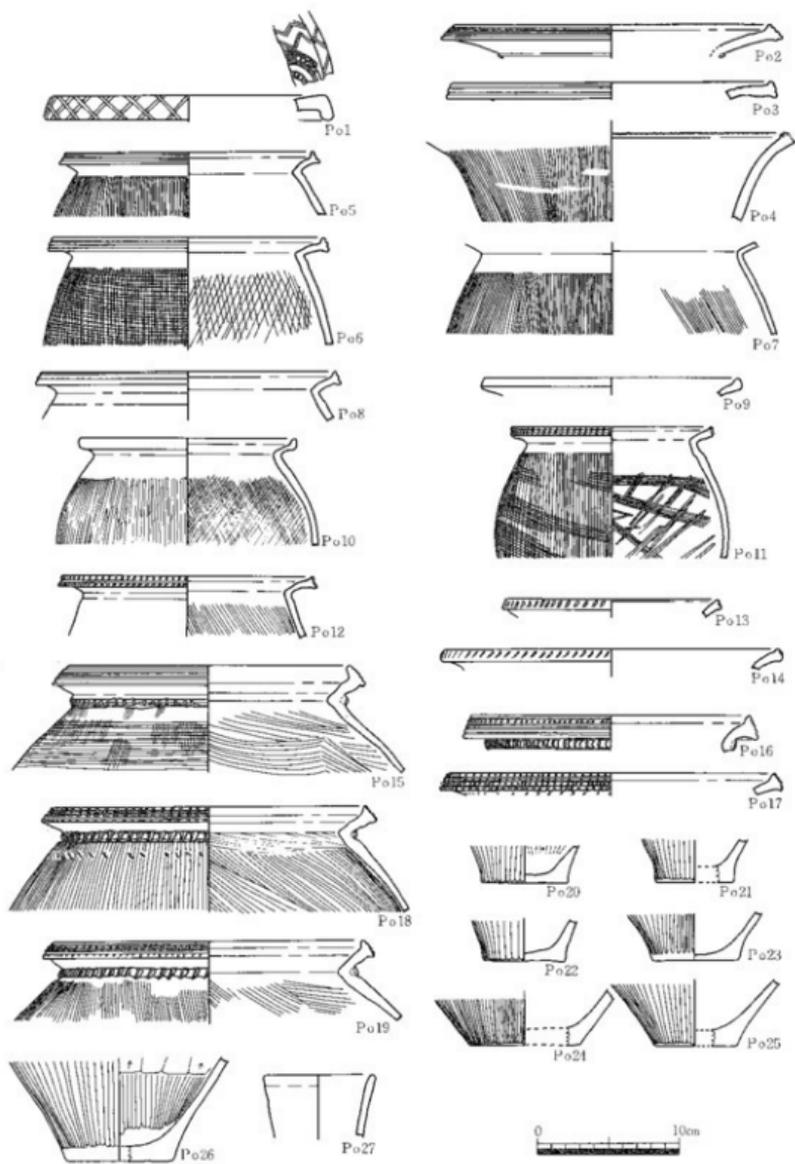
第3段階は、内から2番目の溝を側溝とするもので、推定径は約7.8m、P12～17までの6つの柱穴を持つものと考えられる。P17は確認できなかった。P12(38×?-13)、P13(43×40-74)、P14(79×45-55)、P15(73×40-38)、P16(60×52-57)cmで柱穴間距離はP12より順に2.35、3.20、2.75、2.25mを測る。側溝は幅20～35cm、深さ7cm前後である。

第4段階は、最も外側の溝を側溝とするもので径約9.10m、P18～23の6つの柱穴を持つものと考えられる。P23は確認できなかった。P18(38×36-52)、P19(47×32-58)、P20(79×45-53)、P21(73×40-55)、P22(55×?-46)cmで、柱穴間距離はP18より2.64、2.83、2.70、3.80mを測る。側溝の幅は20～35cm、深さ10cmである。東側では、高さ10cmの壁が残っている。

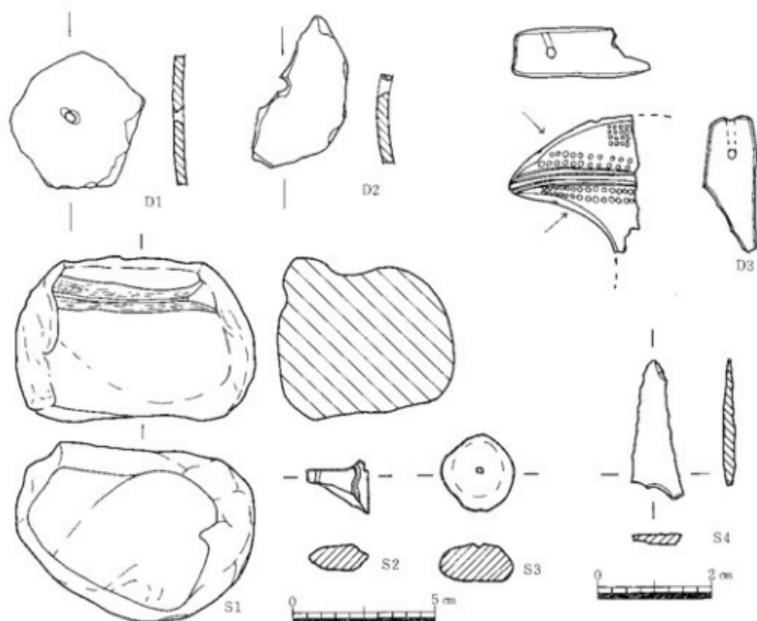
P8・14・20及びP9・15・21は切り合っているが、P21が第4段階の柱穴であること以外は、新旧関係は不明である。一応内側から外へと広がっていくものと考えられる。他にもP27(45×45-58)、P28(42×38-43)、P29(76×41-44)、P30(39×38-14)、P31(27×24-20)、P32(44×16-16)、P33(116×92-7)cm等があるが、どの段階の住居と関連があるかは不明である。

弥生土器は壺・甕が出土している。壺では大きく下垂する口唇部に斜格子文を、口縁部の内側には貼付凸帯による文様を施したものPo1、口唇部に凹線をもつPo2・3、頸部内面に刻み目を施して貼付凸帯をもつPo4がある。Po27はゆるく外反する細長い口縁部をもつ壺であろう。甕はくりあげ口縁のものと、「く」の字状口縁のものがある。くりあげ口縁の甕は口唇部に凹線をもつ。調整は内外面ハケ目。Po15～Po19の甕は、頸部外面に圧痕文の貼付凸帯がつく。またPo16～Po19では凹線上に刻み目をもつ。Po9・13・14は「く」の字状口縁の甕で、Po13・14には口縁部に刻み目を施す。Po11の甕は口縁部に凹線が入り、刻み目をもつ。胴部外面はハケ目、内面にはへら磨きがみられる。底部で図化できたものは7点であった。外面は縦方向のへら磨きのものがほとんどで、内面はへら削りのもの、へら磨きの施されているものがある。(Po26)

Po2・5・6・10・14・15・18・22・26はP24の焼土下層から、Po12はP2から出土している。またPo17は、小型4穴の第1段階の竪穴住居跡の貼り床下層より出土している。この他、Po15は第60土坑出土の土器と接合した。土器の他にも、弥生土器転用の



第140-①图 第2竖穴住居跡遺物図



第140-②図 第2 堅穴住居跡遺物図

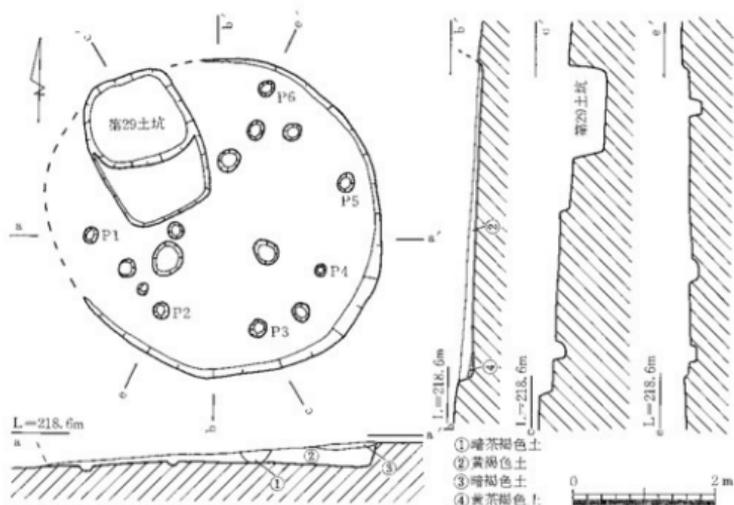
紡錘車 (D1・2) や分銅形土製品 (D3) が出土している。D1・2は<sup>FR1</sup>両側穿孔で、D2は一部欠損している。D3は刺突痕と沈線で文様が描かれ、上から下へ貫通する穿孔がみられる。全体に丹塗りがしてある。S1には擦り面と、溝のような痕がみられる。

出土している土器などより、この住居跡は弥生時代中期に使用されていたものと考えられる。

註1 本文P217参照。

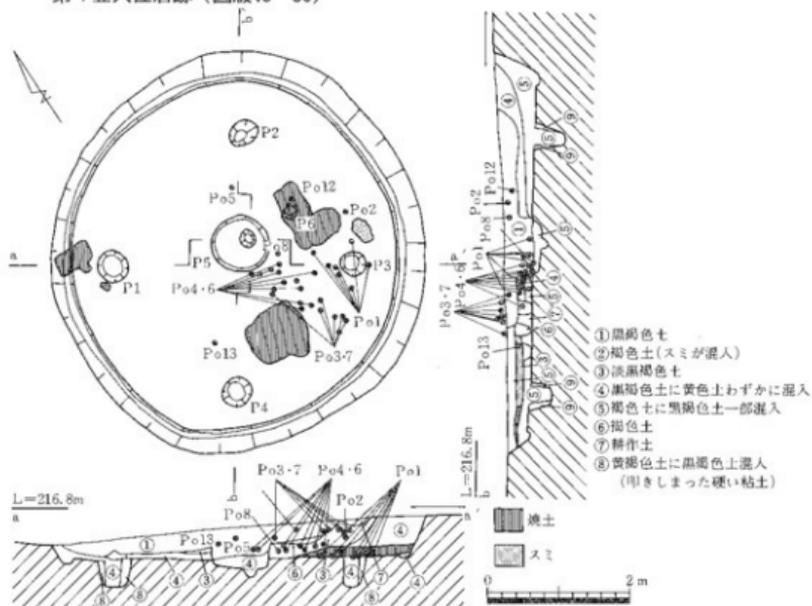
### 第3 堅穴住居跡 (図版49)

15 J、16 J 地区にまたがり、第5・6 堅穴住居跡の西にあたる。地形は東からゆるやかに下がり、住居跡の西側は流失のため検出できなかった。平面形は径4.56mの円形を呈する。壁高は東側で最大値23cm、西側で最小値0cmを測る。床面には綿密な調査にも拘わらず側溝がなく、ピットを16個検出しただけであった。いずれも浅く小さなものである。その内主柱穴と思われるのはP1～6で、P7・8は第29土坑によって壊されたものと思われる。ピットのプランはP1 (21×20-10)、P2 (25×23-6)、P3 (15×14-11)、P4 (24×23-17)、P5 (24×23-20)、P6 (22×22-16) cmを測る。遺物はない。古墳時代のものかも知れない。

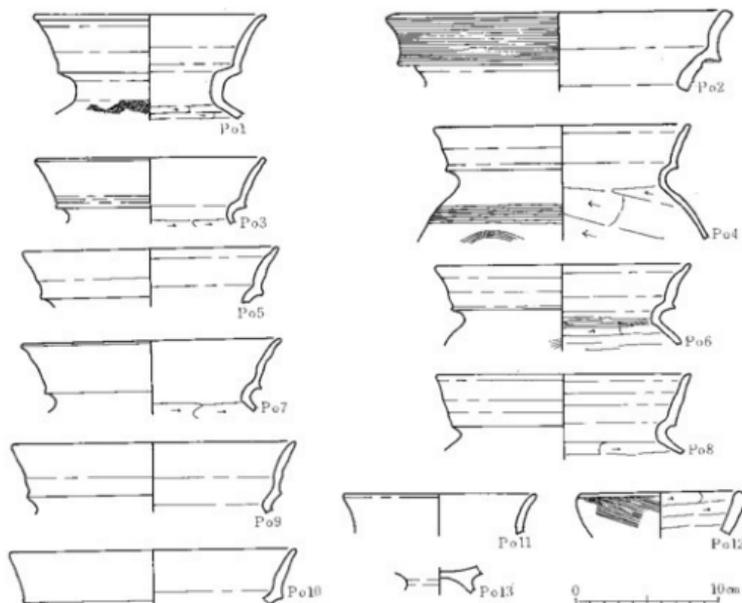


第141图 第3竖穴住居跡遺構図

第4竖穴住居跡 (図版49・50)



第142图 第4竖穴住居跡遺構図



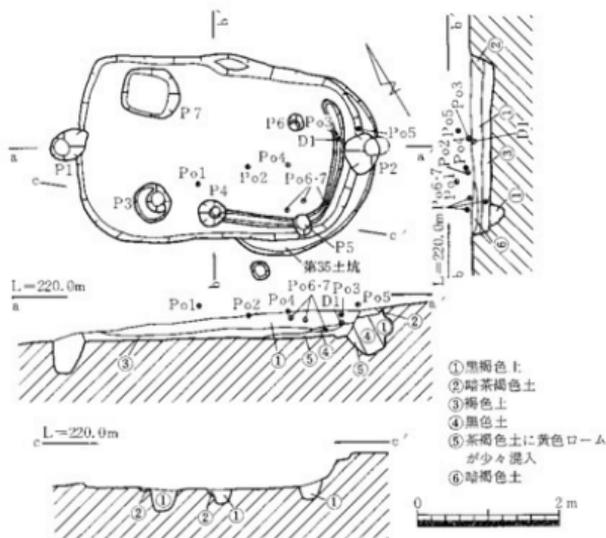
第143図 第4 竪穴住居跡遺物図

14H地区に位置し、第5掘立柱建物跡の南にある。平面プランは円形を呈し、床面の周囲には幅約20cm、深さ約8cmの側溝がめぐる。住居跡の長軸5.72m、短軸5.24m、深さ56cm、床面積約17.3㎡を測る。柱穴は4本で、P1(45×44-44)、P2(36×40-45)、P3(36×36-44)、P4(44×44-36)cmを測り、中央に特殊ビット(84×80-24)をもつ、床面には火をうけた跡があり、P6(20×20-40)cmの周囲が特に硬くなっていた。P6は袋状を呈するビットである。この他、壁際などで焼土面を検出した。

遺物は住居跡の東側で集中して出土している。出土した土器はほとんど古式土師器であるが、埋土中に数点の弥生土器片も含まれていた。Po1・2は複合口縁の甕で、Po1は肩部外面に波状文が施され、内面は頸部のすぐ下より削りが始まっている。口縁部にはススの付着が認められる。Po2は口縁部に凹線が残り、外面全体に丹塗りが施される。Po3～Po10は複合口縁の甕で、Po4は小片が散らばった状態で検出した。肩部外面には櫛形平行沈線と波状文がみられる。甕には炭化物やススの付着が認められた。この他、Po12は鉢、Po13は低脚杯の脚と考えられる。これらの土器より、古墳時代前期初頭の住居跡と考えられよう。

#### 第5 竪穴住居跡、第35土坑 (図版50)

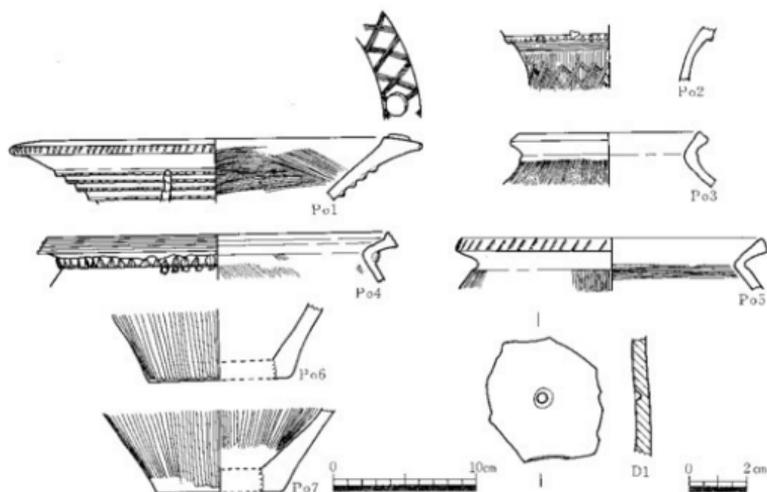
15K地区の西側に位置し、第2 竪穴住居跡の南西、第6 竪穴住居跡の北にあたる。第5



第144図 第5 堅穴住居跡・第35土坑遺構図

堅穴住居跡は断面を観察する限り、第35土坑を切っているように見えるが、場所的に両者は関連する遺構と思われる。

第5 堅穴住居跡は主軸をN-59°-Wにとる隅丸長方形プランの堅穴住居跡である。長辺3.96m、短辺2.58m、壁高東側で27cm、西側で7cmを測る。ピットは住居跡の肩で2個、床面で5個検出した。その内主柱穴と思われるのはP1(58×40-40)、P2(54×52-70)cmで、双方とも柱穴は住居跡の内側を向いている。層的にも柱痕が斜めになっている様子が観察できた。これに対し床面のピットは南西側に集中しており、北東には対応するものが見い出せなかった。以上のことからP1・2を主柱とし、P3～5で補助した建物と推定される。このように住居跡肩部にしっかりした主柱穴を持つものに第10 堅穴住居跡がある。第35土坑と第5 堅穴住居跡の関係についても、第10 堅穴住居跡と、そのテラス部の関係と同様のことが言えよう。遺物には壺(Po1・2)、甕(Po3～5)等がある。Po1には口縁部端面に櫛状工具による格子文が施され、その後径15mmの円形浮文が貼付されている。外面は頸部にかけて4条の刻み目凸帯も貼付されているが、さらに一部分それに粘土紐を上下につけている。Po2は壺の頸部で外面に斜格子文、6条の沈線文がめぐる。下位には刻みを持つ貼付凸帯がめぐる。Po4は口縁部に3条の凹線文、頸部外面に刻み目を持つ貼付凸帯が施されている。内面胴部にハケ目が認められる。紡錘車(D1)の未製品も床面で出土している。時期はこれらの遺物から弥生時代中期後葉であろう。

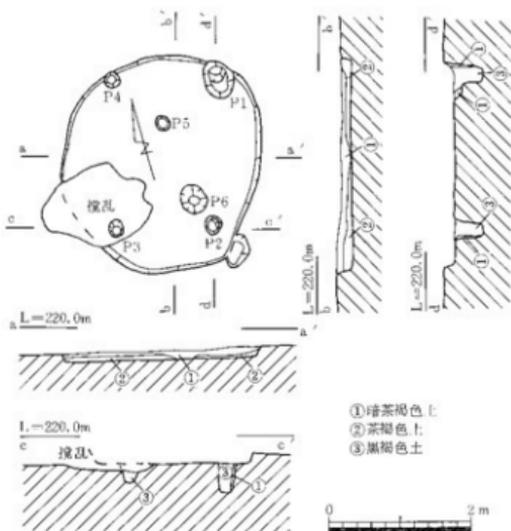


第145図 第5 竪穴住居跡遺物図

第6 竪穴住居跡 (図版51)

15・16K地区に位置し、第5 竪穴住居跡の南、第3 竪穴住居跡の東にあたる。平面形は

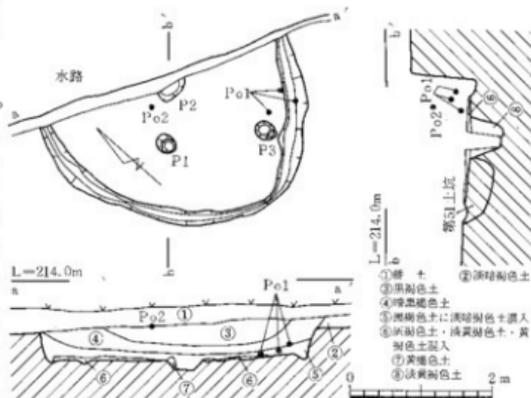
不整形で、一部耕作穴によって壊されている。規模は長軸3.02m、短軸2.70mを測る。壁高は北東で最大値17cm、西で最小値9cmを測る。床面積は約6.8㎡。床面よりピットを6個検出した。その内構造柱跡と思われるものはP1～4である。各々のプランはP1 (56×40-68)、P2 (24×23-43)、P3 (22×20-27)、P4 (23×20-21) cmである。側溝はなく、遺物も弥生土器片ばかりであった。



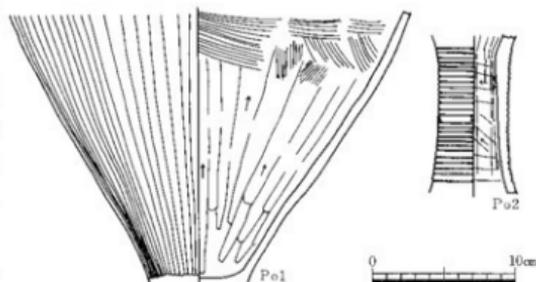
第146図 第6 竪穴住居跡遺構図

### 第7 竪穴住居跡 (図版51)

10D・E地区にかけて位置しているが、北側は水路があったため、調査できなかった。東側には第11竪穴住居跡、北側に第1竪穴住居跡、南西側には第44～47土坑がある。壁高は東隅で約50cmを測り、厚さ5cm程度の貼り床が確認できた。側溝は幅10～20cm、深さ10cm前後で、調査した床面では全体をめぐっていた。柱穴と考えられるP1、中央特殊ビットP2と、浅いP3の3つが検出されている。P1は柱痕を持つが、その周囲は硬くしまった淡黄茶褐色土が入れられており、柱の根元を固めていたものと考えられる。規模は(64×53-50)cmである。中央ビットは半分しか検出していないが、径40cm、深さ14cm、P3は(30×24-22)cmで、補助柱用の柱穴であろうか。

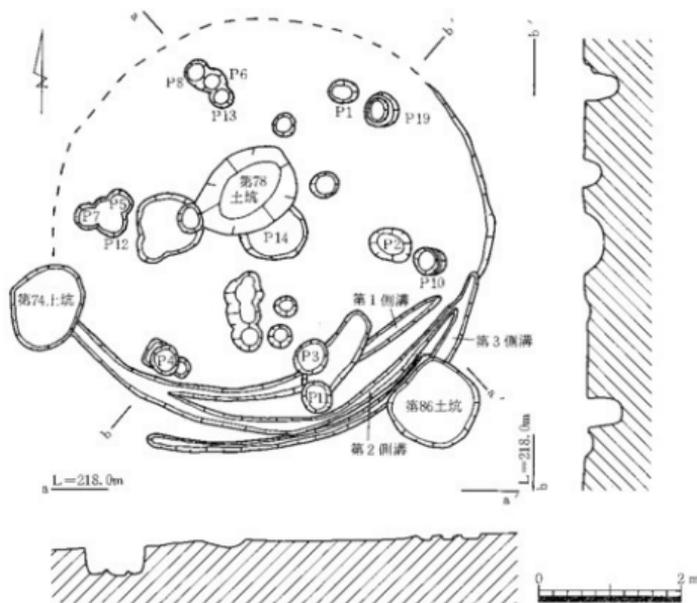


第147図 第7 竪穴住居跡遺構図



第148図 第7 竪穴住居跡遺構図

遺物は住居跡東側の床面近くで、壺の底部(Po1)と、第③層の上部で器台(Po1)が出土している。Po2は筒部に凹線がめぐり、中央には三角形で穿孔途中の透し孔が4方にみられる。全体に丹塗りがされる。弥生時代中期の土器と考えられるが、出土位置から、この住居跡に伴うものとは考え難く、流入したものとみられる。Po1の外表面はヘラ磨きで仕上げられ、内面上方にはハケ目が認められ、以下はヘラ削りで仕上げられている。底部は細く、胴部はかなり太くなっている。この上器、周辺遺構との関係から判断すると、第7 竪穴住居跡は弥生時代中期のものと考えられる。



第149図 第8堅穴住居跡・第78土坑遺構図

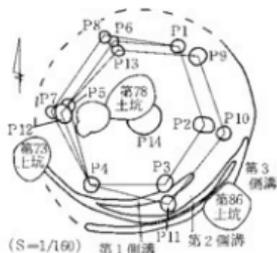
第8堅穴住居跡(図版52・53)

11・12J地区と11・12K地区にまたがって位置し、第9堅穴住居跡、第74・78・86土坑と切り合う。新旧関係は第9堅穴住居跡より新しいが、第74・78土坑よりも古い。第86土坑とは不明である。

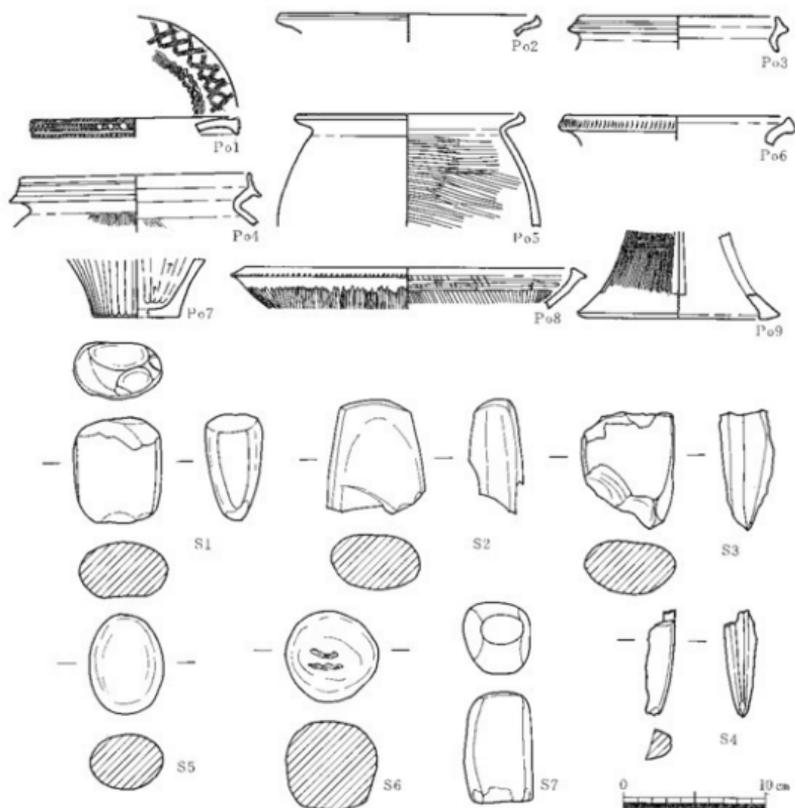
第8堅穴住居跡は西側大半で掘り方を検出することができなかったが、平面形はほぼ円形になると考えられる。また柱穴および側溝の検出状況からみて2回の建て替え並びに拡張が行われたと考えられ、その新旧関係は側溝の切り合いで判断した。また側溝は古い順から、第1・第2・第3とする。

まず最初、P1(43×31-51)、P2(55×45-52)、P3(52×41-27)、P4(40×40-56)、P5(35×?-41)、P6(36×?-38)cmを支柱穴とし、幅20cm前後、深さ5cm余の第1側溝をもつ堅穴住居がつけられた。柱穴間距離は、2~2.3mである。

次にP1・P2・P3・P4・P7(35×?-36)、P8(35×?-36)cmを支柱穴とし、幅10~20cm、深さ5cm余の第2側溝をもつ堅穴住居に建て替え、拡張している。柱穴



第150図第8堅穴住居跡概念図

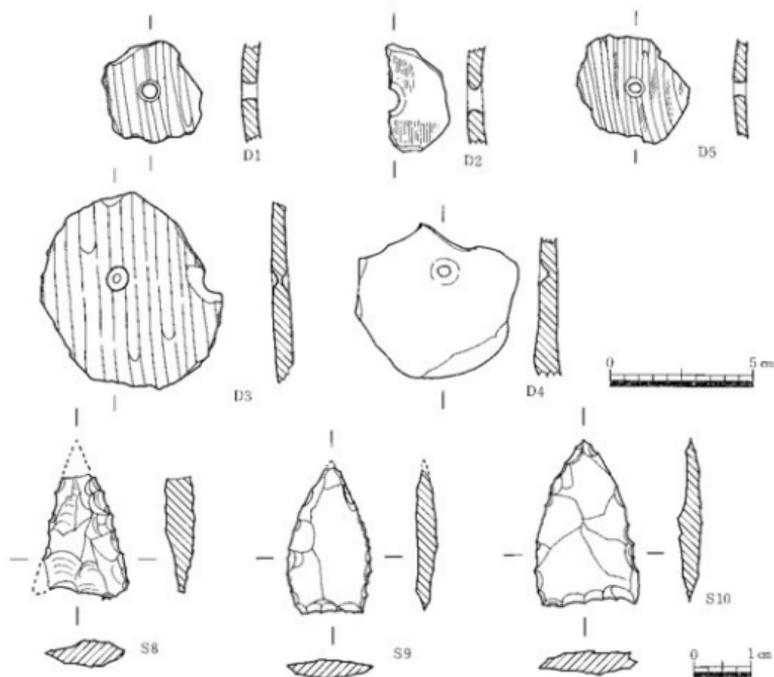


第151-①図 第8竪穴住居跡・第7土坑遺物図

間距離は、2～2.5mである。北西方向にある2本の柱穴を移動させていることは、冬の季節風の影響であろう。小規模な改築と考えられる。

最後に、P 9 (46×46-46)、P 10 (43×36-51)、P 11 (45×36-51)、P 4、P 12 (57×?-38)、P 13 (34×?-29) cmを主柱穴とし、幅15cm前後、深さ5cm余の第3側溝をもつ竪穴住居がつくられた。柱穴間距離は、2.2～2.5mである。P 14 (92×?-31) cmは中央ビットであるが、プランから考えて構造柱の一部とは考えにくく、屋内炉の可能性が高い。最後は、かなり大規模な建て替え並びに拡張である。これは、住居がかなり老朽化してきたためと考えられる。

遺物は埋土中、床面直上、柱穴内より多量に検出したが図化できたものは甕(Po 3～



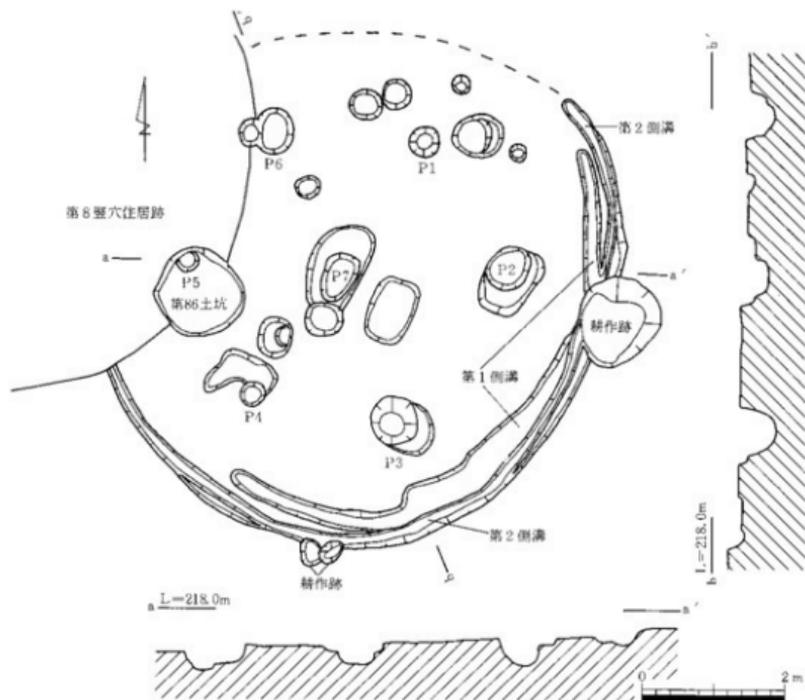
第151-②図 第8 堅穴住居跡・第78土坑遺物図

7)、高坏 (Po 8)、紡錘車 (D1~4)、磨製石斧 (S1~4)、石礫 (S8~10) である。S1は磨石として再利用されている。時期は弥生時代中期と考えられる。

第8 堅穴住居跡が廃棄された後、第74・78土坑がつくられたと考えられる。第74土坑は、第8 堅穴住居跡の廃棄に際して、祭祀的な使用をされた土坑と考えられる。第78土坑はP14との切り合い関係から新しいものと考えられる。規模は(152×110-40) cm。性格は貯蔵穴であり、遺構内からは弥生土器 (Po 1・2・9)、紡錘車 (D5) を検出した。

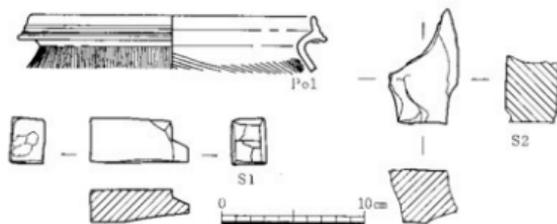
#### 第9 堅穴住居跡 (図版53・54)

12K地区にあり、第8 堅穴住居跡と切り合う。新旧関係は第9 堅穴住居跡の方が古い。平面形は明確ではないが楕円形であろう。長軸は7.70m、短軸は推定7.20mを測る。壁高は東側で最大値15cmを測る。側溝は幅20cm、深さ5cmを測り内側をめぐる。さらに外側に幅15cm、深さ6cmの側溝が走る。外側の側溝の方が新しいので、この側溝は第9 堅穴住居



第152図 第9 竪穴住居跡遺構図

跡の拡張を意味すると思われる。この結果、床面積は約36.3㎡から約46.5㎡に拡大している。柱穴は P 1 (45×40-63)、P 2 (60×54-42)、P 3 (70×70-61)、P 4 (45×



第153図 第9 竪穴住居跡遺物図

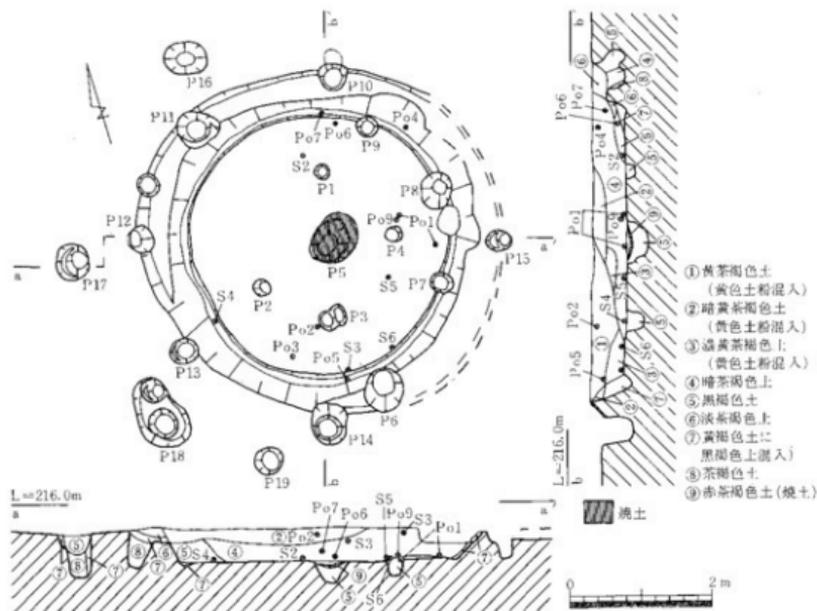
30-47)、P 5 (43×31-8)、P 6 (65×45-60) cm の6個で、柱穴間距離は P 1 より 2.2、2.75、2.0、2.1、2.3、2.15cm を測る。P 7 (130×75-34) cm は2段に掘り込んであり、プランから考えても柱穴とは考えにくい。P 2～4 は抜きとり痕があった。

遺物は埋上、床面直上より多くの土器片を検出したが図化できたのは壺 (P01) のみである。他に砥石 (S1・2) を検出した。時期は弥生時代中期と考えられる。

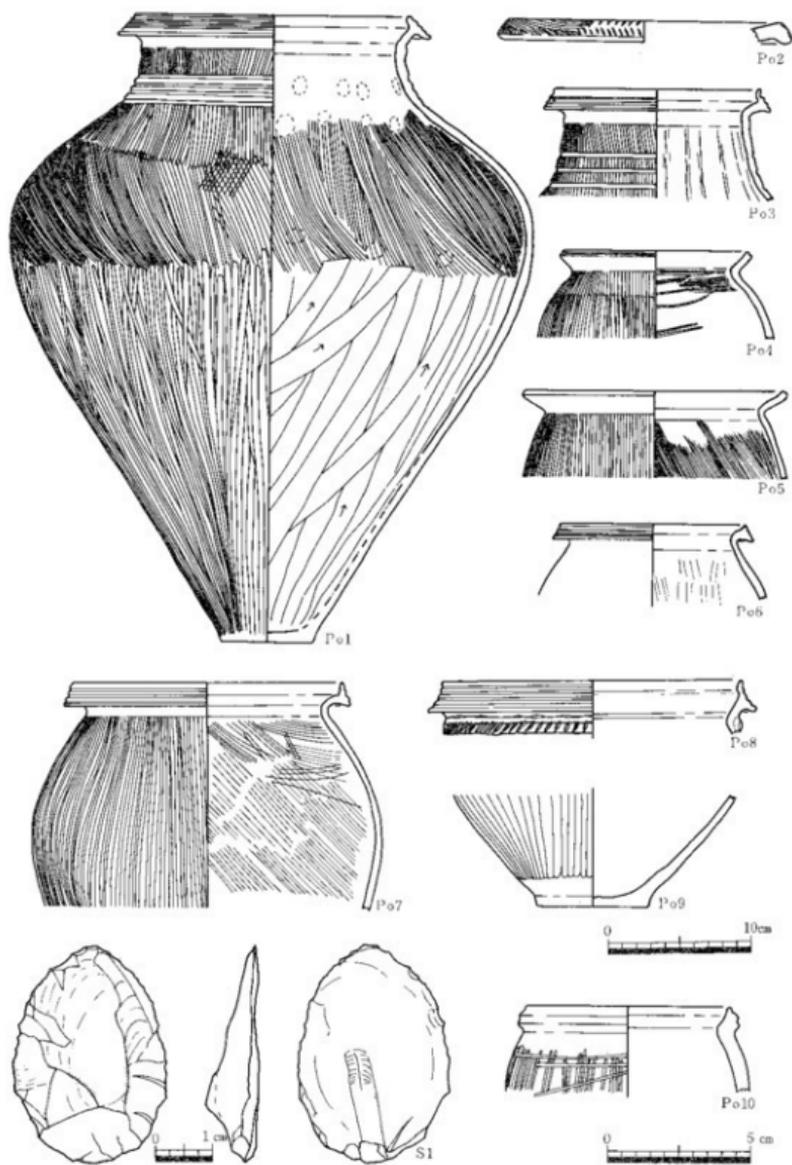
### 第10竪穴住居跡 (図版54・55)

9 G・H地区に位置し、西側は第24掘立柱建物跡を掘り込んでつくられている。南側に貯蔵穴第96・97・98・104土坑がある。

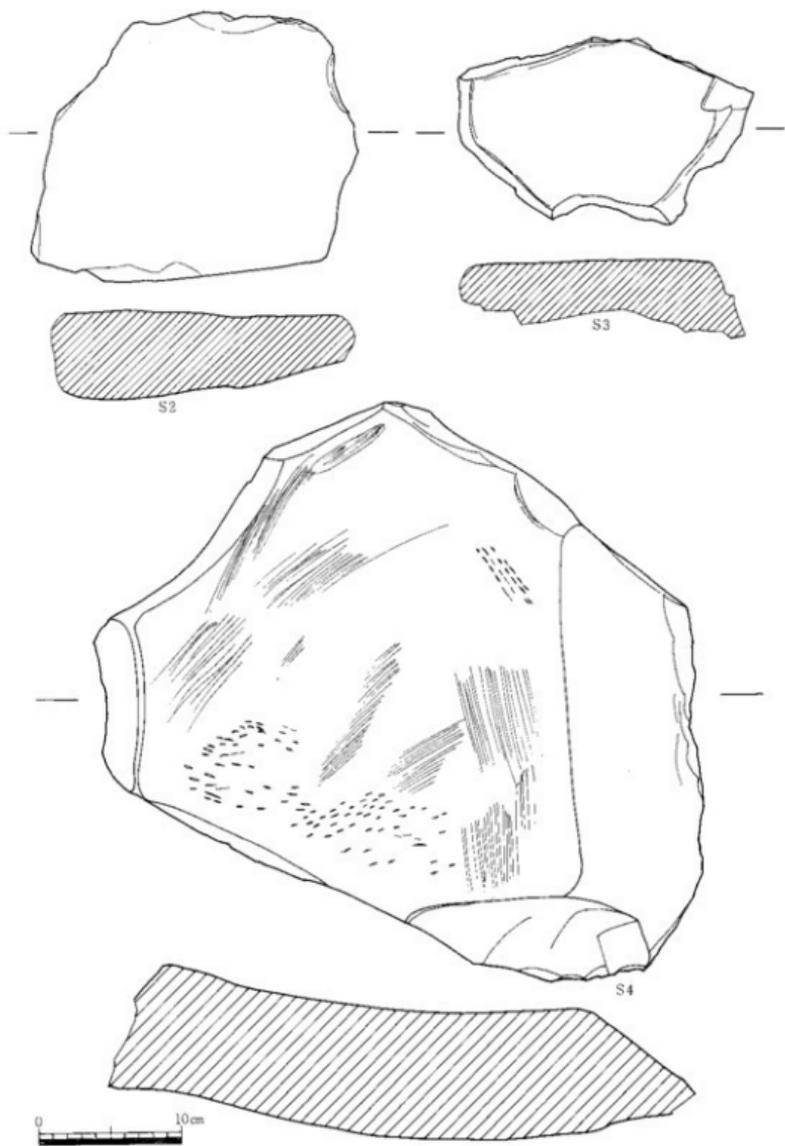
住居跡は平面形が円形で、東側が耕作溝によって壊されている。規模は南北長4.82m、東西長5.10(推定)mを測る。壁は南西側を除いて2段になっている。つまり何cm(検出面からは10cm)か掘り込み、俵かの屋内高床部を設け、さらに約35cmロームを掘り込んで床面とした住居跡である。床面には幅8~16cm、深さ3~5cmの側溝が壁際をめぐる。東側には側溝にかかる4個のピット(P6~9)があるが、いずれも深くしっかりしたものである。床面には他に5個のピットがある。P1(21×20-20)、P2(24×22-28)、P3(40×28-20)、P4(24×22-15)cmは場所的に構造柱跡と思われる。P5(68×46-34)cmは周辺、及び上層より焼土が検出されたことから、屋内炉と考えられる。床面積は10.2㎡になる。第10竪穴住居跡は肩部にもピットがある。P10~15がそれである。これらはP12-P15を中心線として対称形に配されている。各ピットの規模はP10(56×52-47)、P11(42×34-58)、P12(38×34-55)、P13(58×53-61)、P14(38×38-55)、P15(38×29-46)cmで、P12・15は柱穴が住居跡中央を向いて傾いている。



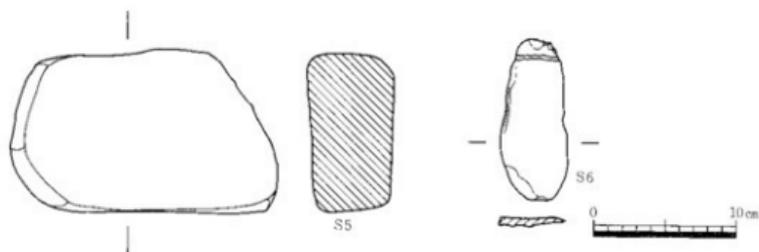
第154図 第10竪穴住居跡遺構図



第155-①图 第10竖穴住居跡遺物図



第155-②图 第10竖穴住居跡遺物图



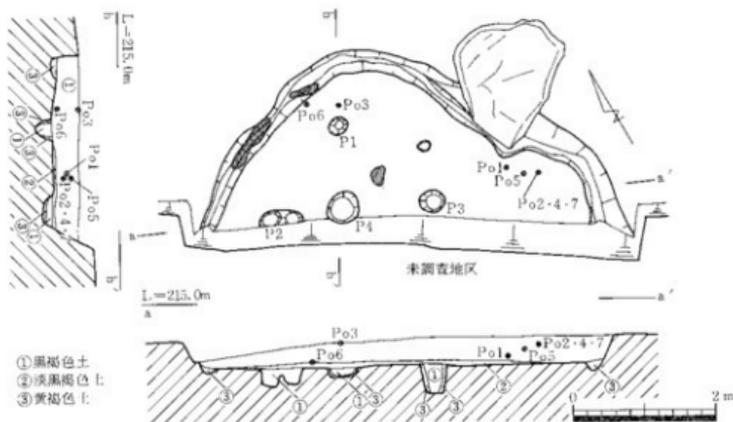
第155-③図 第10竪穴住居跡遺物図

他のピットも断面観察により、柱が内側に傾いていたことが分かる。ところでP 16～19も住居跡の肩に沿うように配置されている。大きさは44～60cmで、深さは45～71cmを測る。P 17・18には柱痕が認められる。これら4個のピットは住居跡の北西側に位置する。冬の季節風を遮る柵を支えた木のあとであろう。遺物は弥生土器と石器である。Po 1は壺で床面に密着し、まとまって検出された。外面口縁部に3条の凹線、頸部に4条の凹線がめぐり、調整は外面頸部、胴部上半縦ハケ目、以下縦ヘラ磨き、内面口縁部・頸部ナデ、頸部に浅い指頭圧痕が残る。胴部上半縦ハケ目、以下上方向のヘラ削りである。Po 10は小型の甕で、口縁部横ナデ、胴部外面ヘラ磨き、内面ナデ調整である。外面に赤色塗彩が施されている。石器としてS 1～6を載せたが、その内S 2～5は台石と思われる。使用痕の顕著なのはS 4で、表面に磨痕、3～5mm長の潰痕が認められる。これらの台石は床面に密着して検出された。S 6も床面に密着して検出された。これは全面研磨されているが、片側中央近くに刃こぼれが認められ、石廬丁のように用いられた可能性がある。S 1は茶褐色のジャスパーを原材としてつくられたスクレイパーで、縄文時代のものである。竪穴住居跡埋没時流入したものと思われる。

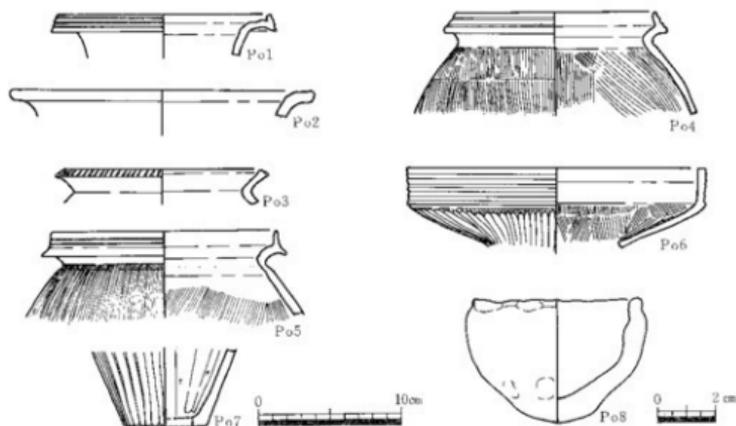
第10竪穴住居跡の時期はPo 1等から弥生時代中期後葉と推定される。

#### 第11竪穴住居跡 (図版55)

10E・F地区にかけて位置しているが、南側半分は道路があったため、調査できなかった。東側に第10竪穴住居跡、西側に第7竪穴住居跡、北側には第1竪穴住居跡がある。検出できた面は半円形状を呈し、壁高35cmで、幅30cm、深さ3～5cmの側溝がめぐっている。東側の壁にはかなり大きな石が露出しているが、そのまま壁の一部として利用していたと考えられる。柱穴と考えられるものを3個検出しており、中央特殊ピットP 5を中心として、約90°毎に配されているため、4本柱の竪穴住居跡と考えられる。各柱穴の規模はP 1 (26×23-27)、P 2 (24×20-16)、P 4 (32×24-42) cmである。P 2には2つの柱穴があるが、中央特殊ピットからの距離から考えて東側のピットを柱穴と判断した。柱穴間距離はP 1～2、1.6m、P 1～4、1.75mを測る。中央特殊ピットは、(45×43-14) cm



第156図 第11竪穴住居跡遺構図



第157図 第11竪穴住居跡遺物図

を測る。これらのピットは、住居跡の西側にかたよっている。側溝と壁をみても、石の露出している部分で、一段くびれた形となっており、石より西側を住居として、東側を貯蔵等の付属施設として使用したのではないかと推測される。焼土面は3ヶ所確認されている。

土器は壺口縁部 (Po1・Po2)、甕口縁部 (Po3~5)、高坏口縁部 (Po6)、手づくね土器 (Po8) が出土している。Po1の壺はくりあげ口縁で口縁部には凹線がめぐる。Po6の高坏は、浅い底部から直立する口縁部をもつ坏部で、外面には凹線が施されている。坏部外面は磨き、内面はハケ目で仕上げられている。Po3の甕は、「く」の字

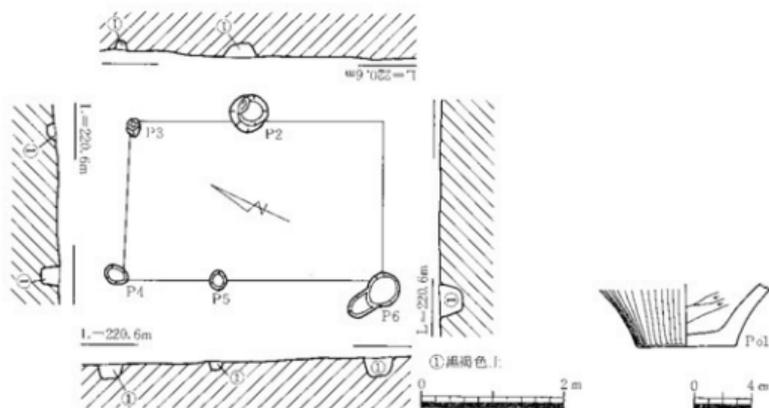
状の口縁で口縁部に刻み目を持つ。Po4・5はくりあげ口縁で、口縁部に凹線を持ち、胴部内外面ともハケ目調整であるが、頸部内面は横ナデである。

これらの土器より、この竪穴住居跡は、弥生時代中期のものと考えられる。

## (2) 掘立柱建物跡

### 第1 掘立柱建物跡 (図版56)

17L・M地区に位置し、第3土坑の北にある。梁行1間、桁行2間の建物跡と考えられる。長軸3.6m、短軸2.24mを測る。P1は検出できなかった。遺物はPo1をP5より、P2・3から壺の胴部片を、P6からは甕の胴部片を掘り下げ中に検出した。いずれも弥生土器である。



第158図 第1 掘立柱建物跡遺構・遺物図

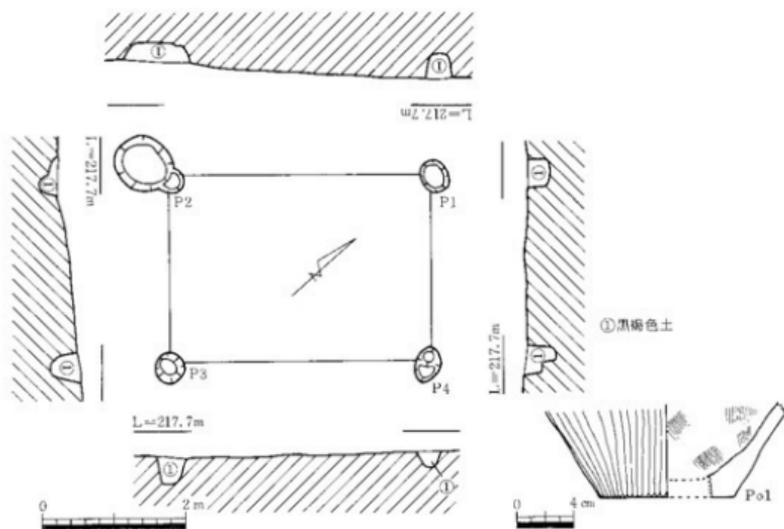
P 1	—
P 2	56 × 54 - 36
P 3	30 × 20 - 19
P 4	32 × 25 - 22
P 5	28 × 16 - 13
P 6	55 × 46 - 37

P 3	165	P 2	—	P 1	—
224					
P 4	140	P 5	230	P 6	—

第1 掘立柱建物跡計測表

### 第2 掘立柱建物跡 (図版56)

14I・J地区と一部13J地区にかかり第3掘立柱建物跡と切り合う。主軸をN-40°-Eにとる梁行1間、桁行1間の建物跡である。長軸3.70m、短軸2.63mを測る。周辺には多くのピットがあるが、第2掘立柱建物跡と関係があるかどうか分からない。他に別の掘立柱建物跡が存在した可能性もある。遺物はP3より弥生土器の底部が出上っている。



第159図 第2掘立柱建物跡構・遺物図

第2掘立柱建物跡計測表

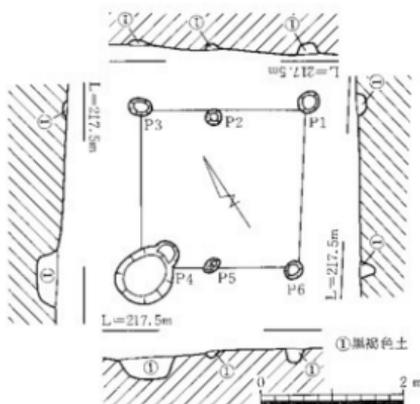
P 1	45 × 37 - 36	P 2	370	P 1	263
P 2	37 × 35 - 25	P 3	370	P 4	263
P 3	43 × 40 - 45				
P 4	53 × 37 - 46				

第3掘立柱建物跡 (図版56)

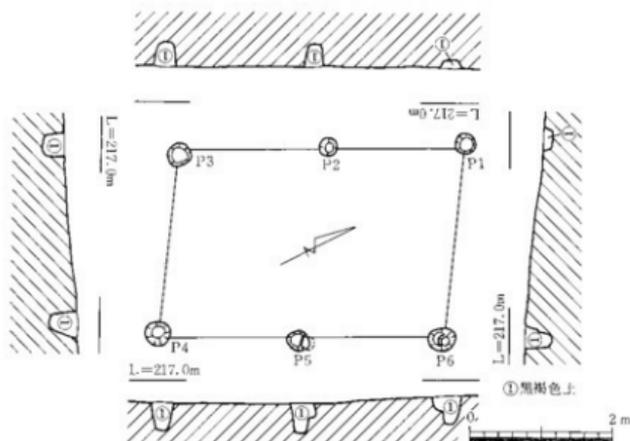
14 I・J地区に位置し、第2掘立柱建物跡と切り合う。主軸はN-59°-Wである。長軸2.40m、短軸2.28mの梁行1間、桁行2間の建物跡であろう。P4は別の遺構によって切られ検出できなかった。遺物はなかった。

第5掘立柱建物跡 (図版56)

14 H・I地区に位置し、第4竪穴住居跡の北東、第2掘立柱建物跡の西にあたる。主軸をN-27°-Eにとる。梁行1間、桁行2間で長軸4.16m、短軸2.64mを測る。P5・6には、順に



第160図 第3掘立柱建物跡構図



第161図 第5掘立柱建物跡遺構図

P 1	33 × 32 - 17
P 2	22 × 22 - 6
P 3	34 × 24 - 30
P 4	74 × 62 - 26
P 5	25 × 15 - 8
P 6	25 × 22 - 23

P 3	104	P 2	136	P 1
228				240
P 4	104	P 5	112	P 6

P 1 ~ P 3	240
P 4 ~ P 6	216

第3掘立柱建物跡計測表

P 1	30 × 28 - 16
P 2	27 × 27 - 34
P 3	35 × 33 - 34
P 4	35 × 22 - 49
P 5	33 × 27 - 44
P 6	42 × 34 - 20

P 3	220	P 2	190	P 1
264				280
P 4	200	P 5	216	P 6

P 1 ~ P 3	410
P 4 ~ P 6	416

第5掘立柱建物跡計測表

(20×20-20)・(25×24-14) cmの柱痕が認められた。遺物はなかった。

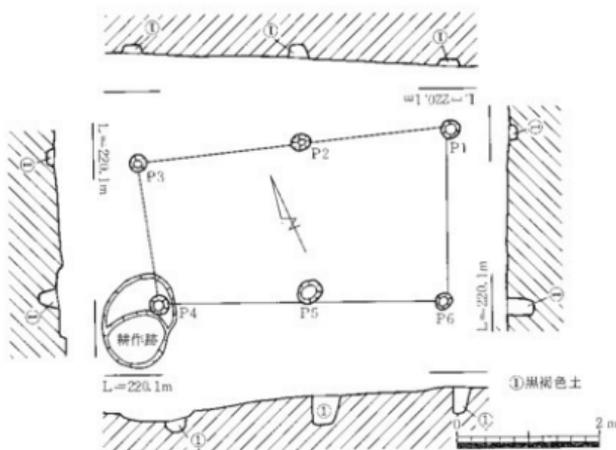
#### 第6掘立柱建物跡 (図版56)

14M地区の南東にあり、第63土坑の北西に位置する。梁行1間、桁行2間で、主軸をN-72°-Wにとる。長軸4.40m、短軸2.00mを測る。柱穴内より遺物は検出しなかった。

P 1	26 × 23 - 12
P 2	25 × 21 - 23
P 3	23 × 22 - 10
P 4	28 × 26 - 33
P 5	35 × 30 - 41
P 6	25 × 23 - 40

P 3	230	P 2	210	P 1
200				244
P 4	210	P 5	190	P 6

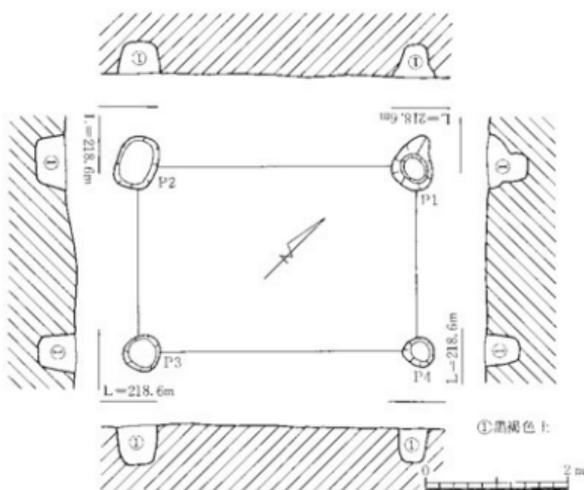
第6掘立柱建物跡計測表



第162図 第6掘立柱建物跡遺構図

### 第7掘立柱建物跡 (図版56)

13K地区の中央にあり、第8掘立柱建物跡の南東に位置する。梁行、桁行とも1間で、主軸をN-46°-Eにとる。長軸4.00m、短軸2.64mを測る。柱穴内より遺物は検出しなかった。



第163図 第7掘立柱建物跡遺構図

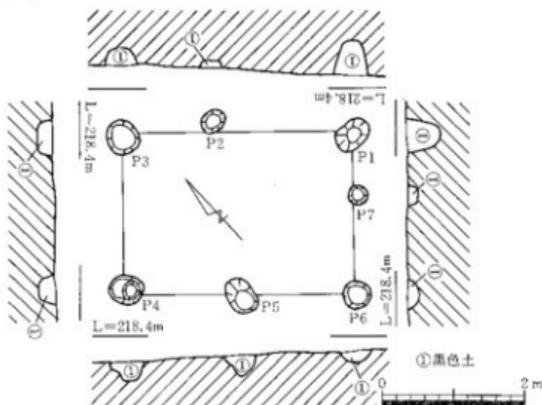
### 第7掘立柱建物跡計測表

P 1	79 × 52 - 53
P 2	79 × 58 - 47
P 3	53 × 47 - 49
P 4	41 × 40 - 45

P 2	400	P 1
264		264
P 3	400	P 4

### 第8 掘立柱建物跡 (図版56)

13K地区の北西にあり、  
第7 掘立柱建物跡の北西に  
位置する。梁行1間、桁行  
2間で、主軸をN-50°-  
Wにとる。長軸3.20m、短  
軸2.20mを測る。柱穴内か  
らは少量の弥生土器片を検  
出したが実測できなかった。



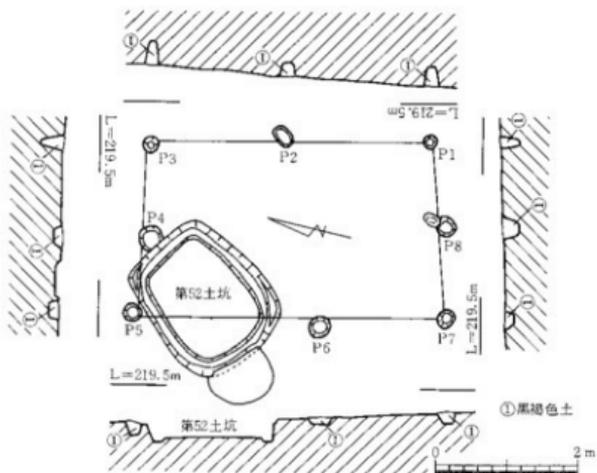
第164図 第8 掘立柱建物跡遺構図

P 1	25 × 22 - 16	P 3	130	P 2	190	P 1	80	
P 2	52 × 35 - 48	220					P 7	140
P 3	35 × 25 - 10		P 4	160	P 5	160	P 6	
P 4	47 × 41 - 32							
P 5	49 × 36 - 43							
P 6	52 × 33 - 26							
P 7	40 × 36 - 23							

第8 掘立柱建物跡計測表

### 第9 掘立柱建物跡 (図版56)

14L地区の北側、  
一部13L地区にかか  
る。P 4は第52土坑  
に一部壊されている  
が梁行2間、桁行2間  
である。長軸4.40m、  
短軸2.50mを測る。  
主軸はN-12°-W  
である。遺物は弥生  
土器がピット内から  
出土しているが図化  
できなかった。



第165図 第9 掘立柱建物跡遺構図

P 1	20 × 18 - 30
P 2	31 × 22 - 23
P 3	24 × 20 - 38
P 4	35 × 33 - 15
P 5	26 × 23 - 13
P 6	30 × 30 - 14
P 7	24 × 22 - 11
P 8	30 × 25 - 19

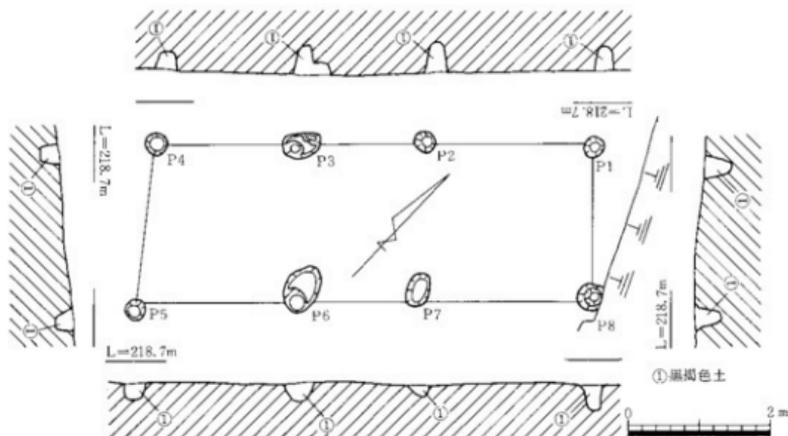
P 3	190	P 2	200	P 1
130				120
P 4				P 8
120				130
P 5	260	P 6	180	P 7

P 1 ~ P 3	390
P 3 ~ P 6	250
P 5 ~ P 7	440
P 7 ~ P 1	250

第9掘立柱建物跡計測表

第10掘立柱建物跡 (図版57・58)

12L地区中央に位置する。梁行1間、桁行3間の細長い建物跡である。主軸はN-47°-Eにとる。長軸6.56m、短軸2.16mを測る。高坏脚部(Po2)が出土している。外面ハケ後横方向のヘラ磨き、内面ナデ調整が施されている。弥生時代の掘立柱建物跡と考えられる。

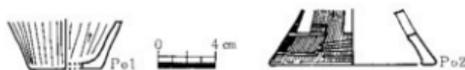


第166図 第10掘立柱建物跡遺構図

P 1	53 × 36 - 42
P 2	31 × 37 - 46
P 3	30 × 28 - 36
P 4	42 × 40 - 36
P 5	48 × 32 - 12
P 6	74 × 45 - 26
P 7	29 × 27 - 26
P 8	28 × 28 - 28

P 4	200	P 3	184	P 2	240	P 1
240						216
P 5	240	P 6	176	P 7	240	P 8

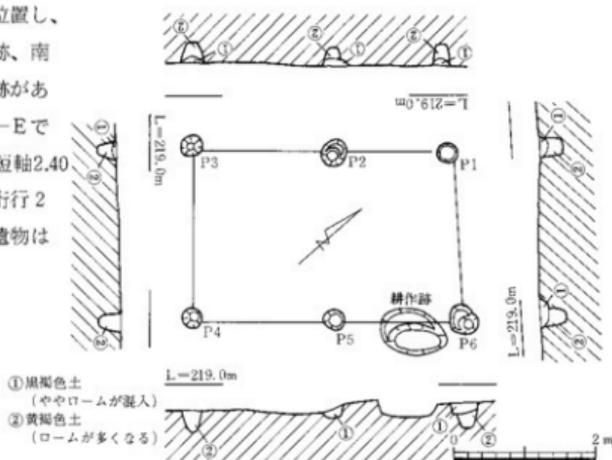
第10掘立柱建物跡計測表



第167図 第10掘立柱建物跡遺物図

### 第11掘立柱建物跡 (図版57)

13L地区の南西に位置し、西に第7掘立柱建物跡、南東に第9掘立柱建物跡がある。主軸はN-43°-Eである。長軸3.90m、短軸2.40mを測る梁行1間、桁行2間の建物跡である。遺物は検出しなかった。



第168図 第11掘立柱建物跡遺構図

第11掘立柱建物跡計測表

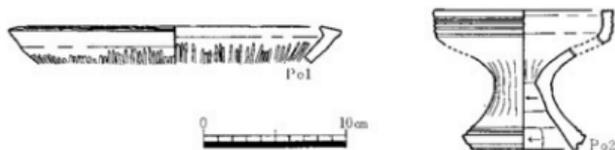
P 1	28 × 27 - 37
P 2	37 × 32 - 29
P 3	32 × 29 - 32
P 4	30 × 30 - 32
P 5	30 × 28 - 27
P 6	45 × 35 - 40

P 3	200	P 2	160	P 1	240
P 4	200	P 5	190	P 6	

P 1 ~ P 3	360
P 4 ~ P 6	390

### 第12掘立柱建物跡 (図版57・59)

12I地区の北東に位置する。梁行、桁行とも1間で、主軸をN-48°-Eにとる。長軸3.44m、短軸2.60mを測る。P1・3・4は断面に柱痕が確認できた。P4内より器台(Po2)を検出した。Po2の受部外面には4条の凹線がめぐり、外面全体に丹塗りがされている。建物跡の時期は、周辺の遺構等から弥生時代中期と考えられる。

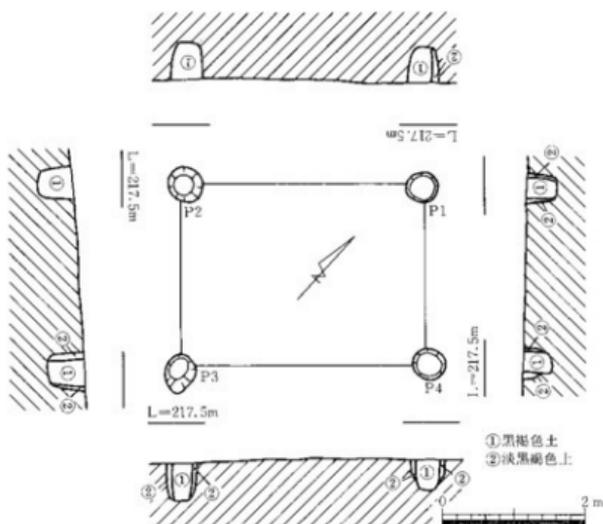


第169図 第12掘立柱建物跡遺物図

P 1	42 × 42 - 46
P 2	49 × 49 - 53
P 3	58 × 43 - 57
P 4	42 × 42 - 46

P 2	344	P 1	260
P 3	344	P 4	

第12掘立柱建物跡計測表



第170図 第12掘立柱建物跡遺構図

第13掘立柱建物跡 (図版57)

12L地区北側から、11L地区南西にかけて位置しており、南側に第10掘立柱建物跡がある。梁行1間、桁行2間を数え、主軸をN-41°-Wにとる。長軸5.52m、短軸2.90mを測る。P5より土器片が出土しているが実測は不可能であった。P2は第59土坑と切り合っているが、耕作溝による攪乱のため新旧関係は不明であった。また、第77土坑とも重なるが、この新旧関係も不明である。



第171図 第13掘立柱建物跡遺構図

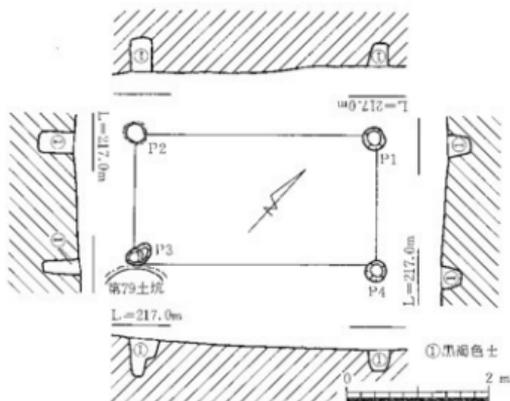
P 1	33 × 32 - 42
P 2	—
P 3	25 × 22 - 8
P 4	26 × 25 - 13
P 5	26 × 20 - 29
P 6	20 × 16 - 38

P 3	—	P 2	—	P 1
290				290
P 4	296	P 5	256	P 6

第13掘立柱建物跡計測表

第14掘立柱建物跡 (図版57)

11 J・K地区の北側に位置し、第15掘立柱建物跡の南、第8竪穴住居跡の北にある。主軸はN-50°-Eで、梁行1間、桁行1間の建物跡である。長軸3.40m、短軸1.75mを測る。遺物は検出できなかった。



第172図 第14掘立柱建物跡遺構図

P 1	32 × 32 - 23
P 2	30 × 30 - 48
P 3	40 × 24 - 54
P 4	31 × 28 - 33

P 2	340	P 1
175		185
P 3	340	P 4

第14掘立柱建物跡計測表

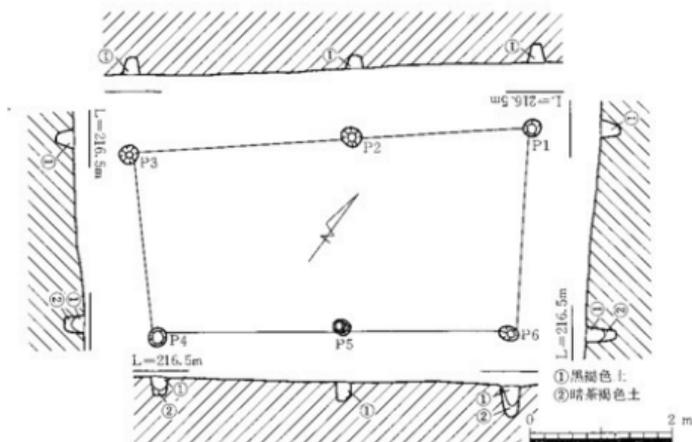
第15掘立柱建物跡 (図版57)

10 J・K地区に位置し、北には第16掘立柱建物跡、西に第20掘立柱建物跡、南に第14掘立柱建物跡がある。東には計8個もの貯蔵穴がある。建物跡の主軸はN-50°-Eで、梁行1間、桁行2間を数える。長軸5.60m、短軸2.60mを測る。遺物は検出しなかった。

P 1	23 × 20 - 26
P 2	28 × 25 - 14
P 3	27 × 25 - 27
P 4	27 × 24 - 32
P 5	23 × 21 - 28
P 6	22 × 15 - 48

P 3	305	P 2	255	P 1
260				290
P 4	256	P 5	240	P 6

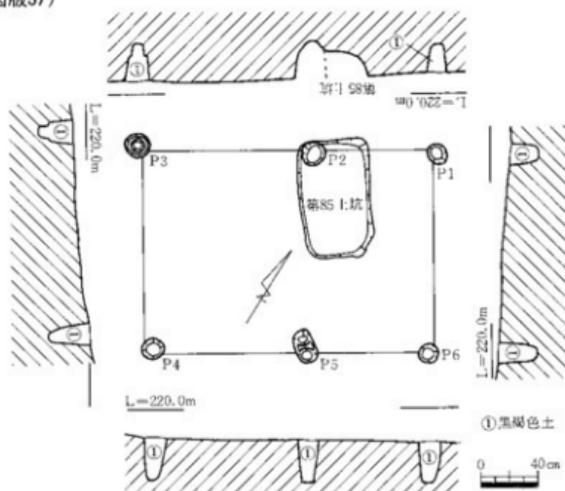
第15掘立柱建物跡計測表



第173図 第15掘立柱建物跡遺構図

第16掘立柱建物跡 (図版57)

10 J地区北東より、10 K地区北西にかけて位置している。第15掘立柱建物跡の北側にあたる。梁行1間、桁行2間の建物跡で、主軸をN-57°-Eにとる。長軸4.10m、短軸2.86mを測る。P2は第85土坑と切り合うが、第85土坑の方が新しいものと考えられる。P5・6より弥生時代中期と考えられる土器が出土している。



第174図 第16掘立柱建物跡遺構図

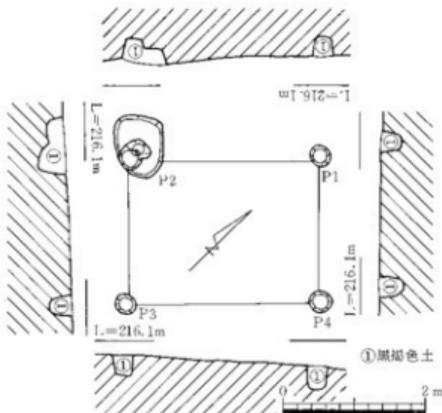
第16掘立柱建物跡計測表

P 1	28 × 25 - 40
P 2	33 × 31 - 48
P 3	34 × 30 - 50
P 4	30 × 23 - 59
P 5	45 × 28 - 63
P 6	30 × 27 - 58

P 3	240	P 2	170	P 1	
	290				286
P 4	220	P 5	170	P 6	

### 第17掘立柱建物跡 (図版57)

10 I 地区北側に位置し、西側に第22掘立柱建物跡、北東側に第19掘立柱建物跡、南東側に第20掘立柱建物跡がある。北東に向かって緩く下る斜面上にある。梁行1間、桁行1間の小型の建物跡で、主軸はN-42°-Eにとる。長軸2.75m、短軸2.05mを測る。P2は耕作により、一部削られていた。P3より、弥生土器の破片が出土している。



第175図 第17掘立柱建物跡遺構図

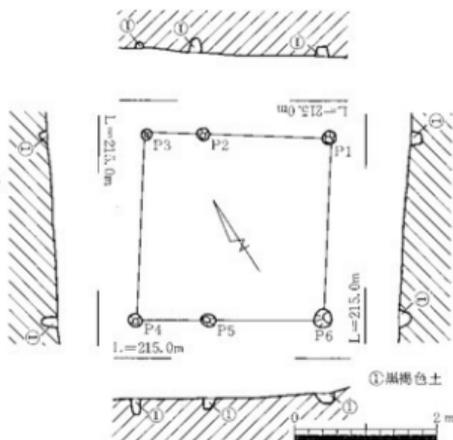
### 第17掘立柱建物跡計測表

P 1	27 × 26 - 29
P 2	32 × 25 - 40
P 3	30 × 27 - 32
P 4	30 × 26 - 36

P 2	275	P 1
205		205
P 3	275	P 4

### 第18掘立柱建物跡 (図版58)

8 J 地区の北に位置し、第21掘立柱建物跡の北にあたる。地形は北から下がってきて、この辺りはかなり低くなっている。建物は北東-南西方向を梁と考えて、主軸をN-57°-Wにとる。梁行1間、桁行2間を数え、長軸2.60m、短軸2.58mを測る。各々のピットは小さく、建物は文字通り「掘立」小屋程度のものであろう。遺物は検出しなかった。



第176図 第18掘立柱建物跡遺構図

P 1	20 × 19 - 17
P 2	16 × 17 - 18
P 3	15 × 14 - 13
P 4	18 × 16 - 27
P 5	19 × 15 - 21
P 6	29 × 22 - 21

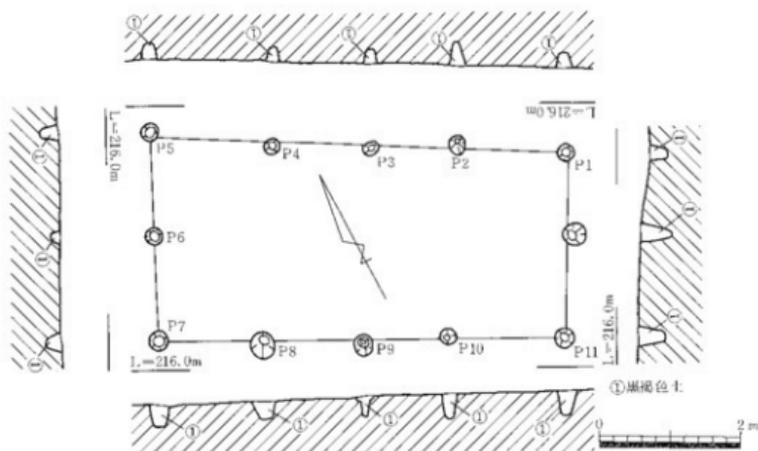
P 3	82	P 2	178	P 1	
258					258
P 4	100	P 5	160	P 6	

P 1 ~ P 3	260
P 4 ~ P 6	260

第18掘立柱建物跡計測表

第19掘立柱建物跡 (図版58)

9 I・9 J地区にまたがり、北に第89土坑が、南西に第17掘立柱建物跡がある。梁行2間、桁行4間の建物跡と考える。長軸5.78m、短軸2.70mを測る。いずれのピットからも遺物は検出してない。



第177図 第19掘立柱建物跡遺構図

第19掘立柱建物跡計測表

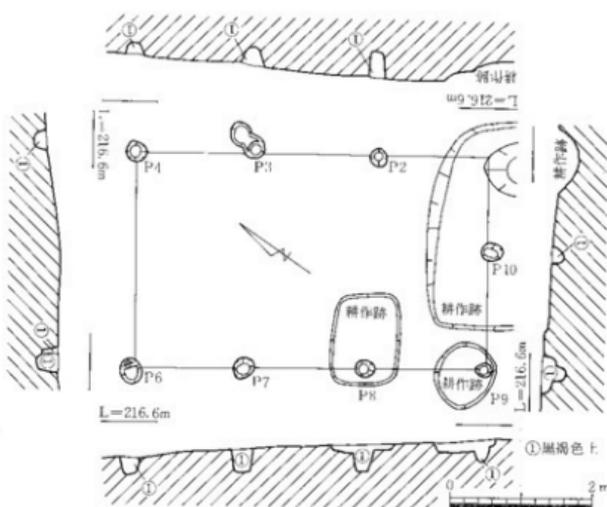
P 1	29 × 25 - 30
P 2	23 × 22 - 42
P 3	25 × 25 - 45
P 4	32 × 30 - 43
P 5	23 × 21 - 25
P 6	22 × 22 - 41
P 7	27 × 21 - 38
P 8	21 × 17 - 21
P 9	24 × 20 - 22
P 10	22 × 21 - 18
P 11	27 × 23 - 19
P 12	38 × 30 - 32

P 5	168	P 4	140	P 3	120	P 2	150	P 1	
140									120
P 6									P 2
150									150
P 7	150	P 8	140	P 9	120	P 10	164	P 11	

P 1 ~ P 5	578
P 5 ~ P 7	290
P 7 ~ P 11	574
P 11 ~ P 1	270

### 第20掘立柱建物跡 (図版58)

10 J 地区南西に位置し、一部10 I、11 J 地区にかかる。主軸は  $N - 35^\circ - W$  にとり、梁行 2 間、桁行 3 間を数えるが、P 5 は検出できなかった。長軸 4.94 m、短軸 3.20 m を測る。また P 1 は耕作により消失していた。遺物は出土していない。



第178図 第20掘立柱建物跡遺構図

### 第20掘立柱建物跡計測表

P 1	—
P 2	25 × 23 - 35
P 3	32 × 30 - 27
P 4	28 × 25 - 17
P 5	—
P 6	38 × 26 - 28
P 7	31 × 27 - 40
P 8	25 × 23 - 27
P 9	89 × 80 - 15
P 10	30 × 24 - 18

P 4	172	P 3	172	P 2	—	P 1	—
320						P 10	165
P 6	160	P 7	170	P 8	164	P 9	

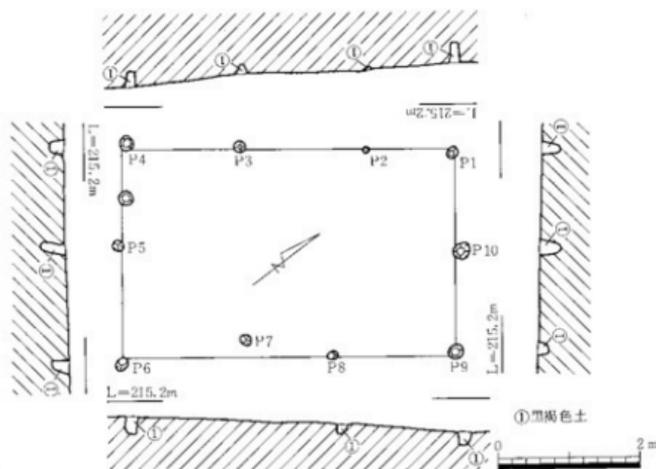
P 1 ~ P 4	494(推定)
P 6 ~ P 9	494

### 第21掘立柱建物跡 (図版58)

8 J・9 J 地区に位置し、北に第18掘立柱建物跡、南に第19掘立柱建物跡がある。建物跡内には第90七坑があるが、主軸方向等から別の遺構であろうと考えた。第21掘立柱建物跡は主軸を  $N - 38^\circ - E$  にとる。梁行 2 間、桁行 3 間（東側は 2 間？）の建物跡である。長軸 4.70 m、短軸 2.85 m を測る。各柱穴は比較的小さい。遺物は P 1 より弥生土器の口縁部が出土している。弥生時代中期の甕である。



第179図 第21掘立柱建物跡遺物図



第180図 第21掘立柱建物跡遺構図

第21掘立柱建物跡計表

P 1	18 × 15	- 24
P 2	11 × 11	- 7
P 3	16 × 14	- 16
P 4	18 × 18	- 23
P 5	21 × 20	- 27
P 6	20 × 16	- 27
P 7	16 × 15	- 24
P 8	13 × 12	- 12
P 9	20 × 19	- 19
P 10	24 × 20	- 31

P 4	165	P 3	168	P 2	127	P 1
	144					140
P 5						P 10
	168					145
P 6	170	P 7	125	P 8	175	P 9

P 1	~	P 4	464
P 4	~	P 6	365
P 6	~	P 9	459
P 9	~	P 1	285

第22掘立柱建物跡 (図版58)

9 I地区南西に位置し、一部9 H、10 I地区にかかる。東側に第17掘立柱建物跡がある。梁行1間、桁行1間、主軸N-40°-Wの小型の建物跡である。長軸3.45m、短軸2.58mを測る。P 1より、弥生土器片が出土している。

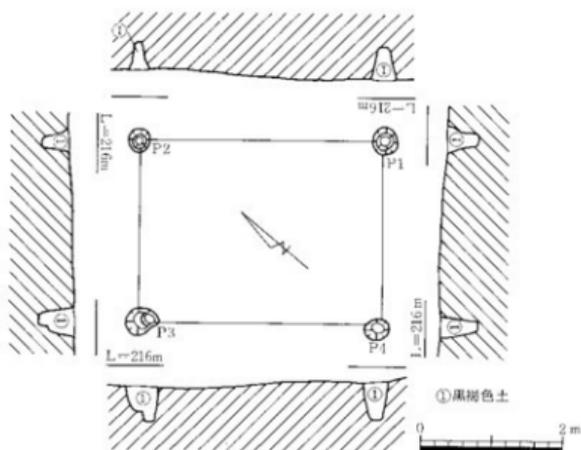
第22掘立柱建物跡計表

P 1	38 × 35	- 45
P 2	30 × 25	- 37
P 3	45 × 30	- 51
P 4	35 × 29	- 56

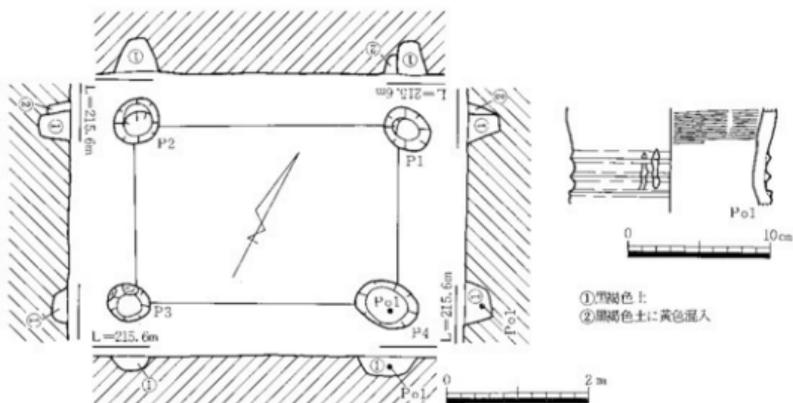
P 2	345	P 1
	258	258
P 3	345	P 4

第23掘立柱建物跡 (図版58)

8 H地区の北西に位置し、西に第24土坑がある。梁行1間、桁行1間の建物跡と考える。長軸3.80m、短軸2.70mを測る。P 4内からは弥生時代の壺の頸部と考えられる上器片を検出した。



第181図 第22掘立柱建物跡遺構図



第182図 第23掘立柱建物跡遺構・遺物図

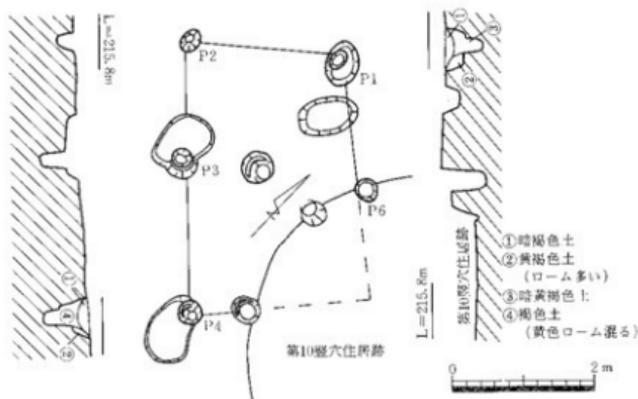
第23掘立柱建物跡計測表

P 1	70 × 53 - 50	P 2	380	P 3
P 2	70 × 58 - 52	270		270
P 3	60 × 53 - 21	P 3	380	P 4
P 4	87 × 61 - 28			

第24掘立柱建物跡 (図版58・59)

9 G地区に位置し、東側は第10竪穴住居跡と切り合う。新旧関係は竪穴住居跡の方が新しい。主軸はN-46°-Wである。梁行1間、桁行2間で、長軸3.92m、短軸2.12mを測る。各ピットはP2を除き深くしっかりしたものであり、P1、4には径25cmの柱痕が認

められた。



第183図 第24掘立柱建物跡遺構図

第24掘立柱建物跡計測表

P 1	60 × 42 - 34	P 2	212	P 1
P 2	35 × 25 - 21	172		190
P 3	- 42	P 3		P 6
P 4	33 × 32 - 66	220		-
P 5	-	P 4	-	P 5
P 6	33 × 31 - 66			

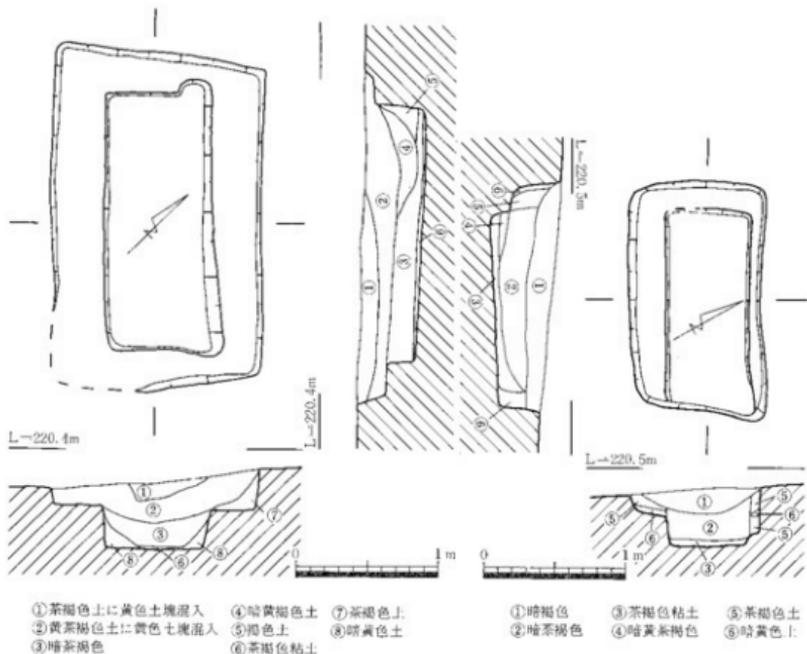
### (3) 木 棺 墓

#### 第1木棺墓 (図版59)

18L・M地区の南側に位置し、第2木棺墓の南西、第1土坑の南東にあたる。軸方向はN-45°-Wで、掘り方の規模は長辺2.4m、短辺1.48mを測る。南側は削平されている。木棺部は深さ56cmの掘り方を、さらに長辺1.82m、短辺76cm、深さ32cm掘り込んで作られている。木棺部の東壁は長辺方向に8cm程度長くなっている。側板を立てた跡であろう。棺内、および周辺より骨、土器は出土していない。時期は弥生時代中期頃と推定される。

#### 第2木棺墓 (図版59)

18M地区の南西に位置し、第1木棺墓の北東、第1土坑の東にあたる。北には第3土坑(ローム特殊土坑)がある。第2木棺墓は西側で第7上坑を掘り込んでつくられている。軸方向はN-60°-Wで、掘り方の規模は長辺1.63m、短辺93cmを測る。木棺部は掘り方をさらに長辺1.40m、短辺56cm、深さ21cm掘り込んでつくられている。棺内、掘り方及びその周辺からは骨、土器等は検出されなかった。時期は他の遺構との関係等から弥生時代中期頃と推定される。

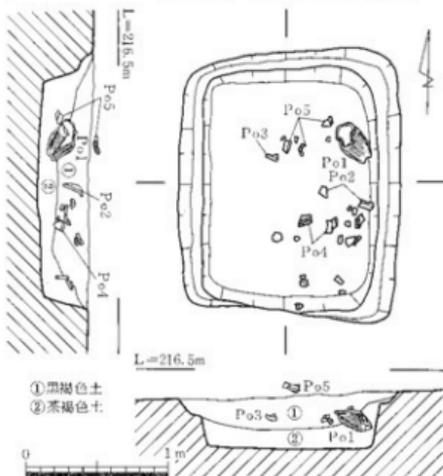


第184図 第1木棺墓遺構図

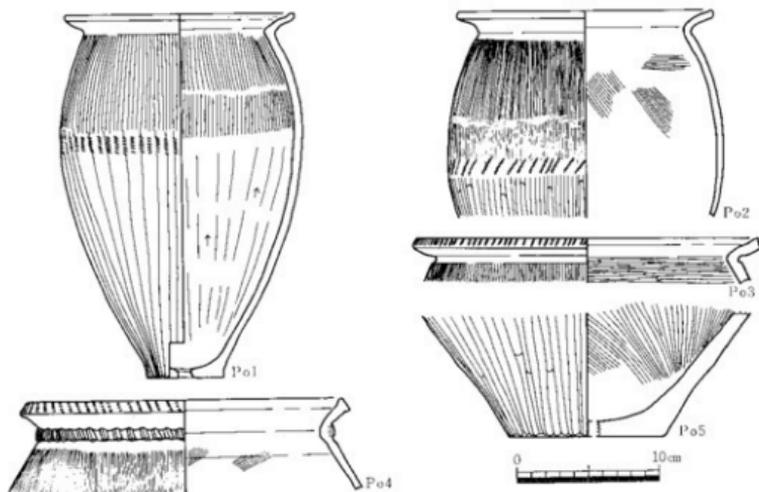
第185図 第2木棺墓遺構図

第3木棺墓 (図版59)

8 G地区の中央部やや西よりにあり、第24土坑の南西に位置する。平面形は長方形で、長辺1.90m、短辺1.56mを測り、主軸を南北にとる。検出面から10cmほど掘り下げたところで、長辺1.64m、短辺1.20m、深さ34cmの長方形の落ち込みを検出した。これが棺部と思われる。棺床面は平坦である。棺部内北東寄りに供献土器の甕 (Po1) を検出した。Po1は口縁部内外面横ナデ、外面胴部上半縦方向のハケ目、胴部下半縦方向のヘラ磨き、胴部中央に櫛状工具に



第186図 第3木棺墓遺構図

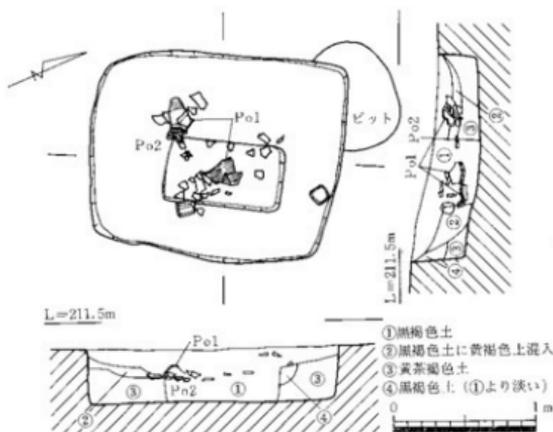


第187図 第3木棺墓遺物図

よる列点文がめぐる。内面胴部上半縦方向のハケ目、下半下から上へのヘラ削り。底部は穿孔されている。他に埋土中より甕等を検出した。時期は弥生時代中期であろう。

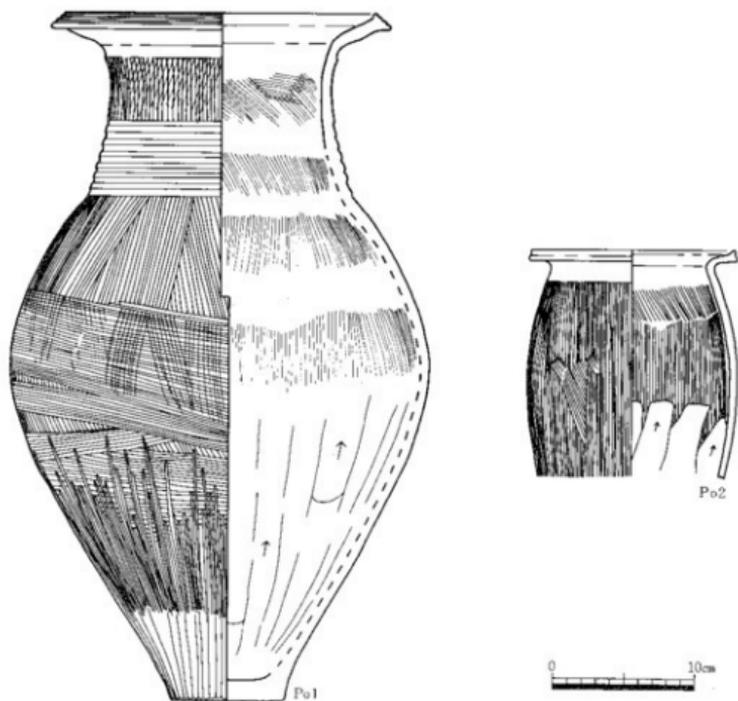
#### 第9土塚 (図版60)

8C地区に位置し、第1堅穴住居跡、第13上坑の南西にあたる。遺構は隅丸方形を呈する土塚に、同形の棺部をもつ。土塚は長辺1.80m、短辺1.48m、深さ40cmを測り、棺部長辺84cm、短辺46cmを測る。主軸はN-31°-Eをとる。土塚掘り方に比べ、棺部分が小さいように思うが木棺墓と考へたい。埋土内からは、供



第188図 第9土塚遺構図

献土器と考へられる壺 (Po1)、甕 (Po2) を検出した。Po1は口縁口唇部が外へ張りだし、上方へわずかにあがる。頸部外面には、凹線がめぐる。頸部内面からハケ目が



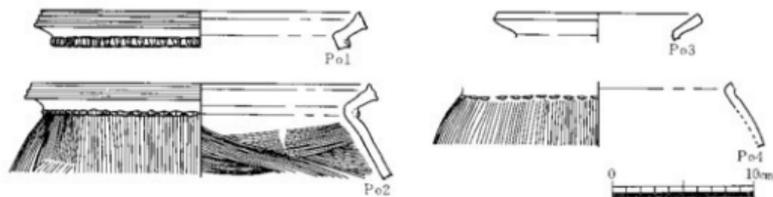
第189図 第9土壇遺物図

施される。時期は壺、甕より弥生時代中期後葉と考えられる。

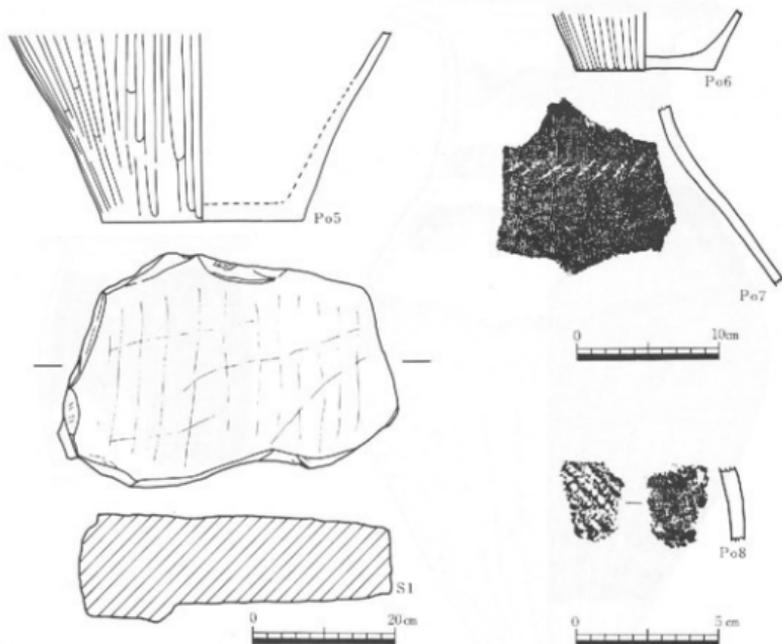
(4) 土壇墓

第1土壇 (図版60)

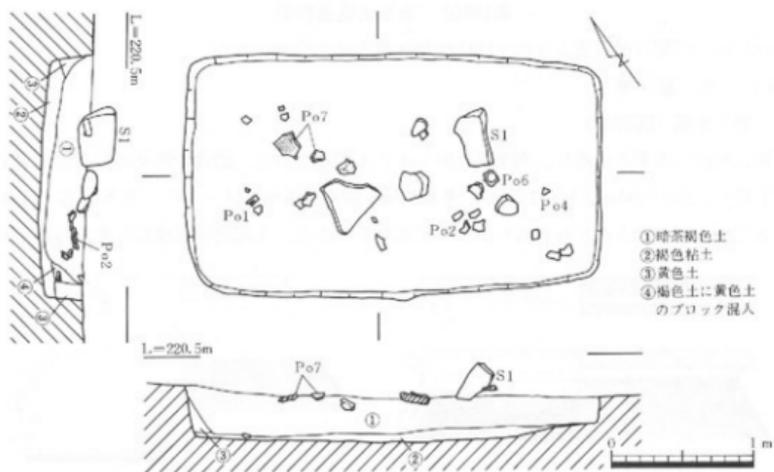
18L地区の南東に位置し、南東側に第1・2木棺墓がある。遺構は隅丸の長方形を呈する土壇で、長辺2.94m、短辺1.72m、深さ36cmを測る。主軸はS-55°-Eをとる。土壇上面では7個の置き石がみられた。さらに掘り下げると、土壇東側に標石と考えられる石



第190-①図 第1土壇遺物図



第190-②図 第1土坑遺物図



第191図 第1土坑遺構図

(S1)と、底部を上むけたPo6を検出した。Po7は壺の肩部で、貝殻腹縁による施文がみられ、第2土坑で検出した壺片と復元できた。時期は検出した遺物より弥生時代中期後葉と考えられる。

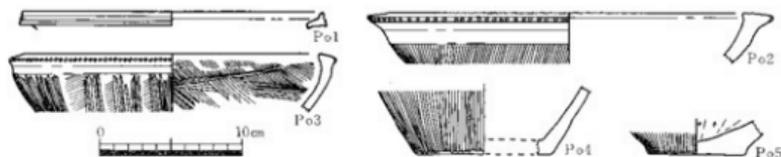
### 第2土坑 (図版60)

18M・19M地区にわたり、第1木棺墓の東、第2木棺墓の南より検出した。平面形は卵形を呈する。長軸は2.55m、短軸1.94m、深さ32cmを測る。軸方向はN-59°-Eである。底面は平坦である。出土遺物は弥生土器である。それらの内第1土坑出土のものと同じ個体のものもあり、両者の埋没に大差がないと

推測させる。Po2・3は高坏である。いずれもII縁端部に刻み目がめぐり、Po3には外面に赤色塗彩が施されている。位置関係等から土坑墓の可能性が強い。



第192図 第2土坑遺構図

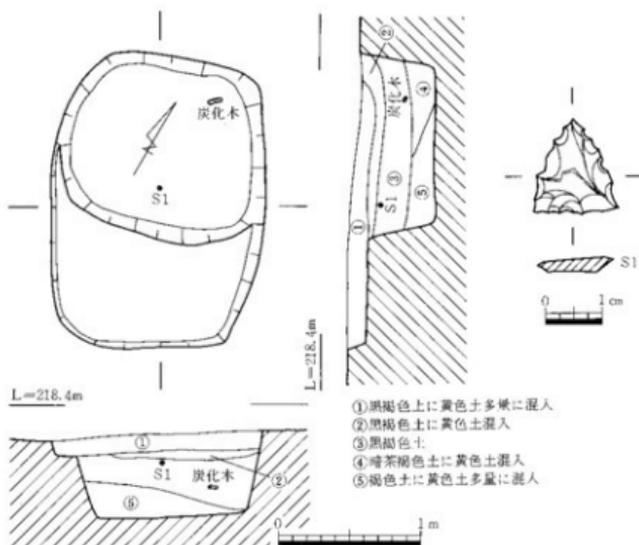


第193図 第2土坑遺物図

## (5) 貯蔵穴

### 第29土坑 (図版61)

15J地区の南側に位置し、第3堅穴住居跡の北西側を掘り込んでつくられている。平面形は隅丸長方形。主軸をN-30°-Wにとる。土坑は長辺2.06m、短辺1.50m、深さ13cmの掘り方をさらに長辺1.32m、短辺1.30m、深さ48cm掘り込んでつくられている。底面は



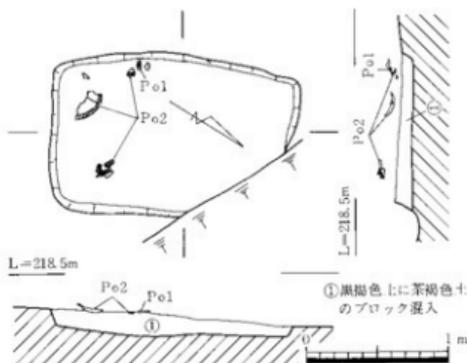
第194図 第29土坑遺構・遺物図

いずれも安定していて、面積は深い方で1.32㎡になる。遺物は上層で石鏃（S1）、下層で炭化木を検出した。当遺跡では他に類例がないが貯蔵穴として使用された土坑と思われる。

### 第30土坑（図版61）

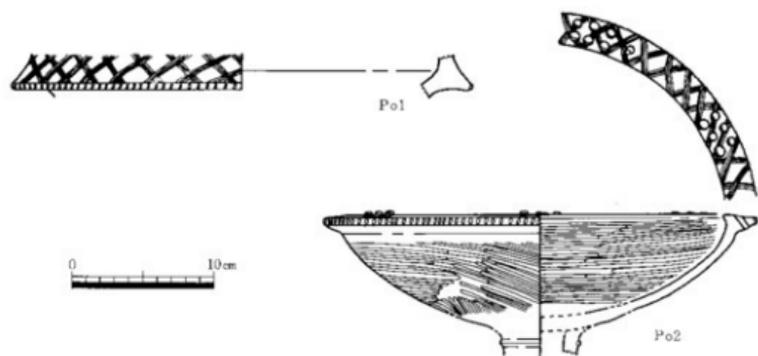
13 I 地区の南東側に位置し、第2掘立柱建物跡の北西、第34土坑の東にあたる。プランは長方形を呈し、床面は平坦である。主軸はN-34°-Wである。大きさは長辺1.68m、短辺1.16m、深さ18cmを測る。

埋土は黒褐色土に茶褐色土が混入している。遺物は、高環（Po2）を南東側で検出した。Po2は口縁端部に斜格子文が施された後、6ずつ円形浮文が約60°の間隔で貼り付けられている。坏部内外面は横方向のヘラ磨きである。



第195図 第30土坑遺構図

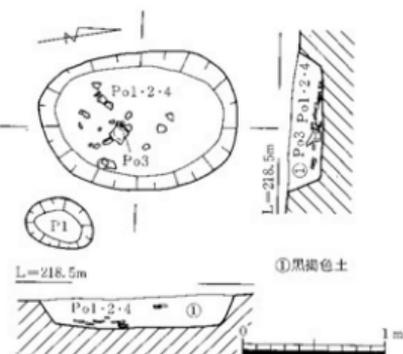
この遺物により第30土坑の時期は弥生時代中期と考えられる。



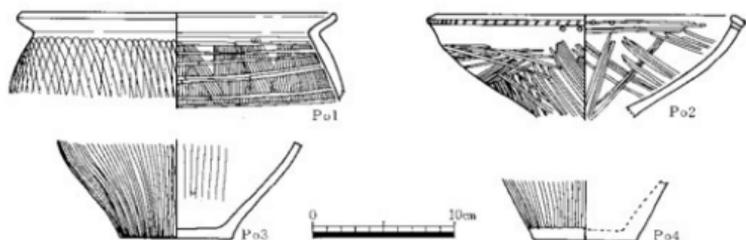
第196図 第30土坑遺物図

第31土坑（図版61）

13 I 地区に位置し、第34土坑の南、第30土坑の西側にあたる。プランは楕円形を呈し、主軸はN-8°-Eになる。大きさは、上縁部で長軸1.36 m、短軸97 cm、底面で長軸115 cm、短軸78 cm、深さ21 cmを測る。底面は平坦である。埋土は黒褐色土で、遺物は比較の出上している。その内高坏Po2は南東隣りのP1（50×32-26）cm 出上のもと復元できた。土器は内外面ともヘラ磨きが施され、口縁部近くに2個1対の紐穴が穿たれている。土坑の時期は遺物から弥生時代中期と推定される。



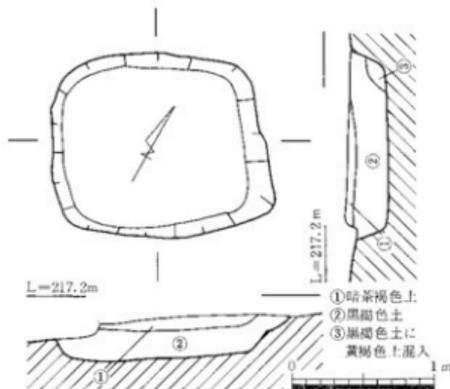
第197図 第31土坑遺構図



第198図 第31土坑遺物図

### 第32土坑 (図版61)

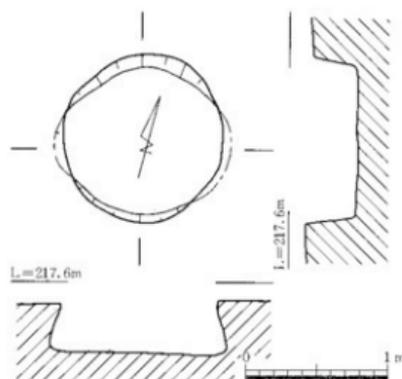
13 I 地区の南にあり、第30土坑の南西、第31土坑の東に位置する。主軸をN-60°-Eにとり、平面形は隅丸方形である。長辺1.48 m、短辺1.31 m、深さ36 cmを測る。遺物は埋土中より少量の土器片を検出したが図化できなかった。時期は出土遺物からみて、弥生時代中期と考えられる。



第199図 第32土坑遺構図

### 第36土坑 (図版62)

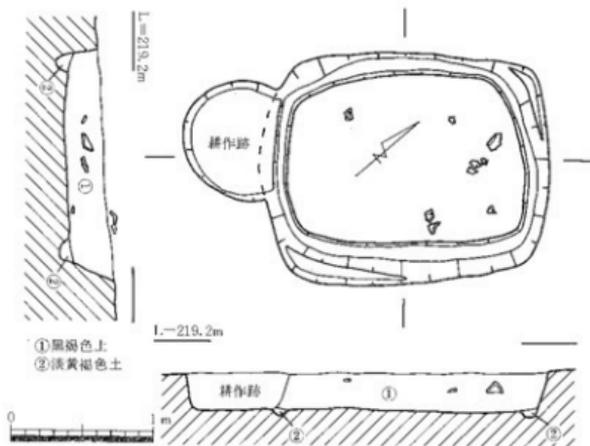
14 I 地区の東側に位置し、第2・第3掘立柱建物跡の南3 mの所にあたる。平面形は円形で、大きさは径1.16 m、深さ41 cmを測る。底面は平坦で、東西は少し内へ入り、弱い袋状を呈す。底面積は0.98 m<sup>2</sup>になる。遺物は検出できなかった。



第200図 第36土坑遺構図

### 第52土坑 (図版62)

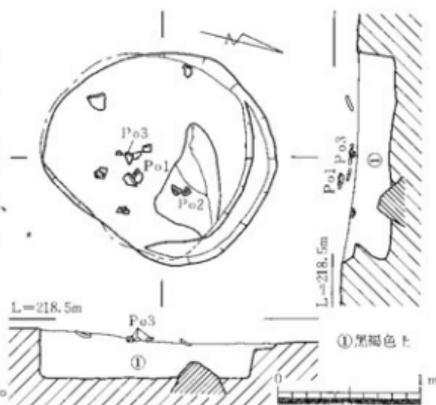
14 L 地区の北側と、13 L 地区の南側にかかる隅丸方形の土坑である。主軸はN-44°-Eである。規模は長辺2.0(推定) m、短辺1.64 m、深さ20~26 cmを測る。床面には幅8~13 cm、深さ6 cmの側溝が四壁をめぐる。床面の規模は長辺1.67 m、短辺1.21 mで、床面積は2.02 m<sup>2</sup>である。遺物は床面より少し高い所で数点検出した。時期は弥生時代中期であろう。



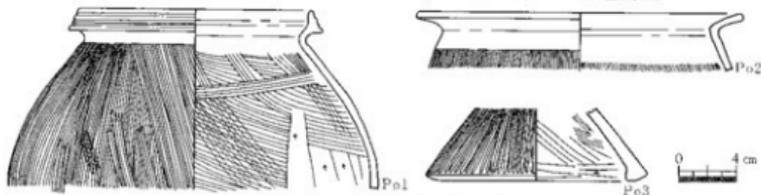
第201図 第52土坑遺構図

第53土坑 (図版62)

13L地区の北西より検出した。平面形は不整形形で、上面は一部2段掘りになっている。規模は長軸1.61m、短軸1.41m、深さ37cmを測る。底部は内へ入りこんでいる所もあり、掘り方が浅いという難点もあるが、袋状の貯蔵穴と思われる。遺物は上面から検出している。Po1は口縁部に3条の凹線、胴部外面ハケ目調整、内面ハケ目、中位以下七方向のヘラ削りが施されている。これらの遺物の時期は弥生時代中期である。



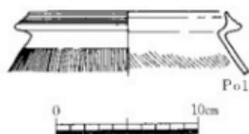
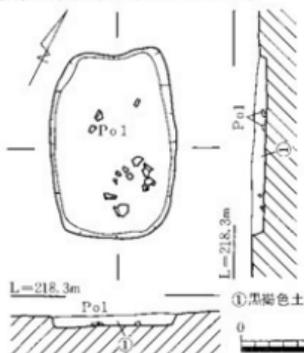
第202図 第53土坑遺構図



第203図 第53土坑遺物図

### 第54土坑（図版62）

13K地区の東側に位置する隅丸方形の土坑である。近くには西に第7掘立柱建物跡、東に第53上坑がある。主軸はN-25°-Wであり、規模は長辺1.30m、短辺88cm、深さ12cmを測る。底面積は0.96㎡で、側溝はなかった。遺物はほとんどが底面に密着していた。Po1は口縁部に3条の凹線を持つ甕で、頸部内外面ナデ、肩部内外面ハケ目調整である。土坑の時期は弥生時代中期であろう。



第204図 第54土坑  
遺構・遺物図

### 第55土坑（図版62・63）

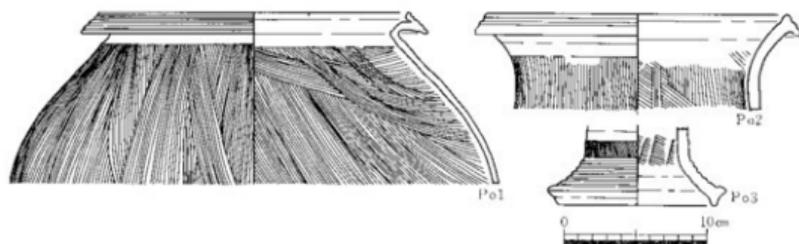
12K地区の南東隅より検出した。近くには東側に第53・56・60土坑といった貯蔵穴と思われる土坑が多く、第55土坑もそういった貯蔵穴群の一つであろう。北西近くに第8・第9といった、2棟の竪穴住居跡があることから、これらの土坑は第8ないし第9竪穴住居跡に伴うものかも知れない。

第55土坑は主軸をN-50°-Eにとる隅丸方形の土坑で、長辺1.55m、短辺1.24m、壁高は南東側で31cm、北西側で26cmを測る。床面は平坦で、面積は1.54㎡になる。側溝はない。遺物は南東側に集中して検出された。

Po1は甕で、口縁部に強い4条の凹線を施し、外面にススの付着がみられる。Po2は器台と考えられ、L1縁部外面に2条の弱い凹線が入り、頸部には縦ハケが施される。内面頸部もハケ目調整である。Po3は器台の脚部である。これらの遺物から、土坑の時期は弥生時代中期と考えられる。



第205図 第55土坑遺構図



第206図 第55土坑遺物図

第56土坑（図版63）

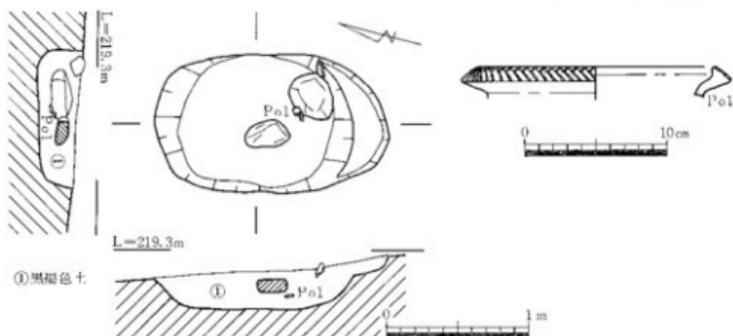
12K・L地区にまたがり、第55土坑の東、第60土坑の南より検出した。東側は耕作溝によって壊されているが、隅丸方形の貯蔵穴と思われる。主軸はN・36°-Eをとり、規模は長辺1.20m、短辺92cm、深さ17cmを測る。底面は平坦で、面積は0.86㎡になる。遺物は検出できなかった。



第207図 第56土坑遺構図

第58土坑（図版63）

12L地区に位置し、北に第13掘立柱建物跡、第77土坑、東に第10掘立柱建物跡、西に第60土坑がある。平面形は楕円形、主軸はN-15°-Wである。長軸1.64m、短軸1.00m、

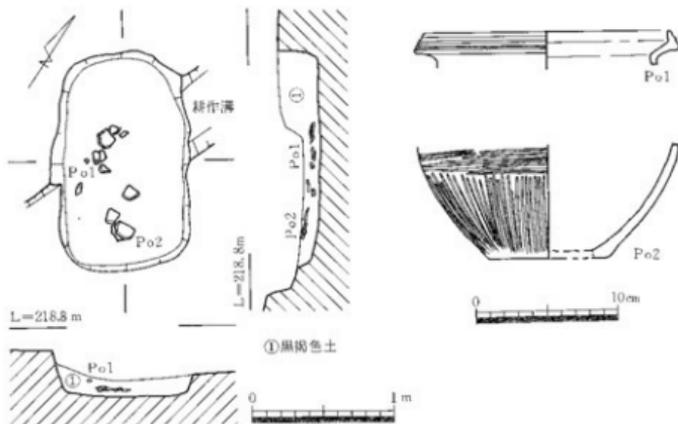


第208図 第58土坑遺構・遺物図

深さ40cmを測る。南側は一段浅くなっており、その深さは20cmである。底面は長軸1.07m、短軸92cmを測る。遺物は弥生土器片を検出した。

#### 第59土坑 (図版63)

11L地区に位置し、第13掘立柱建物跡のP2と切り合っているが、耕作による攪乱がひどく、新旧関係は判断できなかった。平面プランは隅丸方形で、主軸N-32°-W、長辺1.53m、短辺96cm、深さ40cmを測る。壁はほぼ垂直に落ち、底面は長辺1.45m、短辺82cmであった。底面近くで、弥生土器Po1・2を検出した。時期は弥生時代中期と考えられる。



第209図 第59土坑遺構・遺物図

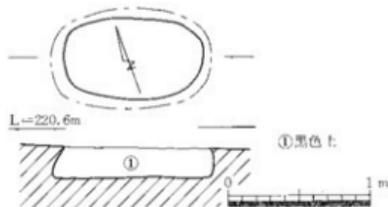
#### 第60土坑 (図版63)

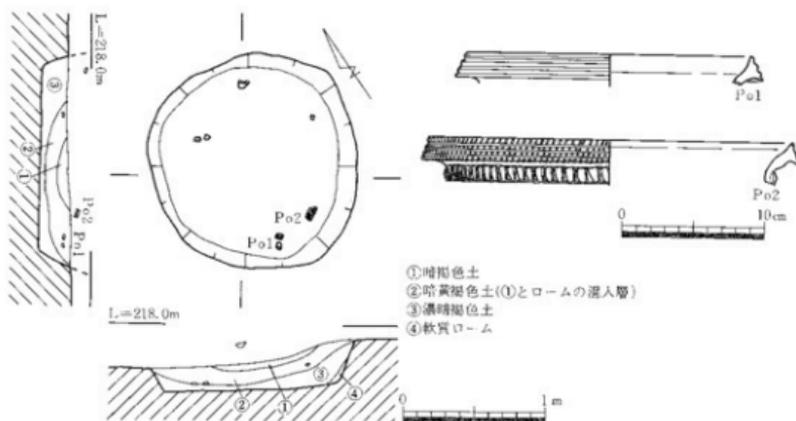
12K、12L地区に位置し、第56土坑の北、第10掘立柱建物跡の西、第9竪穴住居跡の東にあたる。長軸1.49m、短軸1.46mのほぼ円形の土坑である。深さは42cmを測り、西側で浅くなっている。底面は平坦で、その面積は1.26㎡になる。遺物を少量検出した。その内第2竪穴住居跡出土遺物Po15と同一個体のものもある。Po2は甕で、口縁部に3条の凹線、頸部に圧痕を有する貼付凸帯が認められる。時期は弥生時代中期である。

#### 第63土坑 (図版63)

15N地区の北西にあり、第6掘立柱建物跡の南東に位置する。主軸をN-71°-Wにとり平面形は楕円形である。長軸1.00m、短軸56cm、深さ46cmを測る。断面は袋状を呈する。

第210図 第63土坑遺構図





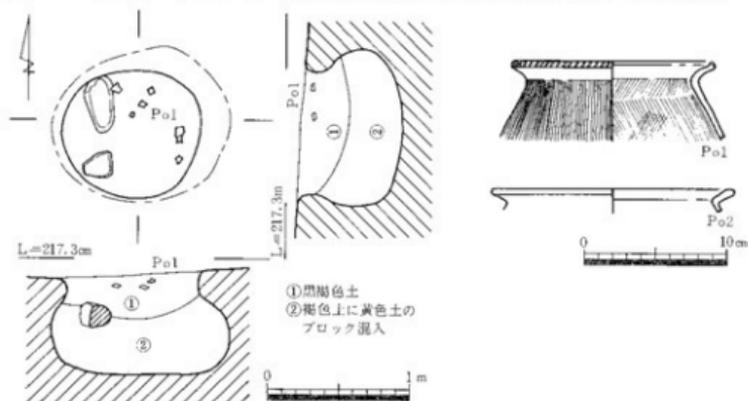
- ①暗褐色土  
 ②暗黄褐色土(①とロームの混入層)  
 ③濃暗褐色土  
 ④軟質ローム

第211図 第60土坑遺構・遺物図

底面も楕円形で長軸1.15m、短軸72cmを測る。遺物は底面直上で弥生土器片を検出したが図化できなかった。時期は弥生時代中期と考えられる。

第65土坑 (図版64)

11L地区の北西に位置し、南に第13掘立柱建物跡がある。遺構は円形を呈する上坑で、袋状をなす。上縁部長軸98cm、短軸90cm、深さ72cm。底面は楕円形で長軸1.26m、短軸1.10mを測る。埋土は2層で、第①層からは甕片の出上りがみられ、第②層掘り下げ中にも弥生土器が出土している。Po1は口縁口唇部が外へわずかに張り出し、上方へあがる。口縁部には刻み目が施される。時期は甕などより弥生時代中期後葉と考えられる。



- ①黒褐色土  
 ②褐色上に黄色土の  
 ブロック混入

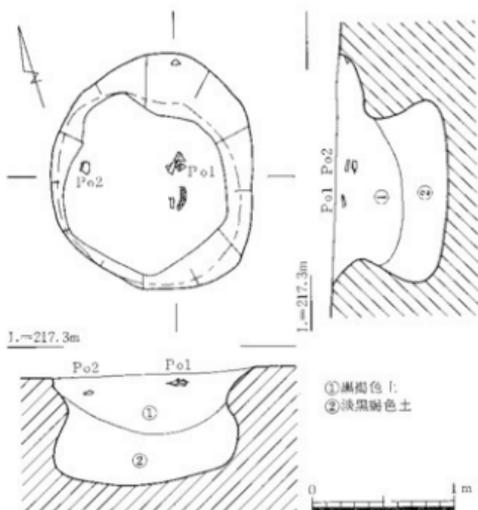
第212図 第65土坑遺構・遺物図

### 第67土坑 (図版64)

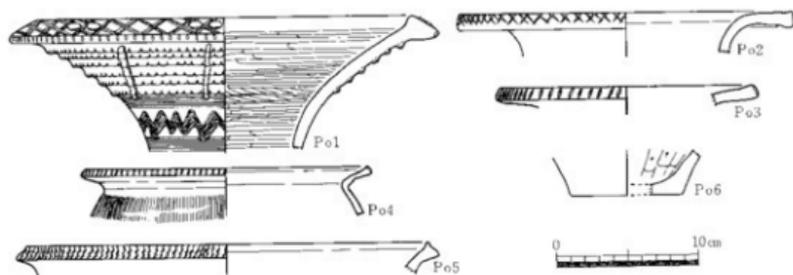
11K地区の中央に位置し、南に第2溝状遺構と第66土坑がある。遺構は楕円形を呈する土坑で、袋状をなす。上縁部長軸1.70m、短軸1.42m、深さ80cm。底面は円形で長軸1.30m、短軸1.28mを測る。埋土は2層であり、多数の土器片が含まれていた。第①層からは壺、甕の口縁部が出土している。Po1は壺の口縁部で、口唇部が横へ張りだす。口唇上部には2つで一単位の円形浮文が施される。口縁外面には6条の貼付凸帯がめぐり、凸帯には刻み目が施される。

また貼付凸帯の上より粘土紐を縦

に貼り付けている。頸部外面は11条を一単位とした櫛歯凹線の間に、10条を一単位の波状文がめぐり、内面はハケ目の後ナデ、その上を磨いている。時期は、壺、甕より弥生時代中期後葉と考えられる。



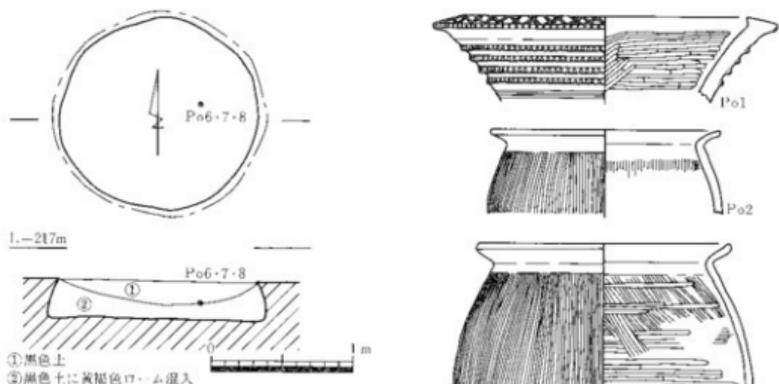
第213図 第67土坑遺構図



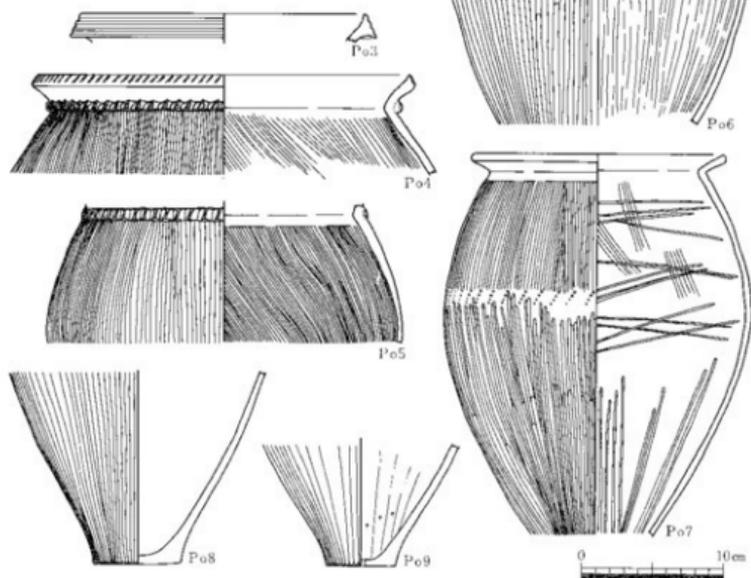
第214図 第67土坑遺物図

### 第68土坑 (図版64・65)

11J地区の北東隅にあり、第14掘立柱建物跡の北西、第15掘立柱建物跡の南東に位置する。平面形は円形で、長軸1.37m、短軸1.34m、深さ32cmを測る。底面も円形で長軸、短軸とも1.48mを測る。断面は袋状である。遺物は埋土中より壺(Po1)、甕(Po2～7)土器底部(Po8・9)を検出した。この遺構の時期は弥生時代中期と考えられる。



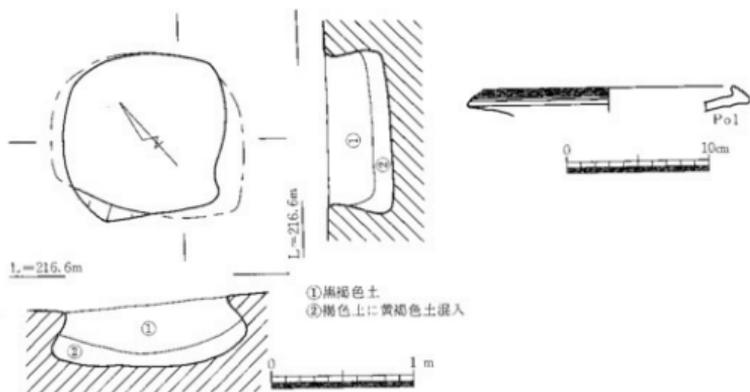
第215図 第68土坑遺構図



第216図 第68土坑遺物図

第69土坑（図版65）

10 K 地区の東に位置し、南に第76土坑がある。遺構は方形を呈する土坑で、袋状をなす。上縁部長辺1.16m、短辺1.14m、深さ46cm。底面は長方形で長辺1.38m、短辺1.16mを測る。埋土は2層で、掘り下げ中に弥生土器を検出した。Po1は壺の口縁部で、口唇

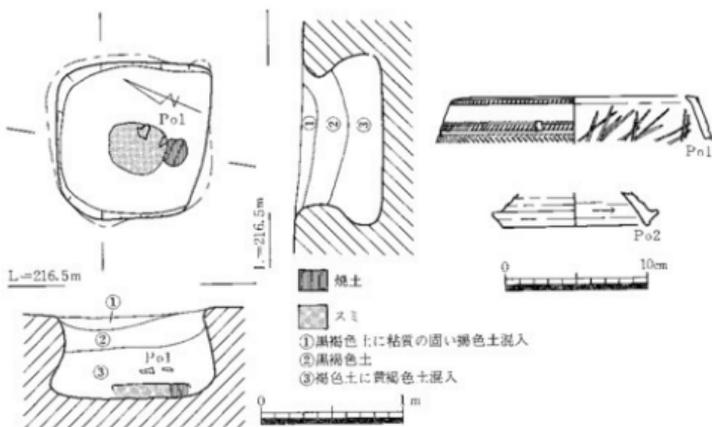


第217図 第69土坑遺構・遺物図

部が横へ張り、上方へわずかにあがる。口縁部には4条の凹線が施される。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

第70土坑 (図版65)

10K地区の北東に位置し、第88土坑を切って作られている。遺構は方形を呈する土坑で、袋状をなす。上縁部長辺1.12m、短辺1.08m、深さ58cm、底面の長辺1.22m、短辺1.16mを測る。埋土は3層で、床面中央で焼土面と炭を検出している。上器は掘り下げ中に壺、甕などの小片を、第③層よりPo1の無頸壺、Po2の器台を、また焼土面の上でススの付着した甕の胴部片を検出した。Po1は口唇部及び胴部に木口状工具で刻み目が施され、



第218図 第70土坑遺構・遺物図

胴部の刻み目の上に粘土紐が貼り付けられている。内面は磨き。Po2 は器台の脚部と考えられる。外面には丹塗りが施される。内面はケズリ。時期は、壺、器台などより弥生時代中期後葉と考えられる。

### 第71土坑 (図版65)

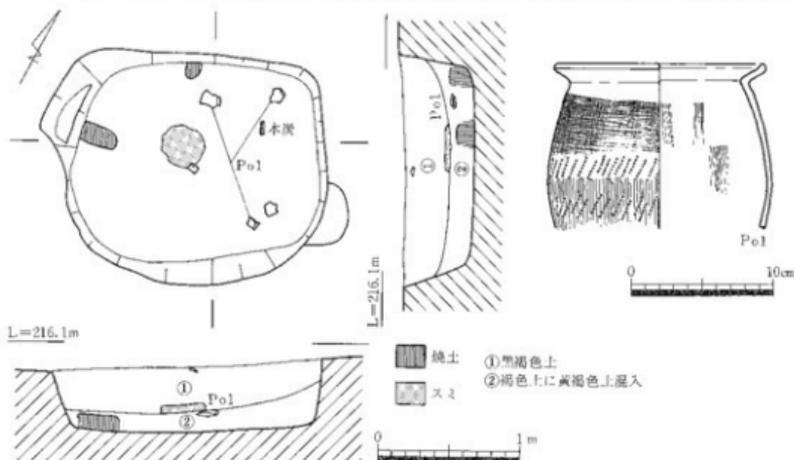
10K地区の北東に位置し、北西側に第75土坑がある。遺構は方形を呈する土坑である。長辺1.04m、短辺1.00m、深さ40cmを測る。埋土は2層で、土器は掘り下げ中に壺、甕片を検出した。近接した第69・70土坑は袋状であるので、この土坑も袋状であったと考えられる。時期は付近の上坑、検出した壺、甕片より弥生時代中期と考えられる。



第219図 第71土坑遺構図

### 第72土坑 (図版65)

9・10K地区にまたがり、南側に第75土坑がある。遺構は隅丸方形を呈する土坑で、長辺2.00m、短辺1.64m、深さ46cmを測る。主軸はN-62°-Eをとる。土坑中央には炭のひろがりが見られ、土坑内の隅には焼土が認められた。また埋土の中から炭化木の出

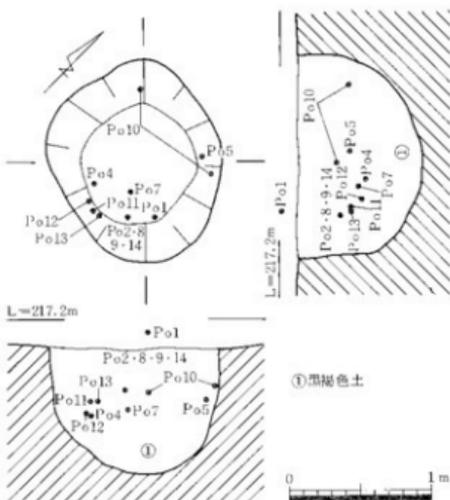


第220図 第72土坑遺構・遺物図

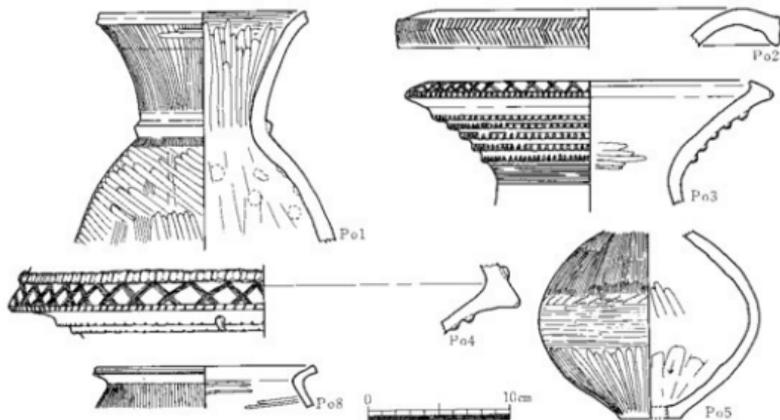
土もあった。埋土は2層である。上坑内より多数の壺、甕片を検出した。その内Po1は口縁部が「く」の字状で口縁端部が角ばりながら丸く終る。胴部外面には、櫛状工具による施文が2段にわたって施される。また口縁部、胴部ともにススの付着がみられる。時期は甕などより弥生時代中期後葉と考えられる。

### 第73土坑 (図版66)

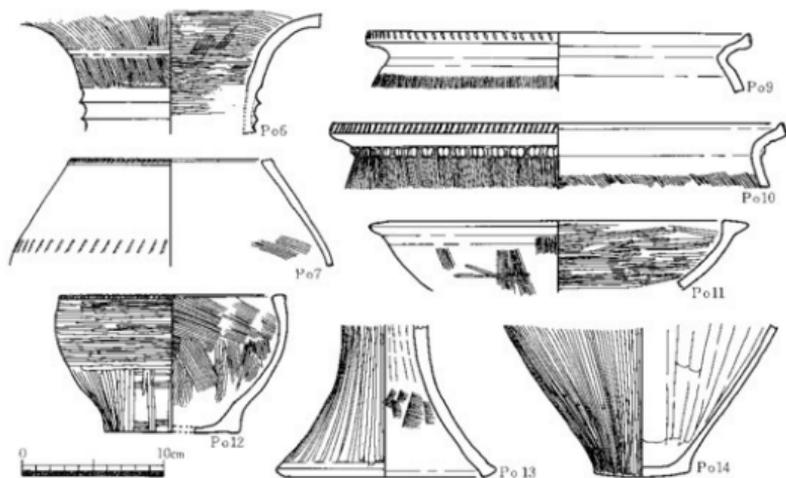
11・12J地区にあり、第8竪穴住居跡の西に位置する。平面形は不整形円形で、長軸1.45m、短軸1.20m、深さ94cmを測る。遺物は埋土中から多量の土器片を検出したが、完形品になるものが1点もないことから、この土坑は貯蔵穴として使用された後、こわれた土器の捨て場として再利用されたのではないかと考えられる。遺物で図化できたものは、壺(Po1~7)、甕(Po8~10)、高坏(Po11)、鉢(Po12)、器台(Po13)である。時期は弥生時代中期と考えられる。



第221図 第73土坑遺構図



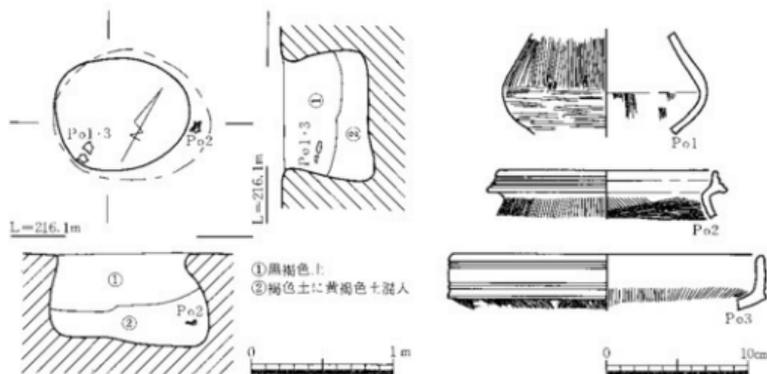
第222-①図 第73土坑遺物図



第222-②図 第73土坑遺物図

第75土坑 (図版66)

10K地区の北西に位置し、西に第16掘立柱建物跡がある。遺構は楕円形を呈する土坑で袋状をなす。上縁部長軸94cm、短軸80cm、深さ66cm、底面も楕円形で、長軸1.14m、短軸92cmを測る。埋土は2層で、第①層よりPo1～3を検出した。その他壺、甕片の出土もみられた。Po1は算盤形をした壺の胸部で、外面はハケと磨き、内面はハケの後ナデている。内外面ともに丹塗りを施す。Po2は甕で、口縁口唇部が上下へわずかづつ張りだす。口縁部に3条の凹線がめぐる。Po3は高杯で口縁部は上方へ立ちあがり、計6条の凹

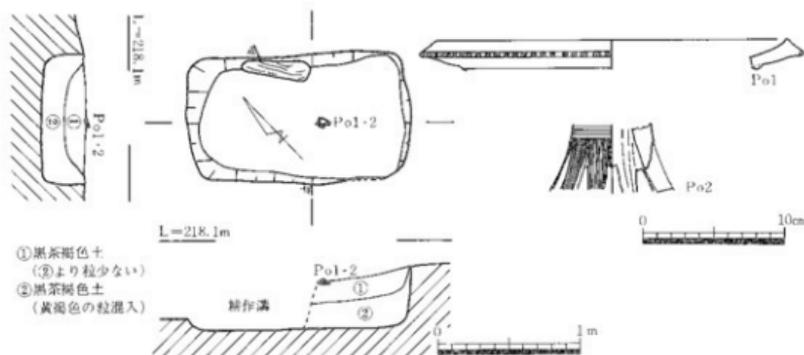


第223図 第75土坑遺構・遺物図

線がめぐる。内外面ともに丹塗りを施す。時期は壺、甕、高坏などより弥生時代中期後葉と考えられる。

### 第77土坑 (図版67)

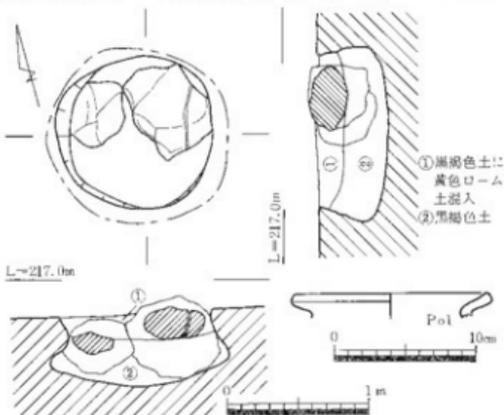
11L地区南側、12L地区北側にわたって位置しており、北に第59土坑、南に第58土坑がある。また、第13掘立柱建物跡と切り合うが、新旧関係は不明である。土坑の北西側半分は耕作溝のために削られていたが、平面プランは、長辺1.60m(推定)、短辺90cm、深さ44cmの隅丸方形で、主軸をN-47°-Wにとる。壁はほぼ垂直に落ち、底面の長辺1.43m、短辺80cmを測る。土坑上部より弥生土器片を検出した。時期は弥生時代中期と考えられる。



第224図 第77土坑遺構・遺物図

### 第79土坑 (図版67)

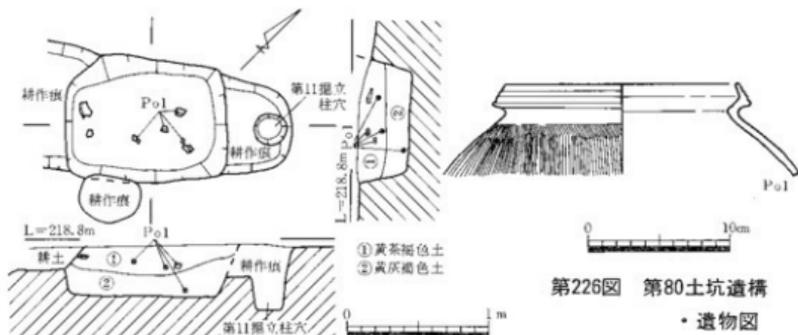
11K地区の西、一部11J地区にかかる円形プランの袋状貯蔵穴である。近くには北隣りに第14掘立柱建物跡があり、南4mの所に第8竪穴住居跡がある。また東には第66・67土坑がある。径約1.06m、底面径約1.28m、深さ52cmを測る。底面は皿状に周縁部が盛り上がっている。遺物は第①層より少量出土している。第79土坑は北側半分を径40~70cmの大きな石で塞がれていたが、その様子からこれらの石は貯蔵穴廃棄後、人為的に入れられたものと考えられる。



第225図 第79土坑遺構・遺物図

### 第80土坑 (図版67)

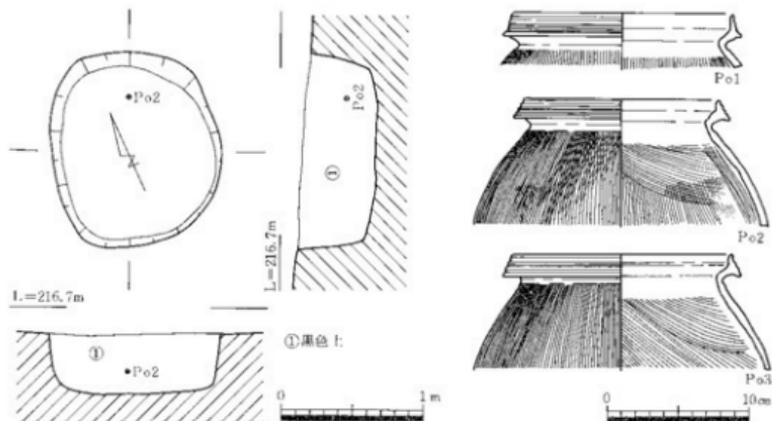
13L地区の南西隅に位置し、第11掘立柱建物跡と切りあう。平面形は隅丸方形を呈し、主軸はN-45°-Eにとる。規模は長辺1.13m、短辺87cm、深さ38cmを測る。底面は平坦で側溝はない。底面積は0.65㎡になる。遺物は弥生土器片を検出した。いずれもPo1と同一個体と考えられる。時期は弥生時代中期であろう。



第226図 第80土坑遺構・遺物図

### 第81土坑 (図版67)

11I地区の北東にあり、第20掘立柱建物跡の南西に位置する。主軸をN-24°-Eにとり、平面形は隅丸方形である。長軸1.35m、短軸1.18m、深さ46cmを測る。底面も隅丸方形で長軸1.16m、短軸1.06mを測る。遺物は底面で甕(Po1~3)を検出した。時期は弥生時代中期と考えられる。



第227図 第81土坑遺構・遺物図

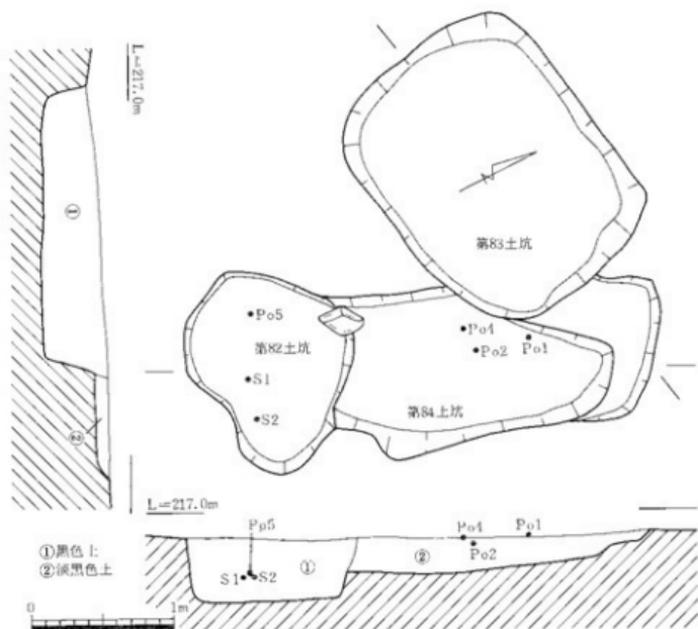
### 第82・83・84土坑（図版68）

11 I 地区の南東にあり、第12掘立柱建物跡の北に位置する。3つの土坑を切り合う形で検出した。第82・83土坑は第84土坑よりも新しいが、第82土坑と第83土坑の新旧関係は不明である。

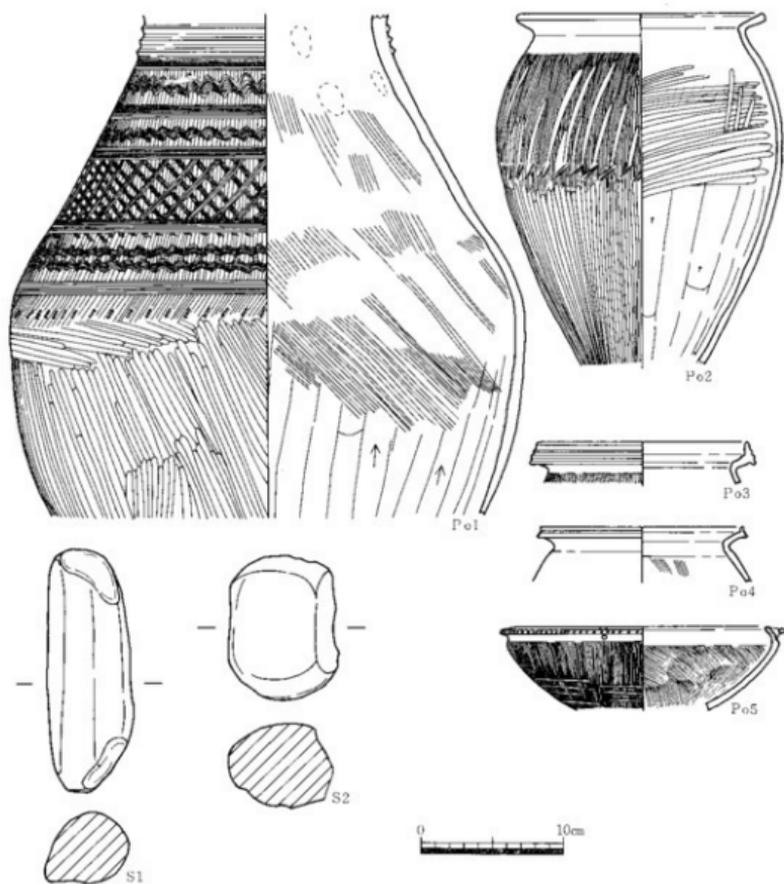
第82土坑は平面形が不整円形で、長軸1.50m、短軸1.10m、深さ46cmを測る。底面も不整円形で長軸1.24m、短軸1.00mを測る。遺物は底面直上で磨石（S1）、蔽石（S2）、高坏（Po5）を検出した。この遺構の時期は弥生時代中期であろう。

第83土坑は平面形が隅丸長方形で、長辺2.05m、短辺1.60m、深さ45cmを測る。側溝はない。主軸をN-78°-Eにとる。底面も隅丸長方形で、長辺1.82m、短辺1.37mを測る。遺物は何も検出しなかったが、貯蔵穴と思われる。

第84土坑は検出した平面形が長方形であったが10cm掘り下げたところで、楕円形の落ち込みを検出した。結局、2段の掘り方をもつ。長辺2.40m以上、短辺1.10m、深さ33cmを測り、主軸をN-27°-Eにとる。遺物は中央部から、壺（Po1）と甕（Po2~4）を検出した。この遺構の時期は弥生時代中期と考えられる。



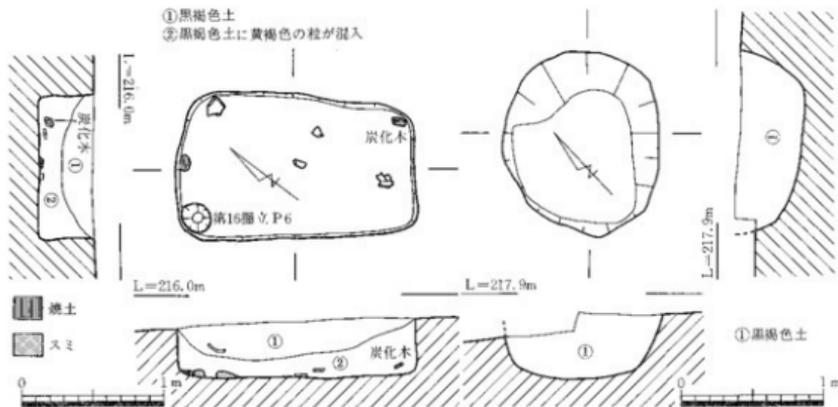
第228図 第82・83・84土坑遺構図



第229図 第82・83・84土坑遺物図

第85土坑 (図版68)

10 J・K地区北側に位置し、第16掘立柱建物跡とは、P2を切る形で重なっている。土坑検出面は確認できなかったが、P2の痕跡が第85土坑底面で検出されているため、第85土坑の方が、後に作られたものと判断される。平面プランは隅丸方形で、主軸をN-37°-Wにとり、長辺1.68m、短辺1.00m、深さ40cmを測る。底面の長辺は1.62m、短辺97cmであった。底面北西側で焼土を検出しており、底面全体からも炭が多く検出されている。湿気防止用に炭を敷いていたものかも知れない。底面では、弥生土器片が出土しているが図化できなかった。時期は弥生時代中期と思われる。

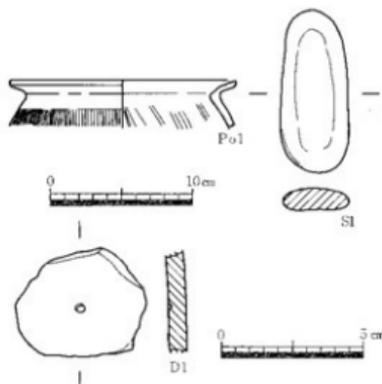


第230図 第85土坑遺構図

第231図 第86土坑遺構図

第86土坑 (図版68)

12K地区の北西に位置し、第8・第9竪穴住居跡と切り合う。新旧関係は、第9竪穴住居跡よりも新しい。第8竪穴住居跡と同時期かそれより新しいとも考えられ、同時期とするならば第8竪穴住居跡の貯蔵施設とも考えられる。平面形は不整円形で、主軸をN-42°-Eにとる。長軸1.28m、短軸1.08m、深さ48cmを測る。底面は平坦である。遺物は、弥生土器片転用の紡錘車未製品(D1)と磨石(S1)を検出した。時期は弥生時代中期と考えられる。

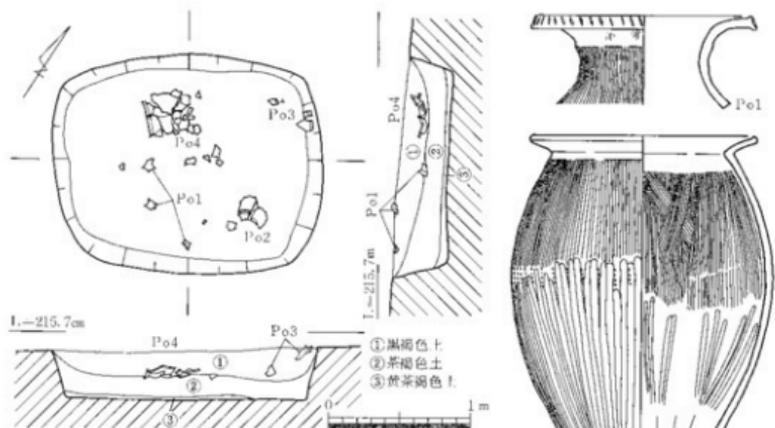


第232図 第86土坑遺物図

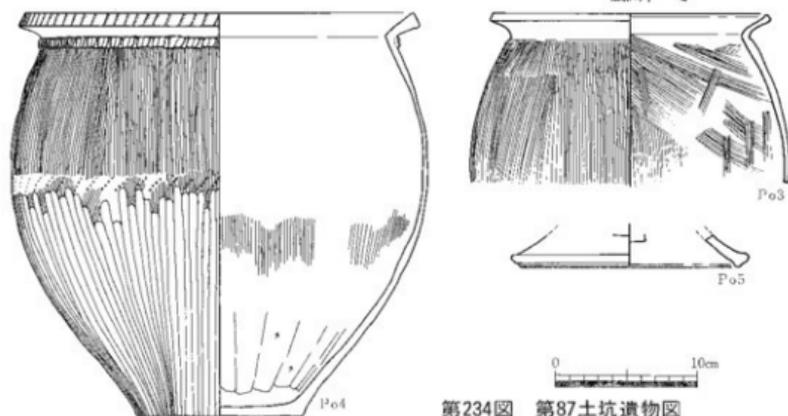
第87土坑 (図版69)

9J地区の南東側に位置する土坑である。周辺には南に第85土坑、第16掘立柱建物跡があり、西に第19掘立柱建物跡がある。第87土坑は主軸をN-56°-Eにとる。平面形は隅丸方形の土坑である。長辺は1.9m、短辺1.55m、深さ40cmを測る。底面は平坦で、面積は約1.98㎡になる。遺物は壺(Po1)、甕(Po2~4)があるが、底面に密着するものはない。

遺物は使用後廃棄されたものと思われる。壺は口縁端部が上下に肥厚し、端面にヘラ状工具による刻み目が施されている。頸部外面は縦ハケ目、内面は剥離のため調整不明であ



第233図 第87土坑遺構図



第234図 第87土坑遺物図

る。甕は頸部に圧痕の顕著な凸帯があるもの (Po 4) とないもの (Po 2・3) がある。いずれも弥生時代中期中葉～後葉のものである。

#### 第89土坑 (図版69)

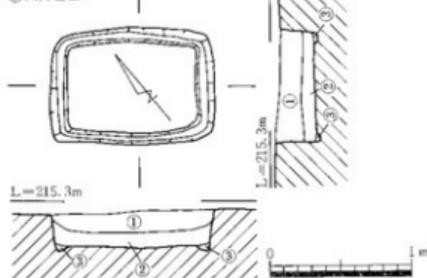
9 J地区の西隅より検出した小型の貯蔵穴である。近くには北に第21掘立柱建物跡、第21土坑、南に第19掘立柱建物跡がある。地形は南から緩やかに下っている。

第89土坑は上軸をN-50°-Wにとる方形プランの土坑である。規模は長辺1.15m、短辺84cm、深さ30cmを測る。底面は平坦で、幅6～9cm、深さ2cmの側溝が四壁際をめぐる。底面積は0.56㎡になる。遺物は検出したが図化できなかった。

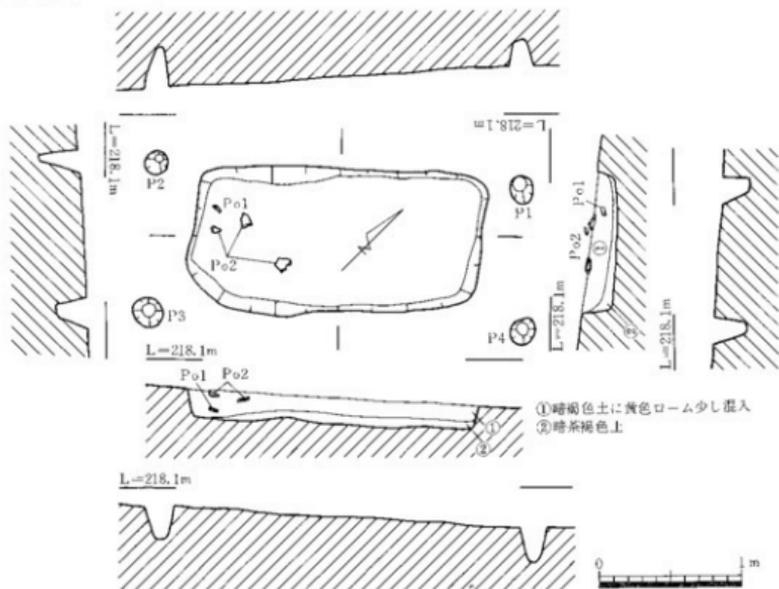
### 第90土坑 (図版69)

9 J地区北側、8 J地区南側にかけて位置しており第21掘立柱建物跡の内側にある。土坑のプランは不整隅丸方形で、主軸をN-45°-Eにとり、長辺2.10m、短辺1.00m、深さ25cmを測る。底面の長辺は1.94m、短辺92cmである。土坑周囲には4つのピットがあるが、これは土坑内貯蔵物を保護するような上部施設に伴う柱穴であろうか。ピットの規模はP 1 (19×17-12)、P 2 (17×16-29)、P 3 (21×19-24)、P 4 (20×17-24) cmで、柱穴間距離はP 1より2.58m、1.10m、2.58m、1.10mである。弥生土器の破片を土坑内より検出している。ピット内からは遺物を検出しなかった。

① 暗褐色土に黄色ローム少し混入  
② 暗褐色土に黄色ローム多く混入  
③ 黄褐色土



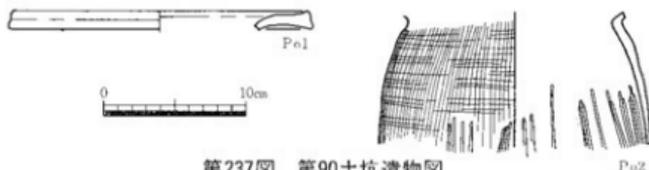
第235図 第89土坑遺構図



第236図 第90土坑遺構図

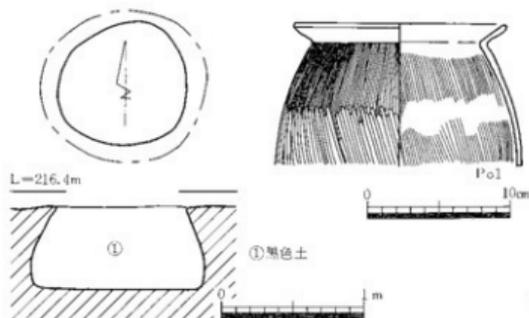
### 第91土坑 (図版70)

10 I地区のほぼ中央に位置する。主軸はほぼ東西で、平面形はほぼ円形である。長軸90cm、短軸87cm、深さ53cmを測る。底面もほぼ円形で長軸1.16m、短軸1.07mを測る。断面



第237図 第90土坑遺物図

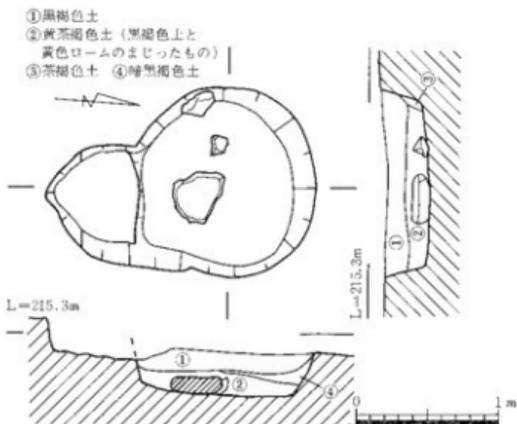
は袋状である。遺物は底面直上で甕(Po1)を検出した。Po1は口縁部内外面横ナデ、胴部外面上半は縦方向のハケ目、以下はヘラ磨き、内面は縦方向のハケ目調整。この遺構の時期は出土遺物などにより、弥生時代中期と考えられる。



第238図 第91土坑遺構・遺物図

#### 第92土坑 (図版70)

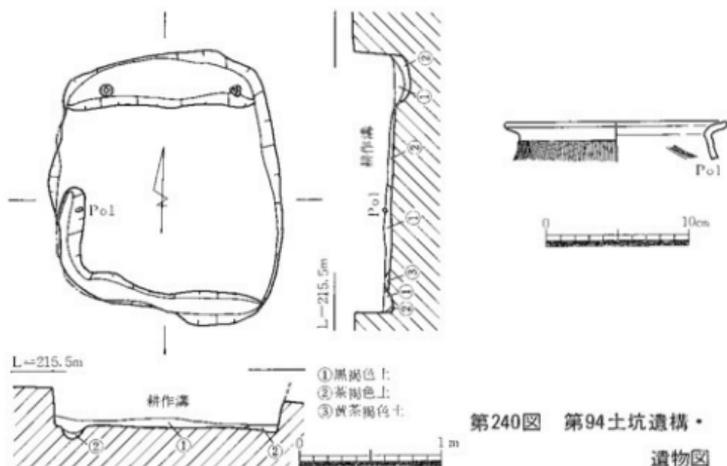
9 K地区の東側に位置する不整形の土坑である。南側は木の根の抜き取り穴によって壊されている。規模は南北1.23m、東西1.33m、深さ36cmを測る。底面は平坦で面積は0.97㎡になる。底面から2個の石を検出した。いずれも底面に密着していた。他に弥生土器片が出上しているが図化できなかった。



第239図 第92土坑遺構図

#### 第94土坑 (図版70)

8 H地区の南東隅に位置する隅丸方形の土坑である。地形は西からゆるやかに下がり、北側、東側からは遺構は検出できなかった。第94土坑は主軸をN-2°-Wにとる。規模は長辺1.8m、短辺1.64m、深さ32cmを測る。底面は平坦で、北、南側に幅24~40cm、深さ8~12cmの側溝が認められる。北側側溝には両側に、深さ5cm位の小穴がある。底面積

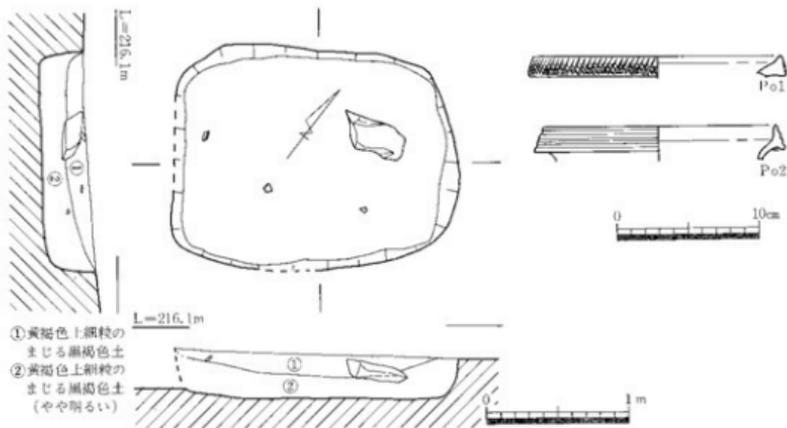


第240図 第94土坑遺構・遺物図

は1.82㎡になる。上層は耕作により攪乱が著しいが低い所で弥生土器の口縁部破片が出土している。時期は弥生時代中期である。

#### 第95土坑（図版70）

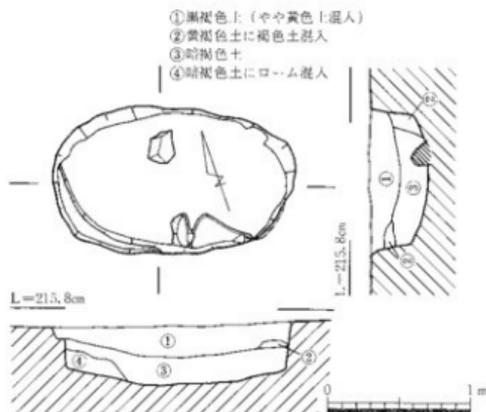
10H地区北東、第22掘立柱建物跡の南西、第100土坑の北西に位置する、隅丸方形の大型の上坑である。主軸をN-54°-Eにとり、長辺2.00m、短辺1.55m、深さ36cm、底面の長辺1.86m、短辺1.44mを測る。南西・南東側の壁は、一部耕作等により破壊されていた。第①層より弥生上器片（Po1・2）が出土しているが流入したものと考えられる。



第241図 第95土坑遺構・遺物図

### 第97土坑 (図版70)

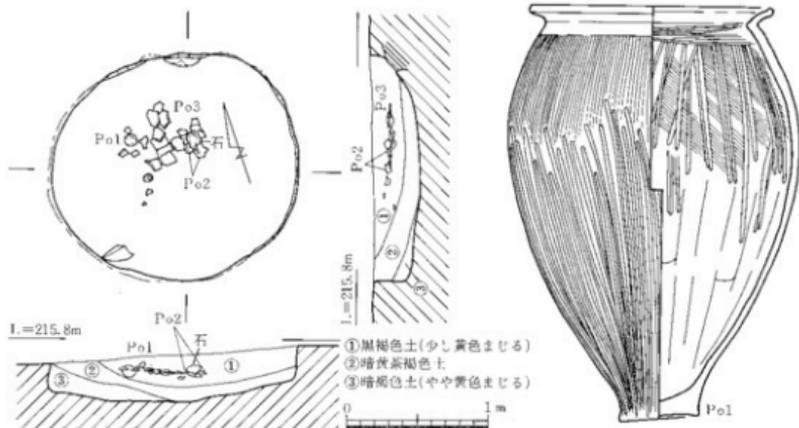
10G地区の北東に位置し、第98・104土坑と隣り合う。少し離れるが北東には第10堅穴住居跡、第24掘立柱建跡がある。平面形は楕円形で、西側に浅い段を有する。主軸はN-70°-Wで、規模は長軸1.67m、短軸1.01m、深さ47cmを測る。底面は平川だが2個人大きな石が露出していて利用できる底面積は1.01㎡になる。弥生土器が出土しているが図化できるものはなかった。



第242図 第97土坑遺構図

### 第98土坑 (図版70・71)

10G地区に位置し、第97土坑の南隣りにあたる。平面形はほぼ円形で、径は約1.60m、



第243図 第98土坑遺構図

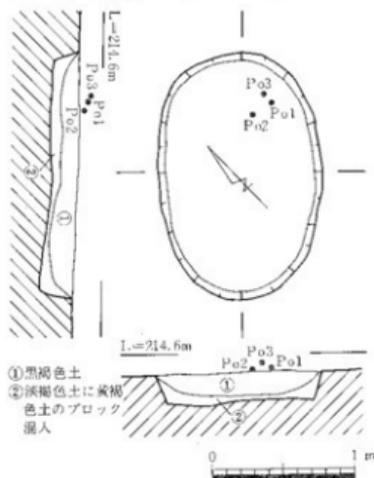


第244図 第98土坑遺物図

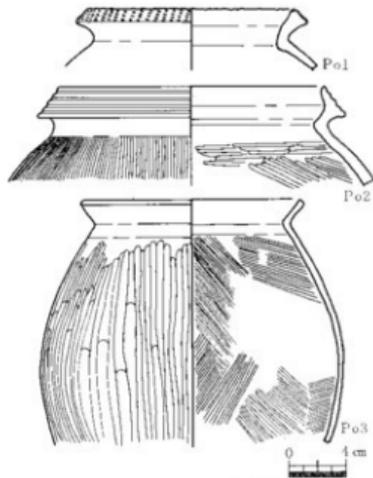
深さは40cmを測る。底面は中央がやや低くなり、断面はスリパチ状になる。底面積は2.16㎡以上になる。遺物を上面からまともって検出した。ほとんどPo1の甕が押しつぶされた破片であり、土器は完形に復元できた。外面にススが附着し、内面に炭化物が認められる。口径16.9cm、器高29.3cm、底部径5.5cmである。Po3の底部は穿孔されている。時期は弥生時代中期である。

#### 第99土坑 (図版70・71)

9 G地区の西にあり、第101土坑の北に位置する。主軸をN-45°-Eにとり、平面形は楕円形である。長軸1.76m、短軸1.15m、深さ22cmを測る。遺物は埋土中より、甕(Po1~3)を検出した。この遺構の時期は弥生時代中期と考えられる。



第245図 第99土坑遺構図



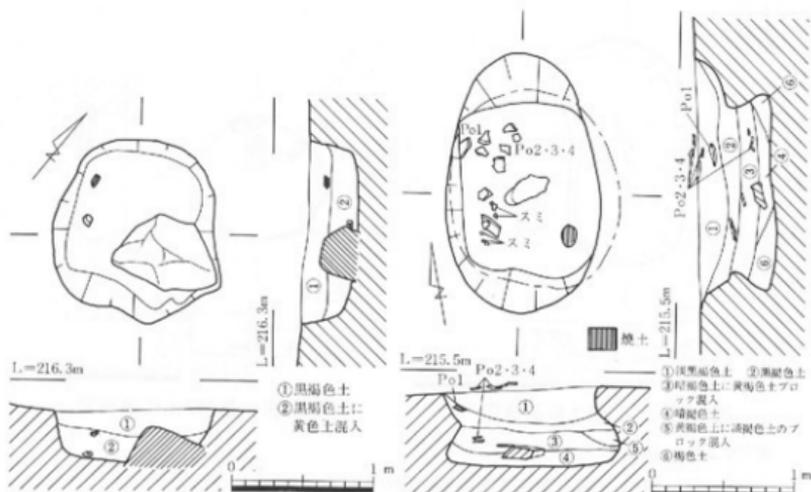
第246図 第99土坑遺物図

#### 第101土坑 (図版71)

10H・I地区に位置する。東側に第91土坑、北西側に第95土坑、北及び北東側には第17・22掘立柱建物跡がある。南側に石があるためやや歪な形ではあるが、プランは隅丸方形である。この石は地山にしっかりとくい込んでいるため、除去することを断念して、空いたスペースを貯蔵用に使っていたものと考えられる。長辺1.32m、短辺1.08m、深さ40cm。底面の長辺104cm、短辺85cmを測る。主軸をN-39°-Wにとる。遺物は弥生土器片を検出したが図化できなかった。時期は弥生時代中期と考えられる。

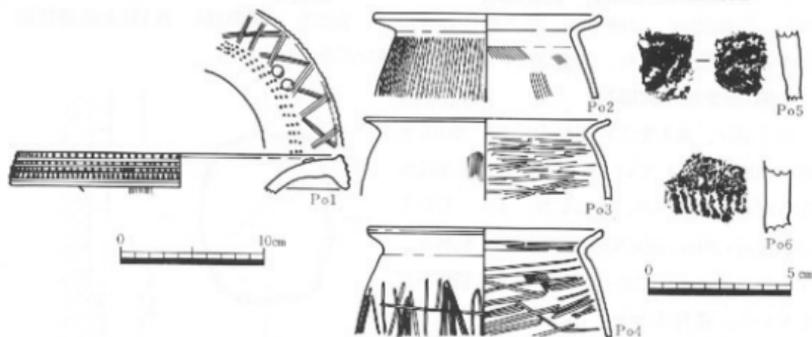
#### 第101土坑 (図版71・72)

9 G地区の南西にあり、第108穴住居跡、第24掘立柱建物跡の西に位置する。主軸をN-10°-Eにとり、平面形は楕円形である。長軸1.82m、短軸1.07m、深さ56cmを測る。袋



第247図 第100土坑遺構図

第248図 第101土坑遺構図

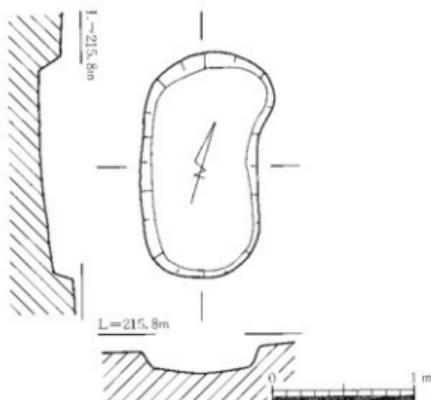


第249図 第101土坑遺物図

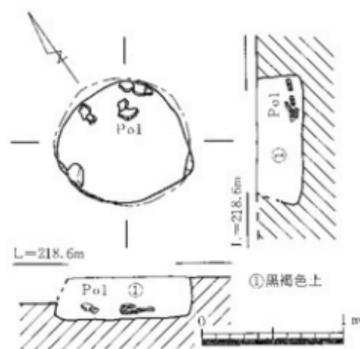
状の土坑であるが、上部は崩れている。底面も楕円形で長軸1.37m、短軸1.20mを測る。遺物は埋土中で、弥生時代中期の壺（Po1）と甕（Po2～4）を検出した。遺構の時期は弥生時代中期と考えられる。

#### 第104土坑（図版72）

10G地区の北東に位置し、第10竪穴住居跡の南にあたる。南には第97・98土坑という貯蔵穴がある。第104土坑も浅めの貯蔵穴と思われる。平面形は楕円形に近く、主軸をN-16°-Wにとる。規模は長軸1.61m、短軸82cm、深さ22cmを測り、底面積は0.96㎡になる。遺物は検出しなかった。



第250図 第104土坑遺構図



第251図 第107土坑遺構図

#### 第107土坑（図版72）

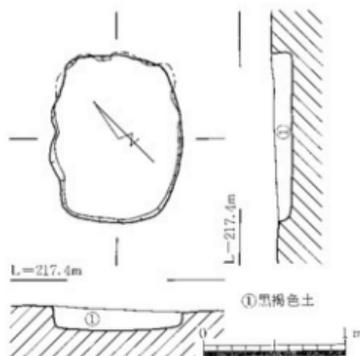
12J地区東側、第8・第9竪穴住居跡の南側に位置している。耕作により一部削られていたが、平面プランはほぼ円形。長軸92cm、短軸88cm、深さ約30cmを測り、袋状を呈する。底面北側より、弥生時代中期の土器の破片が出土している。



第252図 第107土坑遺構図

#### 第108土坑（図版72）

12J地区、第8竪穴住居跡の南側、第107土坑の西側に位置している。耕作により上部はかなり削られていたが、主軸をN-45°-Eにとり、長辺1.20m、短辺85cm、深さ16cmを測り、平面形は隅丸方形である。北側の壁は袋状を呈している。遺物は出土していない。

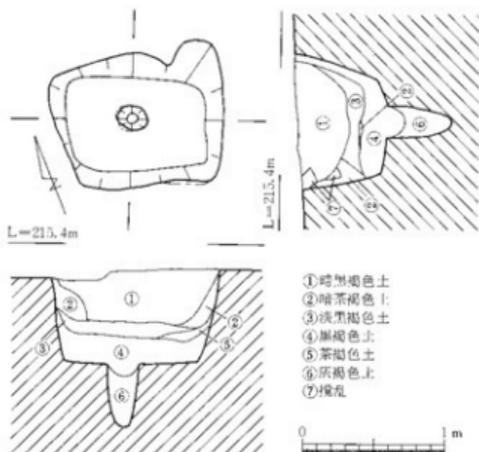


第253図 第108土坑遺構図

## (6) 陥し穴

### 第22土坑 (図版72)

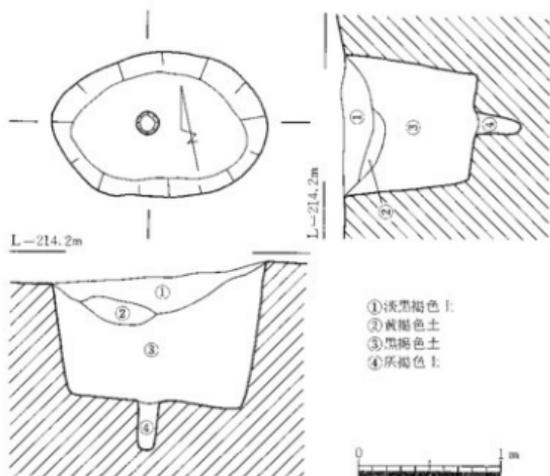
7 G地区の中央部に位置する。主軸をN-69°-Wにとり、平面形は隅丸方形である。長辺1.20m、短辺94cm、深さ68cmを測る。底面も隅丸方形で長辺98cm、短辺65cmを測る。底面中央部には(22×17-45)cmの杭穴がある。遺物は検出しなかった。



第254図 第22土坑遺構図

### 第39土坑 (図版72)

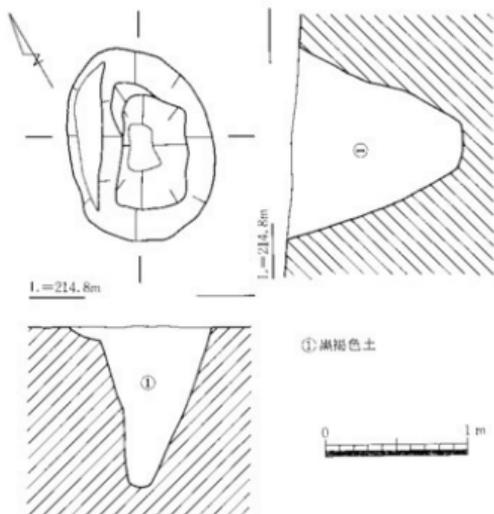
11 F地区の西側中央に位置し、第42土坑の東、第43土坑の北にある。プランは、小判形に近い楕円形で、主軸はN-78°-Wである。底面は平坦である。上縁部長軸1.50m、短軸1.00m、底面までの深さ1.05mで、底面も楕円形を呈し、長軸1.24m、短軸75cmの大きさをもつ。底面中央やや西側に(18×16-32)cmの杭穴がみられる。遺物は出土しなかった。



第255図 第39土坑遺構図

#### 第40土坑 (図版73)

11E地区の中央よりやや南に位置し、第42上坑の南東、第48土坑の北東にある。プランは楕円形で、主軸はN 30°—Eである。上縁部長軸1.34m、短軸1.02m、深さ1.20mを測る。底面は、上縁部よりかなり狭く、平面プランは方形を呈し、やや丸底ぎみになる。底面の大きさは、長軸33cm、短軸16cmになる。底面からは杭穴はみられない。埋土は黒褐色土で、遺物は出土しなかった。かなり深く掘り込まれている。



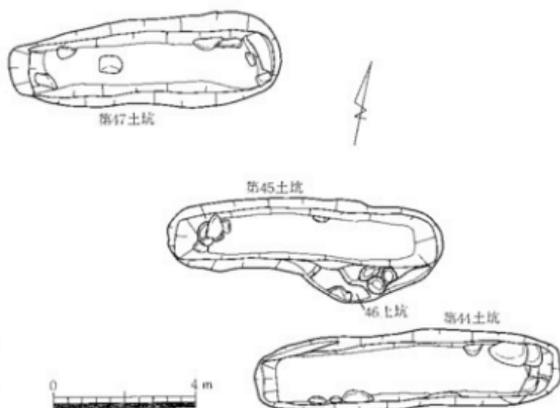
第256図 第40土坑遺構図

#### 第44・45・46・47土坑 (図版73)

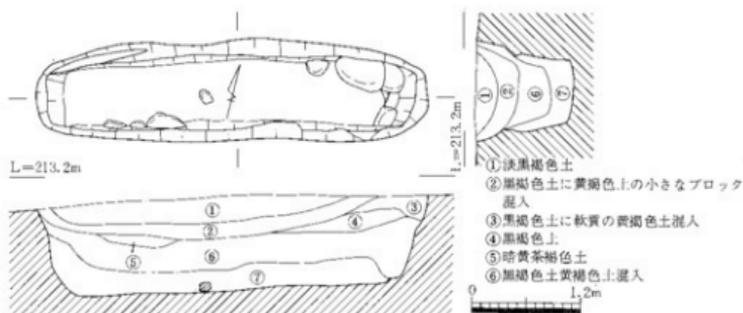
10D地区南側に軸をほぼ同じにして並ぶ人型の土坑である。第44土坑は一部11D地区にかかるが、第44上坑を一番南側として、中央に第45・46土坑、北に第47上坑が位置する。南東側には、陥し穴と考えられる第39・40・48・49土坑が弧状に並んでいる。北側には第7 竪穴住居跡がある。南側は急な崖となっている。

第46土坑は第45土坑に切られ、耕作による攪乱もひどく、その形態等は不明である。

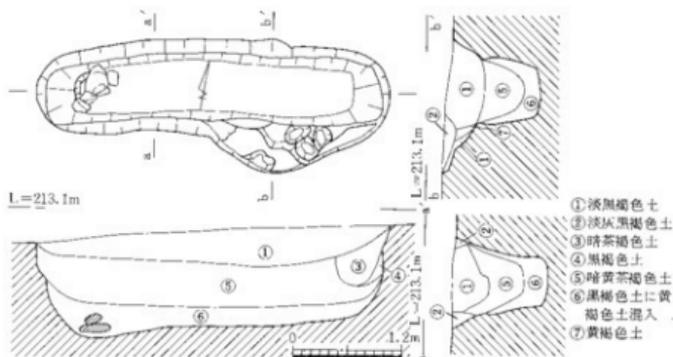
第44・45・47土坑の平面形はいずれも楕円形で、壁は、わずかに袋状を呈し、底部は狭くなる。これは、陥し穴と考えられ



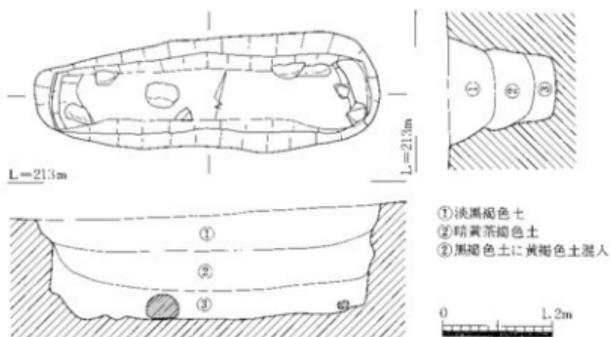
第257図 第44・45・46・47土坑全体遺構図



第258図 第44土坑遺構図 (S =  $\frac{1}{80}$ )

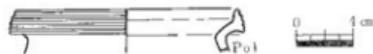


第259図 第45・46土坑遺構図 (S =  $\frac{1}{80}$ )



第260図 第47土坑遺構図 (S =  $\frac{1}{80}$ )

る第40土坑と同じ構造であり、穴に落ちた動物が逃げ出すのを防ぐためのものと考えられ、大型の動物用の陥し穴と判断される。杭穴は検出されていない。



第261図 第44土坑遺物図

第44土坑は、主軸N-75°-E、長軸4.3m、短軸1.8m、底面長軸3.88m、短軸48cm、深さ96cmを測る。

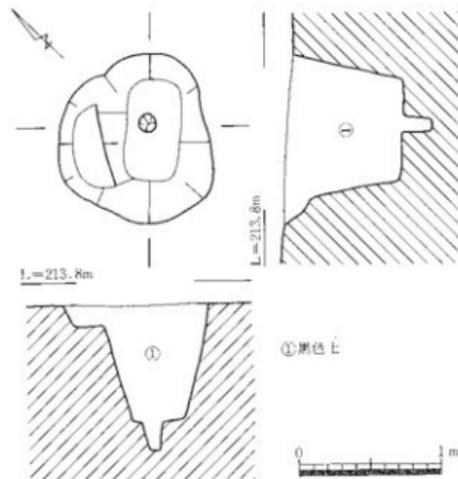
第45土坑は、主軸N-80°-E、長軸3.88m、短軸1.60m、底面の長軸2.83m、短軸57cm、深さ1.05mを測る。

第47土坑は、主軸N-76°-E、長軸3.80m、短軸1.20m、底面の長軸2.58m、短軸58cm、深さ1.14mを測る。

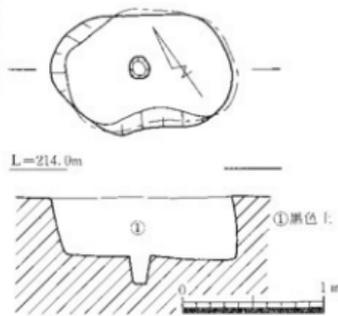
第44土坑では、最下層中で弥生土器片を検出した。Po1は上層からの出上である。弥生時代の陥し穴と考えられよう。また、近くに弥生時代中期の第7竅穴住居跡があるが、動物用の陥し穴の近くに住居があったとは考えがたく、時期差があるものと思われる。しかし、それを判断する良好な資料は得られなかった。

#### 第48土坑 (図版73)

11E地区の南西に位置し、北側に第40土坑がある。遺構は楕円形を呈する上坑で、上縁部長軸1.22m、短軸1.02m、深さ1.02mを測り、底面も楕円形で長軸72cm、短軸36cmを測る。主軸はN-47°-Eである。底面中央には径14cm、深さ20cmの杭穴がある。埋土は黒色土の単一層で、遺物は検出できなかった。時期は不明である。



第262図 第48土坑遺構図



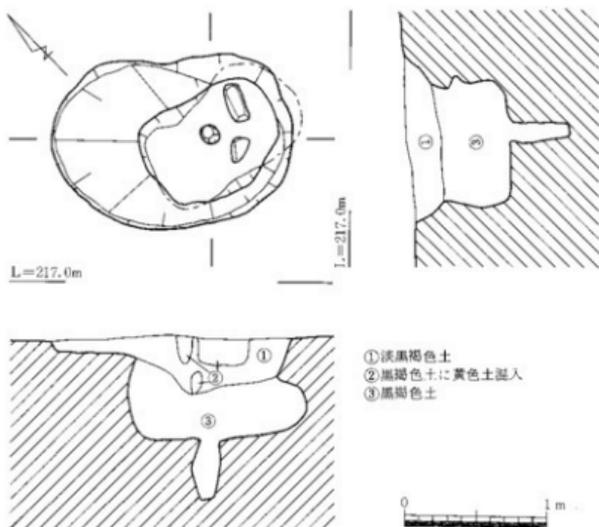
第263図 第49土坑遺構図

### 第49土坑 (図版73)

12E地区の南の中央部にあり、第48土坑の南東に位置する。主軸をN-59°-Wにとり、平面形は楕円形である。長軸1.28m、短軸79cm、深さ81cmを測る。底面中央部には(15×10-38)cmの杭穴がある。遺物は検出しなかった。

### 第103土坑 (図版73)

10F地区に位置し、すぐ西側に第11竪穴住居跡、南西側には、陥し穴と考えられる第39・40・48・49土坑がある。この第103土坑も陥し穴と考えられる。主軸をN-78°-Wにとる二段の掘り方で、袋状を呈する土坑である。上縁は長軸1.69m、短軸1.16mを測り、下縁は長軸1.08m、短軸



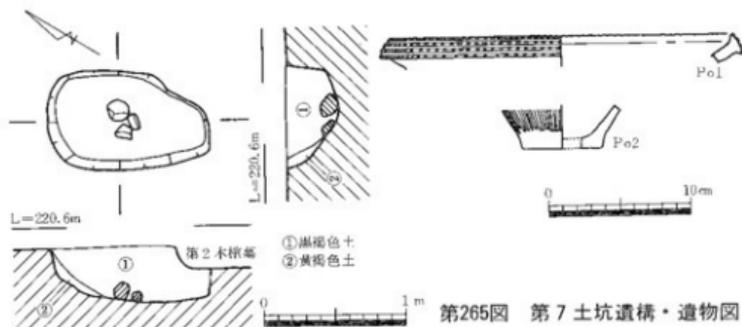
第264図 第103土坑遺構図

80cmを測る。底面では長軸96cm、短軸64cmを測り、底面ほぼ中央部には杭穴(16×14-44)cmがみられる。杭穴もわずかながら袋状を呈する。遺物は出土していない。

## (7) 土坑・溝状遺構・ピット

### 第7土坑

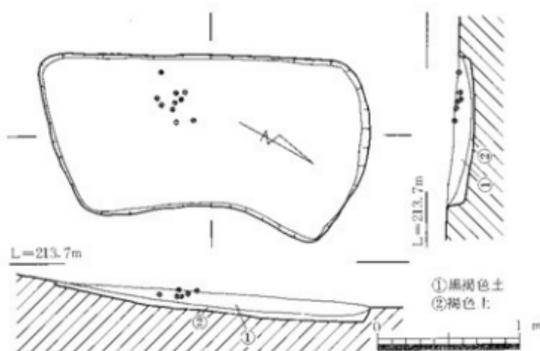
18M地区の南西隅に位置し、東側は第2木棺墓に切られている。南側には第1木棺墓、西側には第1土坑(土塚墓)がある。平面形は楕円形で、長軸1.14m、短軸68cm、深さ34cmを測る。軸方向はN-60°-Eである。土坑内最深部で10~15cmの小石を3個検出した。石はこの地域でよくみる安山岩で、使用痕、焼成痕等はない。遺物には弥生土器片(Po 1・2)がある。土坑の性格は不明であるが、底面に密着した3個の石がそれを考える手がかりになると思われる。



第265図 第7土坑遺構・遺物図

第10土坑 (図版74)

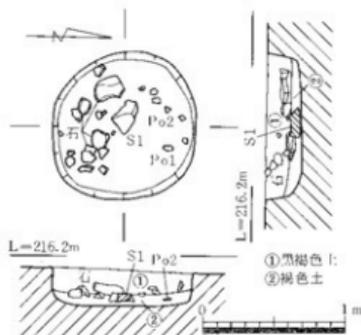
6 D・E地区にまたがり、南側に第12土坑がある。遺構は歪な長方形を呈する上坑で、長辺2.26m、短辺1.08mを測る。主軸はN-30°-Wをとる。土坑南西側より甕の胴部片を検出した。甕は細片のため実測できなかったが、時期は弥生時代中期頃と考えられる。



第266図 第10土坑遺構図

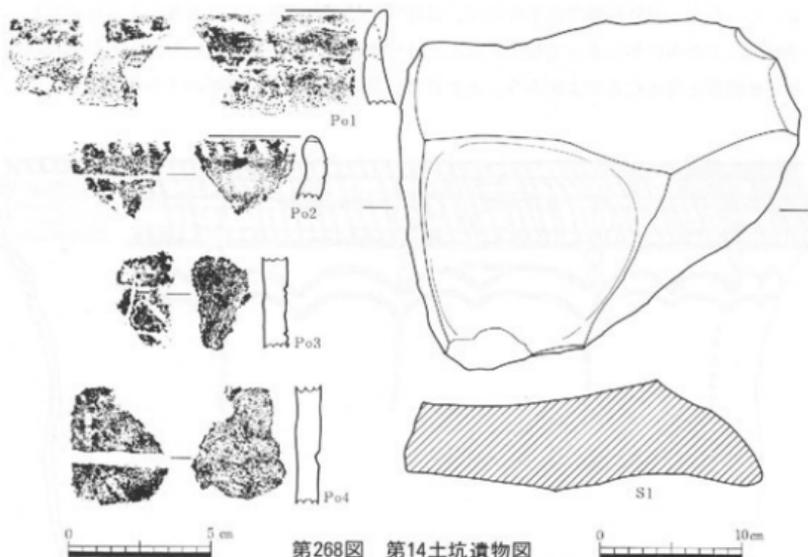
第14土坑 (図版74)

5 F地区の北東に位置し、北に第17土坑がある。遺構は円形を呈する土坑で、径約1.04m、深さ28cmを測る。土坑中央の床面に置かれた形でS1を検出した。S1は七面が凹んでいるため、石皿のように利用されていたと考えられる。その他、土坑内よりPo.1~4の縄文土器を検出した。いずれも鉢と考えられる。Po1は口縁端部で外反し、粘土帯を貼り付けた痕が明瞭である。Po2は口縁部が内湾し、口縁端部にヘラ刻みを施す。また口縁部外面に2条の沈線を施す。内面は丁寧なナデであ



第267図 第14土坑遺構図

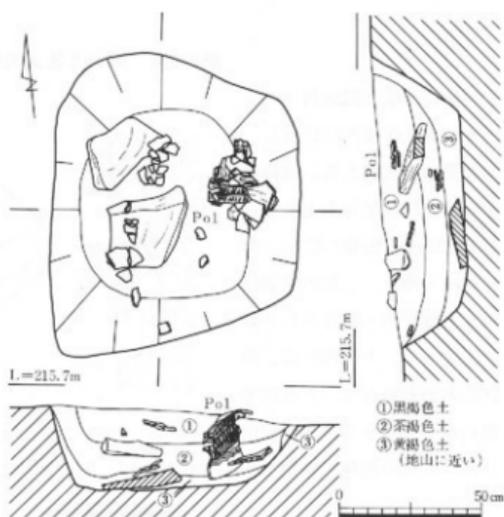
る。Po 4 は外面に1条の沈線を施す。Po 3 は外面に斜格子状の沈線を施す。いずれの土器の胎土にも1~2mmの石英を含く含む。この土坑の性格は不明である。



第268図 第14土坑遺物図

#### 第15土坑 (図版74)

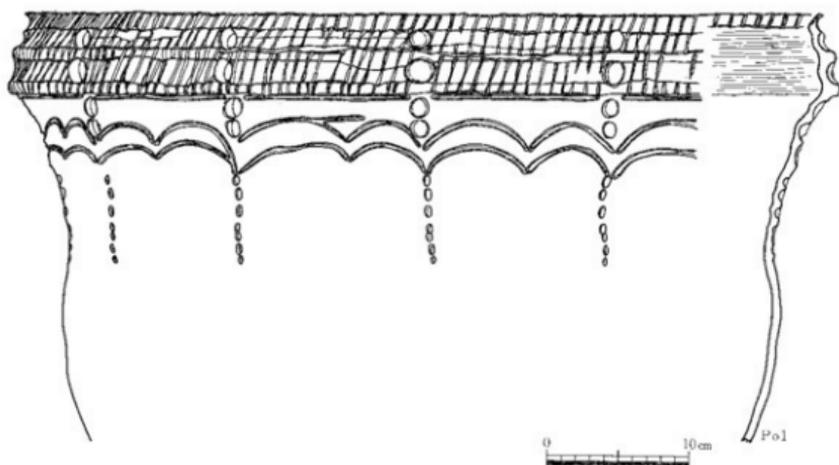
4 D地区の中央やや南よりに位置する。主軸をほぼ南北にとり、長軸1.02m、短軸87cm、深さ31cmを測る。遺物は土坑の東側より縄文時代中期後葉~末の深鉢(Po1)を検出した。Po1は3段からなる口縁部をもつ。口縁部には縦方向の刻み目が施され、口縁部上部から胴部上半にむけて圧痕がある。また口縁部直下にはヘラ状工具による連弧文がめぐる。胴部はややふくらみをもち、底部は検出しなかったが平底になると思われる。全体の



第269図 第15土坑遺物図

約1/4強が遺存していたが、口径約56cmを測り、かなり大型の深鉢である。

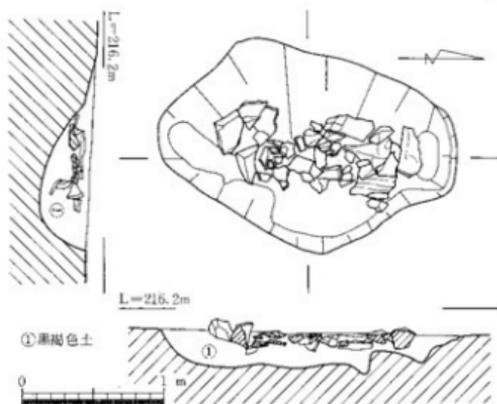
遺構の性格は土器の検出状況を検討してみると、屋外埋甕と被甕葬の2通りが考えられる。ところが、屋外埋甕であるならば、ほぼ完形に近い状態の土器を検出するはずだし、遺構内に1か所にかたまって検出することは可能性として少ない。むしろ土器の遺存状況から被甕葬と考えた方がよかろう。とすれば、鳥取県で最古の墓塚の1つとしてもよいだろう。



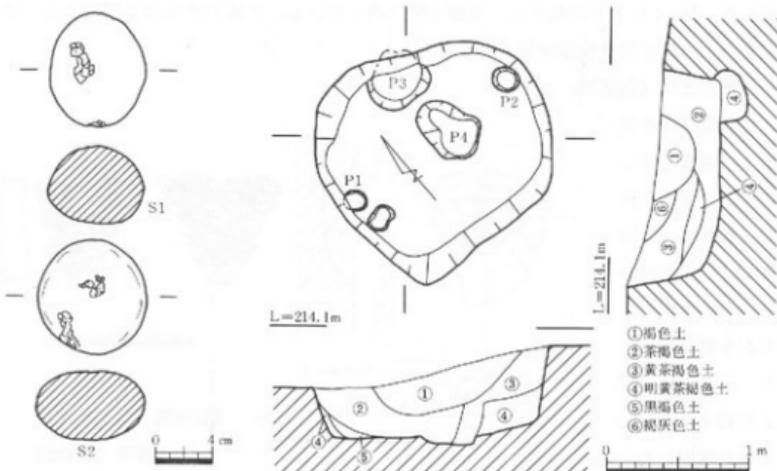
第270図 第15土壇遺物図

#### 第17土坑 (図版74)

4 G地区の南西に位置し、南に第14土坑がある。遺構は歪な楕円形を呈する土坑で、長軸2.08m、短軸1.42m、深さ36cmを測る。土坑の床面は、一部岩盤を削って作られており歪である。土坑内では、板状の石を多数重なった状態で、磨石を2個(S1・2)検出した。土坑の性格、時期ともに不明である。



第271図 第17土坑遺構図



第272図 第17土坑遺物図

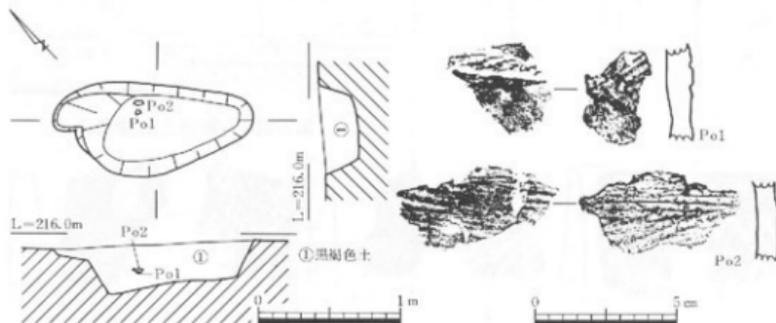
第273図 第18土坑遺構図

第18土坑 (図版75)

3 D地区の北西隅、南から下る丘の斜面に位置する。周辺に遺構はない。平面形は隅丸方形を呈し、主軸をN-50°-Wにとる。規模は長軸1.66m、短軸1.42m、深さ66cmを測る。底面は平坦で、面積は1.54㎡になる。底面にはP1(16×16-66)、P2(20×16-21)、P3(42×38-19)、P4(46×36-11)cmがある。遺物は検出できなかった。P1・2に柱を立て屋根を葺いた施設であろう。

第19土坑 (図版75)

4 E地区の南西に位置し、東に第20土坑がある。遺構は歪な楕円形の土坑で、長軸1.42m、短軸66cm、深さ約36cmを測る。土坑内で縄文土器(Po1・2)と黒曜石の細片を検



第274図 第19土坑遺構・遺物図

出した。Po1はLRの撚りと、条痕を擦り消している。土坑の性格は不明である。時期は土器より縄文時代後期初頭と考えられる。

#### 第20土坑 (図版75)

4 E地区に位置する。遺構は歪な円形を呈する土坑で、長軸96cm、短軸80cm、深さ26cmを測る。土坑内より石を数個検出した。また土坑上層より縄文土器(Po1)も検出した。

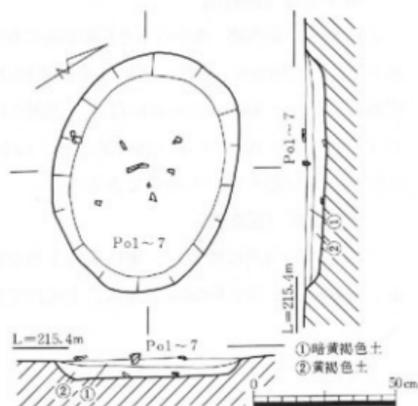


第275図 第20土坑  
遺構・遺物図

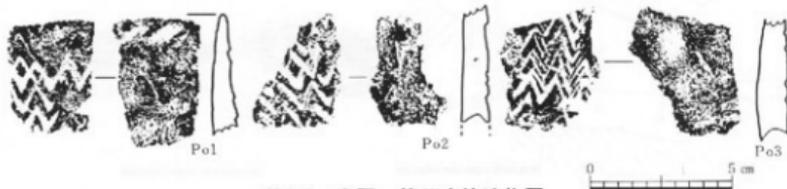
Po1は内外面ともに条痕が認められる。土坑の性格は不明である。

#### 第25土坑 (図版75)

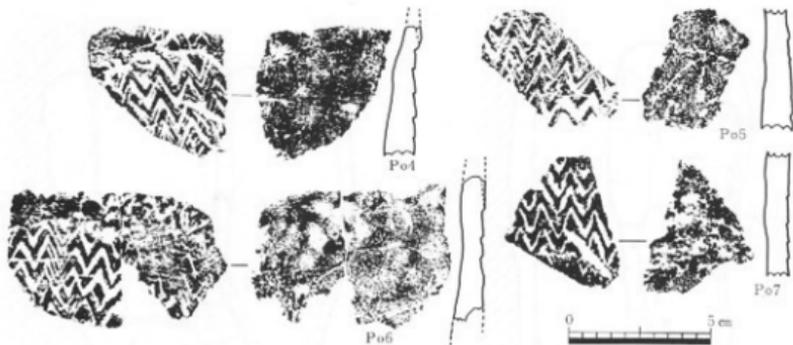
6 G地区の南隅に位置し、第26土坑の南西にあたる。平面形は楕円で、長軸86cm、短軸63cm、深さ9cmの浅い皿状になる。埋土は暗黄褐色、黄褐色土で、その中に縄文土器が含まれていた。縄文土器はすべて小片で、表面には山形の押型文が付されている。それらは散乱し、置かれた状態とは程遠い。焼土はない。時期は縄文時代早期である。



第276図 第25土坑遺構図



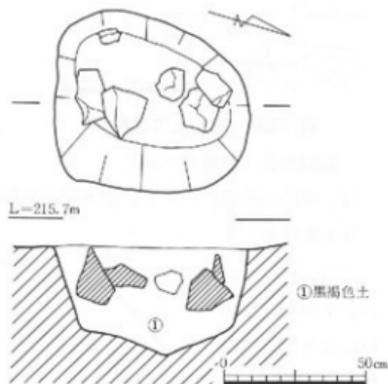
第277-①図 第25土坑遺物図



第277-②図 第25土坑遺物図

第26土坑 (図版75)

6G地区の東隅より検出した。平面形は卵形で、長軸68cm、短軸63cm、深さ38cmを測る。埋土は黒褐色土で、計6個の石がその中より検出された。形態的には集石炉に類似するが、炭化物、焼土等は検出せず、土器も検出されなかった。石にも焼成痕、使用痕は認められず、炉とするには疑問が残る。しかし近くに縄文時代早期の遺構があること、早期の土器が集中することから考えると、その頃の遺構かも知れない。



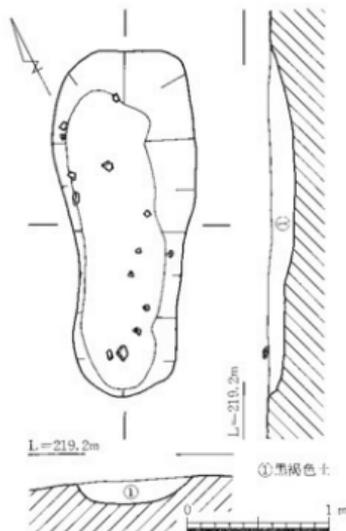
第278図 第26土坑遺構図

第28土坑 (図版75)

16K地区北東に位置し、北に第2竪穴住居跡がある。主軸をN-28°-Eにとり、長軸2.44m、短軸80cm、深さ16cmを測る細長い小型の土坑である。弥生土器片が出土しているが、実測できなかった。遺構の性格は不明だが、時期は弥生時代中期であろう。

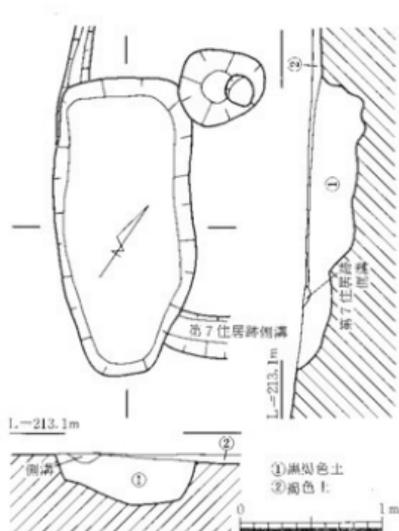
第51土坑 (図版75)

10D地区南東にあり、北側は第7竪穴住居跡に切られている。プランは不整の隅丸方形で南側は細くなっている。主軸をN-35°-Wにとり、長軸2.10m、短軸98cm、深さ36cmを測る。遺物は出土していない。



第279図 第28土坑遺構図

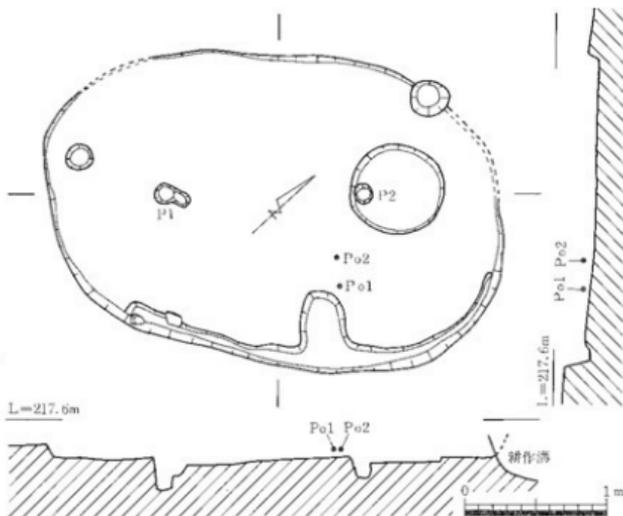
第62土坑 (図版75・76)



第280図 第51土坑遺構図

12J地区の南側に位置し、第8竪穴柱居跡、第107・108土坑の南にある。北側と西側

一部を耕作溝によって切られているが、平面形は楕円形になる。主軸はN-44°-Eをとる。規模は長軸3.14m、短軸2.20mを測る。壁高は17cmで、床面は西側へ少し下がる。床面には2個のピットと、部分的な側溝がある。ピットのプランはP1 (25×14-22)、



第281図 第62土坑遺構図

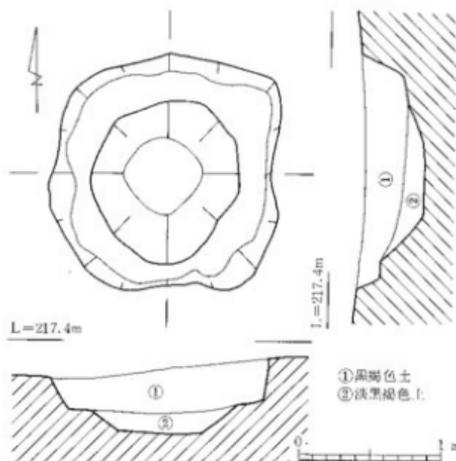


第282図 第62土坑遺物図

P 2 (14×12-16) cmである。側溝は東側の少し高くなっている壁に沿ってつくられている。遺物は弥生土器と石器である。土器は壺 (Po 1) と高坏 (Po 2) を載せた。いずれも弥生時代中期後葉であろう。

第66土坑 (図版76)

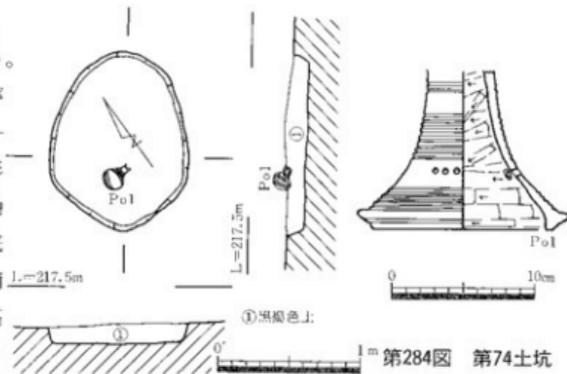
11 K 地区の中央付近に位置し、東に第 2 溝状遺構がある。遺構は歪な隅丸方形を呈する土坑で、長辺1.64m、短辺1.56m、深さ42cmを測る。土坑内より遺物は検出できなかった。上坑の性格は不明であるが、周囲に貯蔵穴が多く見られることから、第66土坑も貯蔵穴の可能性が考えられる。時期は不明である。



第283図 第66土坑遺構図

第74土坑 (図版76)

12 J 地区の北東にあり、第 8 竪穴住居跡と切り合う。新旧関係は第74土坑の方が新しい。主軸を N-36°-Eにとり、平面形は楕円形である。長軸1.25m、短軸96cm、深さ15cmを測る。底面は平らである。遺物は南西部より弥生時代中期の高坏脚部 (Po 1) を検出した。Po 1 は外面全体に丹

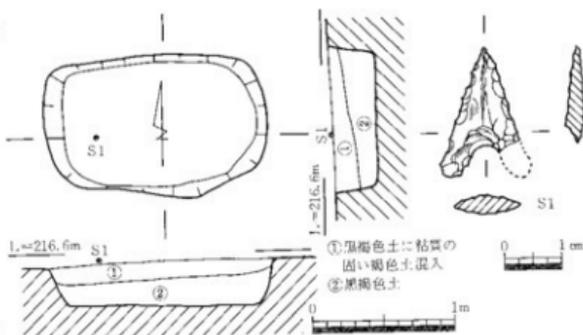


第284図 第74土坑遺構・遺物図

塗りがされていて、3孔を1つの単位として三方透しになっている。遺構の性格は不明だが祭祀的な性格をもった土坑のように思われる。この遺構の時期は弥生時代中期と考えられる。

### 第76土坑 (図版76)

10K地区の南東に位置し、北に第69・70・71・88土坑がある。遺構は隅丸の長方形を呈する上坑で、長辺1.58m、短辺1.00m、深さ34cmを測る。主軸はN-90°-Eをとる。遺物は土坑上層より石鏃

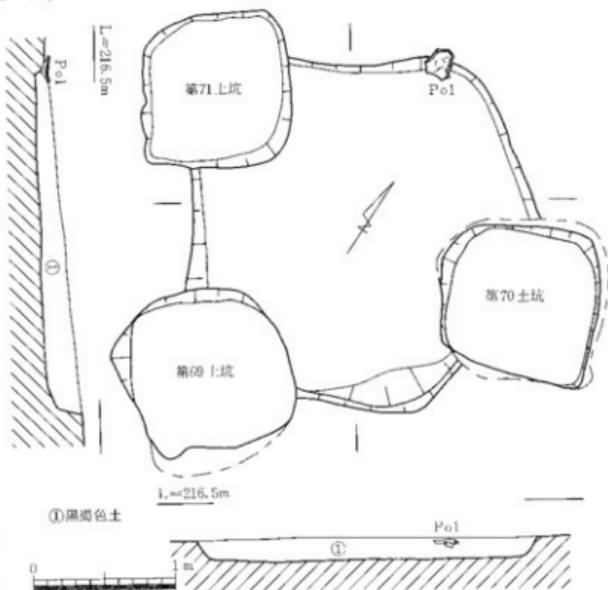


第285図 第76土坑遺構・遺物図

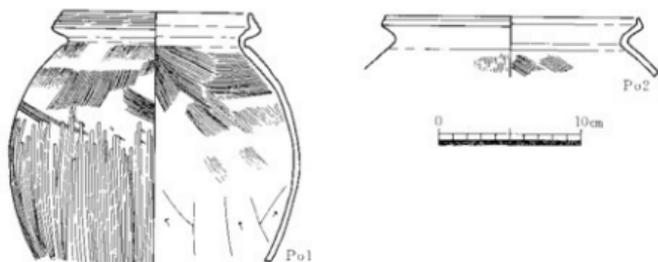
(S1)を検出した。また上坑掘り下げ中に壺、甕の小片が出土している。土器は小片のため実測できなかった。上坑の性格は不明である。

### 第88土坑 (図版76・77)

10K地区の北東にある。遺構は垂な方形を呈する土坑であるが、第69・70・71土坑によって切られている。新旧関係は、第88土坑が古く他の3土坑が新しい。第88土坑の長辺は2.48m、短辺2.22mを測る。主軸はN-58°-Eをとる。埋土は単一層で、北側の肩で甕(Po1)を検出した。Po1は口縁口唇部が上方へあがる。口縁部には3



第286図 第88土坑遺構図



第287図 第88土坑遺物図

条の凹線がめぐる。口縁部、胴部ともススの付着がみられる。この他埋土中より甕片を検出している。この上坑の性格は不明である。時期は甕などより弥生時代中期後葉と考えられる。

第96土坑 (図版76)

10G地区の北隅に位置し、一部10H地区にかかる。東側は耕作溝によって切られ、北側は第10堅穴住居跡を切っている。平面形は隅丸方形で、主軸はN-90°-Eになる。規模は長辺2.64m (推定)、短辺1.44m、深さ28cmを測る。底面は少し凹凸する。底面積は3㎡になる。底面よりピットを1個検

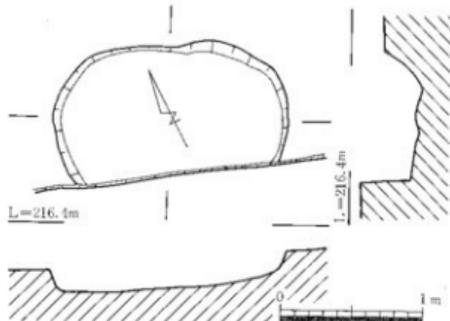


第288図 第96土坑遺構図

出したが、第10堅穴住居跡のものと思われる。遺物は弥生土器片を検出した。土坑の性格は不明である。

第106土坑 (図版76)

10E地区北東、第11堅穴住居跡の西に位置しているが、土坑南側は道路のため調査できなかった。平面プランは楕円形、主軸をN-62°-W

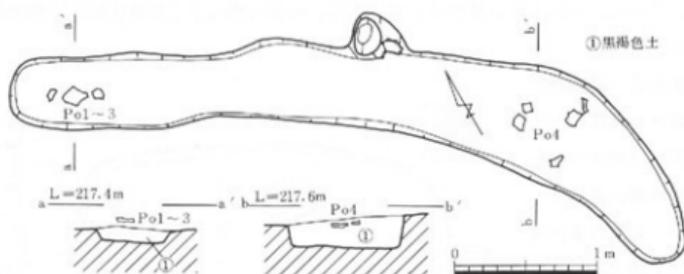


第289図 第106土坑遺構図

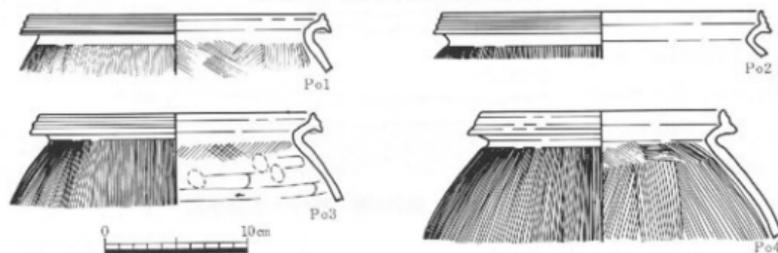
にとり、長軸1.65 m、短軸88cm以上、深さ36cmを測る。遺物は出土していない。

### 第2溝状遺構 (図版77)

11K、11L地区にまたがり、東側に第13掘立柱建物跡がある。東西に長くのびる溝である。溝の中からは多数の壺、甕片のほかPo 1～4の土器を検出した。Po 1～4は甕の口縁部である。Po 4は口縁口唇部が上方へあがり、3条の凹線がめぐる。凹線はナデによって消え気味である。胴部は内外面ともにハケ目がみられる。Po 2は口縁口唇部が下がり気味でわずかに上方へあがる。口縁部には凹線が2条めぐる。この溝の性格は不明である。時期は甕などより弥生時代中期と考えられる。



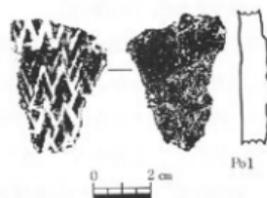
第290図 第2溝状遺構遺構図



第291図 第2溝状遺構遺物図

### 8H地区ピット1 (図版77)

8H地区の中央に位置し、第23掘立柱建物跡の南、第94土坑の西にあたる。平面形は弧形で、長軸75cm、短軸60cm、深さ27cmを測る。埋土は暗茶褐色土で、21cm掘り下げた所から縄文土器を1点検出した。土器の表面には山形の押型文が押捺されている。山形は第25土坑出土の

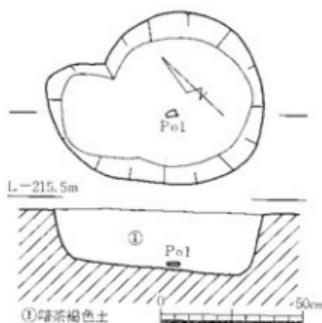


第292図 8H地区ピット1遺物図

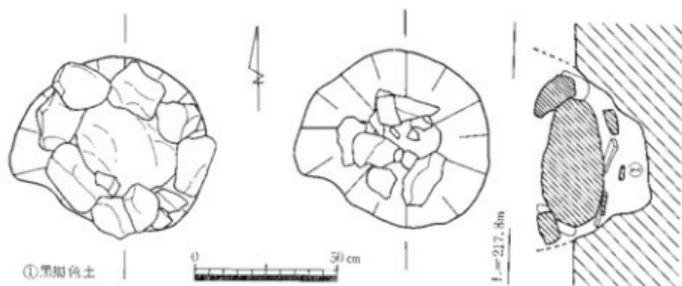
ものと比べ大きく、時代はやや新しくなる。縄文時代早期の遺構であるが、性格は分からない。

#### 14J地区ピット1 (図版77)

14J地区の南西側に位置し、第36上坑の東にあたる。周辺は総て耕作により攪乱され、このピットも耕作溝内より検出されたため、时期的に現代の可能性もある。ピットの規模は南北62cm、東西69cm、深さ33cmを測る。埋上は黒褐色上で、炭化物あるいは焼土等は含まれていない。土器は出土せず、大小25にわたる石が検出された。上部の石群は円礫で、最大のもを中心に円形に配されている。下部のものは割れた板状の石である。屎外炉とするには根拠が乏しく、性格の分からないピットである。



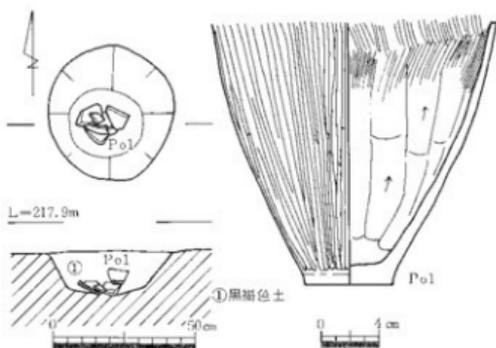
第293図 8H地区ピット1遺構図



第294図 14J地区ピット1遺構図

#### 16K地区ピット1 (図版77)

16K地区の西側に位置する。プランは(48×45-14)cmで、中から弥生土器の底部が検出された。土器は正立状態で、上半を欠く。周辺に関係すると思われるピットはなく、性格は分からない。Po1は甕の底部で、外面へラ磨き、内面上方向のハケ目、以下上方向のへら削りが施される。外面にススが付着する。時期は弥生時代中期である。

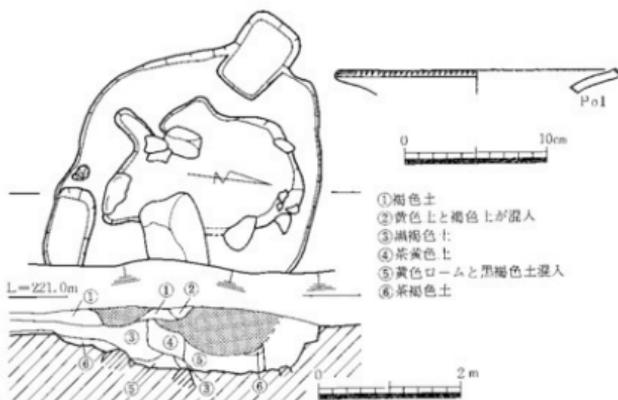


第295図 16K地区ピット1遺構・遺物図

## (8) ローム特殊土坑

### 第3土坑 (図版78)

18M地区の西側の調査区域際で検出した。南には木棺墓、土塚墓があり、北には第1掘立柱建物跡がある。平面形は隅丸方形に近く、西側に方形の張り出しを持つ。規模は南北長3.54m、東西長3.10m以上である。土坑は浅い2段の掘り方をもつ。第2の掘

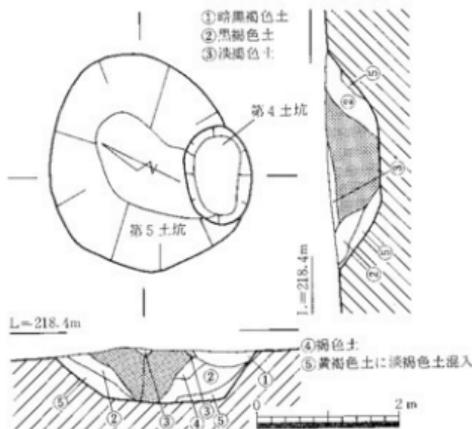


第296図 第3土坑遺構・遺物図

り方は不整形で、壁際の所々に小石が見られる。底面は起伏が著しい、深さは最深部で82cmを測る。遺物は黒褐色土層中より弥生土器片が出上している。

### 第4・5土坑 (図版78)

17J、18J地区に位置する、ほぼ円形の上坑である。規模は東西長3.04m、南北長2.70m、深さ63cmを測る。土坑の南側は第5土坑(140×94-39)cmによって切られている。ロームは土坑の北西側に偏る。層的には小石を多く含む層と粘上質の層に分かれる。焼土や遺物は検出できなかった。



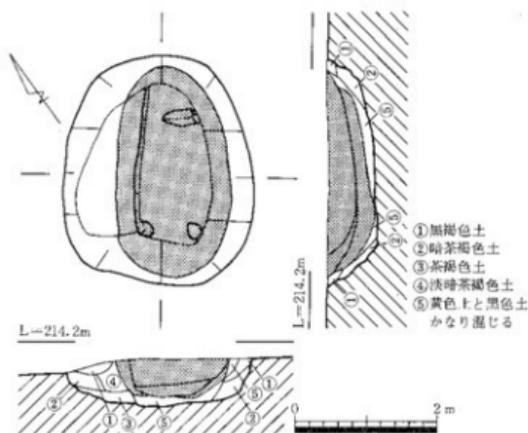
第297図 第4・5土坑遺構図

### 第11土坑 (図版78)

7E地区の南側と一部8E地区にかかるところのローム特殊土坑であ

る。近くに遺構はなく、北西にある同種の土坑(第12土坑)からは10m、西にある第13土坑からは14m離れている。主軸はN-35°-Eをとる。平面形は楕円を呈し、長軸3.38m

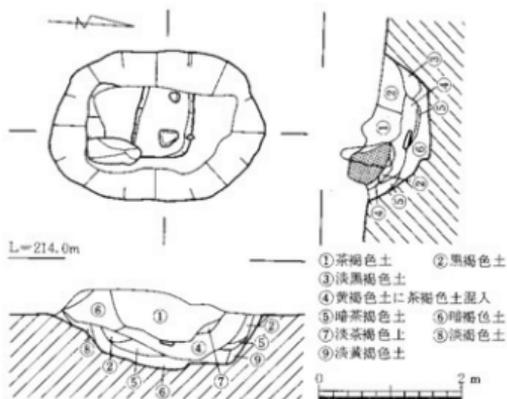
短軸2.62m、深さ83cmを測る。壁、底面ともこの種の土坑としてはなめらかであり、西側には浅い段が認められた。また南側底面隅からピット状のおち込みも検出された。黄褐色ロームは土坑の中央やや東側に位置し、深さも土坑底面近くに到っている。遺物は何も検出できなかった。底面近くより石を検出したが人為的なものかどうか不明である。



第298図 第11土坑遺構図

#### 第12土坑 (図版78)

7 D地区の北東に位置し、一部7 E地区にかかる。近くには南西に第1 堅穴住居跡がある。北側は丘陵状に高くなっている。土坑は軸を南北方向にとる。平面形は楕円形を呈する。長軸2.98m、短軸2.08mを測り、深さは最深处で112cmになる。掘り方は西側を除いて2段になっている。そ



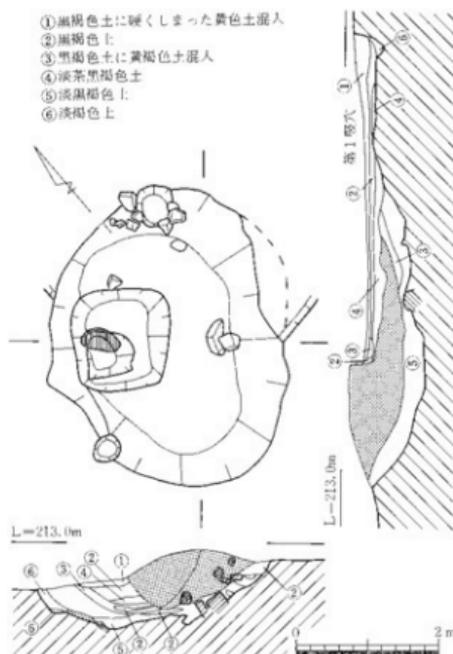
第299図 第12土坑遺構図

の規模は(98×73-17)cmで、平面形は方形である。ロームは東側に偏り、その下位は土坑底面に到っていない。遺物は検出できなかったが、ローム内に埋もれている大きな石に意味があるかもしれない。

#### 第13土坑 (図版78)

7 D地区南西に位置し、北側の上部を第1 堅穴住居跡によって切られている。東に第11土坑、北東に第12土坑がある。第1 堅穴住居跡の断面には第13土坑の上部に当る部分に貼

り床が認められるが、第13土坑上に竪穴住居を掘り、柔らかかった土を貼り、叩きしめて平らな床面を作ったものであろう。土坑北側のピットは第1竪穴住居跡の中央特殊ピットである。平面形は楕円形である。主軸をN-40°-Eにとり、長軸4.20m、短軸3.20m、深さ1.06mを測る。ロームは盛り上げた形で検出されており、ロームの周囲を黒色土がリング状に取り巻く形をとっている。ロームはやや東に偏っている。底面西よりは、長軸1.43m、短軸1.34mの隅丸方形



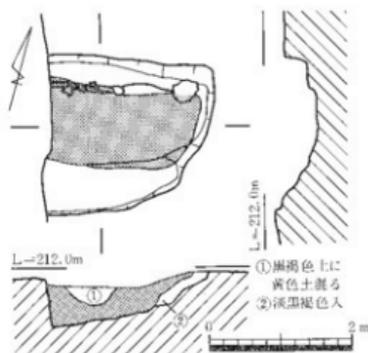
第300図 第13土坑遺構図

の落ち込みがあるが、この落ち込みの上部で焼上を確認している。遺物は出土していない。

#### 第16土坑（図版78）

3A地区の南東より検出した。東側は調査区域外のため全体を把握できなかったが、平面形は隅丸方形であろう。周辺にピット等の遺構はなく、石が目立つ。

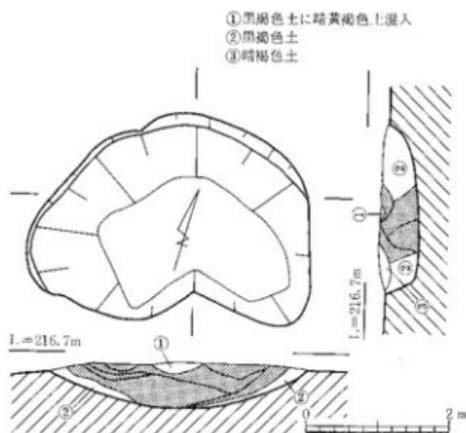
第16土坑は主軸をN-74°-Eにとる。規模は長辺1.76m以上、短辺2.18m、深さ76cmを測る。断面はスリバチ状で、北側は2段になっている。ロームは北側に偏っていて、下層は土坑の底面に到る。遺物は検出できなかった。



第301図 第16土坑遺構図

### 第24土坑 (図版78)

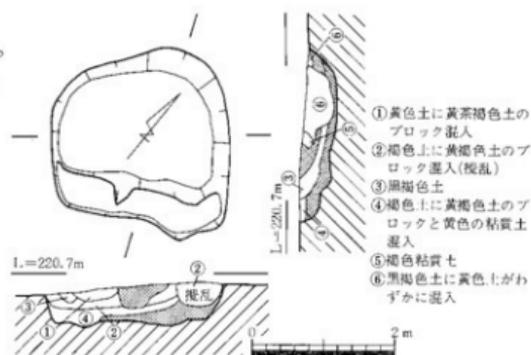
8 G地区の北東に位置し、東には第23掘立柱建物跡、西には第3木棺墓がある。平面形はハート形で、長軸3.98m、短軸2.58m、深さ62cmを測る。断面はスリバチ状である。ロームは南に偏り、深い所では土坑の底面に達する。遺物は何も検出されなかった。



第302図 第24土坑遺構図

### 第27土坑 (図版79)

16 L地区の西側に位置する。遺構は歪な円形を呈する土坑で、長軸2.56m、短軸2.40m、深さ30cmを測る。土坑内の南東側は段になっている。遺物は検出できなかった。



第303図 第27土坑遺構図

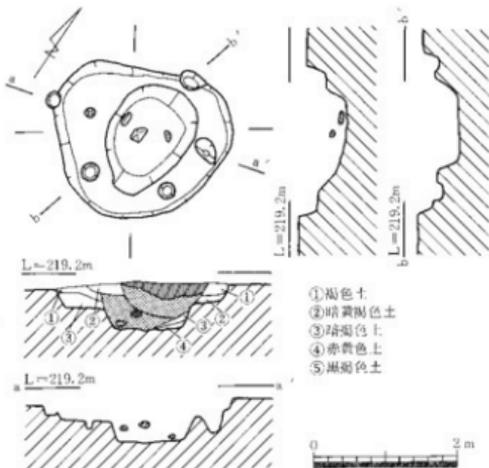
### 第33土坑 (図版79)

16 K地区の北東よりに位置し、第27土坑の西、第2竖穴住居跡の南にあたる。平面形

は不整形円で2段の掘り方を持っている。規模は長軸2.4m、短軸2.08m、深さ33cmを測り、その中に長軸1.56m、短軸1.14m、深さ42cmの落ち込みがある。さらに落ち込みを囲むような配置でP1～6がめぐる。ただしP6は土層観察のために掘ったトレンチ内であったため壊されたものと思われる。各ビットのプランP1 (10×10-11)、P2 (24×24-10)、P3 (22×20-13)、P4 (40×22-32)、P5 (38×24-20) cmである。遺物はなにも検出できなかった。黄褐色ローム層の上位に焼土層が厚さ20cmにわたって観察された。

### 第34土坑 (図版79)

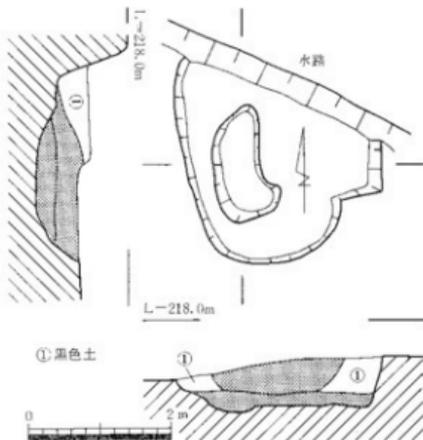
13 I 地区の中央にあり、第31土坑の北に位置する。北側は水路によって破壊され、調査できなかった。主軸はほぼ南北と想われ、平面プランは不整形である。検出面ではロームは東側に偏り、西側に黒褐色土が偏る。長軸2.42m以上、短軸2.40m、深さ81cmを測る。断面をみると、ロームは第12土坑、第42土坑と同じく盛土状に堆積していたと思われる。



第304図 第33土坑遺構図

### 第37土坑 (図版79)

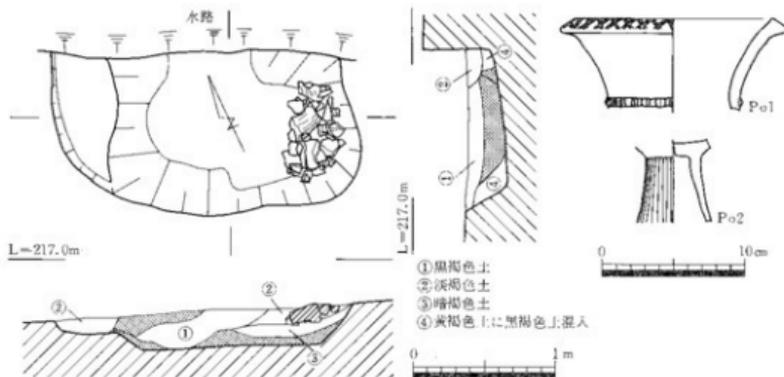
13H地区の北東隅より検出した。東には第34土坑がある。土坑は北側が調査できないため全体を検出できなかったが、平面形は隅丸方形であろう。主軸方向はほぼ南北をとる。規模は長軸4.10m、短軸2.23m(以上)である。深さは79cmで、西側に浅い段を持つ。土坑内東側より大小40数個からなる石群を検出した。用途は不明だが、土坑に伴う遺物と考えられる。



第305図 第34土坑遺構図

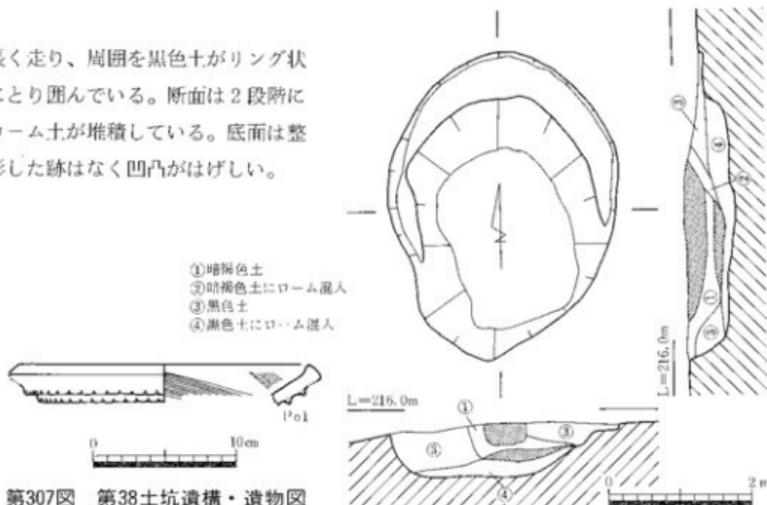
### 第38土坑 (図版79)

14 G 地区の北寄り中央部にあり、第4堅穴住居跡の北西に位置する。主軸方向はほぼ南北で、平面形は卵形である。長軸は4.23m、短軸3.10m、深さ81cmを測る。北側は2段になっているが、掘り方はスリバチ状である。検出面ではロームは上坑中央を南北に細

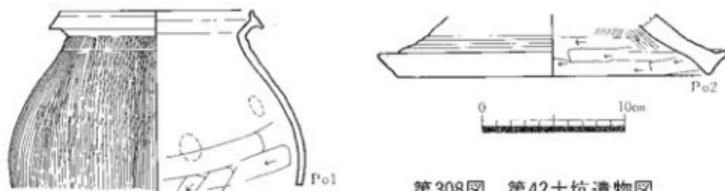


第306図 第37土坑遺構・遺物図

長く走り、周囲を黒色土がリング状にとり囲んでいる。断面は2段階にローム土が堆積している。底面は整形した跡はなく凹凸がはげしい。

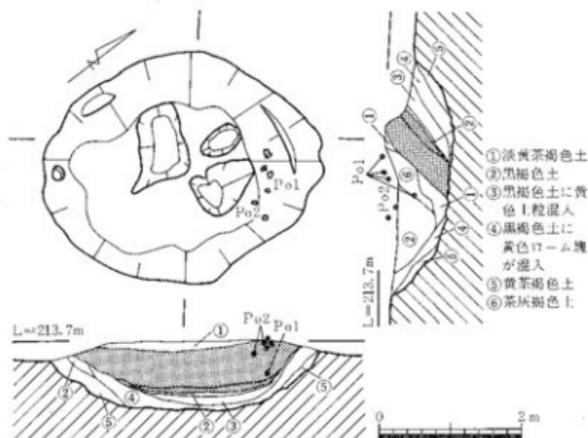


第307図 第38土坑遺構・遺物図  
第42土坑 (図版79)



第308図 第42土坑遺物図

11E地区の北に位置し、第7竪穴住居跡の南東、第40・48土坑（陥し穴）の北にあたる。平面形は楕円形に近く、長軸3.9m、短軸3.3mを測る。断面はスリバチ状で、肩からの深さは最大で93cmになる。ロームは土坑内の東側に偏り、下層の硬質部と上層の黄粉状の軟質部に明瞭に分

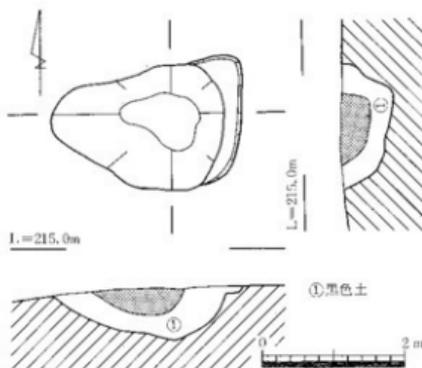


第309図 第42土坑遺構図

かれている。これに対し黒色系統の層は平面的には南東側に集中するが、断面では黄粉状ロームを全く含まない層と、いくらか混入する層に分かれていることが観察できる。遺物は弥生土器(Po1・2)がある。Po1は甕の破片で七坑の上層のものと下層出土のものと接合した。口縁部に凹線は認められず、内面も胴部中位までナデが施されている。弥生時代中期のものであろう。

#### 第43土坑 (図版80)

12F地区の中央部に位置する。平面形は不整形で、主軸をほぼ東西方向にとる。長軸2.68m、短軸1.60m、深さ91cmを測る。東側は段状になっている。断面はスリバチ状であるが、底面は凹凸がやや激しい。掘り方は整形したように思われない。遺物は何も検出しなかった。



第310図 第43土坑遺構図

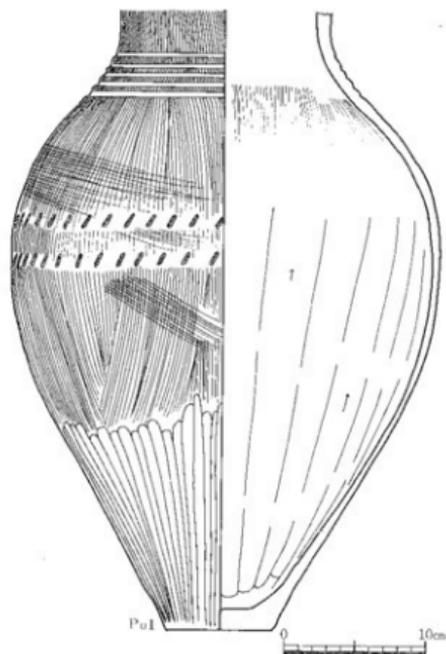
#### 第50土坑 (図版80)

10C地区に位置し、第47土坑の西にあたる。南側は調査区域外に入るが、プランは不整形円形であろう。東西長3.10m、南北長3.20(推定)m、深さ85cmを測る。底面は比較的平

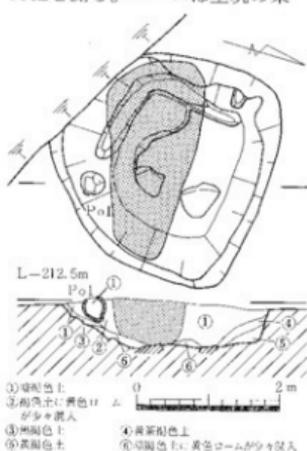
壇で、西側に溝状の落ち込みがある。ロームは土坑内南側に偏る。遺物は壺(Po1)がロームと暗褐色層の間(褐色上にロームがまじる層)から正立状態で検出された。口縁部を欠くが、埋もれている部分は原形をとどめていた。外面頸部下位に5条の凹線文、胴部中位に2列の櫛状工具による刻み目がめぐる。調整は外面ハケ目、胴部下位縦方向のヘラ磨き、内面胴部上位ハケ目、以上七方向のヘラ削りであり、土器の形態はかなりスマートである。胴部下半にススが付着する。弥生時代中期のものとして推定される。

### 第93土坑 (図版80)

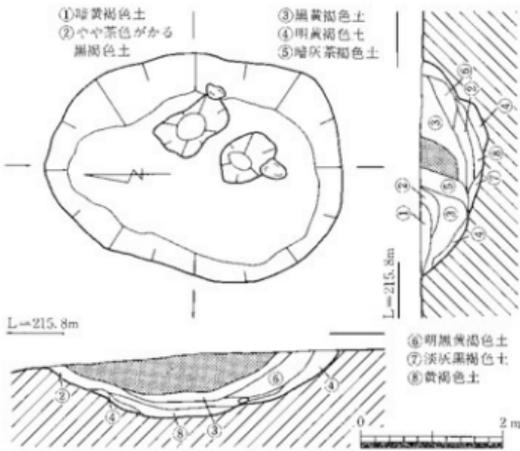
9 I 地区北西隅に位置している。平面プランは楕円形で、北側が、やや細くなっている。主軸をほぼ南北にとり、長軸4.22m、短軸3.08m、深さ90cmを測る。ロームは土坑の東



第311図 第50土坑遺物図



第312図 第50土坑遺構図

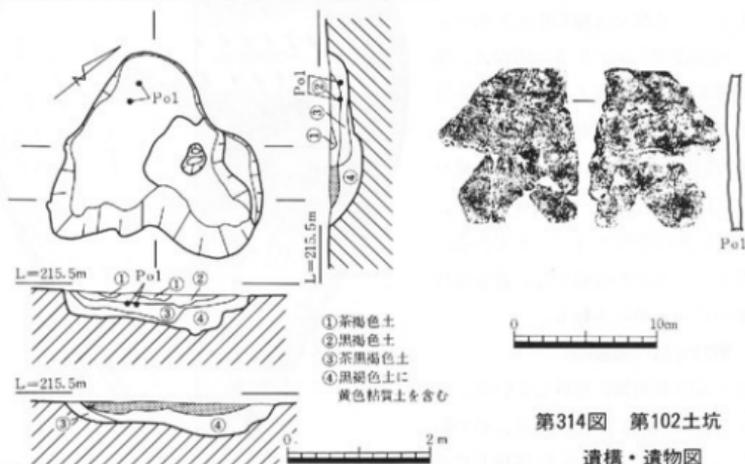


第313図 第93土坑遺構図

に偏っており、周囲を黒褐色土がリング状に取り囲んでいる。遺物は出土していない。

### 第102土坑 (図版80)

7 H地区の中央付近に位置し、南に第23掘立柱建物跡がある。遺構は歪な形を呈する土坑で、長辺2.56m、短辺2.48m、深さ48cmを測る。土坑中央付近は浅く段になっている。埋土第③層上面よりPo1の縄文土器片を検出した。



### (10) 遺構外遺物

#### 縄文土器 (図版81)

遺構外から出土した土器は総て細片として出土したため、器形の全体を推測できる資料は少ない。早期・中期の土器を、主にC区西側で集中して検出した。また便宜上、早期の土器をS I - II群に分類した。

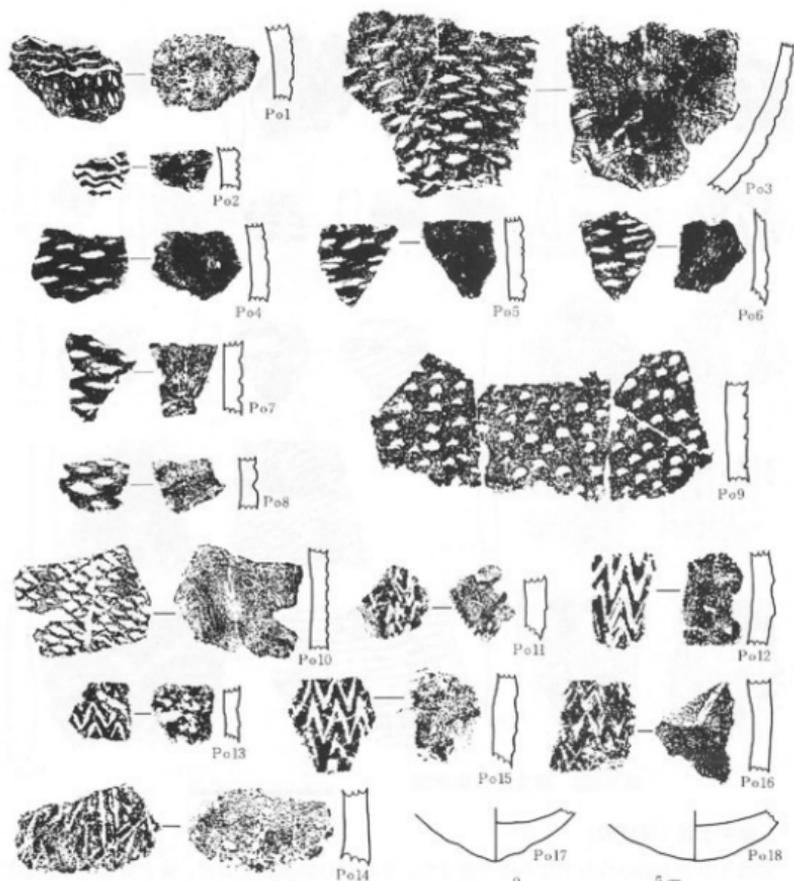
#### 早期

##### S I群 (315図Po1~9、図版81)

いわゆるネガティブな押型文土器と呼ばれているものである。特にPo1・2は、神鍋遺跡(兵庫県)で出土している土器と類似している。なお中国地方では馬取貝塚、帝釈峽遺跡群(広島県)でネガティブな押型文土器が出土している。S I群はS II群に先行するものとして、林ヶ原遺跡の上限を示す資料である。

##### S II群 (第315図Po10~18、図版81)

押型文土器である。Po10は格子目文、Po11~16は山形文である。色調は、茶褐色系統が多い。Po17・18は、押型文土器の尖底部分と考えられる。



第315図 縄文土器実測図 (S I、S II群)

前期 (第316図Po 19・20、図版81)

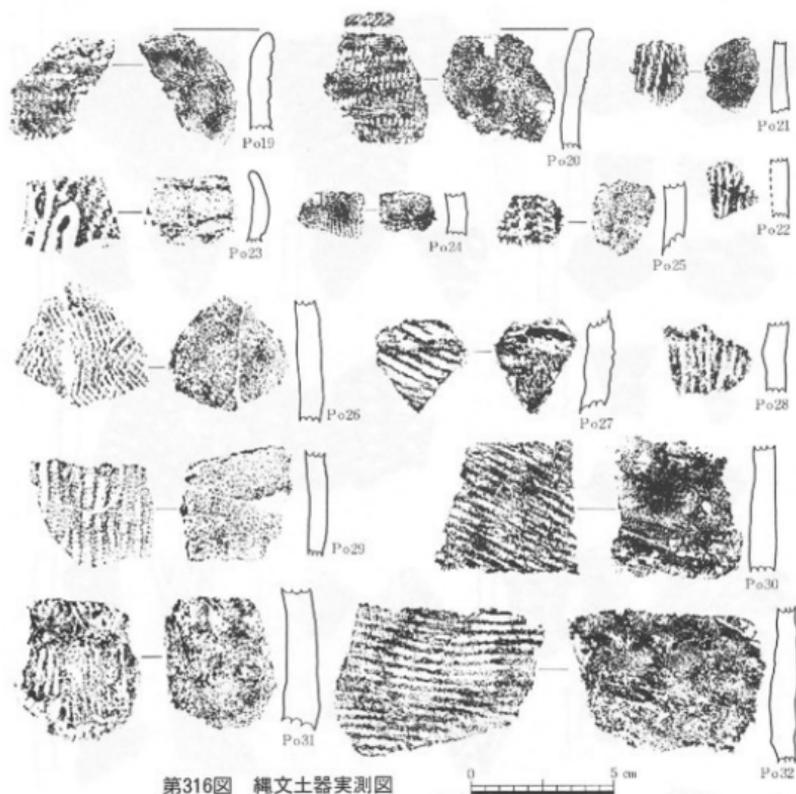
Po19・20は外面に押圧縄文がみられる。特にPo19は口縁部まで押圧縄文がおよんでいる。前期初頭(?)に比定できると考えられる。

中期 (第316図Po21~23、図版81)

撚糸文を地文とするPo21・22と、条痕地に沈線をもつPo23がある。

時期不明の土器 (第316図Po24~32、図版81)

Po24~26は撚糸文を地文とする土器である。



第316図 縄文土器実測図

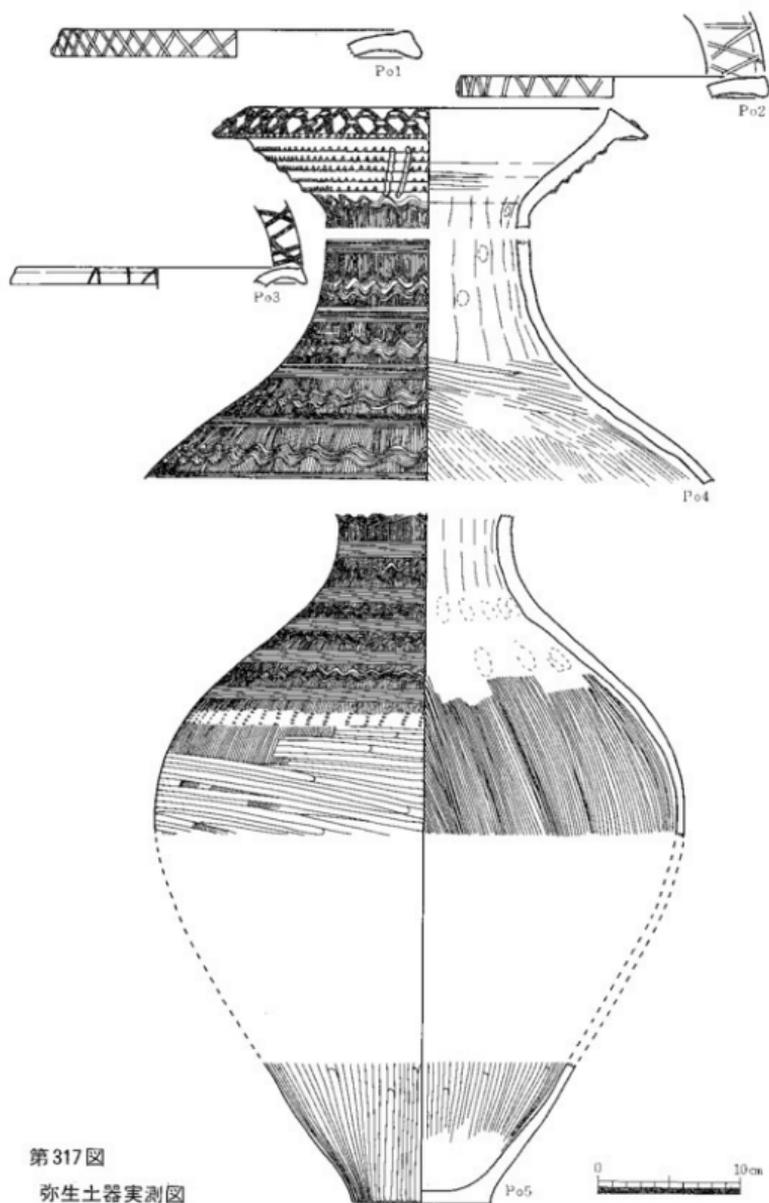
弥生土器（図版82）

遺構外出土土器のうち主なものを載せた。それぞれ器種別におき、壺と甕はその形態によりⅠ・Ⅱに分類した。時期は弥生時代中期中葉～中期後葉と推定される。

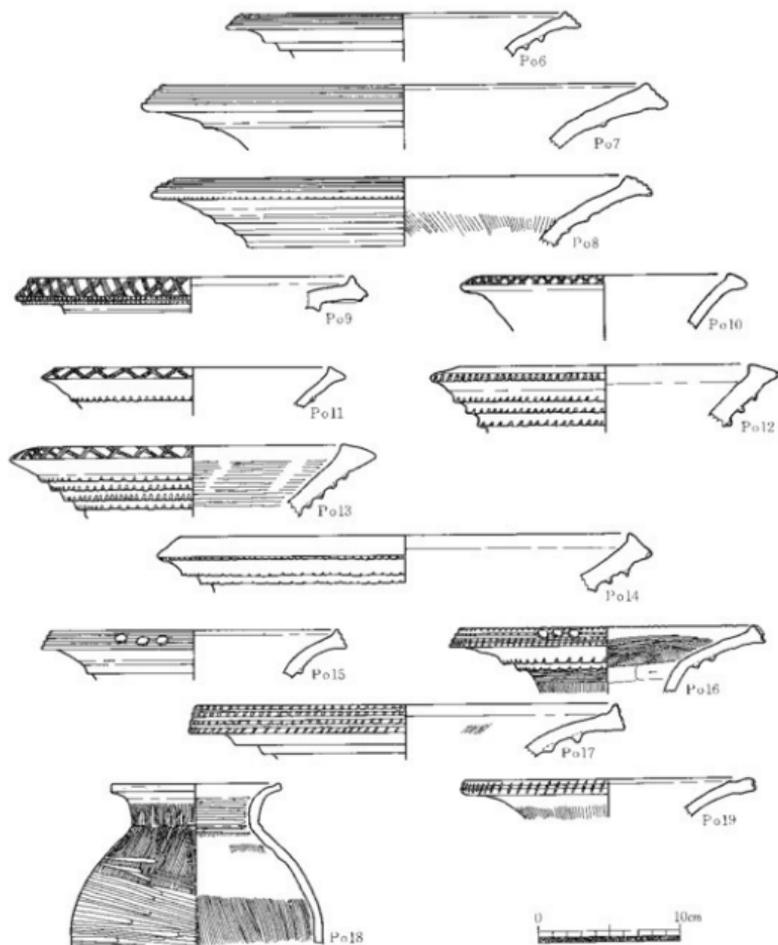
壺 Ⅰ口縁端部が下垂するもの（Po1～Po8）、Ⅱ口縁端部が上方へ立ちあがるもの（Po9～Po17）とした。Ⅰ・Ⅱを口唇部に凹線が無く凸帯の有るもの（Po4・5、Po9～Po14）と、口唇部に凹線をもち凸帯の有るもの（Po6～Po8、Po15～Po17）に分けた。凹線の有無は、これを時期的な差と考えてみた。

Po1～Po3 口唇部に斜格子の文様が施される。Po2・3には口縁部内側にも施文がみられる。いずれの土器も丁寧なナデ仕上げ、色調は黄橙色。

Po4・Po5 Po4は口唇部に斜格子の施文がみられ、その上に円形浮文が付き装飾性に富む。口縁外面には貼付凸帯が5段みられ、凸帯と凸帯にかけ縦に2本の粘



第 317 图  
 弥生土器实测图

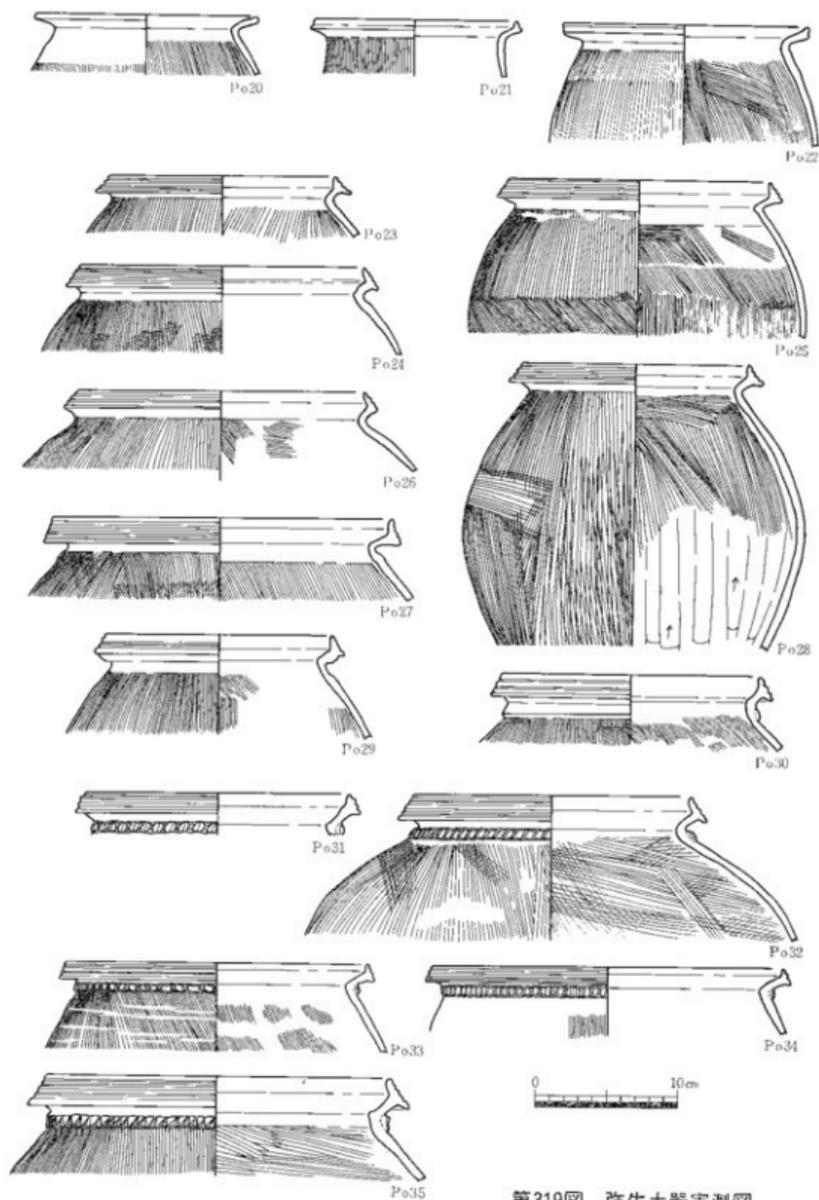


第318図 弥生土器実測図

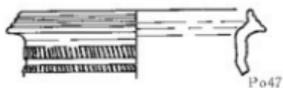
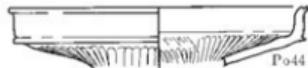
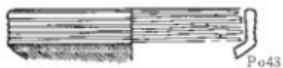
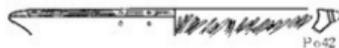
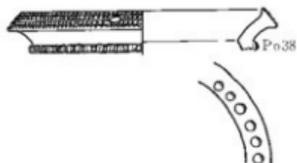
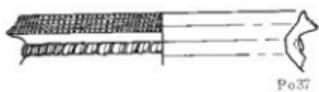
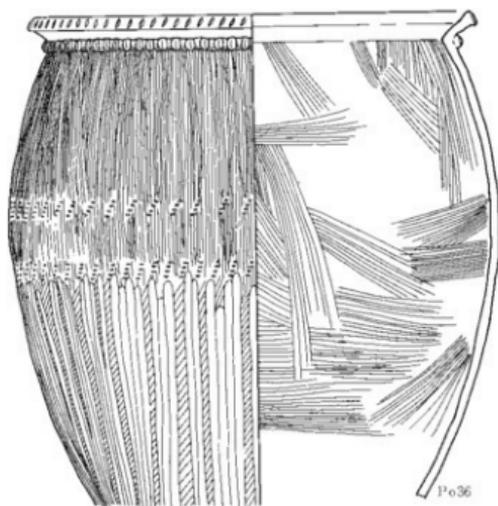
土紐が貼付けられる。頸部外面には凹線間に波状文がめぐる。口縁、頸部内面ナデ。肩部内面ハケ後・部ナデ。胎土中に石英を含む。色調は明橙褐色。

Po6～Po8 口唇部に凹線がめぐり、貼付凸帯をもつ。口縁部外面ナデ、内面ハケの後ナデ。Po8は口縁端部に刻み目が施される。

Po9～Po14 口縁部外面に貼付凸帯をもつ。Po10～Po13は口唇部に斜格子文がみられ、Po12・14は口縁端部に刻み目をもつ。口縁部内外面ナデ。色調は淡褐色。



第319图 弥生土器实测图



第320图 弥生土器实测图



第321図 弥生土器実測図

Po15～Po17 口唇部に凹線がめぐり、刻み目も施される。Po15・16には円形浮文がつく。Po15・17口縁部内外面ナデ。Po16頸部外面ハケ。色調茶褐色。

他の壺 Po18は頸部が立ち気味で、口縁部は外方へ開く。胎土中に石英を含む。黄褐色。Po19は大きく外方へ開く口縁部で、口縁部には沈線がめぐり、刻み目が施される。内外面ハケの後ナデ。色調淡褐色。

甕 Iくりあげ口縁をもつもの(Po23～Po35)、II「く」の字状口縁をもつもの(Po36)の2形態とし、これらに先行する土器として、Po20～Po22を置き時期差を考えてみた。

Po20～Po22 Po21・22は口縁端部が立ちあがる。口縁部内外面横ナデ。胴部外面ハケ、内面ハケ後ナデ。色調淡黄褐色。

Po23～Po30 口縁部に凹線が施される。口縁部内外面横ナデ。胴部外面ハケ、内面ハケの後ナデ。Po30は頸部に貼付凸帯がつく。胎土は細かい砂粒、石英を含む。色調淡黄褐色。

Po31～Po35 口唇部に凹線が施され、頸部には丘痕文の貼付凸帯がつく。口縁部内外面横ナデ。胴部内外面ハケ後ナデ。胎土中に石英を含む。色調淡黄褐色。

Po36 口唇部に刻み目を施す。頸部には丘痕文の貼付凸帯がめぐり。胴部外面上方縦ハケ、下方斜方向のハケの後縦ヘラ磨き。胴部中位に櫛状工具による刺突痕が2段にめぐり。胴部内面ハケの後ナデ。胎土中に1～6mmの石英を含む。色調淡明褐色。

壺と甕の折衷 Po37・Po38 複合口縁で、口唇部に凹線をめぐらし、刻み目を施す。頸部には丘痕文の貼付凸帯がつく。Po38には円形浮文がつく。口縁部内外面横ナデ。

高坏 Po39～Po46 Po39は碗状の坏部から口縁部が外へ長くのびる。坏部内外面縦ヘラ磨き。細かい石英を含む。色調淡褐色。Po40～Po42は口縁部がわずかに外へでる。Po43・44は口縁部が上へ立つ。Po43は口縁部に凹線がめぐり。Po39・41・42は紐孔をもつ。Po40は口唇部に円形浮文がつく。Po45・46は脚部と考えられる。

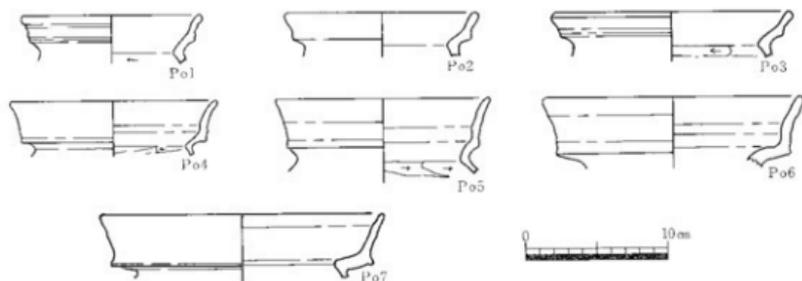
器台 Po47・48 Po47は口縁端部が上へ立ち、Po48は口縁端部が下垂する。ともに口唇部に凹線がめぐり。Po47の胴部外面には、ハケ目の後2条の凹線がめぐり。

その他の土器 Po49・50 Po49は蓋の摘み部。Po50は器形不明。口縁端部は肥厚し刻み目が施される。胎土中に長石を含む。色調暗褐色。

## 土師器

131地区出土の遺構外土器で、近くには第4堅穴住居跡がある。

Po1～Po7は複合口縁の甕で、口縁部内外面横ナデ。肩部外面ナデ、内面頸部のすぐ下よりヘラ削り。Po4・5はII縁、肩部外面にススの付着がみられる。胎土中には小粒の石英が含まれる。Po1～Po7の甕は古墳時代前期初頭と考えられる。



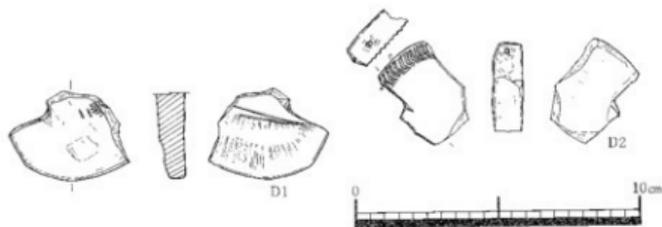
第322図 土師器実測図

### 分銅形土製品 (図版82)

分銅形土製品は弥生時代中期中頃から後期初め頃にかけて盛行し、岡山県南部を中心に大分県から奈良県まで分布している。その用途については、祭祀用具(護符)ではないかとされている。

林ヶ原遺跡では、第2堅穴住居跡から1点、遺構外から2点検出した。いずれも完形品ではない。D1は内湾し、上縁部に文様らしきものはない。矢印で図示した部分には指頭圧痕がある。D2はわずかに内湾し、上縁部に櫛描文らしきものがある。また、くいこみ部には穿孔がしてある。

林ヶ原遺跡の3個体は、大造原遺跡(大山町)の4個体に次ぐものとして注目される。



第323図 分銅形土製品実測図

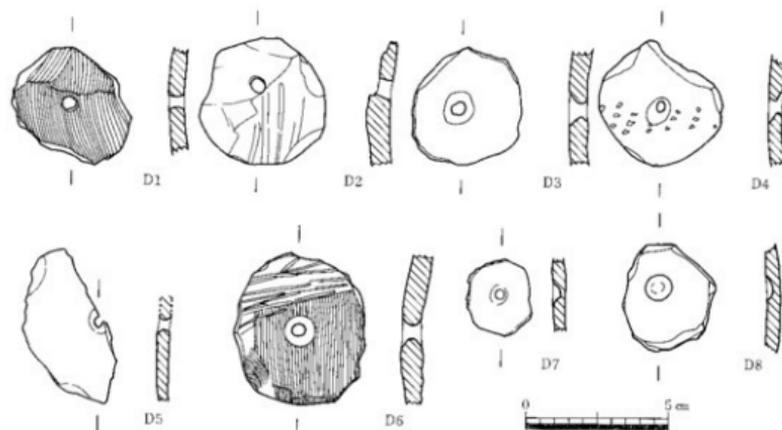
### 紡錘車 (図版82)

林ヶ原遺跡で紡錘車は17個出土している。内訳は遺構内9個、遺構外8個である。

D1～8はいずれも弥生土器転用のもので、縁は形を整えるために削ってある。

番号	形態・材質	径・厚さ・孔径(cm)	重量(g)	穿孔状況等	出土地
D1	弥生土器転用	4.4 0.5 0.5	9.1	両側穿孔	C区掘下中
D2	"	4.5 0.8 0.4	17.1	1方向から穿孔	14M地区掘下中
D3	"	4.2 0.6 0.5	13.4	両側穿孔	D区掘下中
D4	"	4.3 0.5 0.4	9.6	"	C区掘下中
D5	"	- 0.4 0.6	(7.0)	"	9G地区掘下中
D6	"	5.2 0.7 0.4	20.9	"	9H地区掘下中
D7	"	2.7 0.4 -	3.2	未製品、裏側から一方穿孔途中	9G地区掘下中
D8	"	- 0.5 -	(6.7)	"	D区掘下中

遺構外出土紡錘車一覧表



第324図 紡錘車実測図

### 石器 (図版83)

今回の調査で遺構外からも多くの石器を検出したが、遺存状態が比較的良好なものを図示する。

#### (1) 石 鎌 (図版83)

石鎌は遺構外から6点検出した。いずれも打製・無茎である。岩質はS1が黒曜石、S2、4～6がサヌカイト、S3は花崗岩と思われる。遺構外で検出したものは、ほとんど

陥し穴遺構の近辺であり、その関連が注目される。

## (2) 石斧、磨石、砥石 (図版83)

S7は局部磨製石斧である。今回の調査以前に、林ヶ原遺跡のすぐ北でクロボク土採取中に出土したものであるが、関連ある遺物と考えられるので図示した。S7は刃部を研磨する以前に全体の形状を整えるために周辺を粗く加工してある。刃部の研磨は両面である。

S8は磨製で大型蛤刃石斧である。

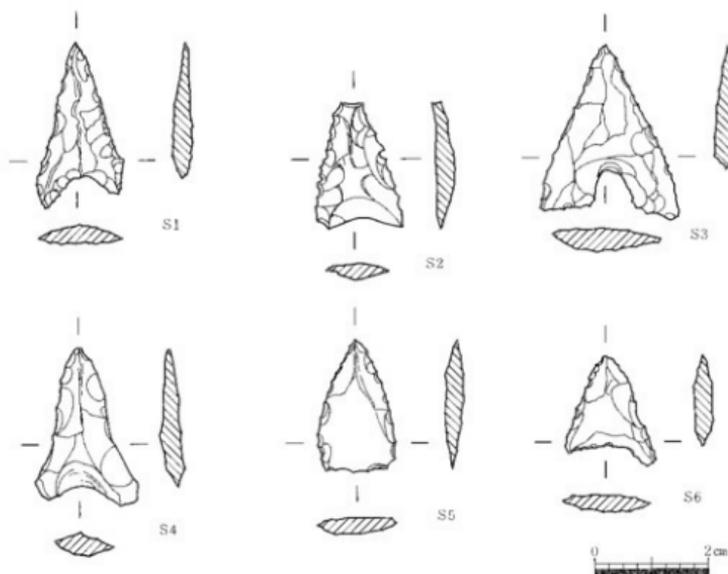
S9～11は磨石で、S9・11には擦痕が認められる。S10には擦痕が認められなかったが、全体の形状、岩質等から磨石と判断した。

S12は砥石である。ところで林ヶ原遺跡では鉄器もしくは鉄製品を検出していないために、石斧等の刃部の研磨に使用された可能性が高い。しかし、鉄器は再加工が可能なので集落を廃絶する時に持ち運ばれていったことも想定される。

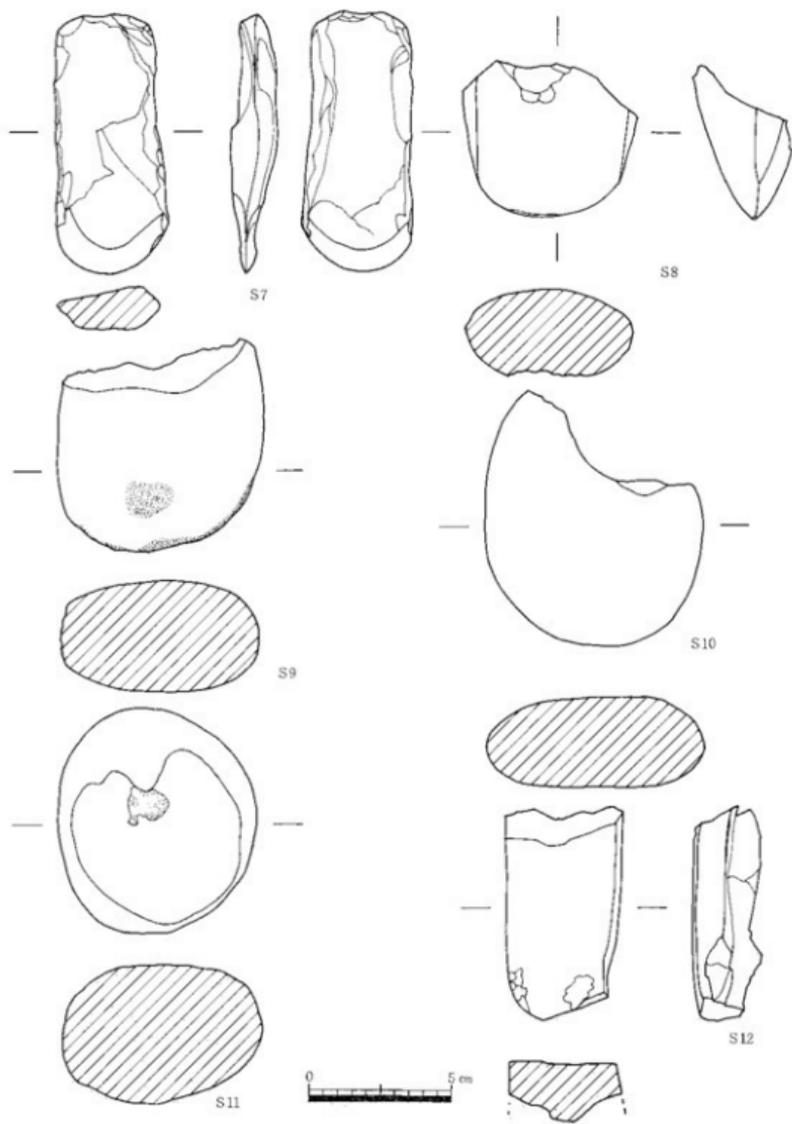
## (3) 岸本町教育委員会保管遺物 (第327図、図版83)

林ヶ原遺跡周辺が昭和初期に開墾された時に出土した遺物が主に保管されている。

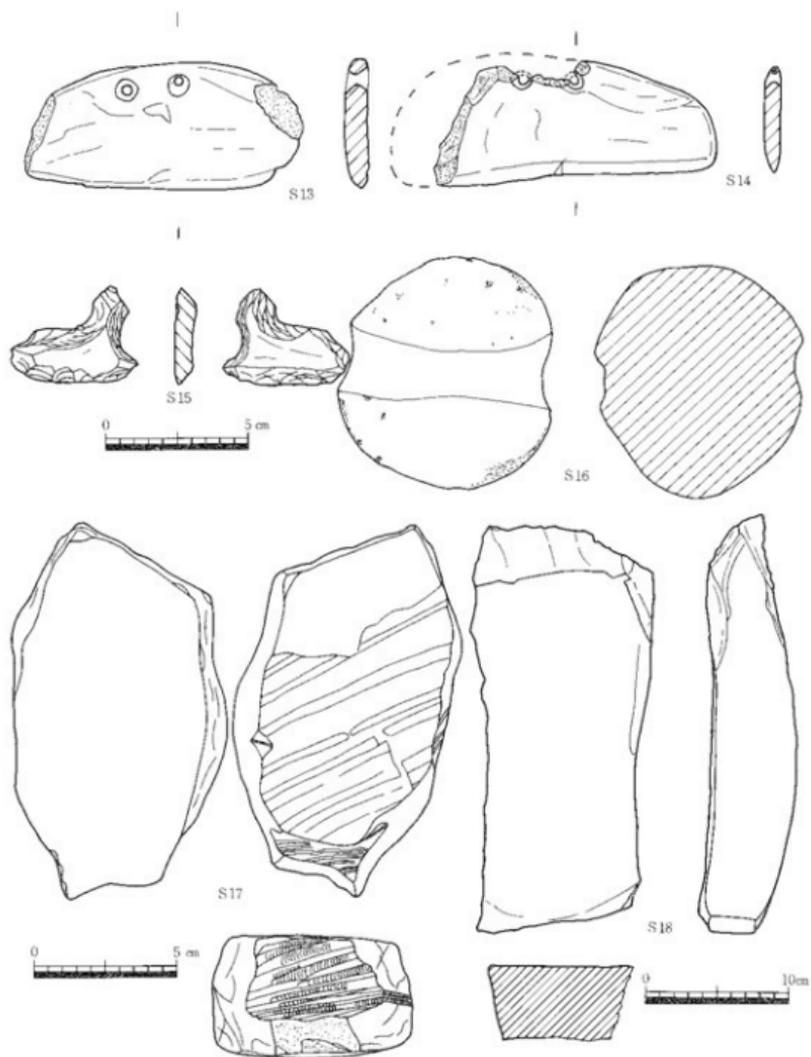
S13・14は石庖丁である。いずれも磨製、片刃で2孔を有する。2孔は両側穿孔で、孔周辺に紐の使用痕がある。S15は横型の石匙である。岩質はサヌカイトである。S16は有溝石錘である。S17・18は砥石で、S17には砥石を製作した時の痕跡がある。



第325図 石器実測図①



第326图 石器实测图②



第327図 岸本町教育委員会保管遺物実測図

### 第3節 ま と め

林ヶ原遺跡の調査を通じて、竪穴住居跡11棟、掘立柱建物跡23棟、木棺墓4基、土坑墓2基、貯蔵穴47基、土坑19基、陥し穴10基、溝状遺構1本、ピット3個、ローム特殊土坑17基を検出し、その報告をしてきた。その結果、林ヶ原遺跡は縄文時代早期から古墳時代前期にわたる複合遺跡であることが判明した。十分な検討もできていないが、今回の調査によってわかった事実、問題点を指摘しておく。なお、この内貯蔵穴、ローム特殊土坑については第5章で詳細に記述しているので、この章ではちた説明を省略したい。また調査後の協議の結果、第4掘立柱建物跡、第6・21・23・41・45・57・61・64・105土坑は遺構でないことが判明したので、本文中で説明をしなかったことをつけ加えておく。以下各時代毎に林ヶ原遺跡の変遷を中心として述べていく。

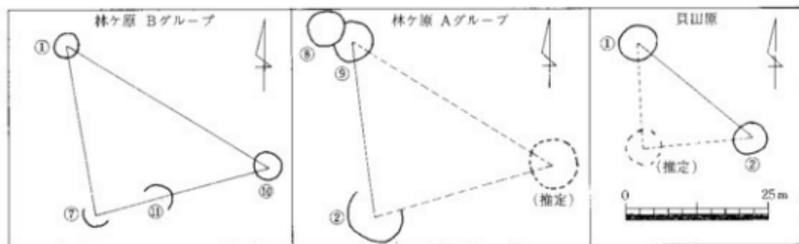
縄文時代の遺構としては、早期の上坑、ピット、中期の被覆葬遺構（もしくは屋外埋葬遺構）、後期の土坑を検出し、遺構内外から早期、前期、中期、後期の遺物を検出した。第25上坑（早期）は掘り込みが浅かったが、底面上に押型文土器が集中しており検出状況から遺構と判断した。第25土坑周辺には、早期の別な生活遺構が考えられ、調査後トレンチを入れて精査したが、それらしい遺構、遺物は検出しなかった。第25上坑の南東に18m離れた8日地区P 1内で押型文土器片を1点検出したが、これは混入の可能性があり明確に早期の遺構と判断しにくい。ところで、遺構外からはネガティブな押型文土器片を検出した。いわゆる押型文土器に先行するものとして本遺跡の上限を示す資料である。今回の調査以前に、本遺跡のすぐ北で、局部磨製石斧がクロボク土採取中に出土していたことがわかった。日本列島では後期旧石器時代初頭より出現し、縄文時代早期まで存続するとされているから本遺跡の上限をより遡って考える必要があるかもしれない。第15上坑（中期）は被覆葬遺構の可能性が強い。とすれば県内の縄文時代の墓塚資料として重要である。縄文人がこの地で活動中に何らかの異常がおこり、ここに埋葬されたのではないか。第17土坑は集石の屋外炉の可能性もある。遺構内から磨石を2点検出したが、その用途は、調理用の道具と考えたい。使用後、炉内におさめておいたのでは？本遺跡で縄文土器を検出している場所は限定された範囲内である。しかしその範囲内では、竪穴住居跡、貯蔵穴等の生活関連遺構もないことから、狩猟、採集活動のための簡単なキャンプが設定されただけと考えられる。この範囲が選定された理由は尾根の支脈の先端部に位置し、見通しがよく、水辺にも近かったためと考えられる。

陥し穴遺構は全部で9基を検出した。その形態により、I群（第22・39・40・48・49・103土坑）と、II群（第44・46・47土坑）に分かれる。I群は平面プランの規模、形ともほぼ同じで、底面中央に杭穴と思われるピットをもつ。（第40土坑は杭穴を持たないが、

その平面プランによりI群に含める)。I群は本遺跡の北から南へ向け、南の崖線の手前でカーブして配置されている。等高線に対して、長軸方向が垂直または平行になっている。II群はかなり大型の陥し穴で、底面に杭穴を持たない。また各土坑底面で30cm大の石が検出されているが、これは陥し穴に落ちた動物をめぐって狩猟者が投げつけたものと考えられよう。各土坑を並行させることによって捕獲機会の増加を狙っており、崖線を意識して配置されている。I群と比べてII群は内容積が数倍もあり、かつ構造自体も違うのは、狩猟対象が大型獣(シカ、イノシシ等)だったからであろう。I群、II群の新旧関係はわからないが、柵等を設置して陥し穴のある場所へ獲物を追いこんだとすれば、狩猟対象動物によって陥し穴を適宜使い分けていたことも想定される。本遺跡における陥し穴遺構の構築年代については遺構内からほとんど遺物が出土せず、他の遺構との切り合いもみられないことから推定することは困難である。ちなみに青木遺跡(米子市)では本遺跡I群タイプのものが250基以上検出され縄文時代後～晩期とされている。本遺跡の陥し穴遺構も縄文時代のいずれかの時期に利用されたものであり、その頃本遺跡が狩り場として機能していたと考えられるのではないか。(II群は弥生時代の陥し穴の可能性もある。)

弥生時代、中期における人口増加、農具等の発達により生活圏の拡大=内陸部への進出が行われた結果、本遺跡にも集落がつくられたと思われる。今回調査した大部分の遺構がこの時期である。調査以前に石砲丁が出土しており、清山川沿いの小規模な谷水田経営がなされていたと思われる。また竪穴住居跡内からは石鏝、貯蔵穴内からは磨石、敲石も検出しており、狩猟、採集活動も行っていたことがうかがえる。

この時期の竪穴住居跡の立地、建て替え状況からみると、Aグループ(第2・第8・第9竪穴住居跡)とBグループ(第1・第7・第10・第11竪穴住居跡)がある。但し、Aグループの第8竪穴住居跡と第9竪穴住居跡は同一、Bグループの第7竪穴住居跡と第11竪穴住居跡も同一のものと考えられる。とすれば、Bグループ3棟の竪穴住居跡によって構成されることになる。そして各竪穴住居跡間を結ぶと、第1竪穴住居跡と第10竪穴住居跡を結ぶ線を底辺とし第7を頂点とする二等辺三角形が完成する。Aグループは1棟不足す



④図 貝田原・林ヶ原遺跡竪穴住居跡配置図

数字はいずれも竪穴住居跡番号

るが、推定する場所に土器の散布があり、その存在の可能性がある。そうするとBグループもAグループと全く同じ二等辺三角形ができる。加えてAグループは磁北を中心に考えるとBグループと全く同じ傾きになる。貝田原遺跡の2棟の竪穴住居跡も本遺跡のA・Bグループと同じ傾きになり、注目に値する(④図参照)。また第2竪穴住居跡と第7竪穴住居跡の距離、第9竪穴住居跡と第1竪穴住居跡の距離は全く同じである。以上が第1の特徴である。第2の特徴は、竪穴住居跡の機能についてである。Aグループの第2竪穴住居跡内からは分銅形土製器、Bグループの第7竪穴住居跡上面からは器台、第11竪穴住居跡内からは高坏が検出された。その高坏、器台は祭器として利用されていた可能性もある。となると、各グループがつくる二等辺三角形の頂点に位置する竪穴住居跡が祭祀的役割をもっていたと考えられる。ところで、第5・第6竪穴住居跡は比較的小型の竪穴住居跡であり、本来住居としての機能を有していたとは考えられず、産屋、作業小屋であろう。本遺跡において3棟の竪穴住居跡をワンセットにした、いわゆる「単位集団」の存在があったと考えられよう。さて、両グループの関係を論ずる前に掘立柱建物跡について述べる。

掘立柱建物跡は全部で23棟を検出した。1棟は古墳時代のもと考えられるが、大半は弥生時代中期と考えたい。ここで桁行方向を主軸方向と考えて分類すると4方向になり、この相違は主として時期差によるものと考えられる。それぞれ①～④とすると、①は第3・8・18・19掘立柱建物跡、②は第13・20・22・24掘立柱建物跡、③は第2・7・10・11・12・14・15・17・21掘立柱建物跡、④は第16・23掘立柱建物跡である。④には第19掘立柱建物跡、②は第20掘立柱建物跡、③は第21掘立柱建物跡というように他と違ってやや大きな建物跡があり、倉庫でない可能性もある。他の掘立柱建物跡はプランからみて大半が穀物等を収納する倉庫と思われる。①～④の4方向はAグループの建て替え、拡張回数と符合する。単なる偶然とは言えない問題がある。

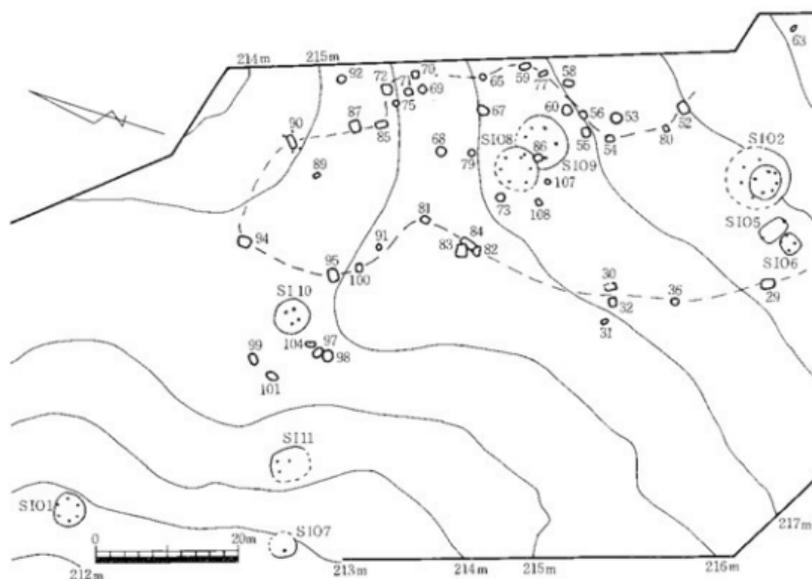
AグループとBグループの関係であるが、遺構内から検出する遺物を比較すると、Aグループが最初に成立し、その後ある一定期間、Bグループと同時存在していた可能性がある。竪穴住居跡の立地等からみても新たな「単位集団」が本遺跡にやってきたとは思えず、AグループからBグループが分離したと推察できる。しかし何故、①3棟の「単位集団」なのか、②「単位集団」の具体的内実、③Aグループは第1・2木棺墓、第1・2土坑と墳墓が集中しているが、Bグループはそれがない等、数々の問題点がある。問題の解決には、周辺遺跡の発掘例の再検討が必要であろう。

やがて生産活動の安定した弥生時代後期初頭のある時期に、本遺跡の集落は発展的に廃絶し、より農業生産活動に便利な場所(長者原台地等)に移動したのもと考えられる。古墳時代前期の遺構として第4竪穴住居跡があり、他に2～3の可能性のある遺構がある。分村によるものか、冬季の狩猟用のためのものかその位置づけは非常に難しい。

## 第5章 考 察

### 第1節 林ヶ原遺跡の貯蔵穴群

林ヶ原遺跡の調査で総計108基の土坑を検出したが、その内の47基を貯蔵穴として報告してきた。それは形態とか位置関係、土層の堆積状況、他遺跡の例から貯蔵用の土坑であろうと判断したからであるが、貯蔵穴であると断定できる決定的な資料（底面に密着する完形土器、あるいはまとまって検出される堅果類）を欠いている点、やや根拠に欠けよう。特に第3木棺墓、第9土坑（木棺墓）等と後述する貯蔵穴Aタイプの掘り方自体には大差がなく、壊れた、日常使用された土器、焼上等の検出がなければ、土坑墓（あるいは木棺墓）としてもおかしくないものである。その他にも貯蔵穴と推定するのに疑問をなげかける点がある。遺物があまり出土しないし、出土する遺物は破片の土器ばかりで、しかも底面から浮いているものがほとんどである点、竪穴住居跡が11棟（その内弥生時代中期と時代が推定できるものは9棟）、おそらく同時期に使用されたであろう掘立柱の倉庫跡19棟に比べ、貯蔵穴があまりに多すぎると思われる点等がそれである。以下こうした問題点をふまえて林ヶ原遺跡検出の貯蔵穴を分析して行きたい。



第328図 林ヶ原遺跡貯蔵穴群分布図

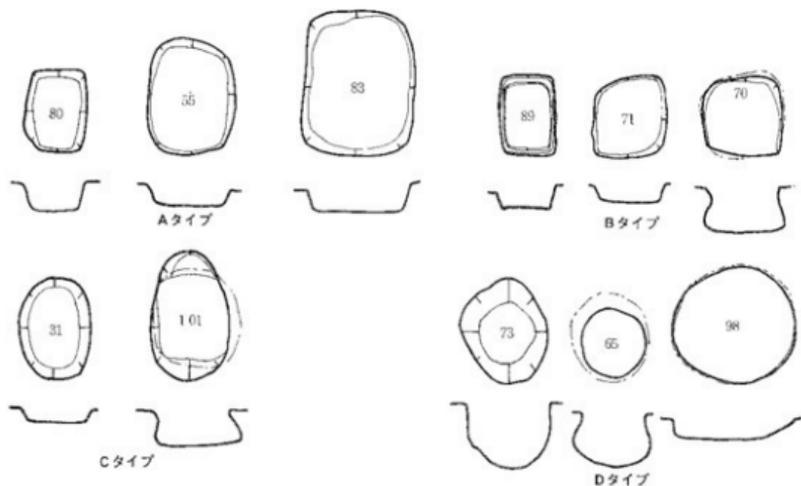
### (1) 林ヶ原遺跡の貯蔵穴群

まず時期であるが、林ヶ原遺跡の貯蔵穴より検出された土器は縄文、弥生土器で、土師器は全く含まれない。その内最も多いのは弥生時代中期中葉～後葉の特徴を備える土器であり、それらは9棟の竪穴住居跡出土土器と極めてよく似ている。従って貯蔵穴も住居跡とはほぼ同じ頃に存在したと思われる。しかし住居跡、掘立柱建物跡と切り合う土坑もあることから考えて、時期に多少のずれはあろう。この新旧関係は一様に貯蔵穴が新しいという結果を得た。

次に各々の貯蔵穴を分析してみる。するとそれらは以下の4タイプに平面的な形態分類が可能である。(第329図)

A隅丸方形、B方形、C楕円形、D円・不整形円形、のタイプである。

最も多いのがAタイプで、貯蔵穴47基中22基を占める。このタイプは最小のNo80(113×87-38cm)から最大のNo95(200×155-30cm)まで幅広く存在するが、底面積0.9㎡未満は3基しかなく、また1.7㎡以上の大きいものはほとんどがこのタイプに含まれている。興味深いことにこの底面積1.9㎡以上のタイプは軸方向がN-25°-EからN-78°-E間に存在するし、さらに絞ったN-36°-E～N-60°-Eの範囲にはAタイプの半数が含まれている。そしてこれらの主軸方向に対しその主軸が垂直方向をとる土坑に有機的關係を認めるなら、さらに7基が含まれることになる(表8)。この主軸方向の集中傾向は掘立柱建物跡の1間×1間のもの7棟にも認められる。さて土坑の断面であるが、このタ



第329図 林ヶ原遺跡貯蔵穴タイプ(数字は土坑番号)

イブには袋状に壁側へ挟れるものではなく、すべて上広下狭のU型掘りか、あるいは2段掘りである。側溝を持つものも、No52・94と2例あるが、ほとんどの土坑は平坦な底面を有している。遺物が比較的出土するものこのタイプの特徴であろう。分布については、第8・9 窪穴住居跡と第2 窪穴住居跡を中軸とした外縁部に位置する傾向が認められる(第328図。ただしNo86・108はこれに適合しない)。

Bタイプとして4基あげた。No69・70はコーナーに丸味が認められ、Aタイプに近いものであるが、平面形が正方形に近く、また断面も袋状のものがある等から区別した。本来ならBタイプに入れない方がよいのかも知れないが、小規模である、主軸方向が似ている等から一緒に扱った。このタイプは皆底面積が1.4㎡以下で、主軸を北西—南東方向にとる。No69~71は隣接するが、No89は17m程離れている。No89は林ヶ原遺跡で検出した貯蔵穴群中最小であるにも拘わらず、内にしっかりした側溝を持っている。断面はNo69・70が袋状を呈する。

Cタイプは9基あるが、その内4基が第10窪穴住居跡の近くに存在する。他のものは散在する。主軸方向に強い規則性は認めたいが、隅丸方形タイプにあまり例のない南北方向に軸をとるものが5基あることは注視すべきであろう。土坑断面は約半数が袋状である。

Dタイプは12基あり、Aタイプに次ぐ数である。分布はAタイプに似ているが、より一層第7・8住居跡近辺に集中するようだ。規模は径1m以上がほとんどで、深さも比較的深くなっている。断面は一部内へ挟れるものを含めて、袋状を呈するものが半数ある。底面積も1㎡以下が過半数を占める。側溝をもつものはなく、底の浅いスリパチ状のものが多い。遺物は他のタイプに比べ最もよく出土している。No79のように大きな石で上縁部が塞がれているものもある。No73は断面が深鉢状を呈し、かつ遺物も他の土坑出土のものと同状状況、形態に相異が認められ、Dタイプと同一視できないと思われる。

これらの貯蔵穴は、ほとんどが単独で検出されている。また住居跡、掘立柱建物跡を切っ

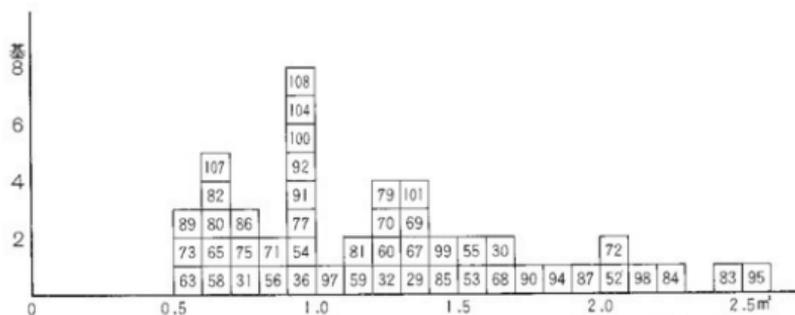


表7 林ヶ原遺跡・貯蔵穴数と底面積(数字は土坑番号)

ているもの(No.29・52・59・77・80・85・86)はあっても、それらに伴って検出されるものはなく、総て屋外にあるものと考えられる。またそれらは、調査区域の東側に、掘立柱建物跡群にまじって分布している。そこは見晴らしのきく、水はけのよくなっている小高い地であり、貯蔵穴は初めからこの貯蔵条件のよい地を選んでつくられたものと思われる。これに対し調査地域の西側、南側は住居跡が7棟(第3・4住居跡を除く)あるにも拘わらず、貯蔵穴はほとんど検出されていない。削平されたのだという見方もあるが東側の貯蔵穴のほとんどが第8・9竪穴住居跡の床面より深く掘り込まれてつくられているから、もし貯蔵穴があったなら、南側の竪穴住居跡を検出した時点で当然その掘り方を検出できたはずである。実際ビットなどは同じように検出されている。しかし現実的に貯蔵穴が検出されていないということは、西側、南側には始めからそれがなかったと考えた方がよさそう。

## (2) 「ムラ」と貯蔵穴群

こうした住居跡と貯蔵穴の分布状況は、弥生時代中期に林ヶ原に生活を営んだ人々が、

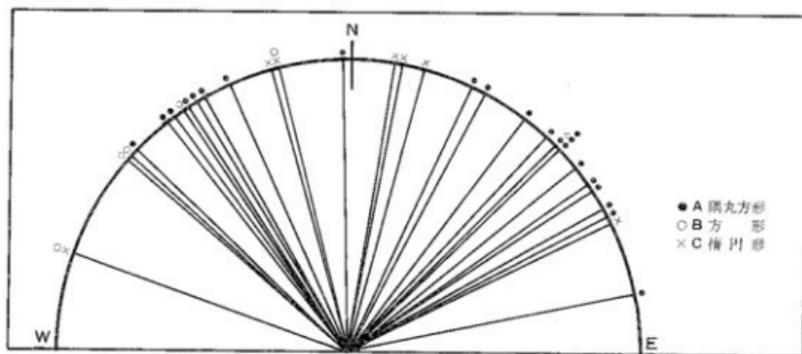


表8 平面形態と主軸方向

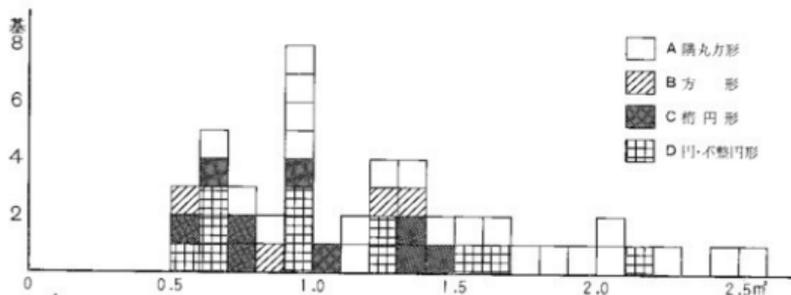


表9 林ヶ原遺跡・貯蔵穴の平面形態と底面積

住む場と貯える場を分けていたことを推定させる。ここで場所的に問題になるのが、第8・9 堅穴住居跡の存在である。第8 堅穴住居跡は建て替え1回、拡張1回で計3棟、第9 堅穴住居跡は拡張1回で計2棟、両者は切り合うから総計5棟の堅穴住居跡が同じような地点にあったことになる。また第2 堅穴住居跡の場合も少なくとも3棟存在する。P222の林ヶ原遺跡のまとめに述べられているが、第2・8・(9)住居跡から成る集団をA、第1・7・10住居跡からなる集団をBとすると、47基の貯蔵穴群がこのA・B両者に属する事は問題あるまい。しかし、Aグループは貯蔵用区域内に位置し、かつ建て替え、拡張による同一地域使用の時間的長さ、最終段階における床面積の広さ、遺物の量等でBグループに優っている。中でも第8・(9)住居は、堅穴住居の耐用年数を20～25年として、計100～125年存在したことになり、林ヶ原遺跡集落存続年数約120年とほぼ同じ事になる。即ちAグループは弥生時代中期中葉に初めて林ヶ原遺跡に「ムラ」を築いた集団であり、彼らが「ムラ」の首長層として「貯蔵用区域」を集落移動・廃棄の行なわれる中期後葉～後期まで管理していたものと思われる。このような首長層を中心とした「ムラ」による管理・運営を想定してこそ、47基という貯蔵穴群、23棟の掘立柱倉庫群の分布状況は理解できよう。残念なことに「ムラ」の全容を把握できなかったが、土器の散布状況から遺跡は東方へ20～30mほど延長することは明らかである。従って7棟(第8・9住居跡を1つに数え、第3・4・6住居跡を除く)の堅穴住居跡の所産ではなく、さらに東側に続く数棟の住居跡を含めた「ムラ」の生活累積の姿を如実に示すものが貯蔵穴・掘立柱の倉庫群であろう。

### (3) 周辺遺跡との比較

このような状況は近くの弥生時代の集落跡とはかなり異なる。Dタイプの内、断面袋状の貯蔵穴は岡山の大田十二社遺跡(津山市、弥生時代後期～古墳時代前期)に79基の検出例があるが、ここにはAタイプが皆無である<sup>註2</sup>。鳥取県内でもDタイプ、断面袋状の貯蔵穴は点々と検出されている。その内弥生時代中期～後期初頭のものとしては、浅井遺跡(公見町)、宮前遺跡(同)、奈喜良遺跡(米子市)、尾高遺跡(同)、東宗像遺跡(同)、神原遺跡(溝口町)、丸山遺跡(三朝町)等がある。しかし林ヶ原遺跡のように形態、深さ、断面形は様々だが使用年代が弥生時代中期中葉～後葉と限定できる例を、寡聞の限りであるが知らないのである。西日本でも最大級の大規模集落が弥生時代中期～古墳時代中期末・奈良時代に営まれた青木遺跡(米子市)でさえ貯蔵穴は14例しか報告されておらず、しかも、それらはほとんど円形、袋状を呈するもので、点々と散在している。青木遺跡の場合貯蔵穴を近くの住居に付属する施設と考え、不整形円形(弥生時代後期)→隅丸方形(古墳時代前期)に変化したと編年的な記述がなされている<sup>註3</sup>。

ところで縄文時代前期以降現代に到るまで活用されているDタイプ、断面袋状の貯蔵穴は、弥生遺跡の場合縄文時代の「ドングリピット」の流れを継ぐものでなく、稲作と共に

伝えられたものであり、従って高温、多湿な日本では穀物貯蔵に適さず、中期以降掘立柱の高床倉庫にその座をゆずるようになった。そして、袋状貯蔵穴は補助的食料である木ノ実等の一時的保存に用いられるようになったことは周知の説である。ということは穀物栽培の比較的安定した地域においては貯蔵穴がなくても、倉庫があれば食物の保存が可能であるということになる。実際地域によっては貯蔵穴の全く検出されていない遺跡も多くある。掘立柱建物の倉庫（住店もあるが）が何棟もあり、下方に開けた平地を持つ青木遺跡の場合は、生活の基盤、安定性自体が林ヶ原遺跡とは大いに異なり、これが貯蔵穴に投影されたものと思われる。即ち林ヶ原のような水利、平地に恵まれぬ山間地において、青木のような水利のよい、平坦地で行なわれる水田経営の生産力の発展は困難であり、狭い谷水田経営と、それに匹敵するくらい重要な木ノ実・根茎類の採集、動物の狩猟を共同で行ない、生活をおくっていたものと思われるのである。従って林ヶ原遺跡においては「ムラ」そのものの漸進的発展はあっても、それが各個人の分化に結びつかず、「ムラ」は弥生時代中期を通して共同体の紐帯を断ち切れなかったと思われる。住居跡内に貯蔵穴らしき施設がないのも、この故ではなかろうか。

#### (4) 貯蔵と形態

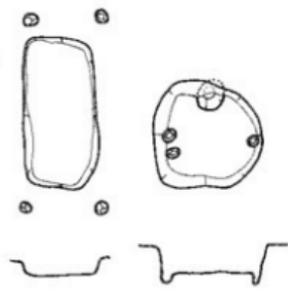
先にも触れたように、「貯蔵穴」と聞けば平面形が円、不整形円形、断面袋状のフラスコ状土坑を想起する。実際このタイプの検出例は各地にある。しかし林ヶ原遺跡の場合、様々な形状のものが混同している点で他地域とは大いに異なっている。第329図では平面形で4タイプに分類したが、断面が袋状か、上広下狭か、底面スリパチ状か、平坦か、側溝があるかどうか等でさらに細分可能である。一体この多様性をどう理解すればよいであろうか。「ムラ」が特定期間（弥生時代中期中葉～後葉）に作り、管理していた貯蔵穴であろうと推定した現在、様式とか流行ではこの現象は理解できない。ただし遺物で判断する限りでは、Dタイプは頸部に指頭圧痕文帯を持つ壺、簡素な「く」の字状口縁を持つ壺とも共伴しており、「く」の字状口縁、あるいは凹線文のめぐりあげ口縁の壺ばかりのAタイプの貯蔵穴とは、埋もれる、埋める時期に差があるようだ。即ち相対的に考えて、作った時は分からないにしても、使われなくなった時はDタイプが新しいことが言えよう。またAタイプの出土遺物にDタイプ程時期的な幅がないことは、土坑が速やかに埋められたことを推定させる。これに対しDタイプは埋もれる、あるいは埋めるのにかなり時間を要したものと推定される。それともかなりの間利用されたのかも知れない。Dタイプの規模が大きく、深い事も耐用年数を長くするよう、しっかりしたものを作った結果とも考えられる。

しかし実際にはこのA、Dタイプの時期的な相違はほんの僅かなものであり、両者の併存状況を想定した方がよさそう。ところでこの貯蔵穴の形態差を場所的・地形的なものとする見方もある。しかし各タイプ隣り合う例もあり、この説も当たらないようだ。する

と残る形態相違の要因は貯蔵する物それ自体にあることになる。貯蔵方法は貯蔵する物によって違ふことは今も昔も変わらない。竪穴貯蔵法を発見した縄文時代中期とは違い、生活が多様化し、おそらく貯蔵法に対し色々な知識を得ている弥生時代の食物等の保存方法が多岐に分かれていても不思議ではないと思われるのである。勿論貯蔵する物は総て食料とは限らない。また食用に貯蔵したのもでも、例えば唐古遺跡（奈良県）のドングリビットの例など、活用されることはなく廃棄されるだけのものもある。このような廃棄用の「貯蔵穴」が林ヶ原遺跡になかったとはいえない。実際食べる事を念頭において採集した食料（おそらくドングリ、クリ、シイ等の堅果類）を必要がないからと言って投げ捨てる事は古代においては考えられない。「廃棄」も大切な行為だから、土坑をそのためのみに掘ることはあったのではなかろうか。<sup>註5</sup>

しかし飽くまで貯蔵穴は、物を貯蔵するために掘られた土坑である。「ゴミ捨て場」として使用されていても、それは二次的なものであって、土坑を作る目的は貯蔵にあったのである。ここで再び何が貯蔵されたのか問題となるが、残念なことにこれを解明する物的証拠を検出できなかった。唯一Na104からドングリらしき堅果類を2点検出しただけであった。ここでは貯蔵物を推定するいくらかの資料と形態の特性をあげて行きたい。Aタイプは数が多く、規模も様々であり、分布は掘立柱の倉庫群の周辺に偏る。そしておそらく使用年数が短いであろうこと等から、簡易な、一時的保存、あるいはドングリ等の非常食廃棄に用いられるものと考えたい。しかし規模の大きなものについては、Na90のピットが示すように上屋架構が存在し、かなりの空間を占める物も保管されたものと推定される。B・Cタイプも遺物から判断するとAタイプに類似している。しかし分布は異なり、BタイプのNa69～71、CタイプのNa97・99・101・104に強い集中傾向が認められる。特にNa69～71は第88土坑の各コーナーに当たり、同時存在をうかがわせる。同じものが同時に分割貯蔵されたものと考えたい。

しかしこの平面形による貯蔵物分類より、断面を有力視すべきかも知れない。土坑を断面により袋状、U字状、V字状に分け、貯蔵物を考えることにより縄文時代の袋状、あるいはU字状のそれとの比較が容易になり、それをもとに弥生時代の貯蔵穴の特性に迫れるというのである。断面とは地面の掘り込み方であり、これが最も作用するものは温度と湿度、あるいは底のスワリのよさである。V型のものには壺が安置されていたのかも知れない。実際底がV型のAタイプからは破片であるが、壺がよく出土している。U字型はドングリビット<sup>註6</sup>に酷似し貯蔵物としてドングリ等の木ノ実がそ



第330図 林ヶ原遺跡ピットを持つ土坑

のまま収められていた可能性が強い。袋状を呈する上坑も底面状況によって分けられるものと思われる。

その他側溝を持つ貯蔵穴が3基ある。これは排水と共に、壁面からもぐら等が侵入するのを防ぐ壁板をめぐらした跡であろう。かなり大切なものが保管されていたのだろう。

#### (5) 貯蔵穴・・・その後

貯蔵穴が、土塚墓、ゴミ捨て場等に再利用される例は多く報告されているが、林ヶ原遺跡においてもその傾向が認められる。主に上層から壊れた状態で検出される多くの土器がそれを雄弁に物語っている。No.79出土の大きな石も邪魔な石を捨てたものであろう。土坑の中には焼土と共に炭化木を検出するものもある (No.29・71・85・101)。これに除湿機能を求める考え方があるが、一部に集中する点、底面より上方に塊状に分布する点から貯蔵穴廃棄時に投げ込まれたものと考えた方がよかろう。

非常に大まかに林ヶ原遺跡検出の貯蔵穴群を見て来たが、いかにこれらをまとめるのが困難かを痛感した。それは弥生時代の貯蔵形態としては、高床式倉庫ばかりが中心的に研究され、堅穴貯蔵法はともすれば見落されがちになり、それを扱った文献もないことによる。また土塚墓との見分けが困難であるということもあろう。しかしこのような研究現況では、片手おちであり、あたかも弥生時代は高床貯蔵法が時代を通して普遍的になされたかのごとき誤解を与えるのではなかろうか。また板付遺跡の検出例から、貯蔵穴が高床式倉庫へ変化していったのではないかとされているが、林ヶ原遺跡で切り合い関係が判明している限りでは、掘立柱の倉庫→貯蔵穴であり、これに矛盾する。今後の弥生時代以降の堅穴貯蔵法の総合的研究がまたれよう。

註1 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅲ (1978) P315では1住居跡の使用年数を25年としている。

註2 津山市教育委員会『大田十二社遺跡』(1981) P54~90

註3 青木遺跡発掘調査団『前掲書』P29

註4 木下正史編『弥生時代』、『日本の美術』No.192 (1982)「稲作の始まり」；『古代史発掘』4講談社(1979)『日本民俗文化大系3 稲と鉄』小学館(1983)等

註5 森浩一「稲と鉄の渡来をめぐって」(註4『前掲書』P29~30)

註6 この上層を推定させる土坑にはNo.18があるが、他のものとはかなり離れ、かつ周辺に遺構がない等から貯蔵穴群からはずした。

註7 水瀬福男「貯蔵穴」『考古学』創刊号(1982)等

註8 縄文時代の西日本のドングリピットについては、山崎純男「西日本後・晩期の農耕」『縄文文化の研究』2 雄山閣(1983)

註9 二朝町教育委員会・花園大学考古学研究室編『丸山遺跡発掘調査報告書』(1984)P224~228で、袋状貯蔵穴について考察がされているが、丸山遺跡で検出された他の土坑の中にもかなり多くの貯蔵用堅穴が存在すると思われる。

形態	土坑番号	主 軸	長軸×短軸 深さ	底面積	断面袋状	遺物数	備 考	
圓	29	N-30°-W	206 × 150 - 13	1.32		1	炭化木	
	30	N-34°-W	168 × 116 - 18	1.62		2		
	32	N-60°-E	148 × 131 - 36	1.28		0		
	52	N-44°-E	(200) × 164 - 26	2.02		0	側溝	
	54	N-25°-W	130 × 88 - 12	0.96		1		
	55	N-50°-E	155 × 124 - 31	1.54		3		
	56	N-36°-E	120 × 92 - 17	0.86		0		
	59	N-32°-W	153 × 96 - 40	1.12		2		
	72	N-62°-E	200 × 164 - 46	2.08		1	炭化木・焼土	
	77	N-47°-W	160 × 90 - 44	0.98		2		
	80	N-45°-E	113 × 87 - 38	0.65		1		
	81	N-24°-E	135 × 118 - 46	1.1		3		
	83	N-78°-E	205 × 160 - 45	2.44		0		
	84	N-27°-E	(240) × 110 - 33	2.28		4		
	方	85	N-37°-W	168 × 100 - 40	1.48		0	焼土・炭
		86	N-42°-E	128 × 108 - 48	0.72		2	1
87		N-56°-E	190 × 155 - 40	1.98		5		
90		N-45°-E	210 × 100 - 25	1.71		2	ピット	
94		N-2°-W	180 × 164 - 32	1.82		1	側溝	
95		N-54°-E	200 × 155 - 36	2.56		2		
100		N-39°-W	132 × 108 - 40	0.93		0		
108		N-45°-E	120 × 85 - 16	0.92		0		
方		69	N-49°-W	116 × 114 - 46	1.60	○	1	
		70	N-15°-W	112 × 108 - 58	1.28	○	2	焼土・炭
	71	N-35°-W	104 × 100 - 40	0.84		0		
	89	N-50°-W	115 × 84 - 30	0.56		0	側溝	
楕	31	N-8°-E	136 × 97 - 21	0.74		4	炭化物	
	58	N-15°-W	164 × 100 - 40	0.68		1		
	63	N-71°-W	100 × 56 - 46	0.57	○	0		
	67	N-14°-E	170 × 142 - 80	1.38	○	6		
	75	N-63°-E	94 × 80 - 66	0.76	○	3		
	97	N-70°-W	167 × 101 - 47	1.01		0		
	99	N-45°-E	176 × 115 - 22	1.40		3		
	101	N-10°-E	182 × 107 - 56	1.34	○	6	種子・焼土	
104	N-16°-W	161 × 82 - 22	0.96		0			
不 整 円 形	36		116 × 116 - 41	0.98	△	0		
	53		161 × 141 - 37	1.52	△	3		
	60		149 × 146 - 42	1.26		2		
	65		98 × 90 - 72	0.66	○	2		
	68		137 × 134 - 32	1.60	○	9		
	73		145 × 120 - 94	0.56		14		
	79		106 × 106 - 52	1.28		1		
	82		150 × 110 - 46	0.62		1	2	
	91		90 × 87 - 53	0.92	○	1		
	92		133 × (123) - 36	0.97		0		
	98		160 × 160 - 40	2.16		3		
	107		92 × 88 - 30	0.68	○	1		

断面袋状 ○ 遺物数(土器、石器)  
断面一部袋状 △

表10 林ヶ原遺跡の貯蔵穴一覧(長さcm、面積㎡)

## 第2節 ローム特殊土坑について

### (1) はじめに

本年度調査した遺構の中に「ローム特殊土坑」として一括できる、性格のよく分からない落ち込みが19基（貝田原2基、林ヶ原17基）ある。いずれもが黄褐色を呈する大山ロームを黒褐色系統の土層（以下黒色系土層と表す）が楕円形にとり囲む形で検出されるもので、断面では各々黒色系土層の上にローム層が形成されている様子（第332図-I）、土坑底に接するロームを黒色系土層が囲う様子（同一-II）、ロームが黒色系土層にはさまれている様子（同一-III）が観察できる。このような土坑は関東地方では沢山検出され、「小竪穴群」、「竪穴土坑」、「ローム盛土土坑」、「ロームマウンドを伴う土坑」、「住居跡」等と様々な名で呼ばれてきたものであるが、今日では自然のなせる業=風倒木跡として、さしたる調査も行なわれず片づけられている。しかしその性格づけは、全国各地の検出例を考慮し、十分に分析、検討がなされないまま性急になされた感を否めない。そこで今回まとまってこのような土坑を検出、調査したことを契機に、このローム特殊土坑を検討してゆきたい。

### (2) 林ヶ原遺跡のローム特殊土坑

林ヶ原遺跡では17基の土坑がこれに相当する。ほとんどが円、不整形円形であるが、全体を調査できなかったものが4基ある。主軸のわかるものは7基しかない。そのいずれもが北東-南西方向である。地形で言えば、南東から北西へ緩やかに下がる等高線に沿って存在する。また各土坑間距離は一見不規則のようであるが、No93-27、27-11、5-42、42-43、42-38、38-34、27-5、27-3といずれもが約20mとなっている。（第331図参照）これらの土坑の個々をさらに詳しく分析すると以下の全体的傾向が認められる。

- 1、ロームを黒色系土層がとり囲む
- 2、断面に上層の逆転（ロームの下に黒色系土層が入り込んでいること）が観察できる。
- 3、底面は凹凸が著しく、深いスリバチ状のことが多い。



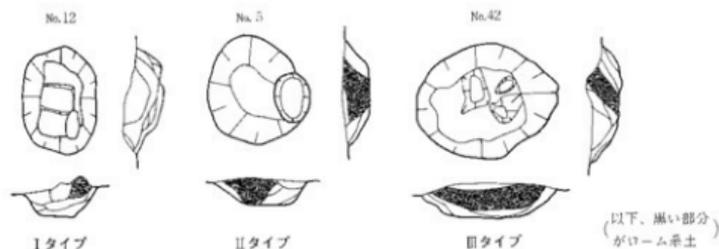
第331図 林ヶ原遺跡ローム特殊土坑配置図

4、遺物がほとんど出土しない。

5、規模は3m×2m以上がほとんどである。

この内1、2がローム特殊土坑のメルクマルであるが、2の「上層の逆転」には、黒色系土層の上にロームが位置するもの(6基)、土坑底に接するロームの周辺に黒色系土層が入り込むもの(8基)、ロームが黒色系土層にはさまれているもの(3基)がある。(表11)この土層は一樣でないものが多い。3については底面が比較的平坦なものはNo.11・12・37しかなく、他の上坑には整形の跡が認め難い。4については遺物を検出したのは4基で、総て上層の黒色系土層内であり流入と言ってよかろう。ただしNo.50からは壺形土器、No.42・102からは低い所で土器が出土している。また遺物としてよいかどうか疑問が残るが、大小の石がほとんどの上坑から出土している。特にNo.37では著しい。

その他個別になるが焼土(No.13・33)、ビット状の落ち込み(No.33・34・41・90・102)方形の落ち込み(No.11・12・13・16・27)も検出されている。



第332図 林ヶ原遺跡のローム特殊土坑のタイプ分け

### (3) 県内のローム特殊土坑

鳥取県内では、この種の土坑は検出例が少ないためか、報告例をほとんどきかない。しかし最近の山間地に迫る大規模な発掘調査によって、こういった上坑もまとめて検出されるようになったが、現在のところ検出地は大江山麓に限られている。貝田原遺跡(岸本町)、岸本遺跡(同)、森藤第1遺跡(東伯町)、大谷遺跡(大栄町)がそれである。青木遺跡(米子市)にもあったときくが、報告書に明記されておらず、一応青木遺跡は除外しておく。ところでこれらの内森藤第1遺跡は現在調査中、岸本遺跡は報告書がまだ出ていず、唯一、大谷遺跡のみが、報告書で記されている。もっとも大谷遺跡にしてもロームを取り巻く黒色系土層のみを調査し、「土壇をかこんで溝があった」とか、根拠もなく「土壇墓」と性格づけを行なって報告を終えているので、林ヶ原、貝田原調査時には全くと言ってよいほど資料がなく、調査員は大いに頭を悩まされることになった。しかし貝田原遺跡とほぼ期を-にして調査がなされていた岸本遺跡がよい資料を与えてくれるようだ。

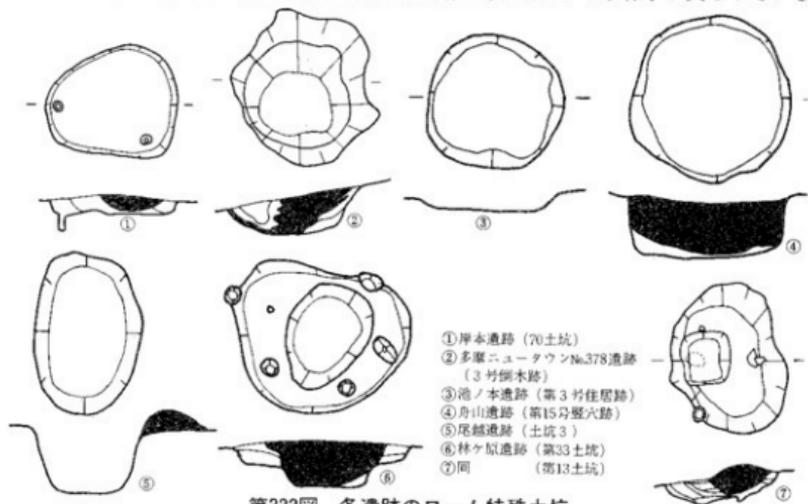
岸本遺跡は弥生時代中期の遺跡で、標高70mの、米子平野を見おろす丘陵地に位置する。住居跡1棟、木棺墓1基、土坑74基がその頃のものと考えられるが、さらに特殊土坑として10基の土坑が調査されている。これは「大型土坑の中にロームとバミスが楕円形に入っているもの」で実見した限りではローム特殊土坑の範疇に入るものである。ただ岸本遺跡のものは底がスリパチ状でなく、平坦な住居跡状のそれを持ち、中には硬質ロームを40cmも掘り込んでつくられたピットを壁際に持つものもある。(第333図④)

貝田原遺跡では2基検出したが、第8土坑は削平、攪乱が著しく資料として不適当である。第9土坑もかなり削られているが、おおむね形状は林ヶ原遺跡のそれと同じである。

#### (4) 関東のローム特殊土坑

ローム特殊土坑は近年の山間、丘陵地にせまる大規模開発に伴って検出される例が多く、関東、中部地方にかなりの出土例をみることができる。東北、北海道地方にも例があるらしいが、詳細は分からない。手元にある資料から関東地方のそれが中心になるが、御容赦願いたい。

まず検出場所であるが、やはり丘陵地、台地に集中している。平面形は円形、楕円形で断面はスリパチ状が多いが、(多摩No.378遺跡<sup>註4</sup>、池の本遺跡(静岡)<sup>註5</sup>、舟山遺跡(長野)等の例は底が平坦で住居跡として考察している。またロームの状況は大体第332図のどれかに含まれるが第333図⑥のようなものもある。これらの報告書には、断面に分層線が記載されていないものが多く、ロームと黒色系土層の関係に不明な点が多い。分層線の記されているものも、図333図②の例など林ヶ原遺跡のものとはかなり様子が異なっている



第333図 各遺跡のローム特殊土坑

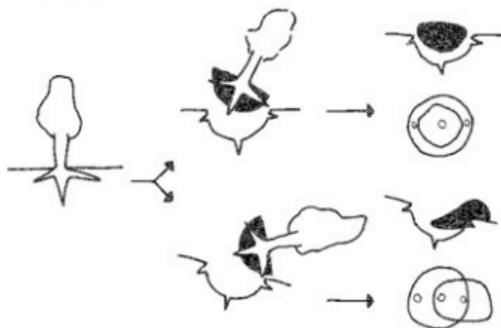
ように思われる。遺物は、土坑の平面、断面図に出土位置が記されていないため、安易に土坑に伴う遺物とできないが、報告されているものは大半が縄文土器（特に中期が多い）である。その他弥生土器、土師器もある。

### （5） 従来説の反省と問題点

検出された遺構の性格づけをすることは、調査した遺跡の持つ意味を考える上で最も重要なことであり、従って何にもまして慎重でなければならない。しかるに次々と迫る発掘調査の山は、その時間を調査者に与えることなく、我々を次の遺構へと向かわせてしまう。このような状況下、この性格不明の土坑は多くの調査者の手を経て性格づけがなされて来た。墓坑、貯蔵穴、陥し穴、産小屋、住居跡、便所、炉穴、水ため、倒木跡（発表時は風倒木跡であるが木が倒れる要因は風以外にもあるため、より広い概念でこう言った方がよい）がそれであるが、今日最有力視されているのは倒木跡とする見方である。これは倒木跡以外の論を本格的に展開するものがなく、かつこの土坑の最大の特徴である、マウンド状のローム、土層の逆転を十分に説明するものが他説にないということが大きな要因となっているように思われる。これに対し能登健氏の倒木跡論（風倒木跡論）はこの2つの条件を満たしている点、他説より合理的であるがために多くの人に支持されたものと思われる。氏は自らの調査、この土坑内より半腐植の大木が出土したこと、強風で倒れた大木の実見から論を展開している。即ち「大木が風などの自然の労力によって一気に倒れたとする。その木は大地に多くの根をはっており、倒木の際の力は基盤となる層の上をも一緒に持ち上げてしまう。そして木と

ともに持ち上げられた土は、木の腐植や風雨、日照などによって落下、再堆積を行なうが、その間に周囲の黒色系土が流入して黒色土層を形成する。」と層序の逆転、ロームの盛り上りを説明する。第334

①図がそれに用いた氏の略図である。この説は一見明解なようであるが、問題が無いわけではない。論の発表当時から言われているように、風倒木ならロームと黒色系土がもっとまじり合うはずだし、



第334-①図 倒木跡形成模式図



第334-②図 倒木跡想定図

持ち上げられる過程で落下したロームが、土坑と黒色系土の間のほぼ全域から薄く、あるいは厚く検出されるはずである。また黒色系土が風雨と共に流入したとするなら黒色系土は土坑肩部の高い方に多く堆積するはずであるが、No11・13・50等はこれに合致していない。

氏が論を発表した時点から資料もかなり増え、少なくとも林ヶ原遺跡、岸本遺跡のそれは倒木跡論では理解できない点が多くある。焼土、完形土器の検出、掘り方らしい跡の検出、床面のしっかりしたピットがそれである。これらの事項を土坑の再利用で説明しようとするむきもある。しかし土坑の上層や窠みの再利用ならいざ知らず、No13の焼上、岸本遺跡No70のピットはいずれも底面上での検出なのである。一度できた、あるいは形成されたローム特殊土坑を再び掘り下げて同様に土層を堆積させたとも言うのであろうか。ここで一步譲って倒木跡論をとってみる。まず倒れた方向であるが、土坑の形状から長軸方向が可能性が高い。つまり木は北東-南西方向に倒れたのであり、気候が今日とさして変わらないとして、北西風の強い林ヶ原では全く反対方向（風に対して垂直方向）を示すのである。また木が倒れた時、その根は巢たしてスリバチ状に基盤の層を持ち上げるだろうか。持ち上げる所と、持ち上げる途中で落下させてしまう所、持ち上げられない所と分かれ、土坑断面は凹凸がもっと著しくなると考えるのが現実的ではなからうか。木が倒れる時土根の部分が最も深くなることは認めるが、それだけではスリバチ状の土坑はできない。それは、先に述べた理由の他に、以下の物理的な理由があるからである。即ち木が倒れる時、第334-②図のA地点が支点になることはあり得るがB地点では力学的に無理がある。木はA地点を境界としてa方向へ根を介してCが深く、Dが浅い大きな穴をつくることはあっても、能登氏の描く図のような中央の凹む東西、あるいは南北方向対称形のスリバチ状の土坑はできないのである。できるとすれば、断面のかなりいびつな土坑になるはずである。また自然によるなら持ち上げられたロームと、地山（ローム）で検出した土坑の容積は同じでなければならない。しかるに、ほとんど削平されていないNo42でさえロームの量は土坑容積の1/2程度である。これら物理的理由で倒木跡論は首肯できないのである。

このようにローム特殊土坑-倒木跡も説得できない。自然のなせる業にはあまりに不合理なのである。成程木が倒れ地盤の土層が根と共にもち上げられる例はある。しかし我々調査員のみか地元の人さえ倒木がロームを4.32×3.4mの楕円形に持ち上げる例は知らないのである。上層を持ち上げる量、形は広葉樹と針葉樹とは大いに異なり、中でも赤松の場合はロームをかなり吸いよせるという説もある。しかしロームを第332図の1型のように少しも落下せしめることなく、切って取ったように吸い上げ、持ち上げる事は不可能のように思われる。土坑内のピット状の浅い落ち込みも、根の抜けた跡とみるより、形成時の小石を取った跡とみた方がよからう。

## (6) ローム特殊土坑の性格

それでは一体この種の土坑は何のために作られ、どのように使用されたのであろうか。この課題解明の鍵は、土坑のどの部分が実際に使用されたか、どのような状態で利用されたかという点にある。即ち土坑そのもの(堅穴利用)か、土坑の埋土内か、マウンド状を呈するロームそのものかということである<sup>411</sup>。従来の考え方は堅穴利用のみにとらわれ、墓塚、貯蔵穴、陥し穴等々と説をとえ、他は眼中にないといった体であった。従って既述したように上層逆転の説明が疎かになり、倒木跡論のつけ入るところとなったのである。確かに底面の凹凸、断面のスリパチ状は貯蔵には不向きだし、土塚墓では断面が矛盾する。便所ではロームが説明できない。産屋説は民俗例に認められるくらいで、考古学的な根拠に欠ける。何にもましてこのタイプの土坑は従来検出されている墓塚、貯蔵穴等の遺構とは形状を全く異にしているから、従来の考え方では理解できない点が多々ある。従って自然の営力とみる説が出てくるのも否めない。しかし今回の分析の結果、性格はよく分からないにしても、人為的な堅穴とみた方がより矛盾が少なく、しかしロームそのものに意味を認めた時、それが最小になるのであろうという推定を得た。ローム特殊土坑の最大の共通点は土坑、掘り方、埋土ではなく、おそらく旧表土に露出していたであろうロームのマウンドであり、この状態にして利用されたものと考えたいのである。つまり土坑を掘りロームを多量に掘り上げた後、しばらくして、あるいは速やかに今度は黒色系土を中心にして埋めもどす。この時ロームもいくらか埋められる。これは純粋さその他の要因で捨てられたものであろうし、埋める作業にも何らかの規制があったと思われる。そして上層になるとロームを多くしてマウンド状に盛り上げるのである。こうして黒い旧表土面に黄色ロームのマウンドが形成される。これはかなり目立つ存在であったと思われる。土坑が滑らかでないのはその必要がなかったからであり、大きく深いのは、より多量の純粋なロームを得るためである。

次にこのような形態にして何をやったか、どのように利用されたかが問題になる。かつてのようにかかる上面観にまどわされて、方形周溝墓の祖型<sup>412</sup>など言うのは早計である。マウンド状のロームに使用形態・方法を求めようとする方向を導いた現段階そのロームマウンド自体が風雨、耕作等で削平、攪乱され、おそらく形成時の状況を留めるものがないであろうということは、この問題の解決を極めて困難にしている。それに加えて調査者の力不足もあり、ローム特殊土坑の性格、使用法を解明するに至らなかったが、それを推定するいくらかの資料を得た。以下列挙する。No50の完形正立土器、No33の同心円状に配されたピット、焼上、岸本遺跡No70のピットの検出、さらに土坑検出地が、林ヶ原遺跡の場合、弥生時代中期の集落の外縁部をめぐる事がそれである。また上坑底面より焼土が検出されたもの (No13)、掘り方らしい落ち込みが認められるもの (No12) 等も何らかの資料を与

えてくれよう。

## (7) ま と め

以上、非力ではあるが林ヶ原遺跡の資料を中心に、性格不明とされて来たローム特殊土坑を、従来説の問題点をふまえて分析、検討して来たが、最大の論点はこの土坑が遺構か、そうでないかという、調査以前のごく基本的なものであった。結局様々な理由で「遺構」であると判断したが、これで問題がなくなったという事ではない。それは関東、中部地方のローム特殊土坑とかなり様相が異なり、林ヶ原、岸木遺跡の場合と同様な分析結果が得られないという事である。例えば第333図②等を見る限り倒木跡と考えた方が問題が少ないのである。これは本来両者が性格を異にするためか、地域性か、それともローム特殊土坑自体か①自然にできる上坑（倒木跡）、②人為的に形成された土坑（遺構）に分かれているためのどれかの理由による。この点は再考を要する問題である。また形成された、あるいはできた時期が関東の例を含めると縄文～古墳時代と何千年の幅を持つという点も「遺構」説に疑問を投げかけている。何千年も、（おそらく）同様な形態を保って、人々に絶えることなく作り、伝えられる遺構が果たしてあるかということである。しかしこれに否と答える根拠を我々は持っていないし、人間の精神構造、生活変化の、現在とは比較にならない程ゆるやかな古代において、我々の価値基準で物事を測ることはできない。ここでは疑問は残るもの一応ローム特殊土坑を「遺構」として来たが、性格については迫り得なかった。今後の資料の充実と、それに基づく性格づけがなされることを願って文を終えたい。

最後に小文を作成するにあたり、数々の資料、助言を写えて下さった諸氏に対し、末筆ながら感謝の意を表したい。

註1 人栄町教育委員会、「大谷第1遺跡」「大谷地域遺跡群分布調査報告書Ⅲ」（1979）

註2 岸木遺跡現地説明会資料（1983）より作成

註3 本報告書P96・97参照

註4 多摩ニュータウン遺跡調査会「多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅳ」（1979）P84～87

註5 「池の本」については『古代史発掘』2（1973）P27にも「直径1.5～3m程度の円形プラン」の竪穴住居跡があったと紹介されている。

註6 御堂島正「ロームマウンドを伴う土坑について」『始原』第2号、（1978）P3

註7 能登健「発掘調査と遺跡の考察 いわゆる「性格不明の落ち込み」を中心として」

註8 同上 P280

註9 気候環境は弥生時代以降現代に至るまで大きな変動は認められないが、縄文時代についてはいくつかの変動期がある。安田喜憲「鳥道跡の花粉分析」（北条町教育委員会『鳥道跡発掘調査報告書第1集』1983）

註10 この地域に吹く強い風には大山おろしと呼ばれる風があるが、風向は南東である。また毎年吹く台風等によって木が倒れることもあるが、それらを考慮すると林ヶ原のローム特殊土坑の軸方向の規則性が理解できない。

註11 ロームがマウンド状に盛り上がっていたことは林ヶ原遺跡の表土剥ぎの段階で気づいていたが、その時点では耕作による地山（ローム）の掘り返しと見ていたため、ほとんど削平してしまった。かろうじてマウンド状を呈するものはNo12・13・42と限られている。

註12 御堂島正『前掲書』P3

土坑No	平面形	軸方向	規模 (cm)	ロームのタイプ	備考
3	隅丸方形	—	(354)×310 - 82	I	方形の落ち込み
5	円形	—	304×270 - 63	II	
11	楕円形	N-35°-E	338×208 - 112	II	
12	楕円形	N-0°-E	298×186 - 91	I	大石
13	楕円形	N-40°-E	420×320 - 106	I	焼土、落ち込み
16	隅丸方形	N-74°-E	(176)×218 - 76	II	
24	ハート形	—	398×258 - 62	III	
27	不整形	—	256×240 - 30	II	
33	不整形	—	240×208 - 75	II	ビット、焼土
34	不整形	N-0°-E	242×240 - 81	II	
37	隅丸方形	N-0°-E	410×(223) - 79	III	石群
38	楕円形	N-0°-E	423×310 - 81	I	
42	楕円形	N-38°-E	390×330 - 93	II	甕、器台
43	不整形	N-90°-E	268×160 - 91	I	
50	不整形	N-15°-W	(320)×310 - 85	II	完形正立壺
93	楕円形	N-1°-E	422×308 - 90	III	
102	ハート形	N-38°-E	256×248 - 28	I	

表11 林ヶ原遺跡ローム特殊土坑一覧表



版

久古第3遺跡



現 況 (北より)



現 況 (西より)



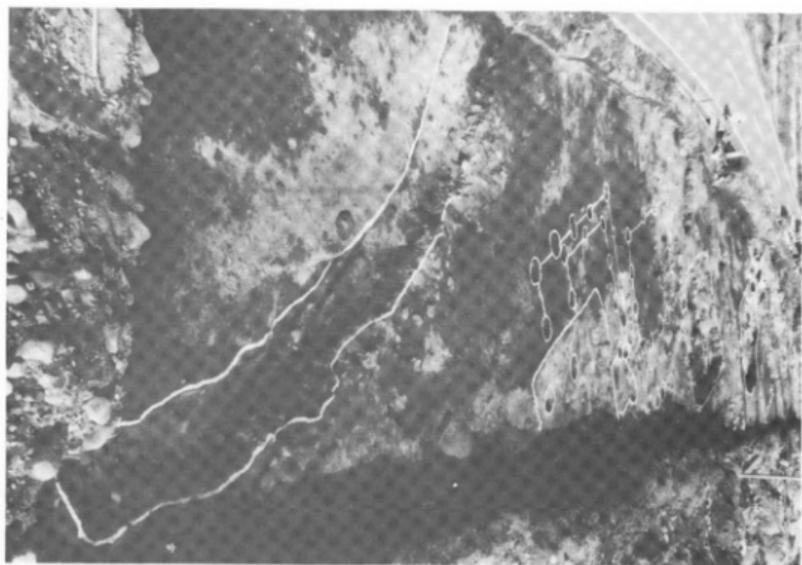
B区全景（南東より）



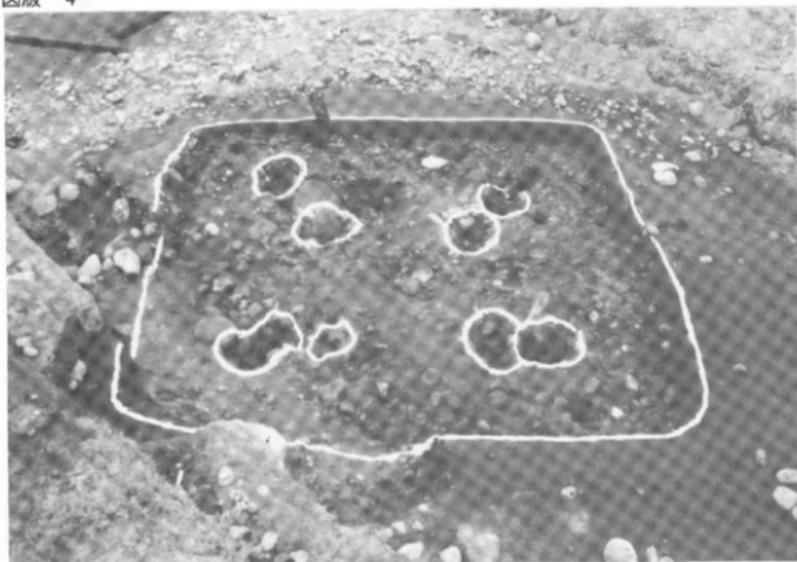
B・C区全景（南東より）



D区全景（東より）



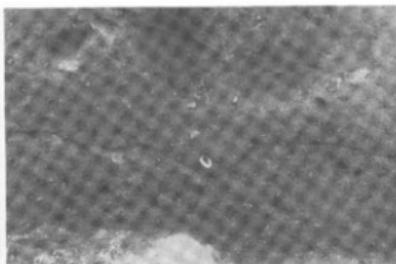
D区全景（西より）



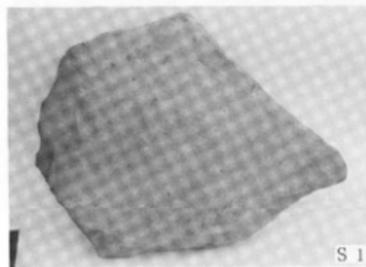
第1竪穴住居跡全景（南より）



耳環



耳環出土状況

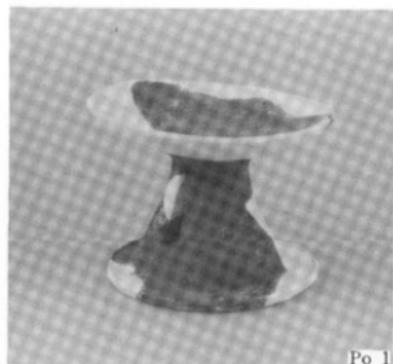


用途不明石製品

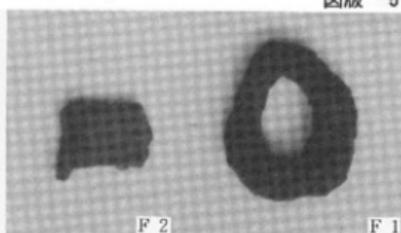
S 1



黒曜石、砥石



Po 1



F 2

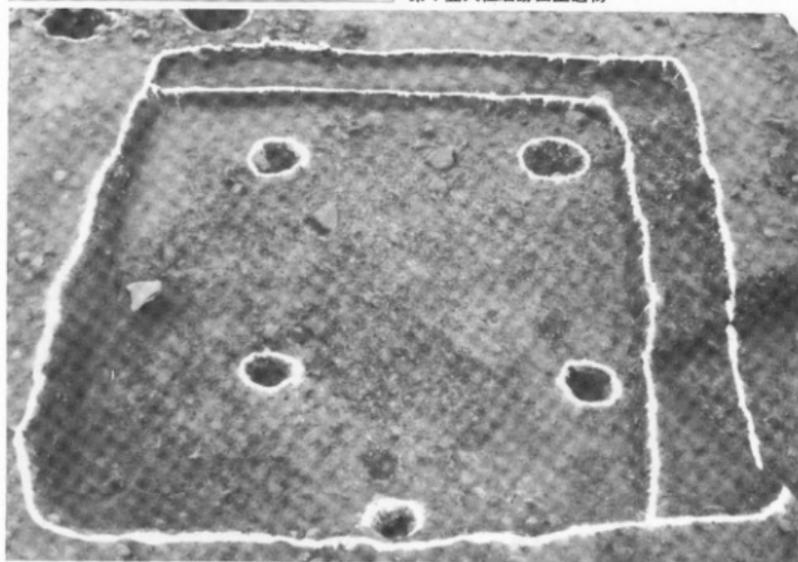
F 1



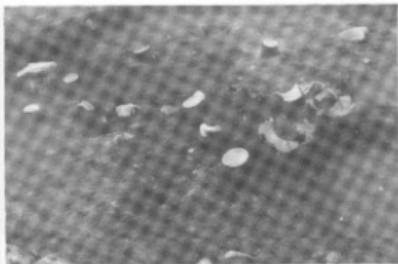
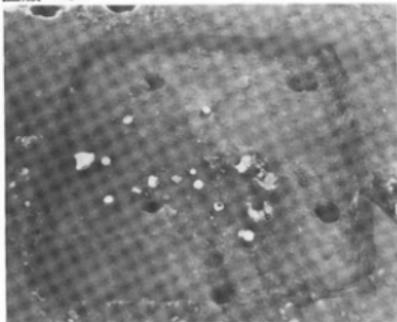
Po 2



第1 竪穴住居跡出土遺物



第2 竪穴住居跡全景 (東より)

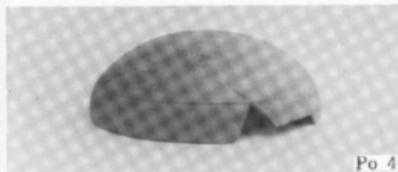


上 遺物出土状況（北東より）

左 遺物出土状況（東より）



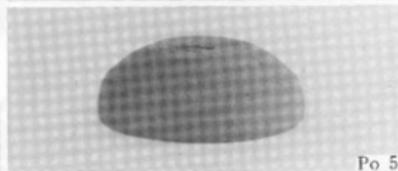
Po 1



Po 4



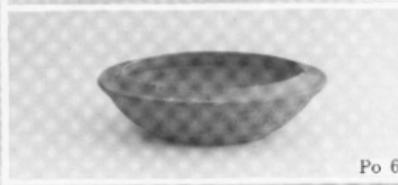
Po 2



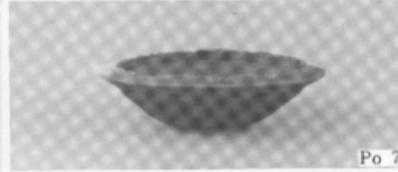
Po 5



Po 3

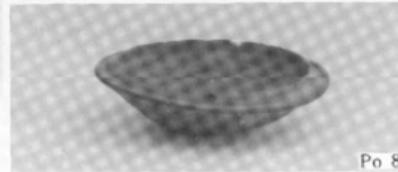


Po 6



Po 7

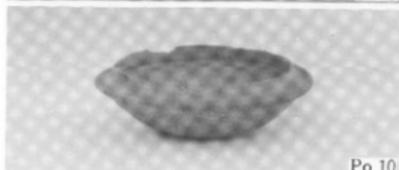
第2 竪穴住居跡出土遺物



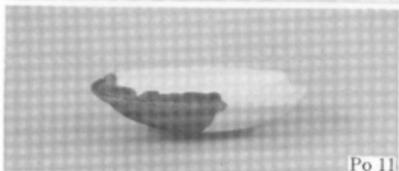
Po 8



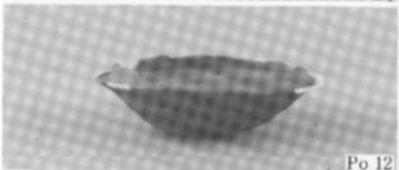
Po 9



Po 10



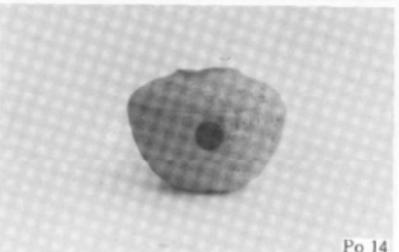
Po 11



Po 12



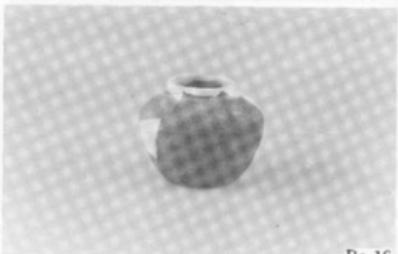
Po 13



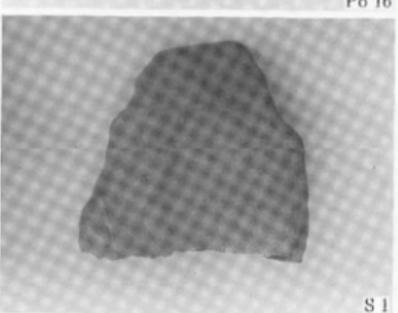
Po 14



Po 15



Po 16



S 1



S 2

第2 竪穴住居跡出土遺物



第 4 豎穴住居跡全景



第 6 豎穴住居跡全景



第 6 豎穴住居跡東石列檢出狀況



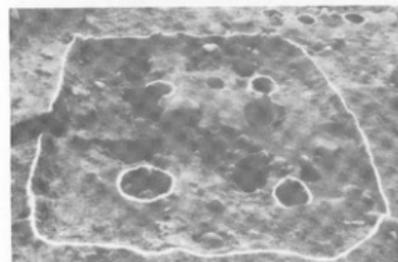
S2

S1

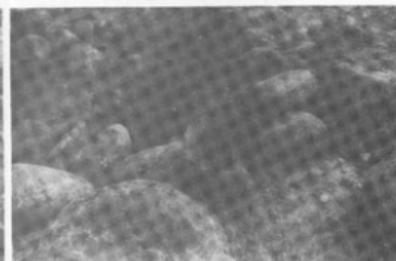


F1

第 6 豎穴住居跡出土遺物



第 7 豎穴住居跡全景

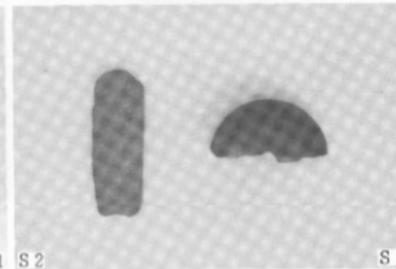


第 7 豎穴住居跡土器出土狀況



Po 1

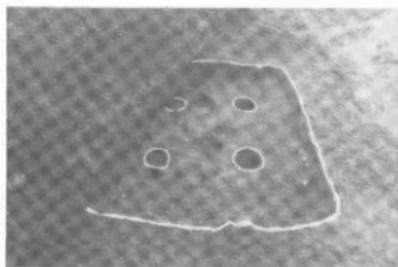
第 7 豎穴住居跡出土遺物



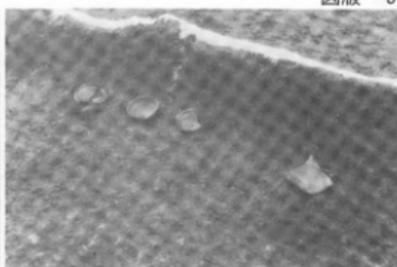
S2

S1

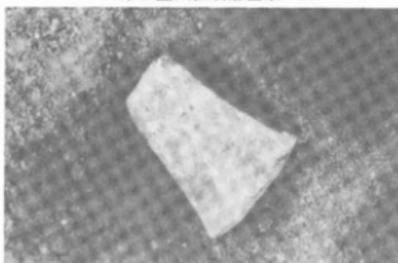
第 7 豎穴住居跡出土石製品



第8竪穴住居跡全景



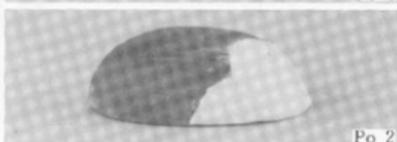
土器出土状況



砥石出土状況



Po 1



Po 2



Po 4



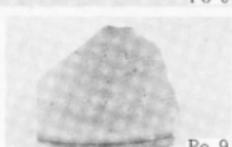
Po 3



Po 5

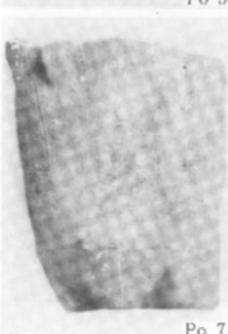


Po 6



Po 9

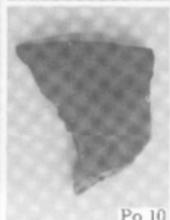
第8竪穴住居跡出土遺物



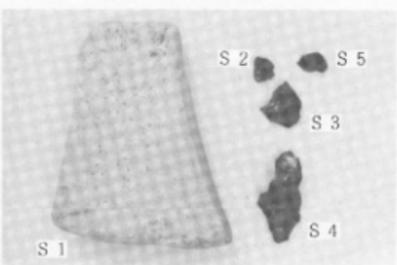
Po 7



Po 8



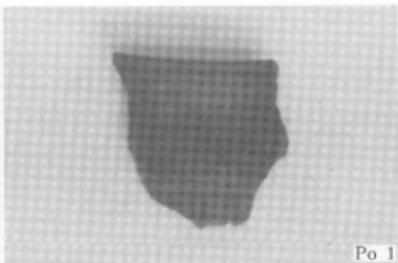
Po 10



第8竪穴住居跡出土土製品



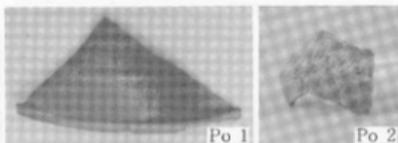
第9 竪穴住居跡全景



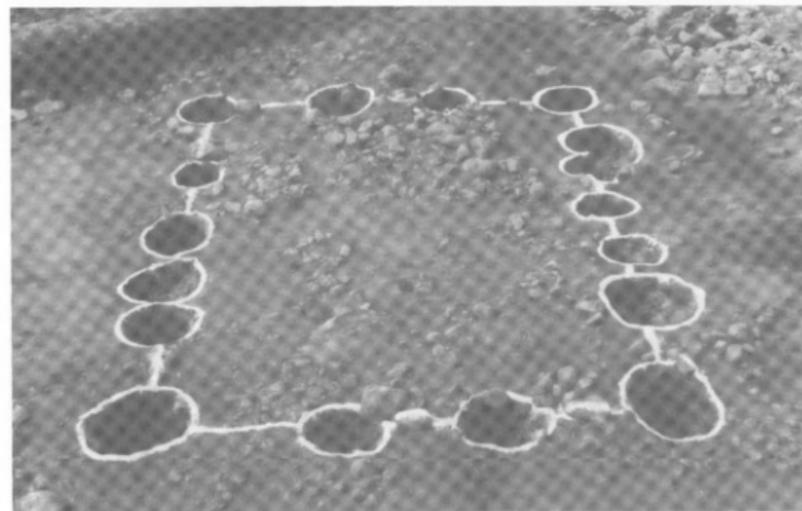
第9 竪穴住居跡出土遺物



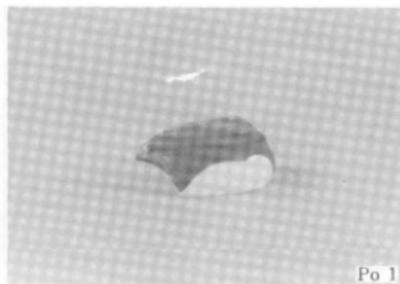
第10 竪穴住居跡全景



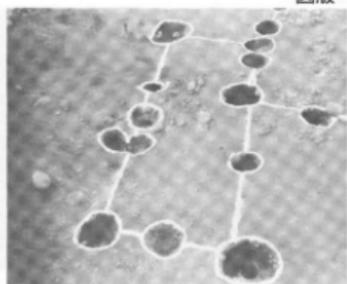
第10 竪穴住居跡出土遺物



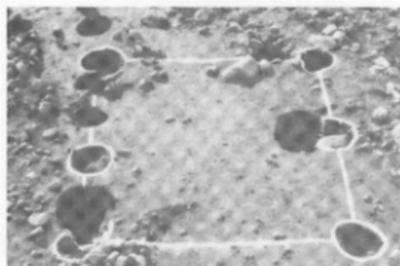
第1 掘立柱建物跡全景



第1掘立柱建物跡出土遺物



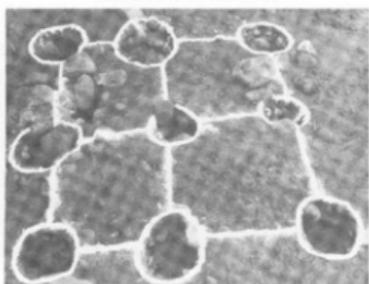
第2掘立柱建物跡全景



第3掘立柱建物跡全景



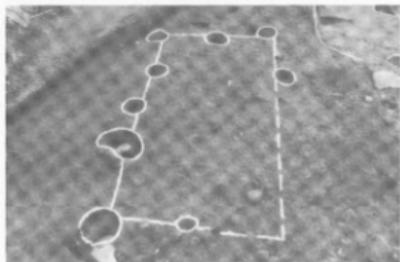
第5・6掘立柱建物跡全景



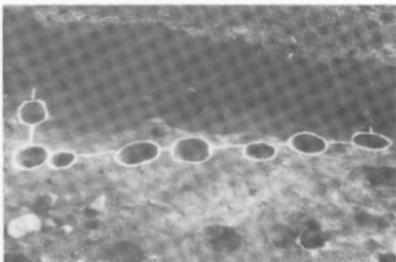
第4掘立柱建物跡全景



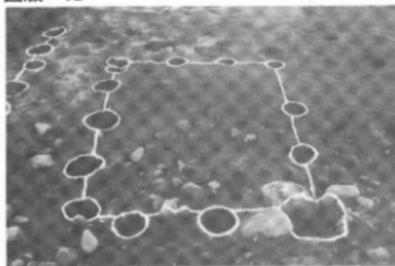
第5掘立柱建物跡全景



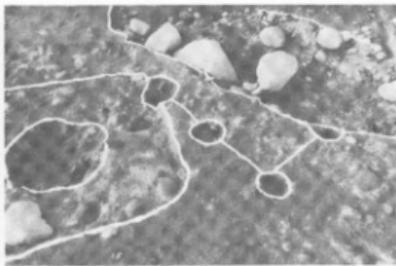
第7掘立柱建物跡全景



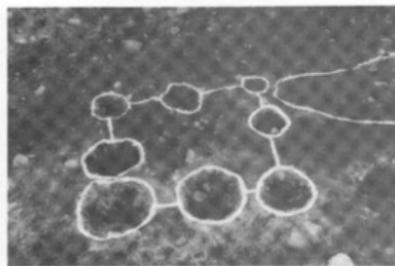
第8掘立柱建物跡全景



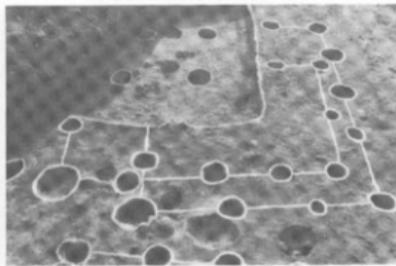
第9掘立柱建物跡全景



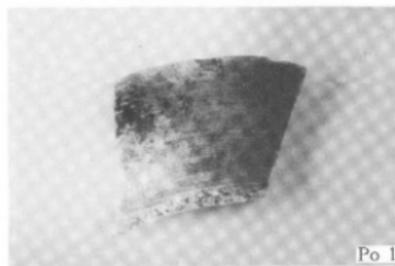
第10掘立柱建物跡全景



第11掘立柱建物跡全景

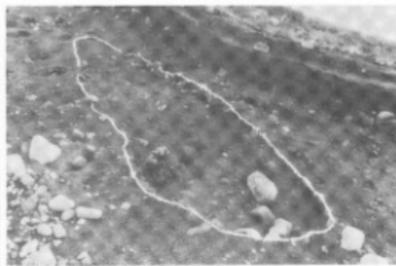


第12・13掘立柱建物跡全景

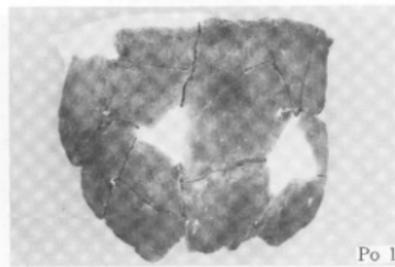


第12掘立柱建物出土遺物

Po 1

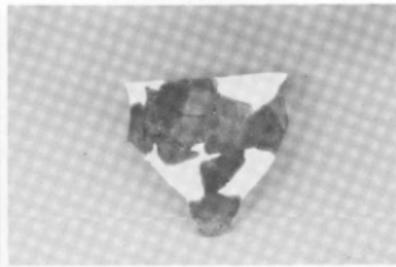


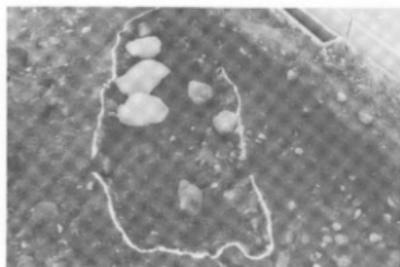
第1溝状遺構全景



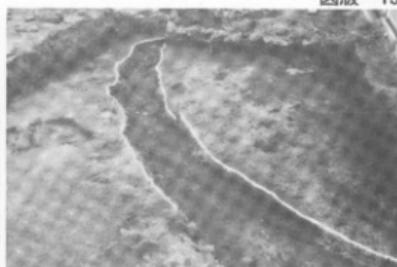
Po 1

第1溝状遺構上層出土遺物

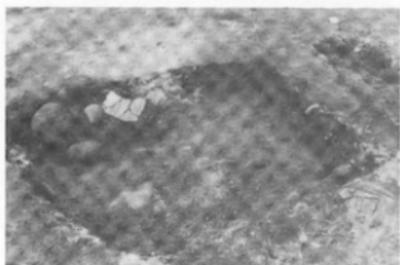




第2溝状遺構全景



第3溝状遺構全景



第3溝状遺構付近縄文土器出土状況



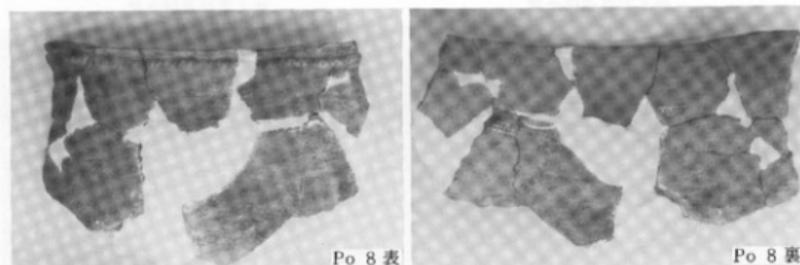
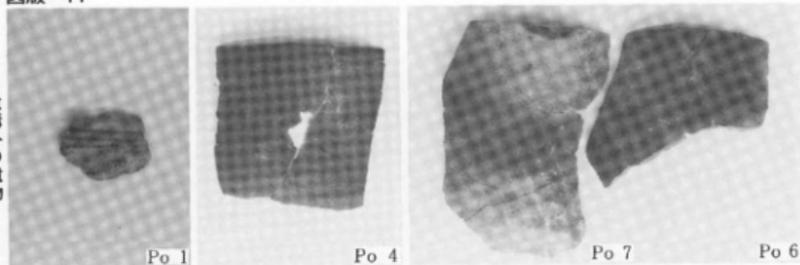
縄文土器出土状況



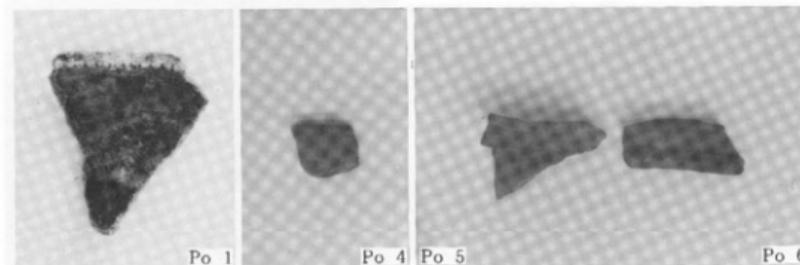
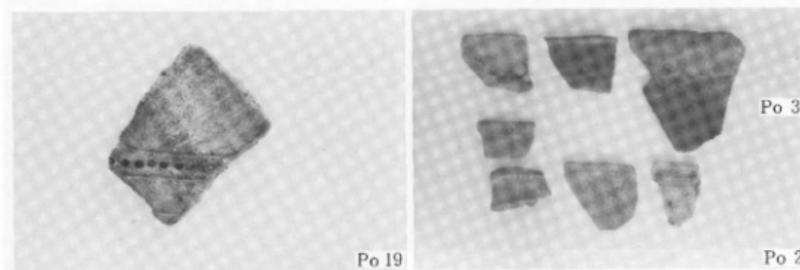
第1土坑全景



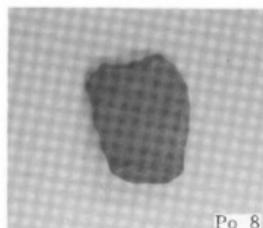
D区土层断面



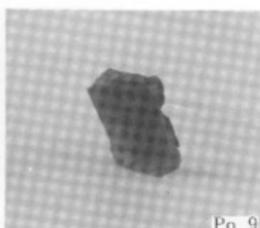
Po 8 表  
Po 8 裏  
久古第 3 遺跡出土縄文土器



Po 1  
Po 4  
Po 5  
Po 6  
久古第 3 遺跡出土弥生土器



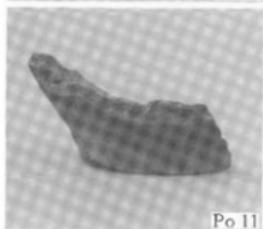
Po 8



Po 9



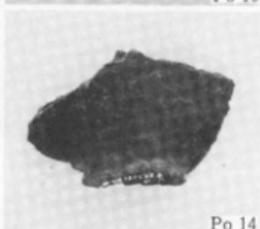
Po 10



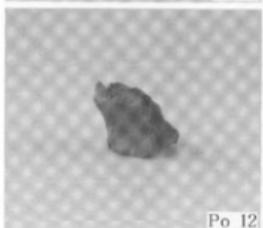
Po 11



Po 13



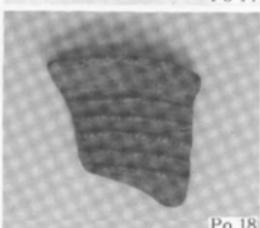
Po 14



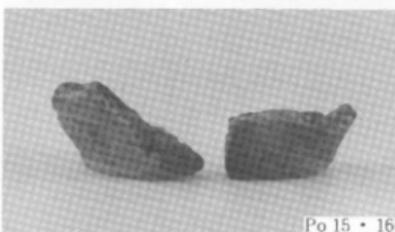
Po 12



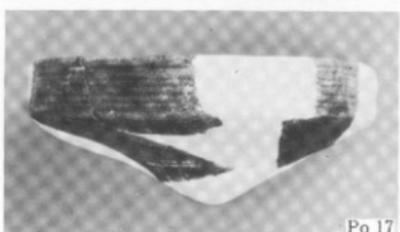
Po 15・16



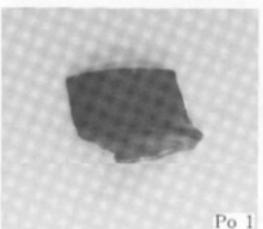
Po 18



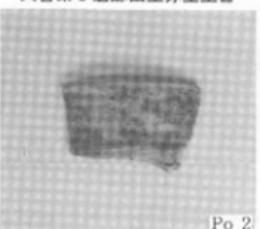
久古第 3 遺跡出土弥生土器



Po 17



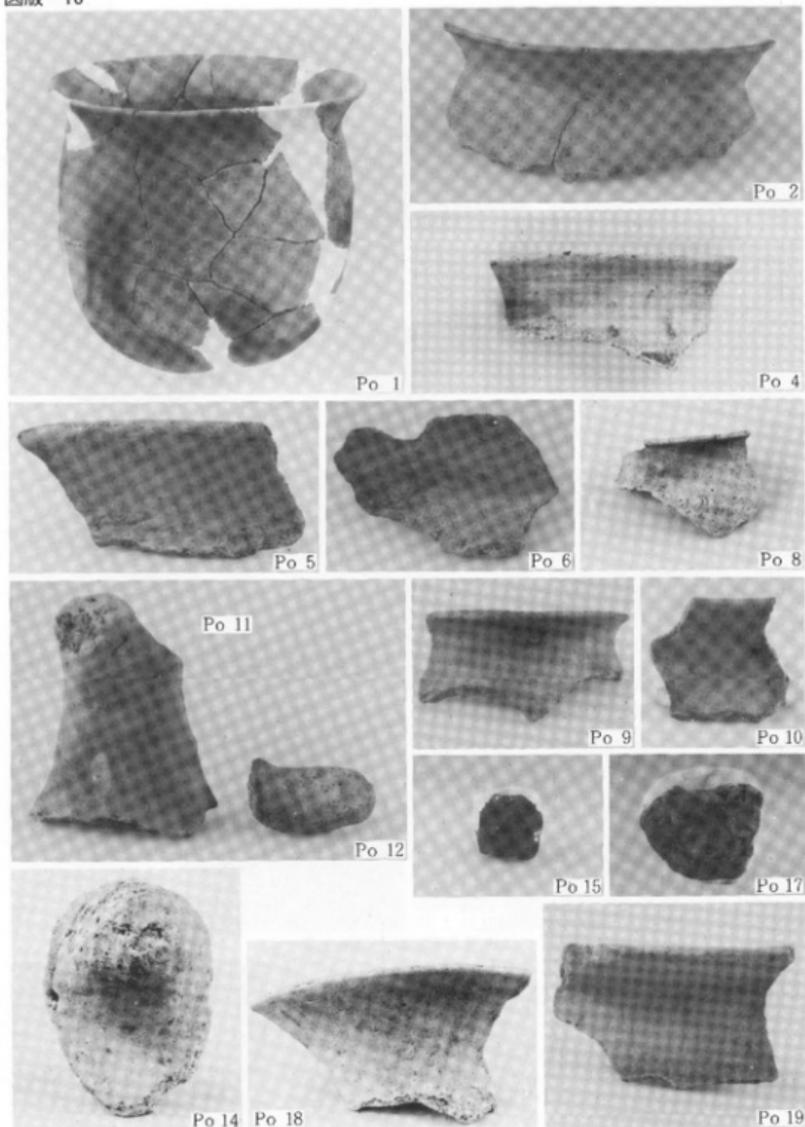
Po 1



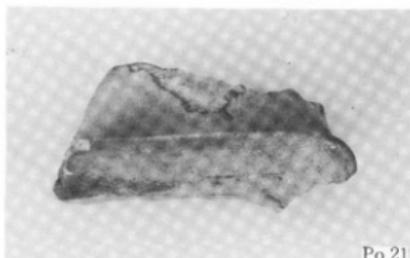
Po 2



久古第 3 遺跡出土古墳時代前期土器



久古第3遺跡出土古墳時代後期の土器



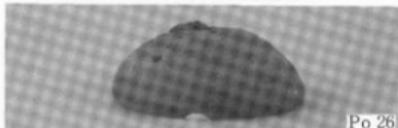
Po 21



Po 21



Po 28



Po 26



Po 27



Po 29



Po 29

久古第3遺跡出土古墳時代後期の土器



Po 1



Po 2-3-5



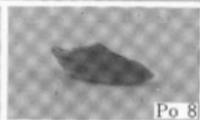
Po 7



Po 4



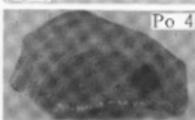
Po 6



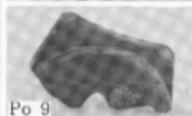
Po 8



Po 8



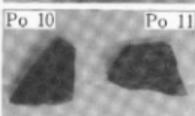
Po 4



Po 9



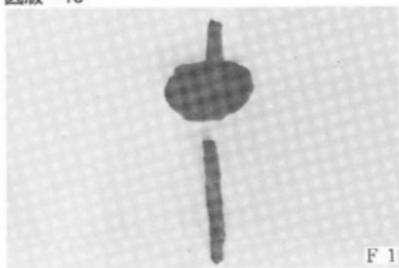
Po 9



Po 10

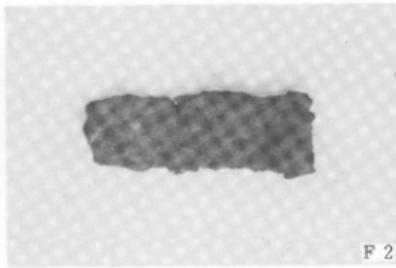
Po 11

久古第3遺跡出土奈良時代～中世の土器



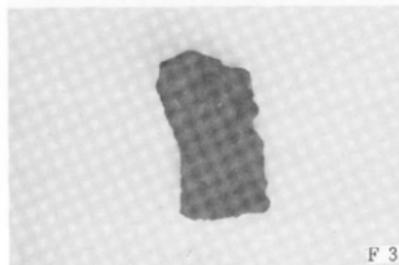
鉄製紡錘車

F 1



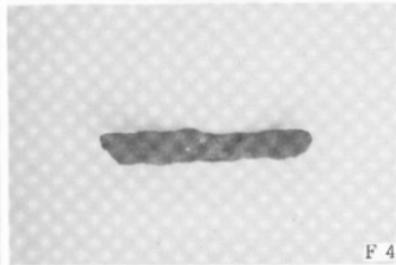
鉄器

F 2



鉄斧

F 3



不明鉄製品（上から）

F 4



鉄斧

F 3

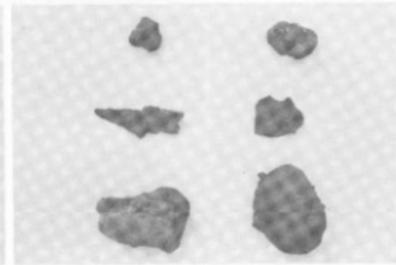


不明鉄製品（横から）

F 4



鉄製品



鉄・スラグなど



石皿 ?

S 1・2



打製石斧

S 3



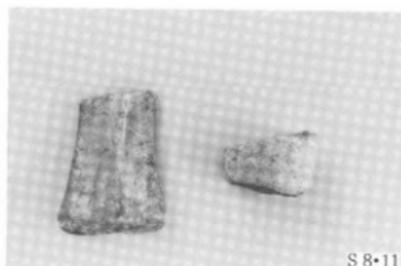
黒曜石

S 4・6



黒曜石

S 7



砥石

S 8・11



不明石製品

S 10



滑石製紡錘車

S 9



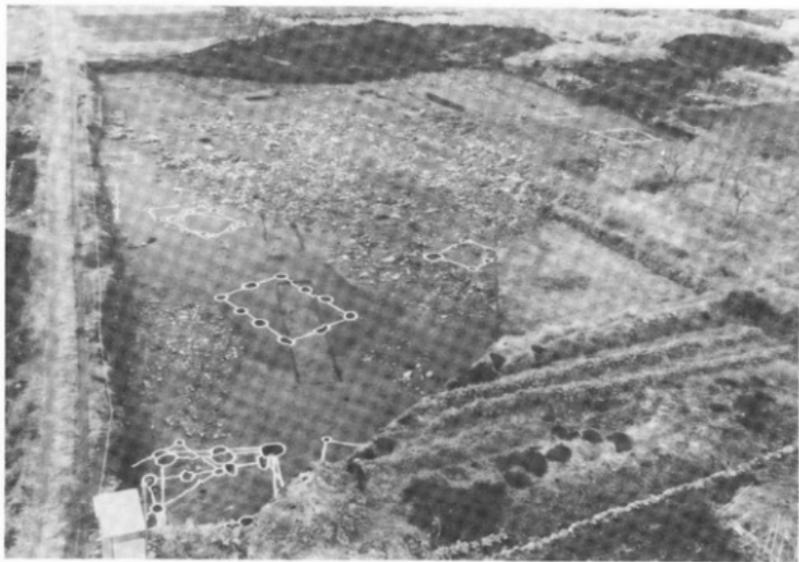
滑石製紡錘車

S 9

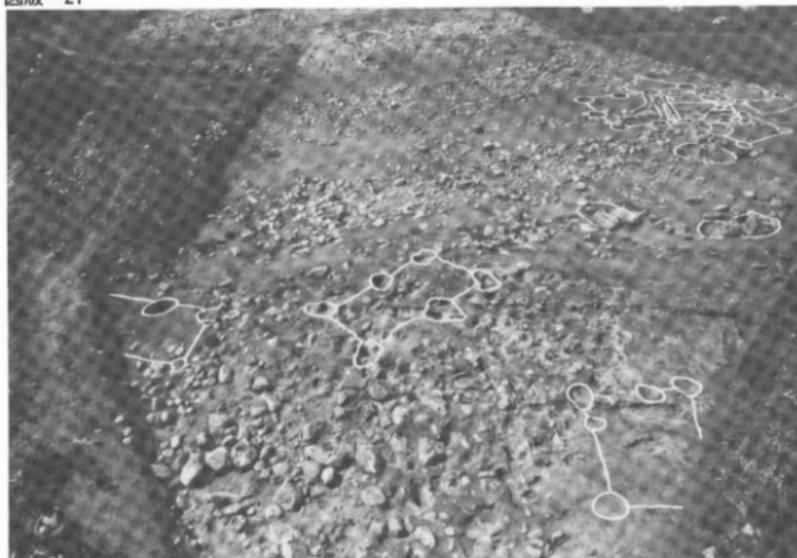
貝田原遺跡



現 況 (南より)



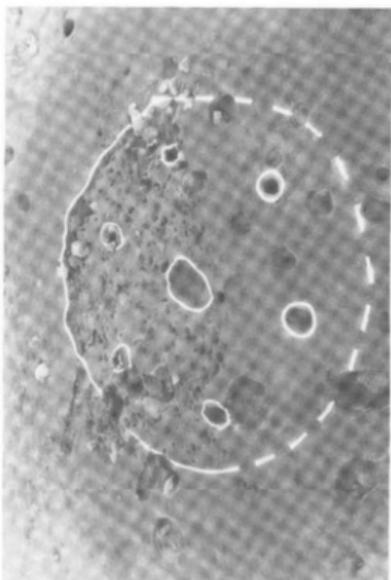
昭和57年度調査地区 (東より)



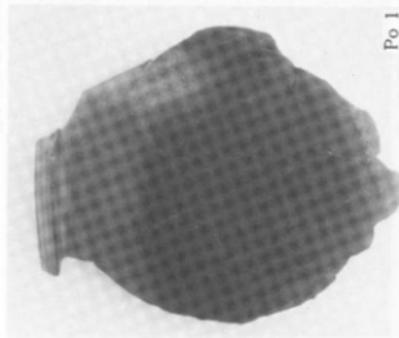
昭和58年度調査地区（南より）



昭和58年度調査地区（北より）



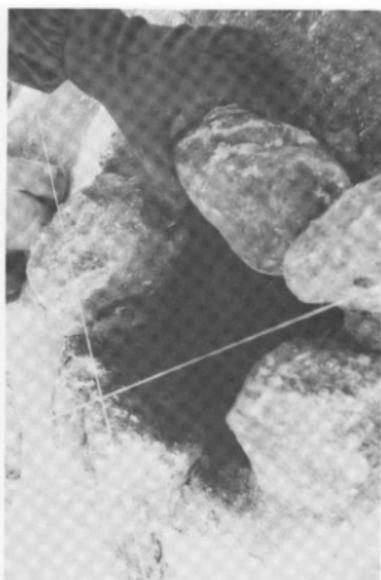
第1 竖穴住居跡全景



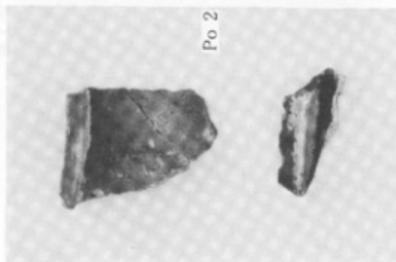
Po 1



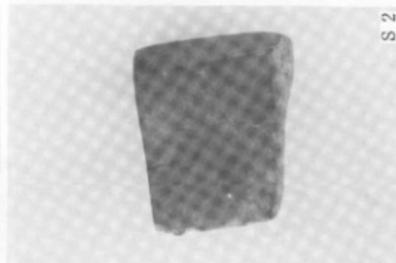
F 1



第1 竖穴住居跡P-1



Po 2

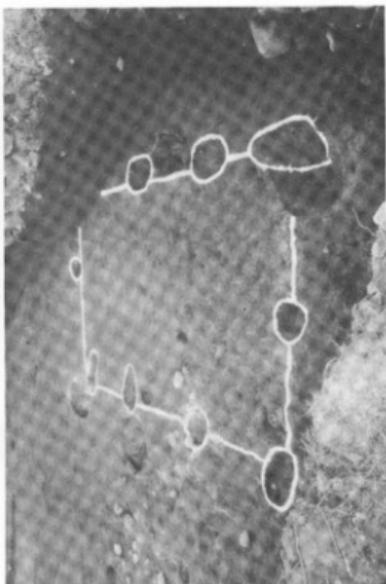


S 2

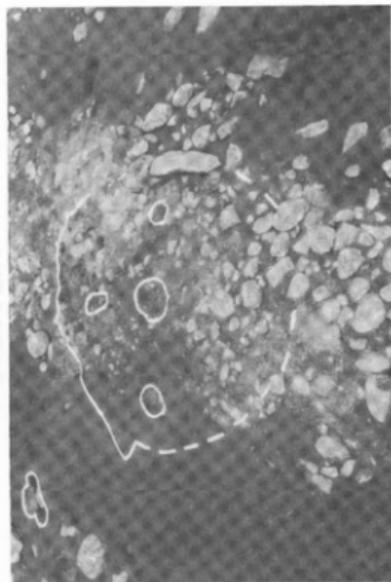
第1 竖穴住居跡出土遺物



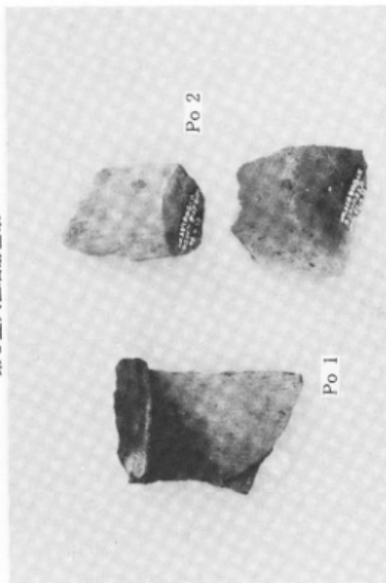
第1獨立柱建物跡全景



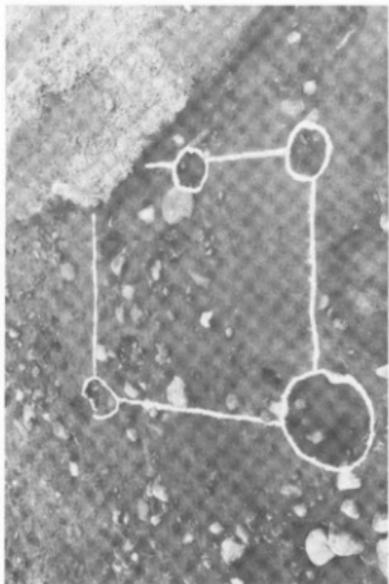
第2獨立柱建物跡全景



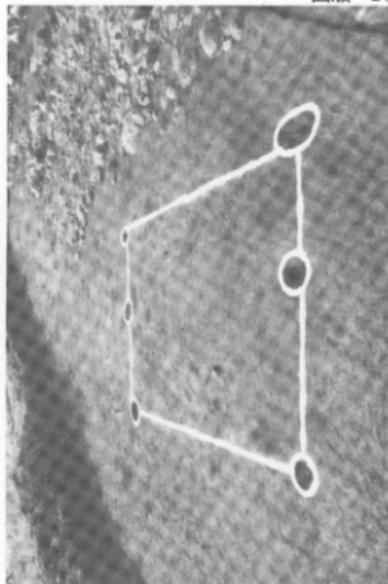
第2竪穴住居跡全景



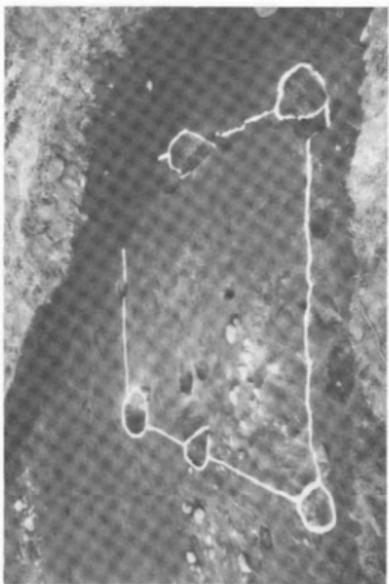
第2竪穴住居跡出土遺物



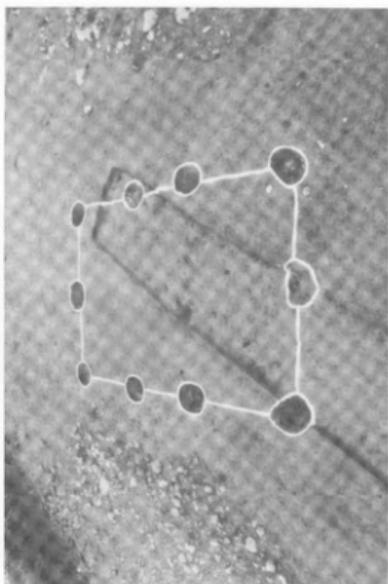
第5 掘立柱建物跡全景



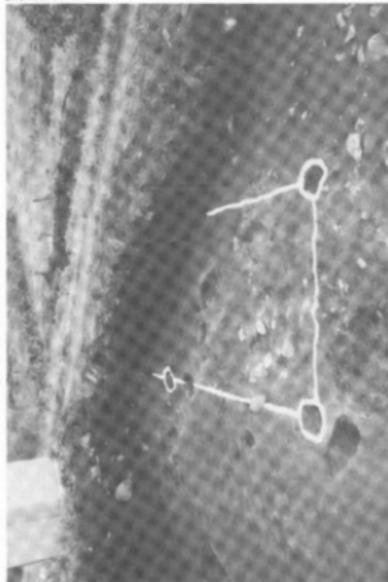
第6 掘立柱建物跡全景



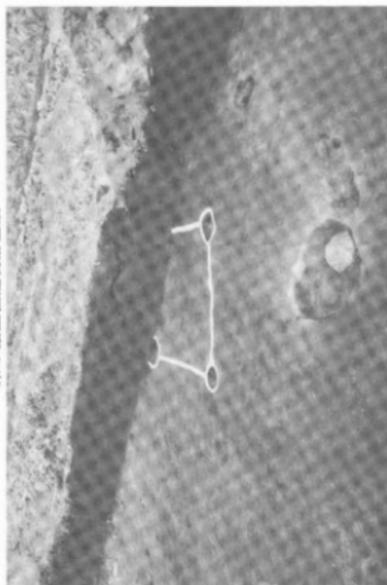
第3 掘立柱建物跡全景



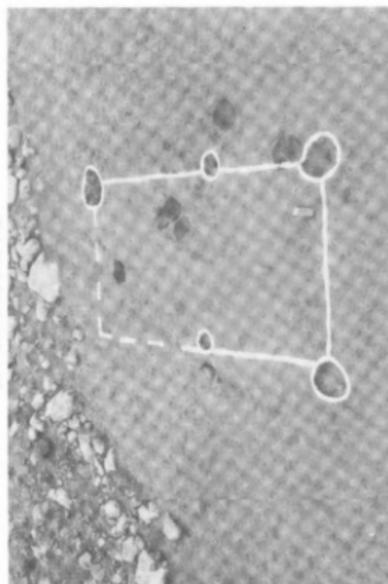
第4 掘立柱建物跡全景



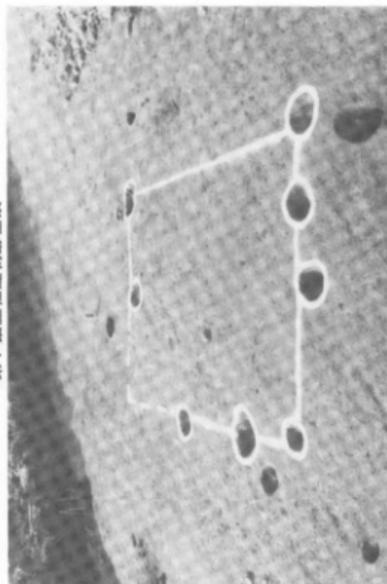
第9 圈立柱建物跡全景



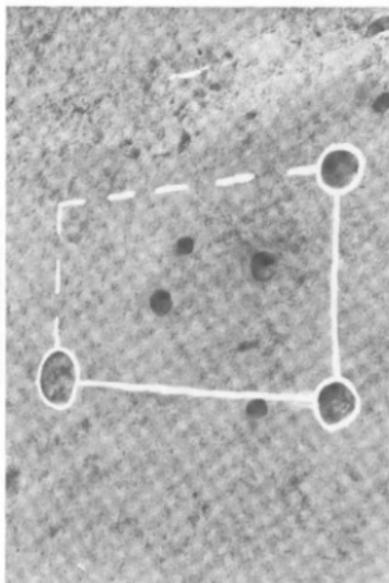
第10圈立柱建物跡全景



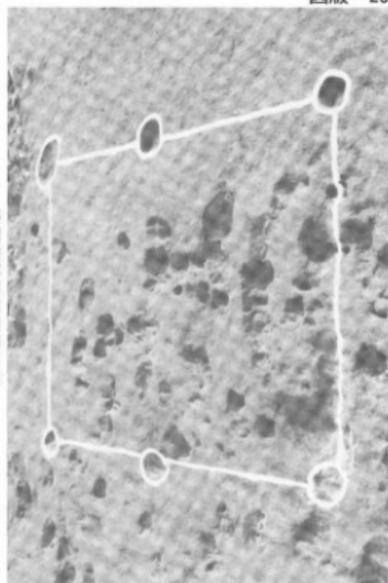
第7 圈立柱建物跡全景



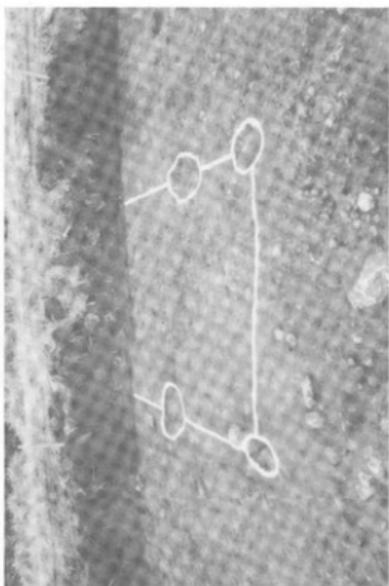
第8 圈立柱建物跡全景



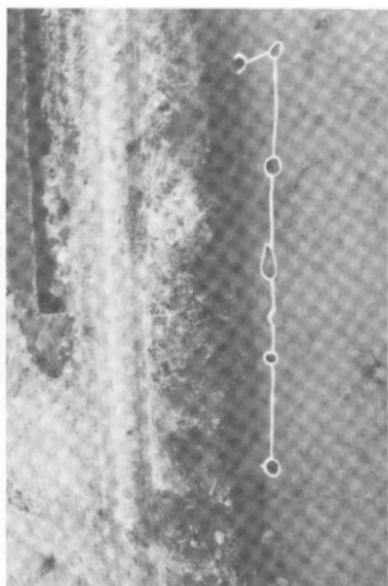
第13掘立柱建物跡全景



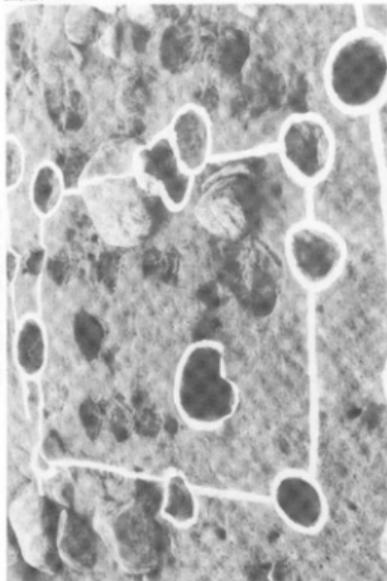
第14掘立柱建物跡全景



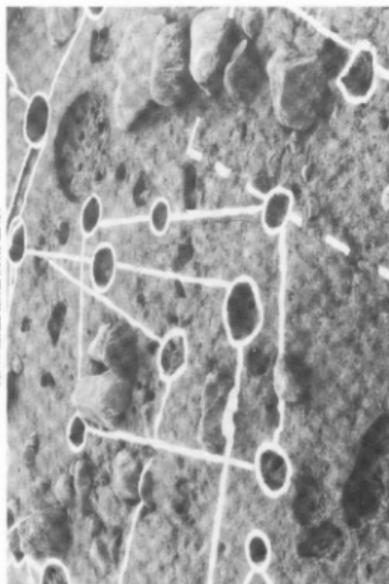
第11掘立柱建物跡全景



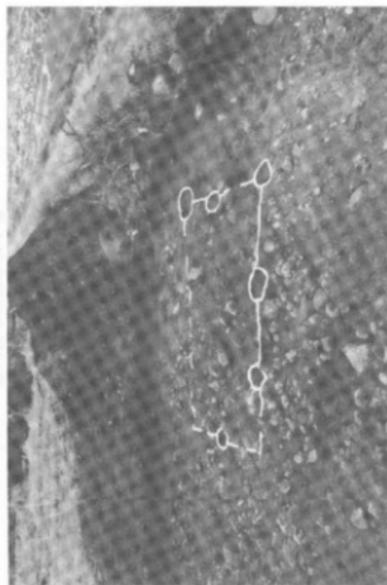
第12掘立柱建物跡全景



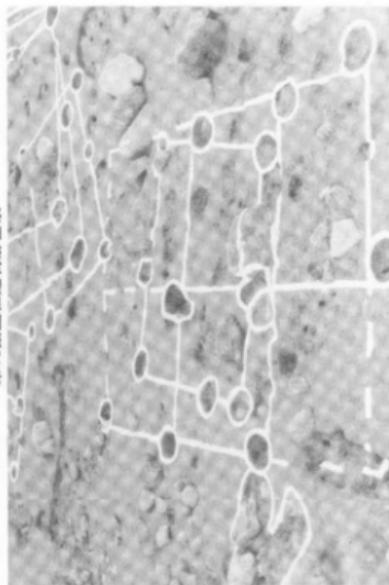
第17层立柱建物跡全景



第18层立柱建物跡全景



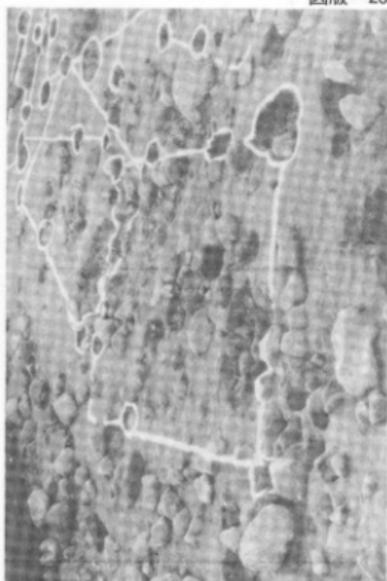
第15层立柱建物跡全景



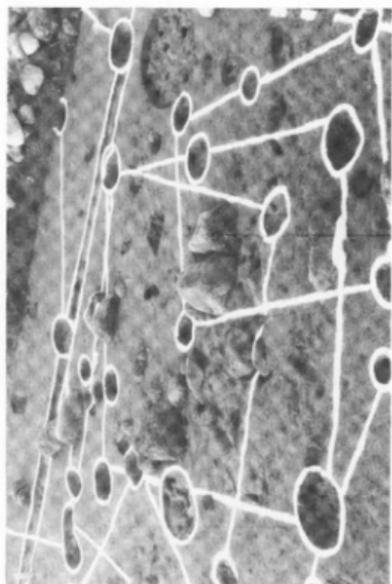
第16层立柱建物跡全景



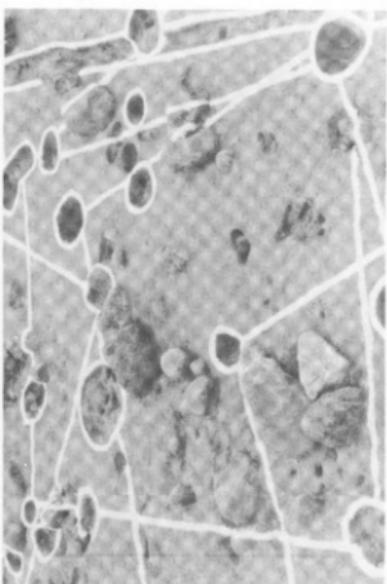
第21号立柱建物跡全景



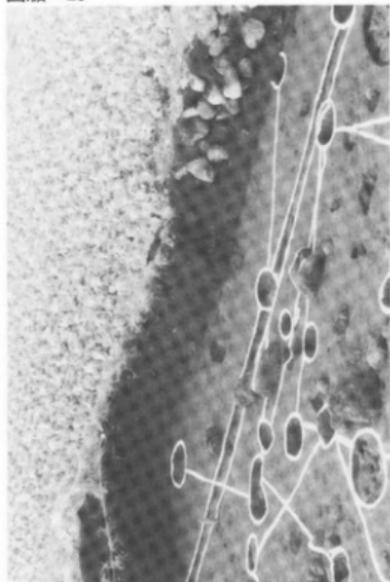
第22号立柱建物跡全景



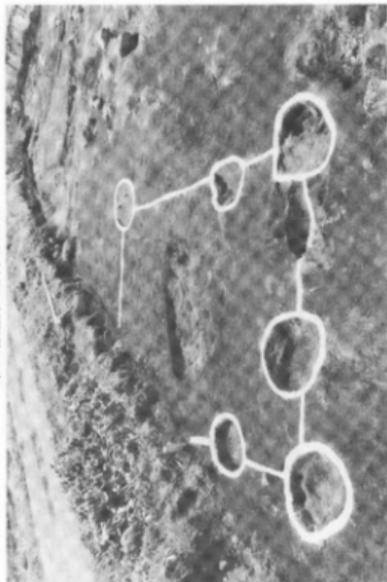
第19号立柱建物跡全景



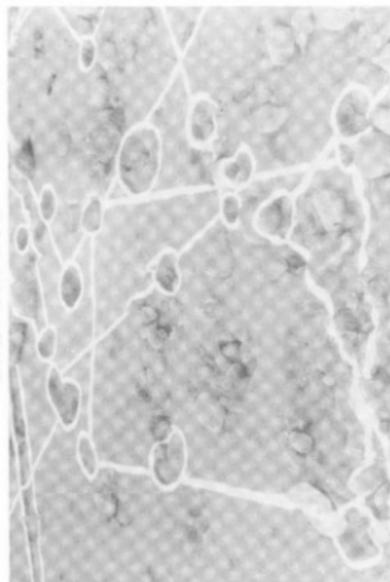
第20号立柱建物跡全景



第25掘立柱建物跡全景



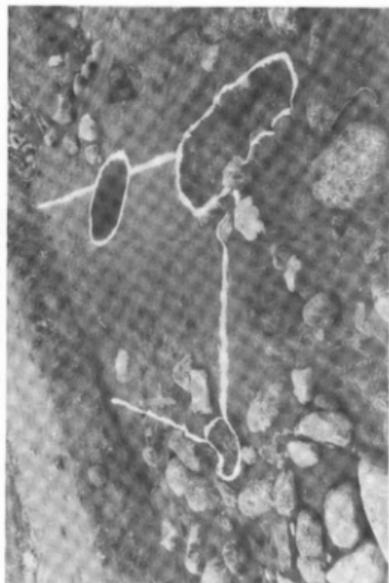
第26掘立柱建物跡全景



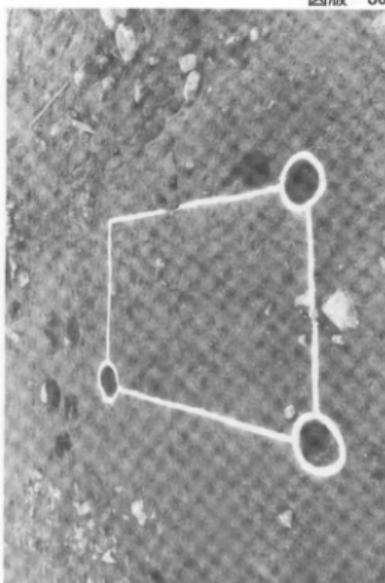
第23掘立柱建物跡全景



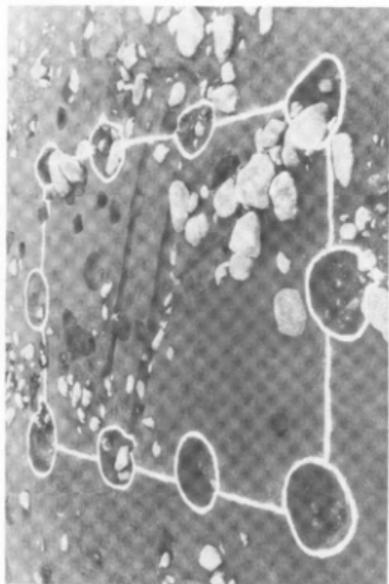
第24掘立柱建物跡全景



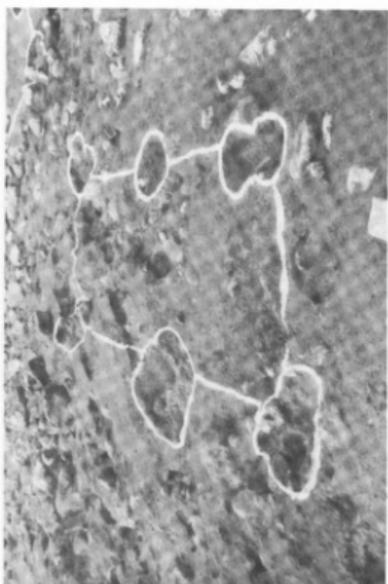
第29個立柱建物跡全景



第30個立柱建物跡全景



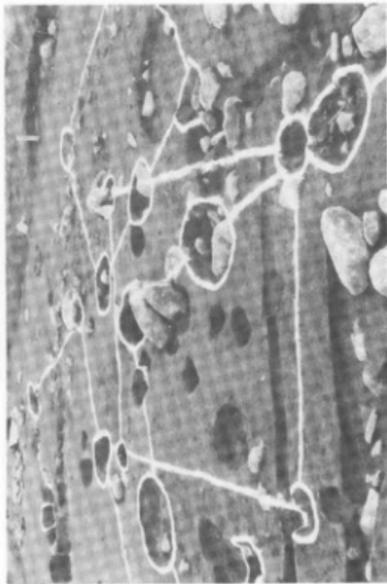
第27個立柱建物跡全景



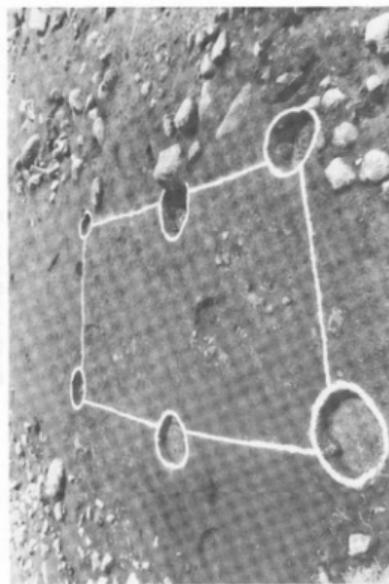
第28個立柱建物跡全景



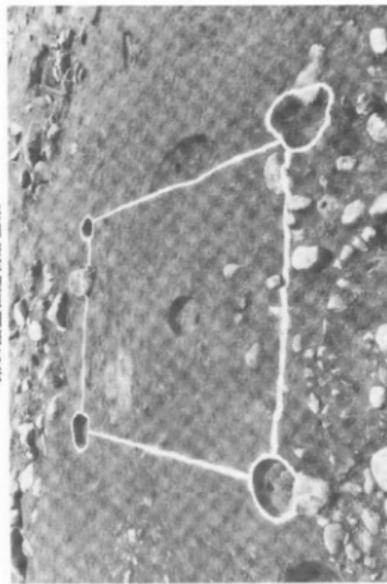
第33個立柱建物跡全景



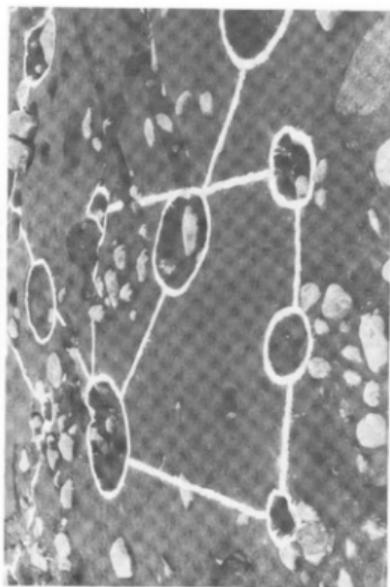
第34個立柱建物跡全景



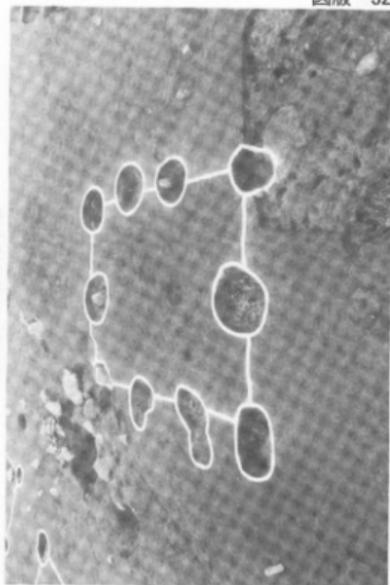
第31個立柱建物跡全景



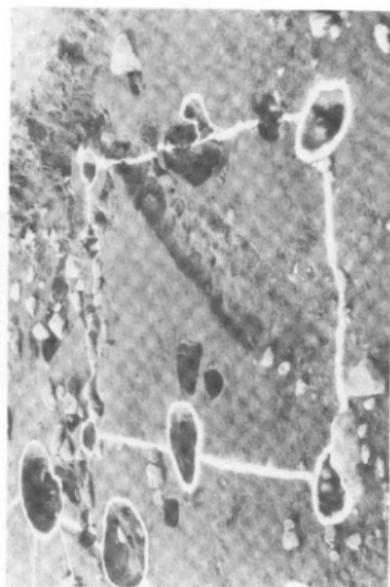
第32個立柱建物跡全景



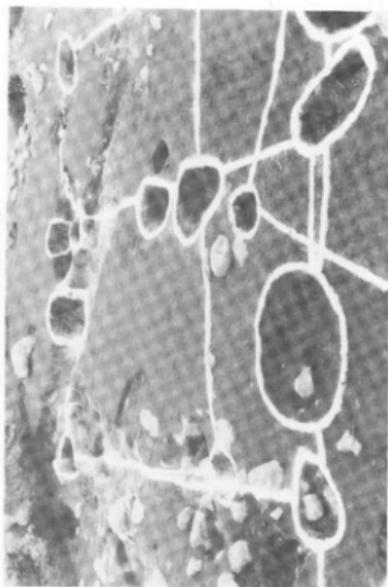
第37届立柱建物种全景



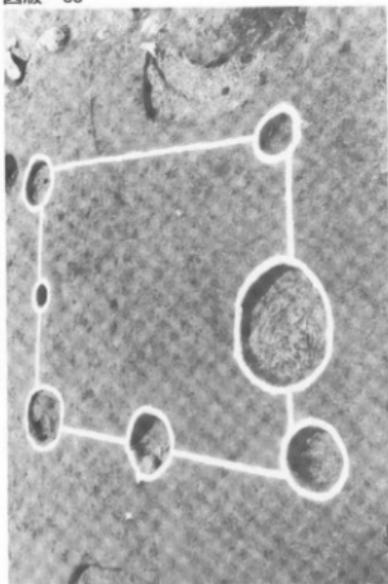
第38届立柱建物种全景



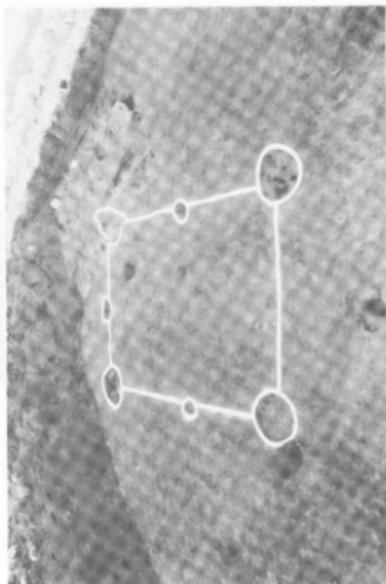
第35届立柱建物种全景



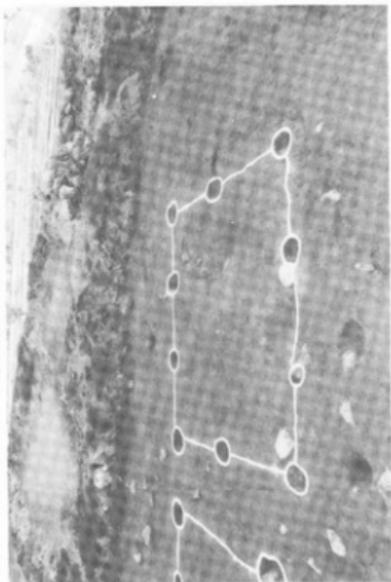
第36届立柱建物种全景



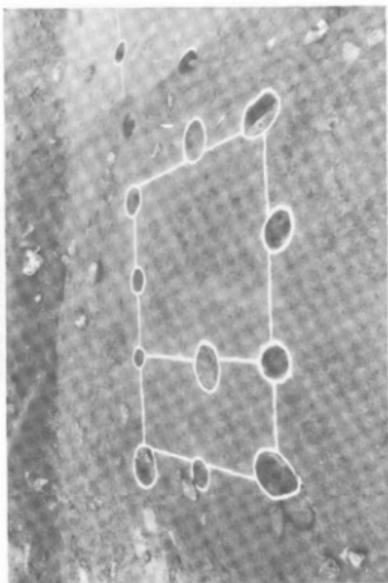
第41獨立柱建物跡全景



第42獨立柱建物跡全景



第39獨立柱建物跡全景



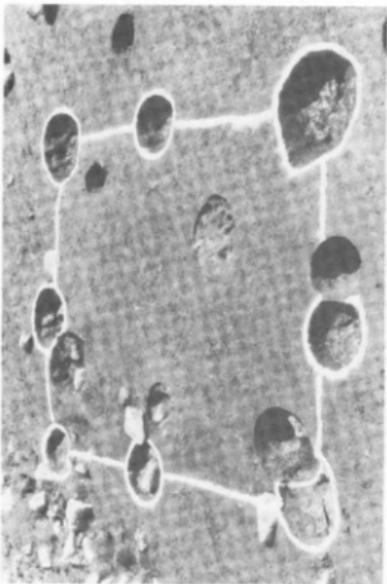
第40獨立柱建物跡全景



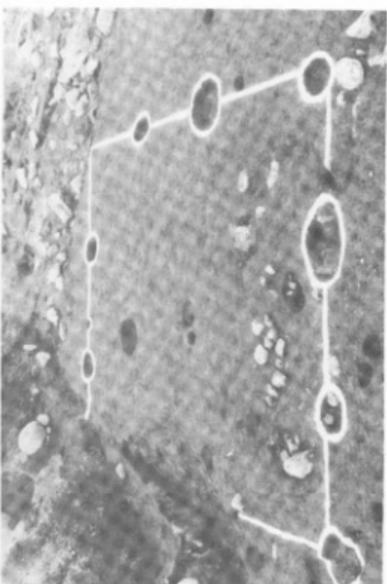
左. 第45掘立柱建物跡 右. 第44掘立柱建物跡



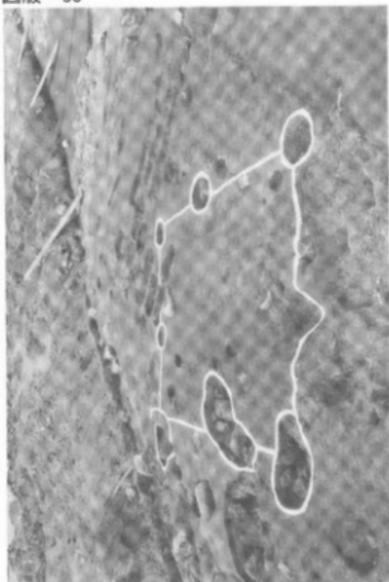
第46掘立柱建物跡全景



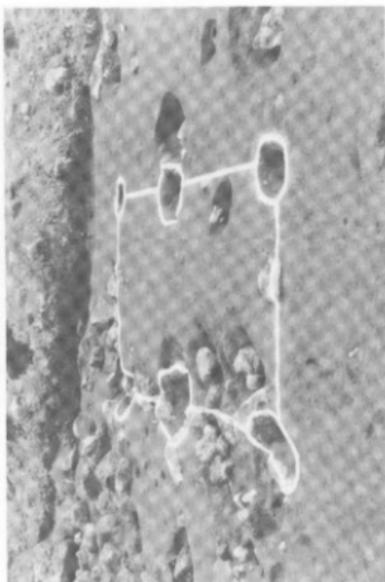
第43掘立柱建物跡全景



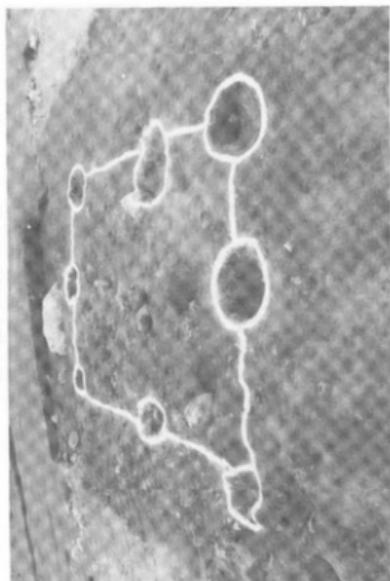
第44掘立柱建物跡全景



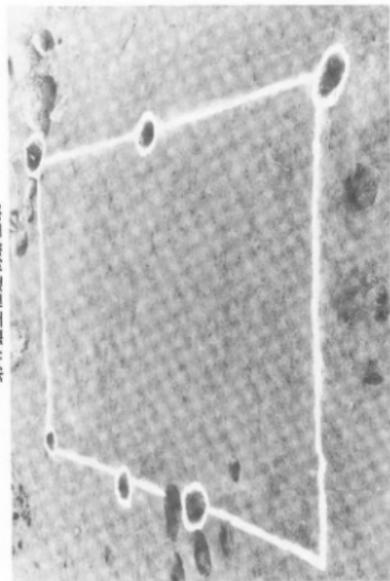
第49掘立柱建物跡全景



第50掘立柱建物跡全景



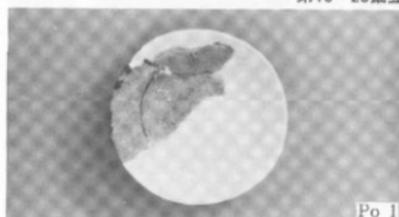
第47掘立柱建物跡全景



第48掘立柱建物跡全景



第16~25掘立柱建物跡全景



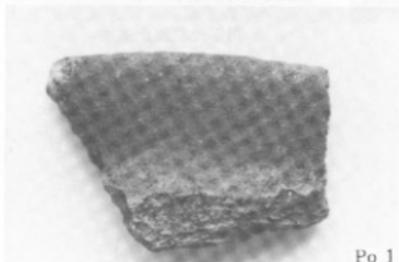
第1掘立柱建物跡出土遺物

Po 1



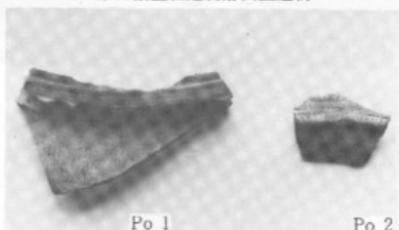
第33掘立柱建物跡出土遺物

Po 1



第27掘立柱建物跡出土遺物

Po 1



第38掘立柱建物跡出土遺物

Po 1

Po 2



第48掘立柱建物跡出土遺物 →

Po 1

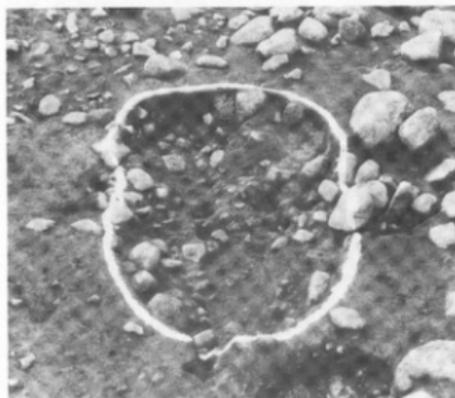


第2土坑全景



第2土坑出土遺物

Po 1

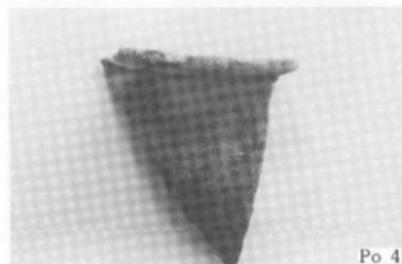


第3土坑全景



第3土坑出土遺物

Po 1

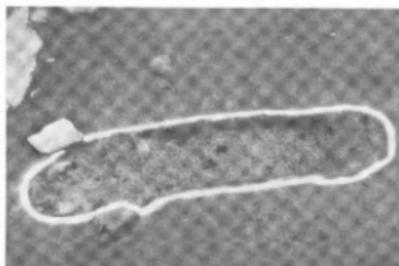


Po 4



Po 6

第3土坑出土遺物



第 7 土坑全景



第 7 土坑遺物出土狀況



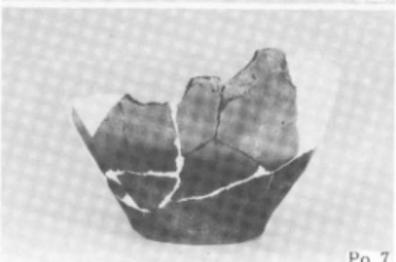
Po 2



Po 4



Po 3

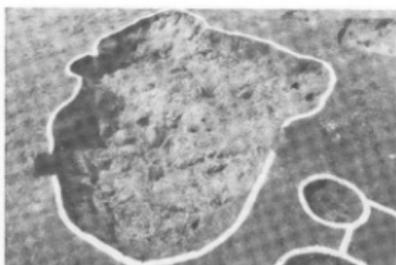


Po 7

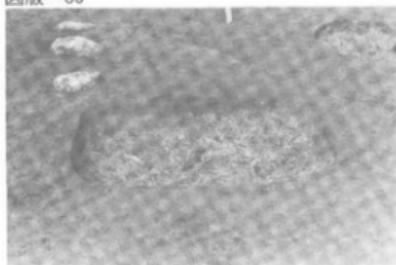
第 7 土坑出土遺物



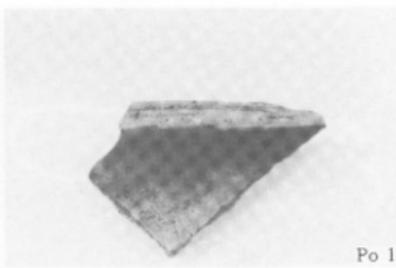
第 8 土坑全景



第 9 土坑全景

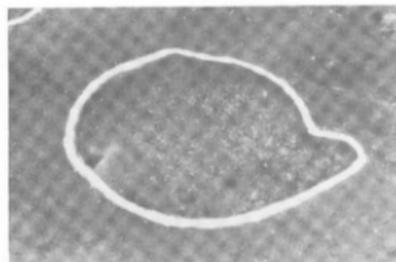


第10土坑全景

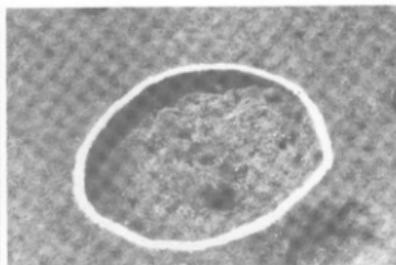


第10土坑出土遺物

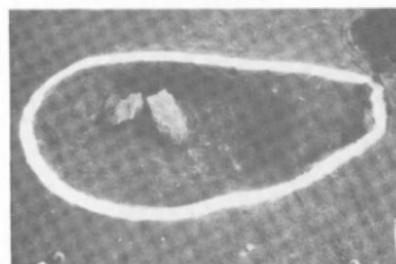
Po 1



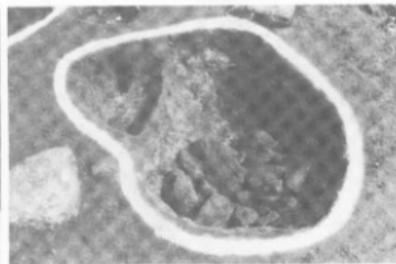
第11土坑全景



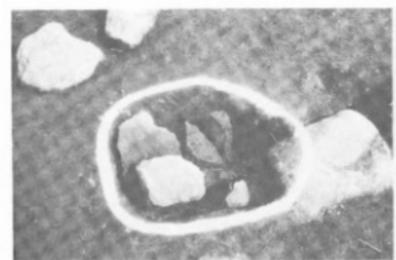
第12土坑全景



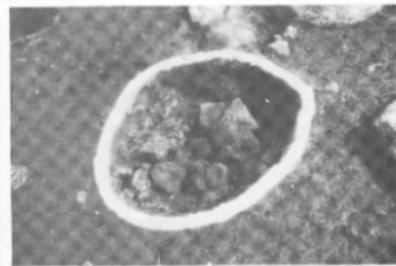
第14土坑全景



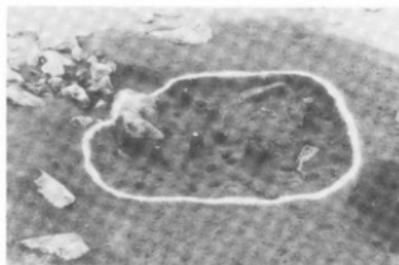
第15土坑全景



第17土坑全景



第18土坑全景



第19土坑全景

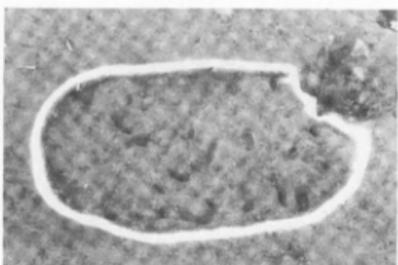


第19土坑出土遺物

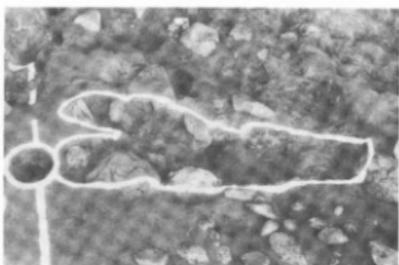
Po 2



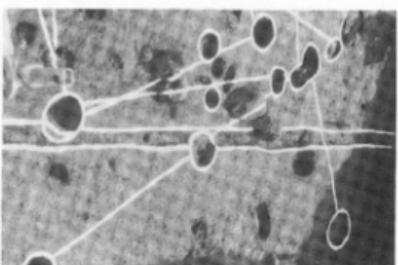
第20土坑全景



第21土坑全景



第1溝状遺構全景



第2溝状遺構全景



縄文土器

Po 2

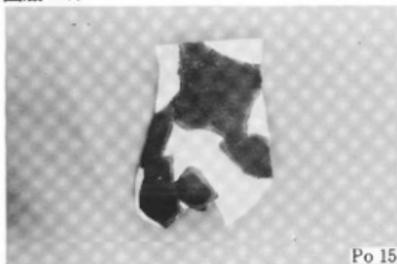
遺構外出土遺物



Po 3

Po 4

弥生土器



Po 15



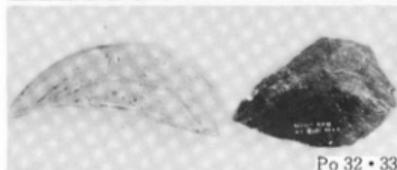
Po 28



Po 20



Po 34

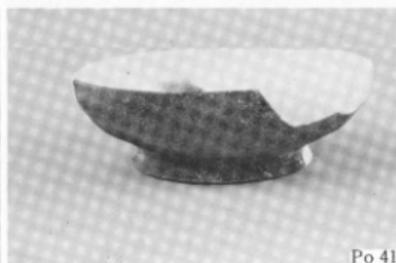


Po 32・33

土師器



Po 36



Po 41

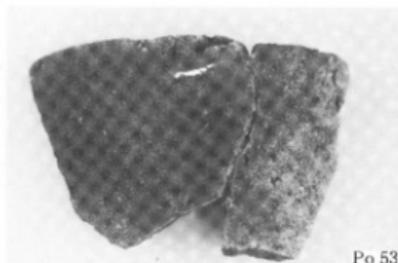


Po 48~52 表



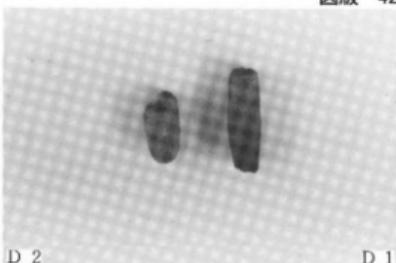
Po 48~52 裏

須恵器



不明土器

Po 53 D 2



土 鐘

D 1



鉄製鋤先

F 8



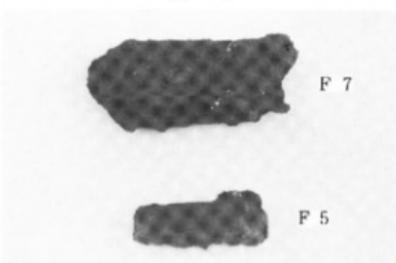
刀 子

F 1



鉄 鏃

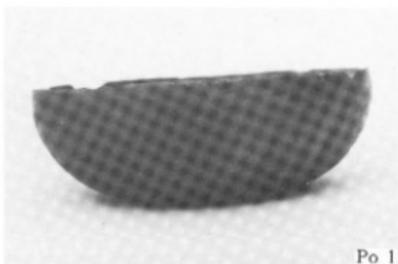
F 3



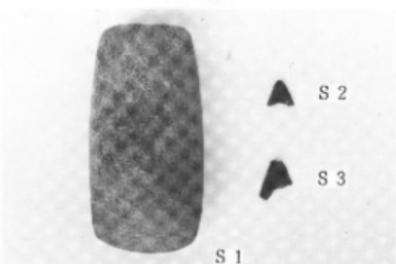
上 鋤先

F 7

F 5



Po 1



S 1

S 2

S 3

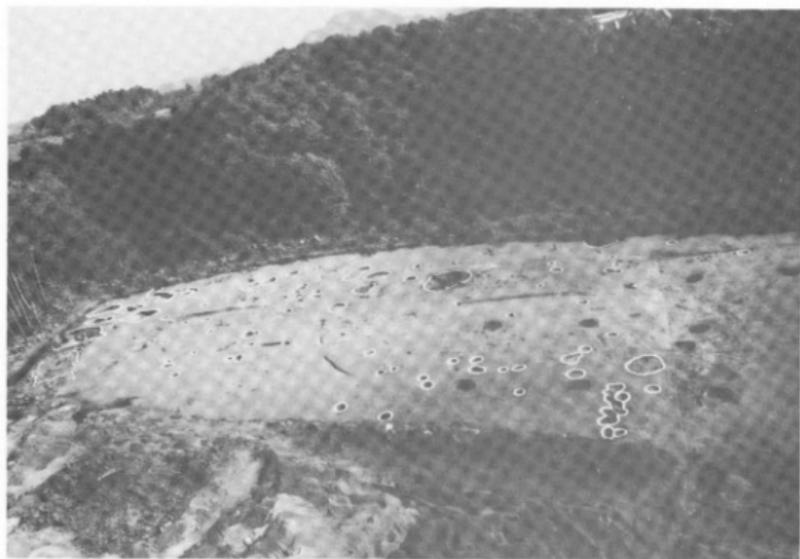
岸本町教育委員会保管遺物（貝田原遺跡出土）

Po 1 土師器（8世紀後半） S 1 磨製石斧 S 2・3 黒曜石石鏃

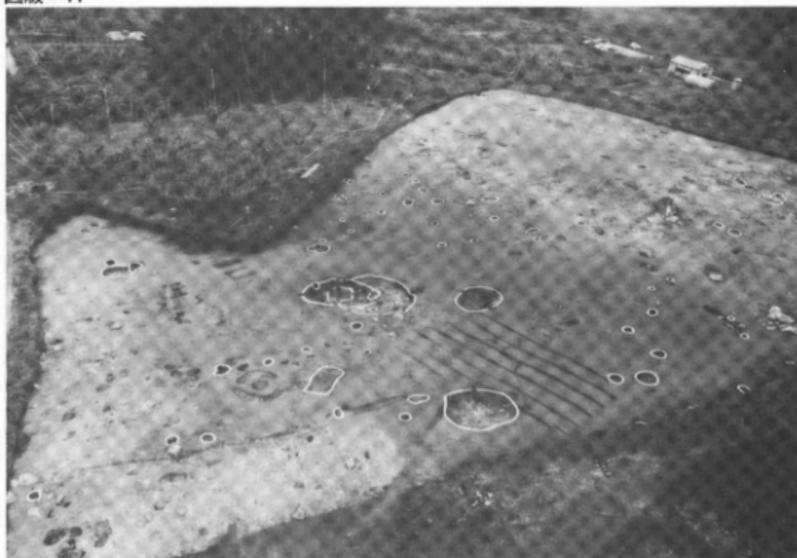
林ヶ原遺跡



現況 (西より)



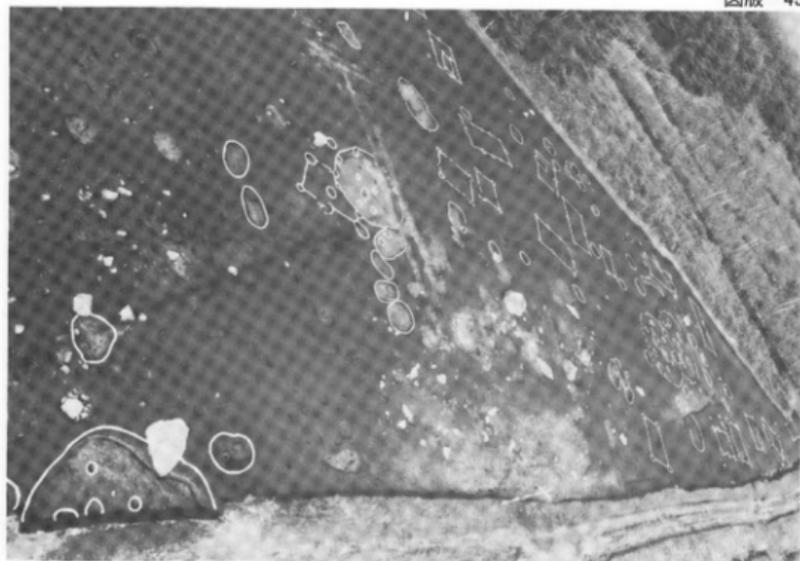
A区東側全景 (北より)



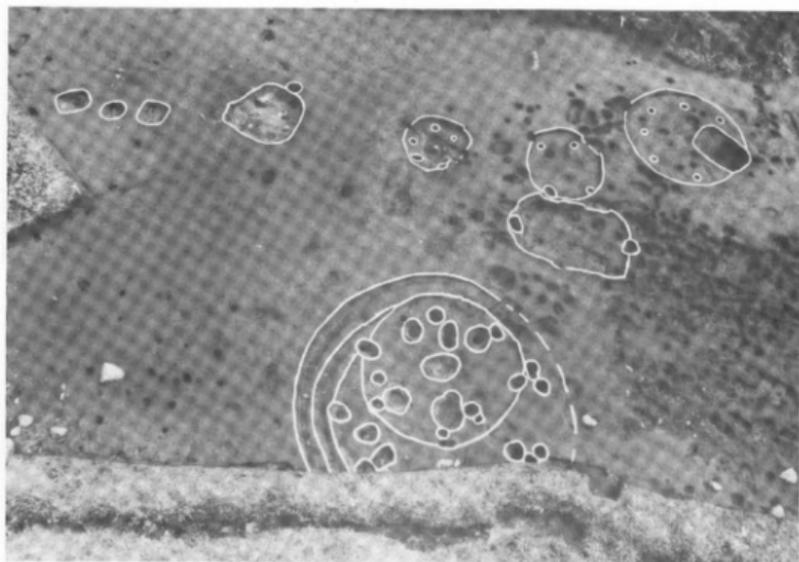
B区全景（東より）



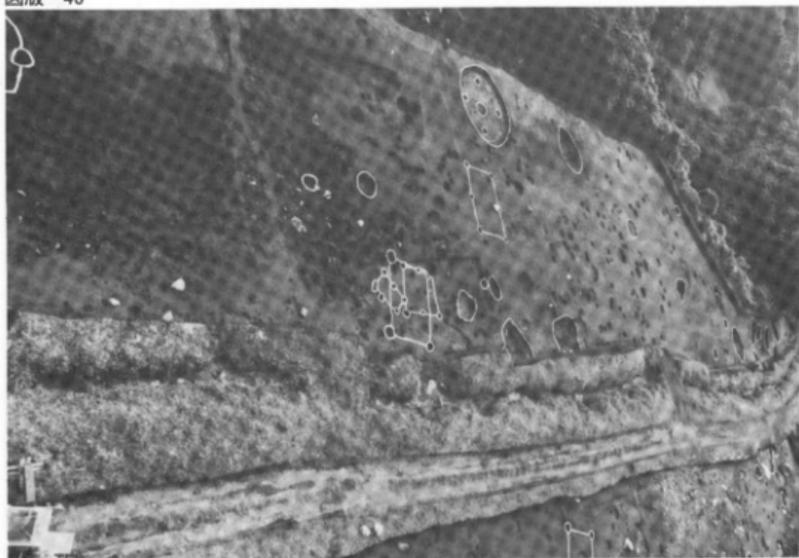
C区全景（東より）



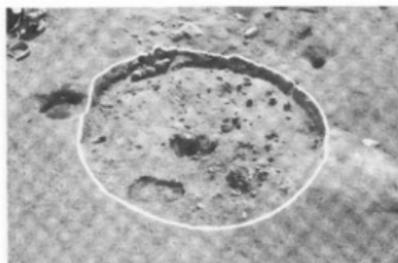
C区全景 (西より)



D区東側全景 (北より)



D区西側全景



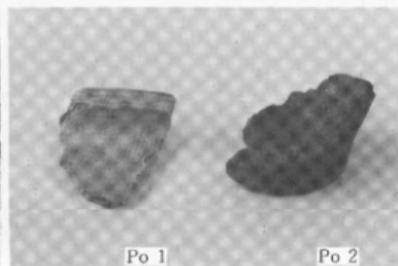
第1 竪穴住居跡全景



第1 竪穴住居跡と第13土坑



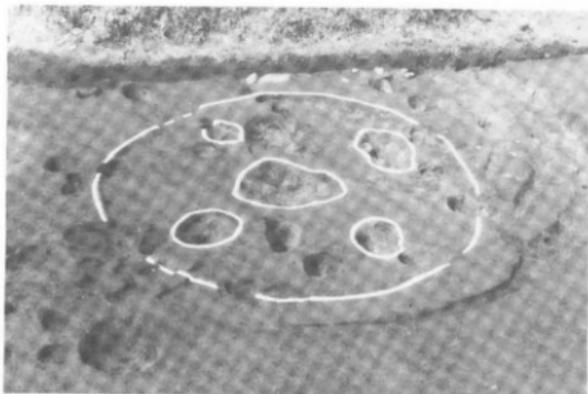
第1 竪穴住居跡貼床状況



Po 1 Po 2  
第1 竪穴住居跡出土遺物

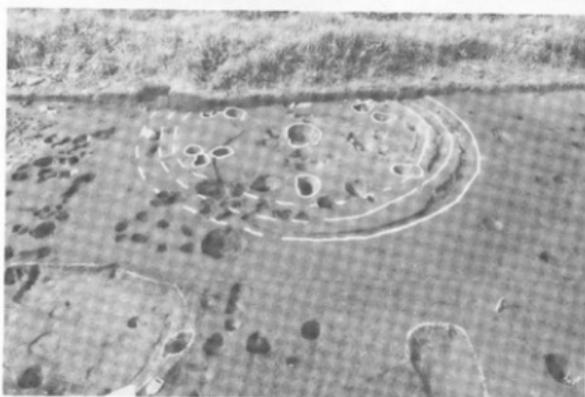
第2 壑穴住居跡

第1 段階



同

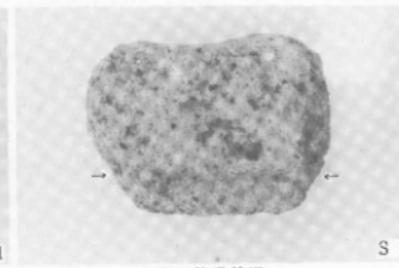
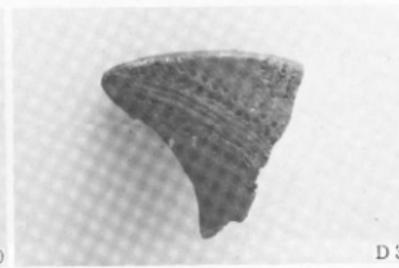
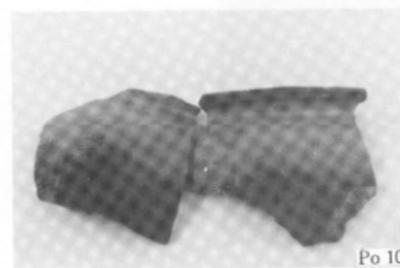
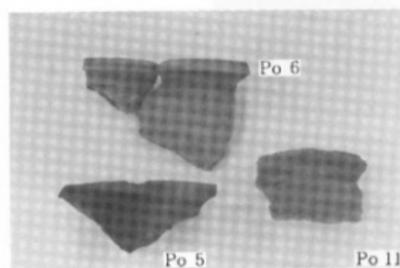
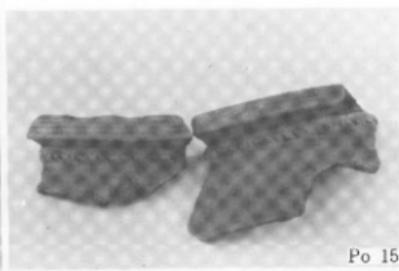
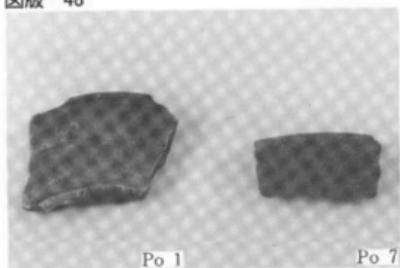
2 ~ 4 段階



同

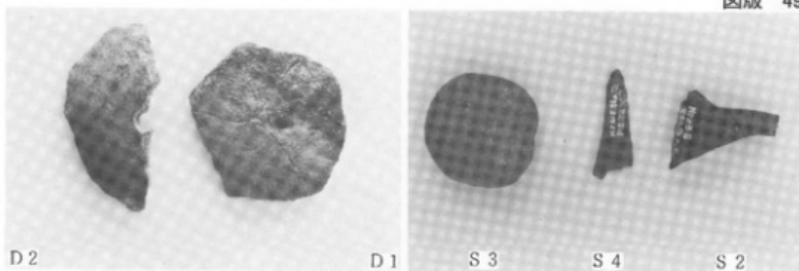
1 ~ 4 段階



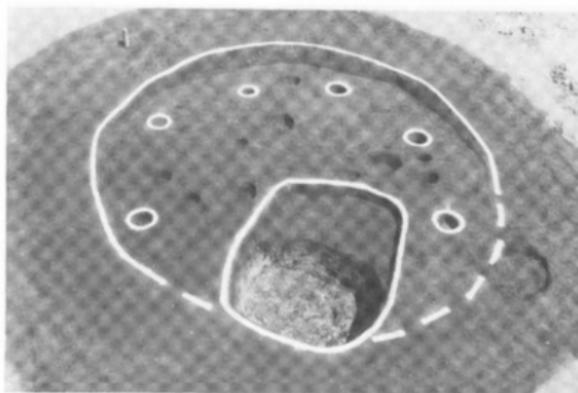


磨石

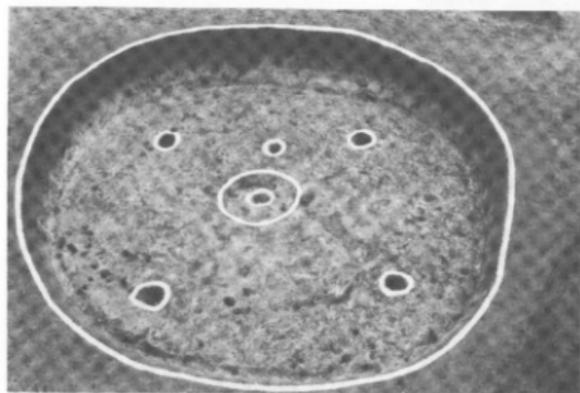
S 1 施溝状況



第2 竪穴住居跡出土遺物



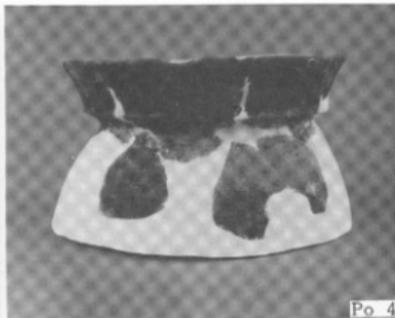
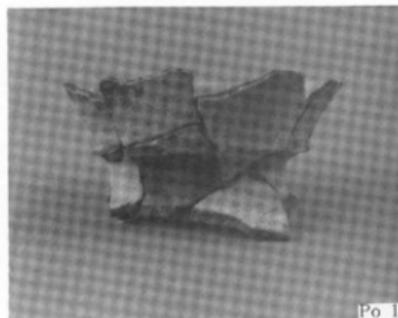
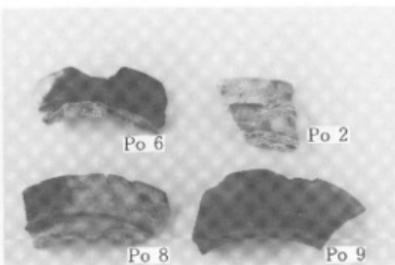
第3 竪穴住居跡  
と  
第29土坑全景



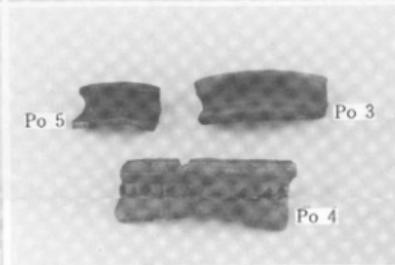
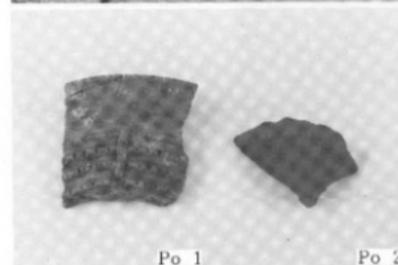
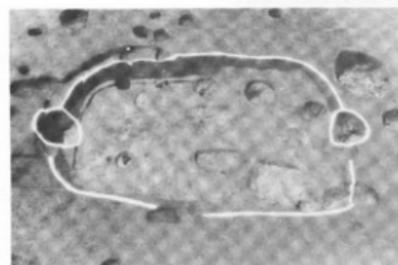
第4 竪穴住居跡全景



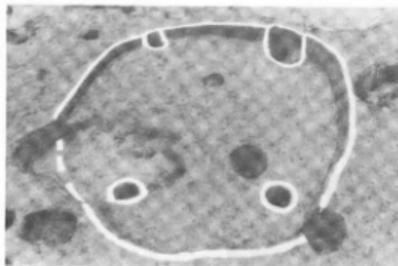
第4 竪穴住居跡遺物出土状況



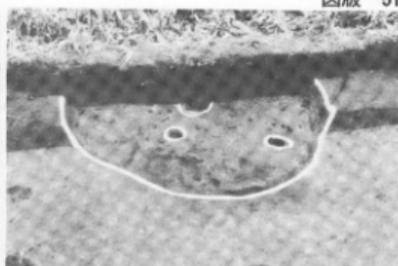
第4 竪穴住居跡出土遺物



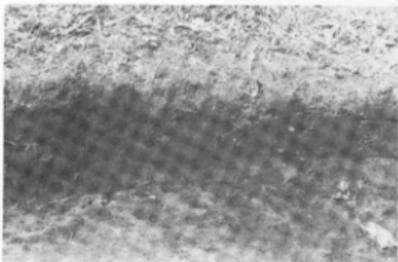
第5 竪穴住居跡全景および出土遺物



第6竖穴住居跡全景



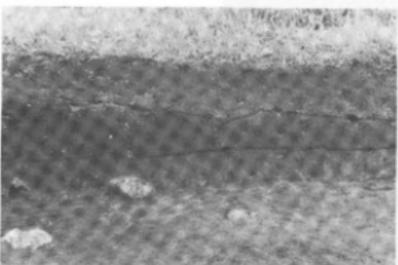
第7竖穴住居跡全景



D区H断面



第7竖穴住居跡Po 1出土状況



D区G断面



Po 1



D区F断面



Po 2

第7竖穴住居跡出土遺物

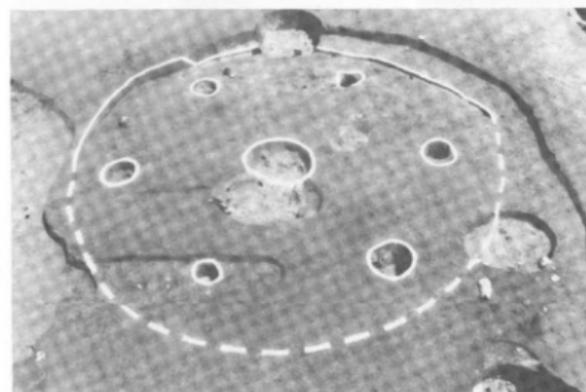


第 8 竖穴住居跡

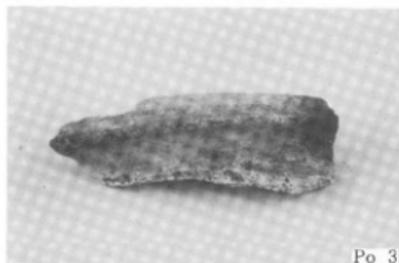
第 1 段階



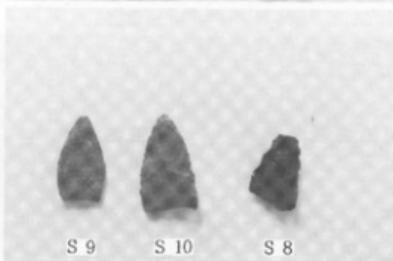
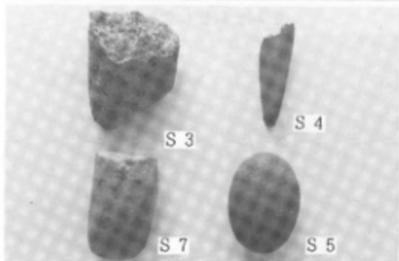
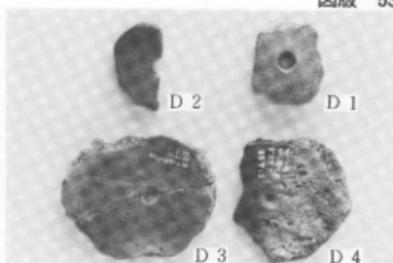
同  
第 2 段階



同  
第 3 段階



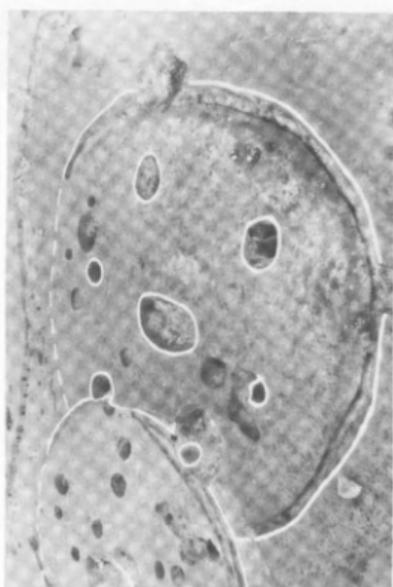
Po 3



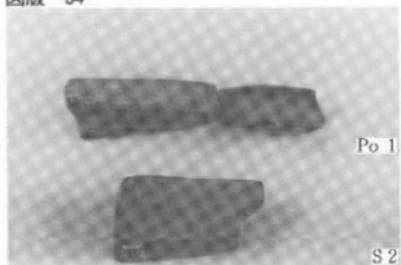
第 8 豎穴住居跡出土遺物



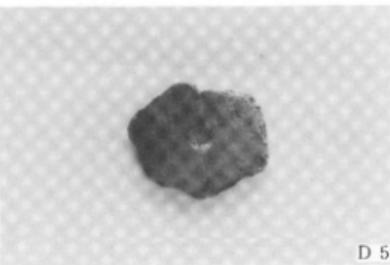
第 9 豎穴住居跡擴張前



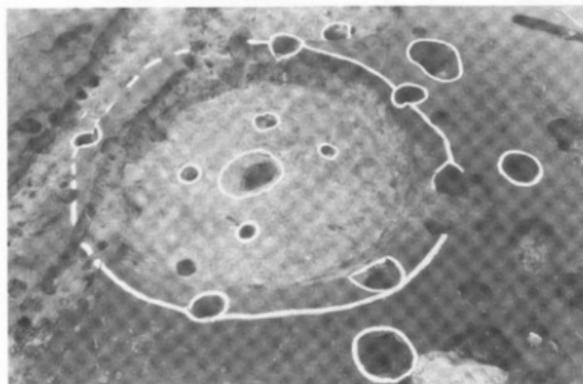
同擴張後



第9 竪穴住居跡出土遺物



第78土坑出土遺物

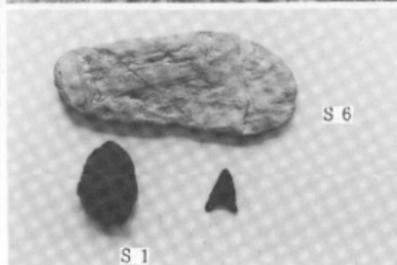
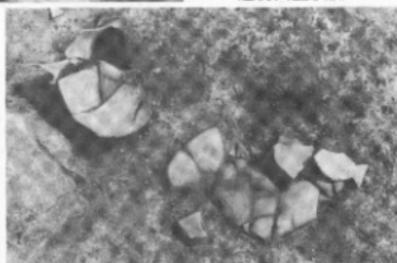


第10竪穴住居跡全景

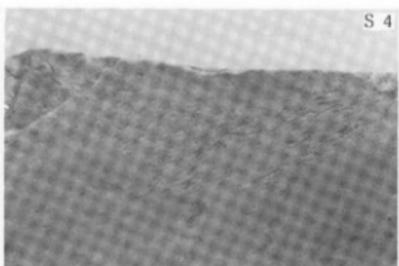
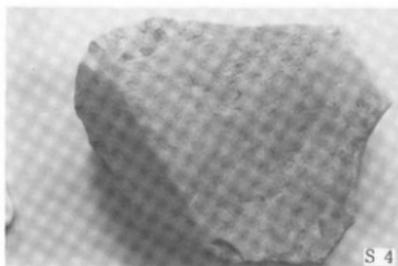
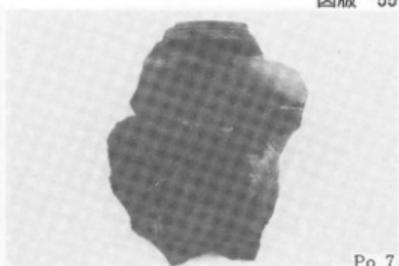
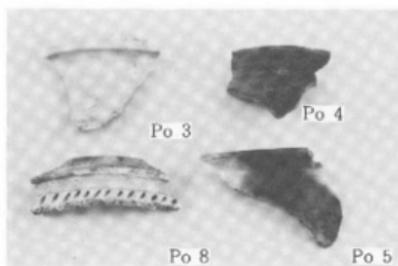
遺物出土状況



第10竪穴住居跡出土遺物

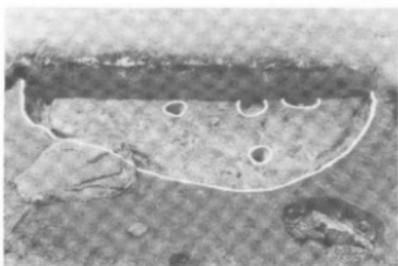


S 1

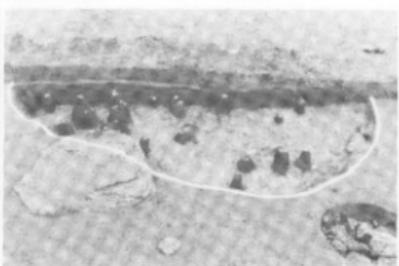


第10竪穴住居跡出土遺物

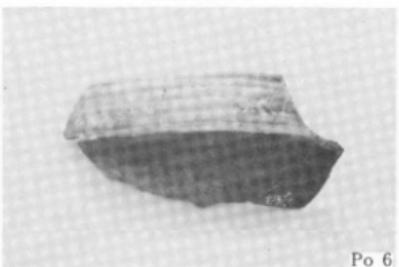
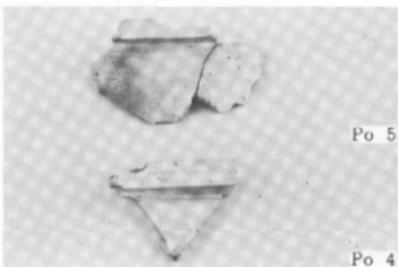
↑ S 4 使用痕



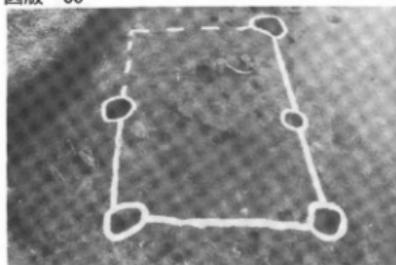
第11竪穴住居跡全景



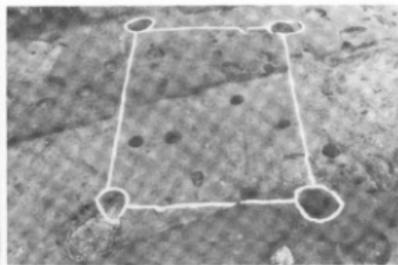
遺物出土状況



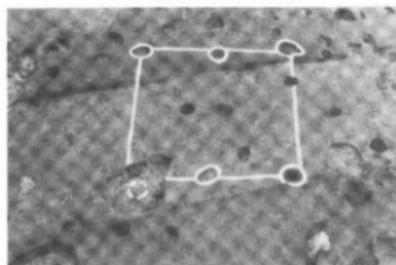
第11竪穴住居跡出土遺物



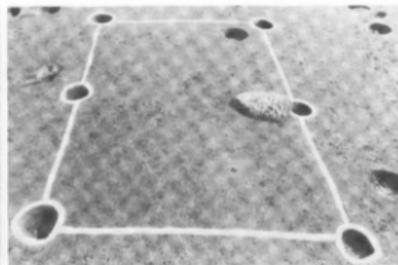
第1 掘立柱建物跡全景



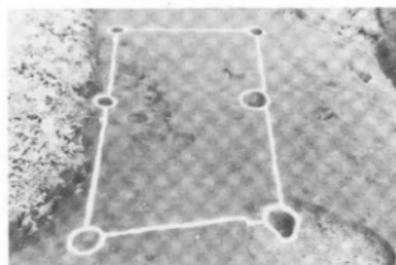
第2 掘立柱建物跡全景



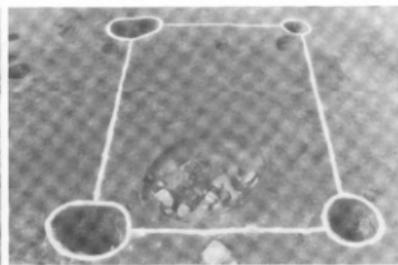
第3 掘立柱建物跡全景



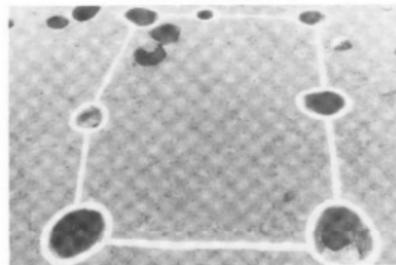
第5 掘立柱建物跡全景



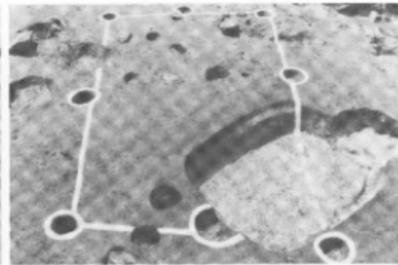
第6 掘立柱建物跡全景



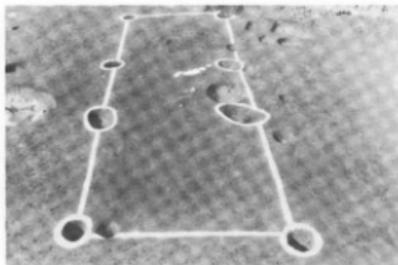
第7 掘立柱建物跡全景



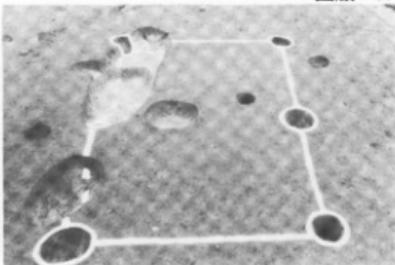
第8 掘立柱建物跡全景



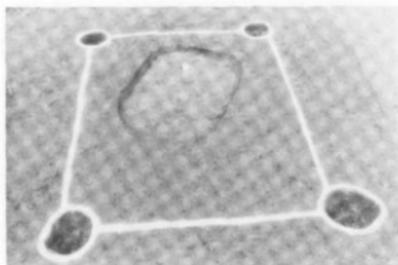
第9 掘立柱建物跡全景



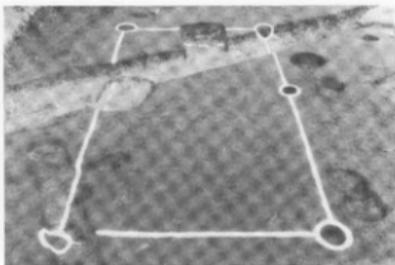
第10掘立柱建物跡全景



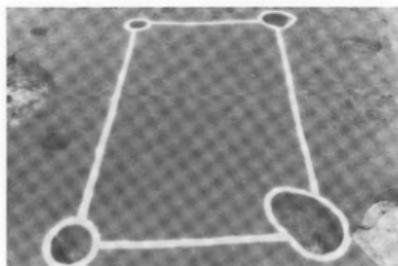
第11掘立柱建物跡全景



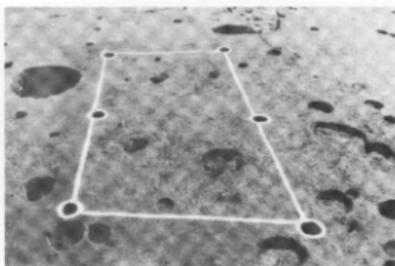
第12掘立柱建物跡全景



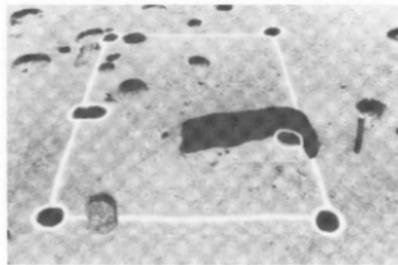
第13掘立柱建物跡全景



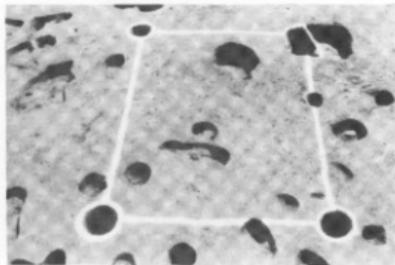
第14掘立柱建物跡全景



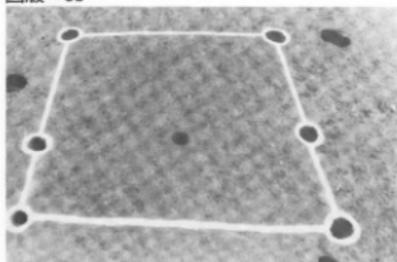
第15掘立柱建物跡全景



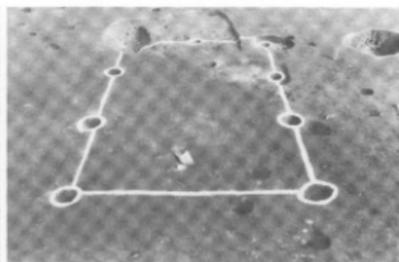
第16掘立柱建物跡全景



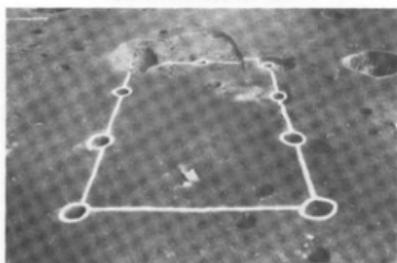
第17掘立柱建物跡全景



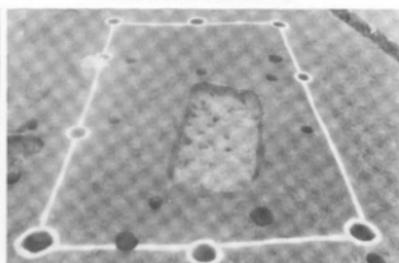
第18掘立柱建物跡全景



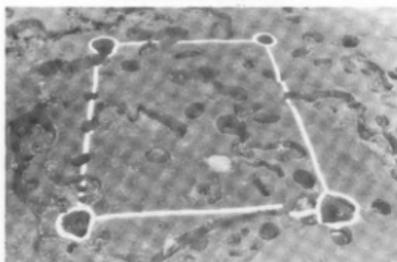
第19掘立柱建物跡全景



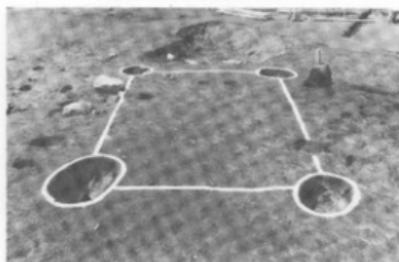
第20掘立柱建物跡全景



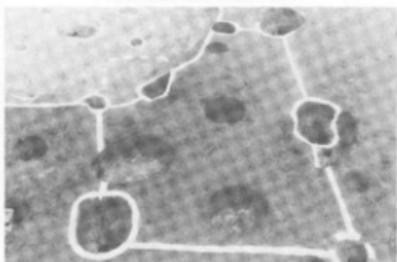
第21掘立柱建物跡全景



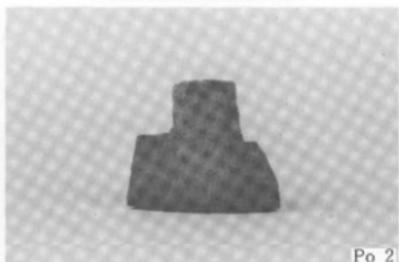
第22掘立柱建物跡全景



第23掘立柱建物跡全景



第24掘立柱建物跡全景



第10掘立柱建物跡出土遺物



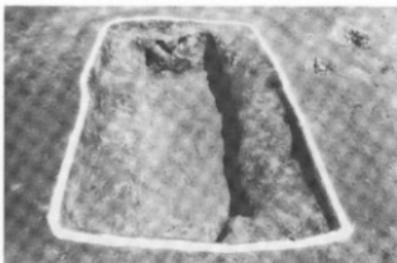
Po 2

第12掘立柱建物跡出土遺物



Po 1

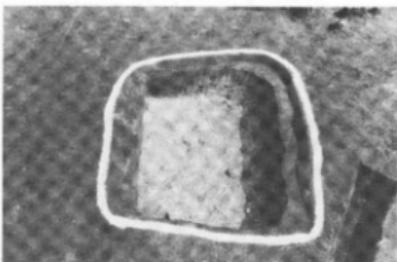
第23掘立柱建物跡出土遺物



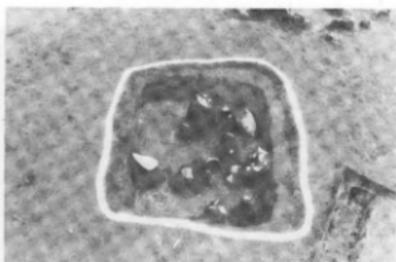
第1木棺墓全景



第2木棺墓全景



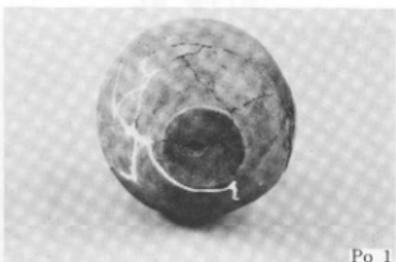
第3木棺墓全景



第3木棺墓遺物出土状況

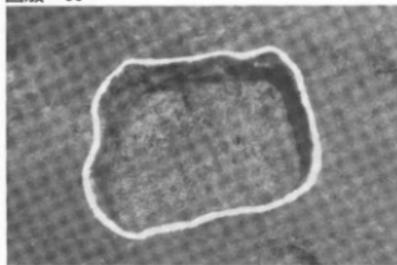


Po 1



Po 1

供献土器及び穿孔状況



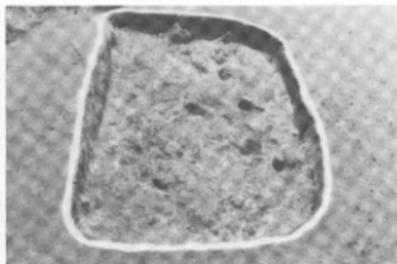
第9土坑全景



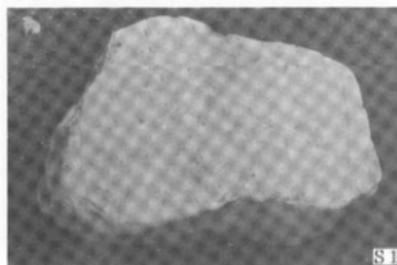
第9土坑遺物出土状況



第9土坑出土遺物



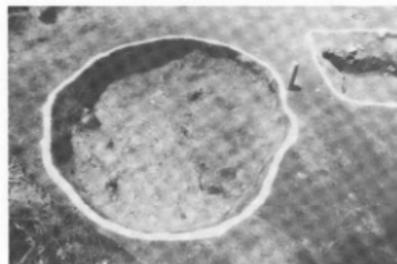
第1土坑全景



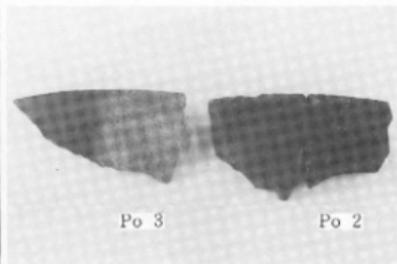
第1土坑 標石



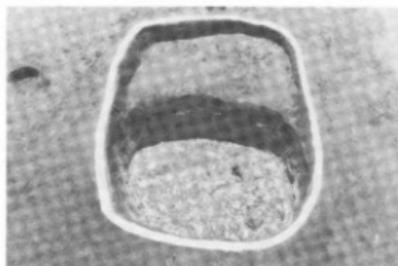
第1土坑出土遺物



第2土坑全景



第2土坑出土遺物



第29土坑全景



第30土坑全景

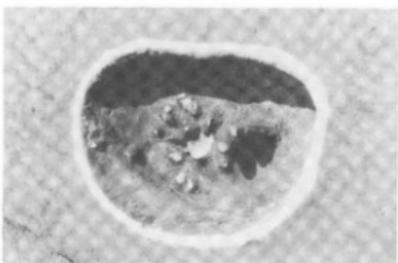


第30土坑出土遺物

Po 1



Po 1 の円形浮文

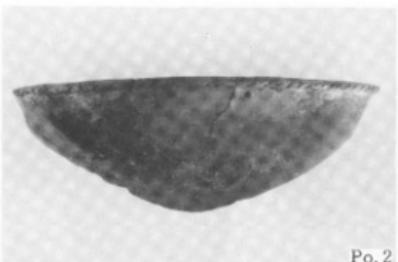


第31土坑全景



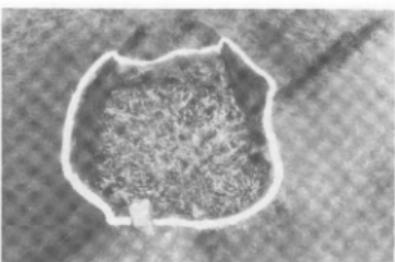
第31土坑出土遺物

Po 1

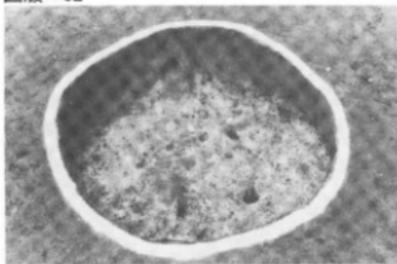


第31土坑出土遺物

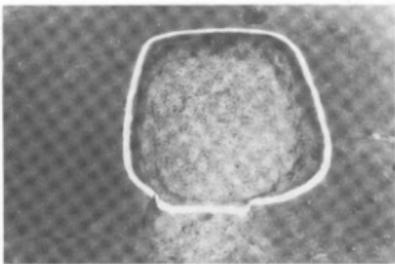
Po. 2



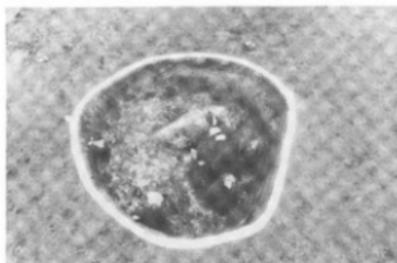
第32土坑全景



第36土坑全景



第52土坑全景



第53土坑全景



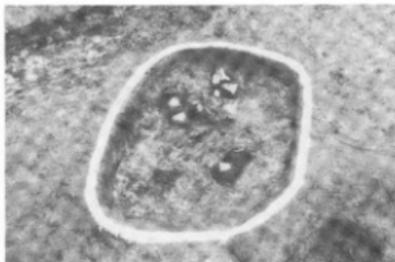
第53土坑出土遺物

Po 1



第53土坑出土遺物

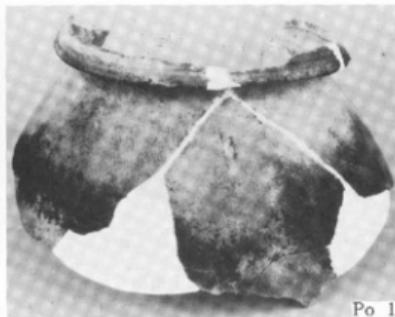
Po 2



第54土坑全景

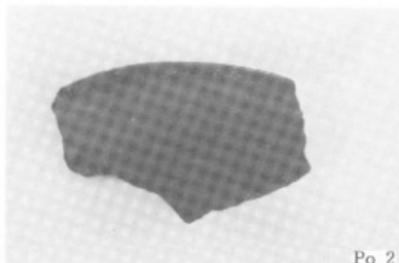


第55土坑全景



第55土坑出土遺物一

Po 1

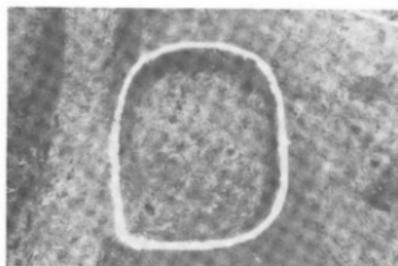


Po 2



Po 3

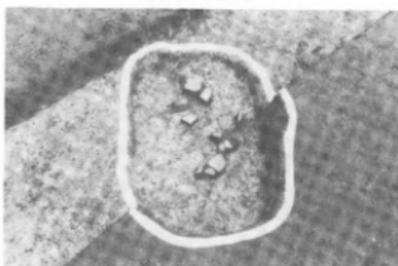
第55土坑出土遺物



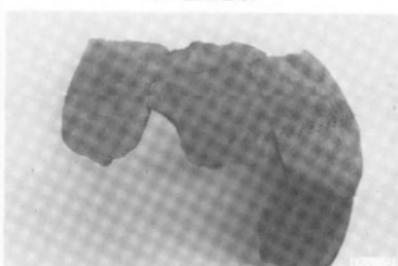
第56土坑全景



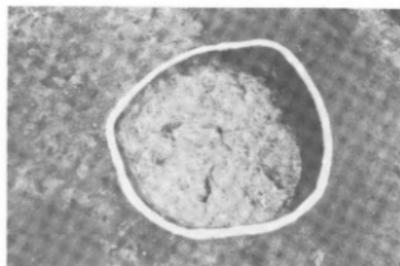
第58土坑全景



第59土坑全景



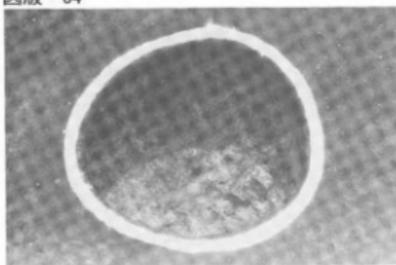
第59土坑出土遺物



第60土坑全景



第63土坑全景

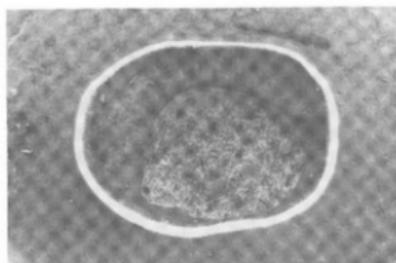


第65土坑全景

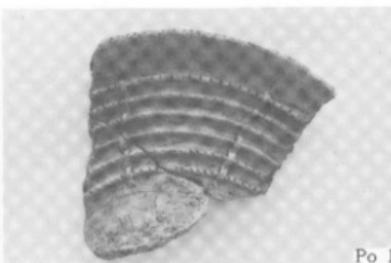


Po 1

第65土坑出土遺物

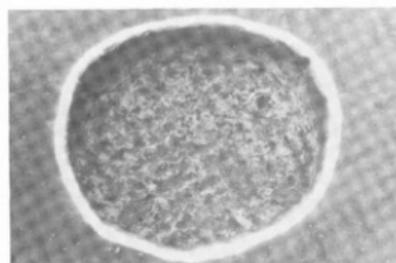


第67土坑全景



Po 1

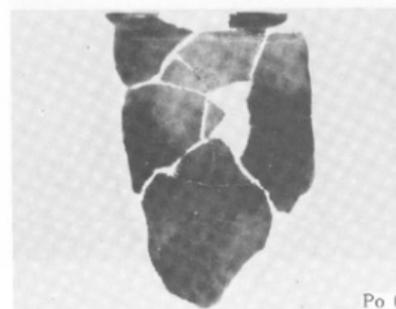
第67土坑出土遺物



第68土坑全景



第68土坑遺物出土狀況

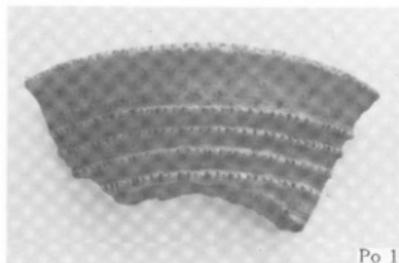


Po 6

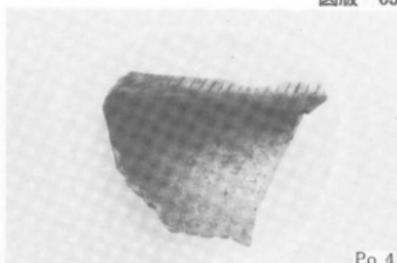
第68土坑出土遺物



Po 7

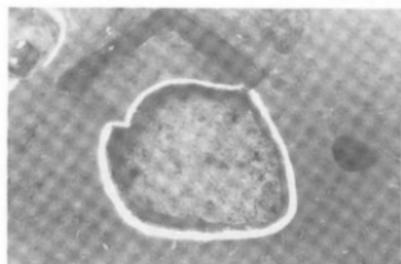


Po 1

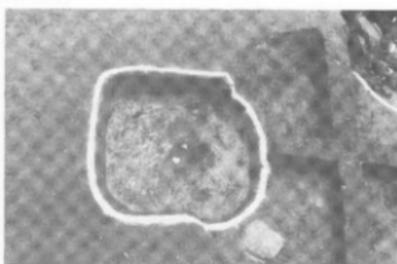


Po 4

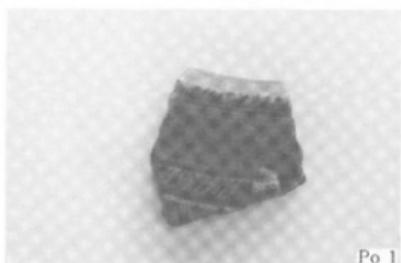
第68土坑出土遺物



第69土坑全景

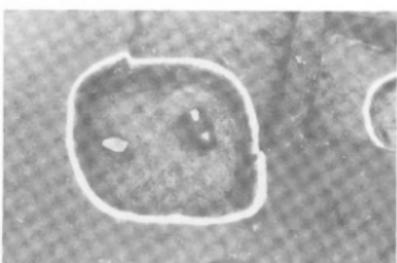


第70土坑全景

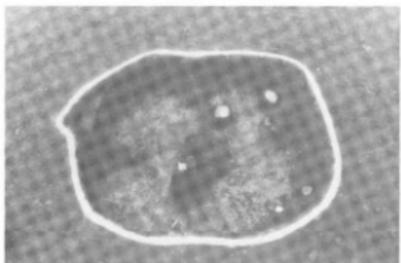


Po 1

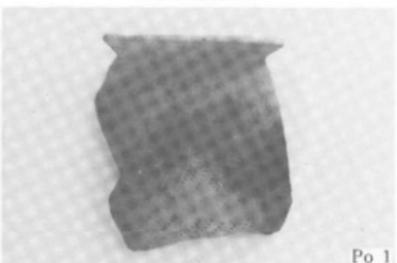
第70土坑出土遺物



第71土坑全景

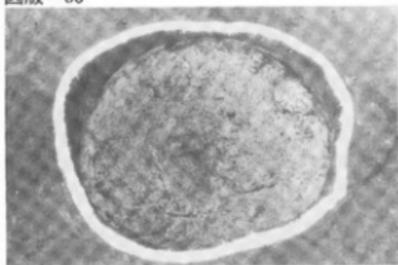


第72土坑全景

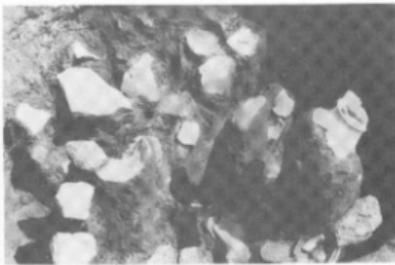


Po 1

第72土坑出土遺物



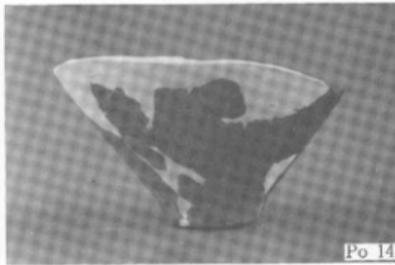
第73土坑全景



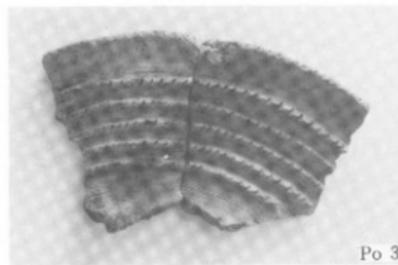
第73土坑遺物出土狀況



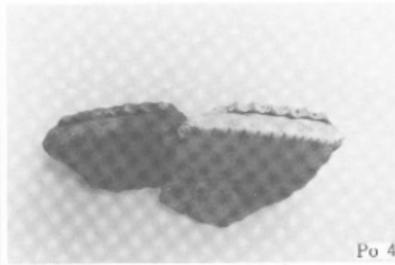
Po 1



Po 14



Po 3

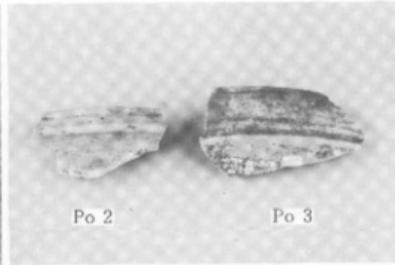


Po 4

第73土坑出土遺物



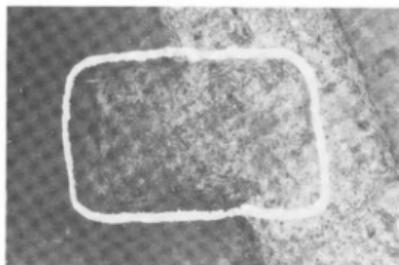
第75土坑全景



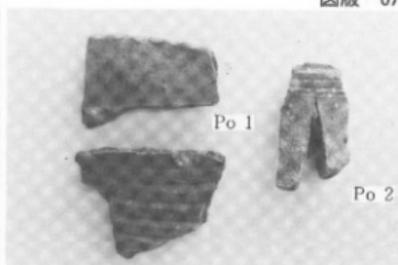
Po 2

Po 3

第75土坑出土遺物



第77土坑全景



第77土坑出土遺物



第79土坑全景



第80土坑全景



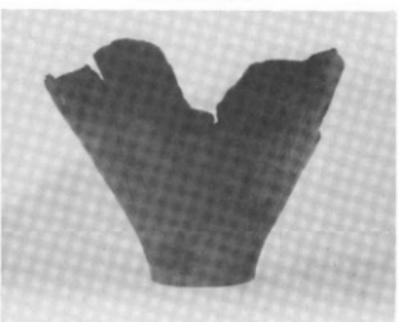
第80土坑出土遺物



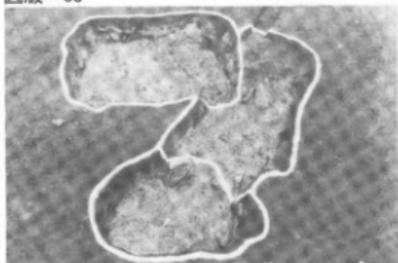
第81土坑全景



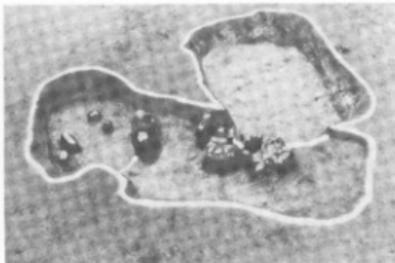
↑  
第81土坑出土遺物



→



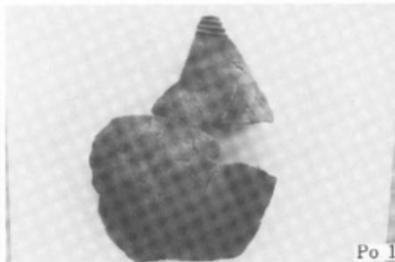
第82・83・84土坑全景



第82・83・84土坑遺物出土狀況



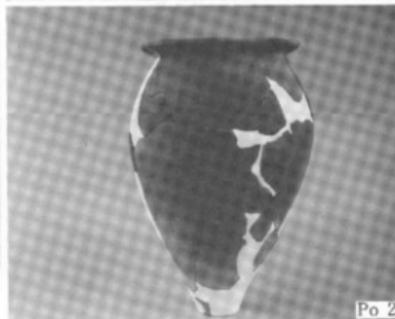
Po 5



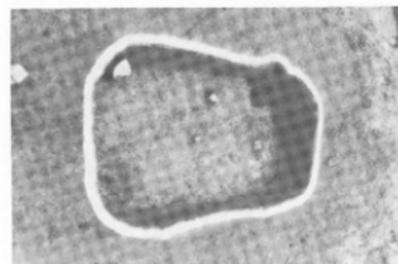
Po 1



第82土坑出土遺物



第84土坑出土遺物



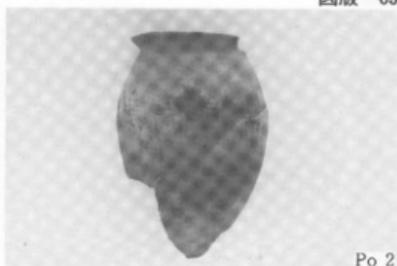
第85土坑全景



第86土坑全景

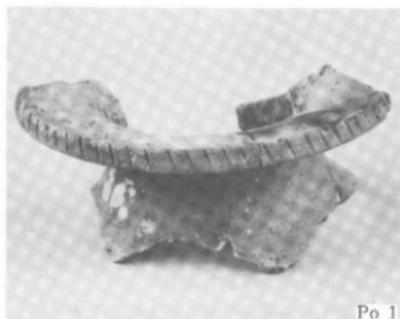


第87土坑全景



第87土坑出土遗物

Po 2

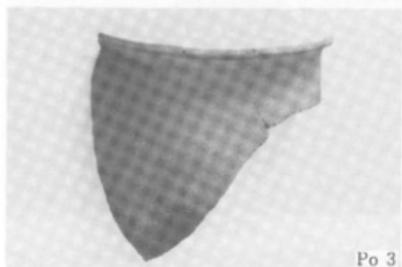


Po 1

第87土坑出土遗物

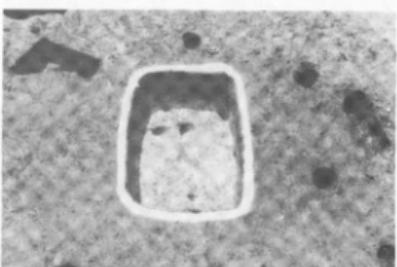


Po 4

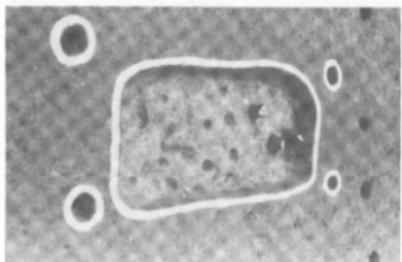


Po 3

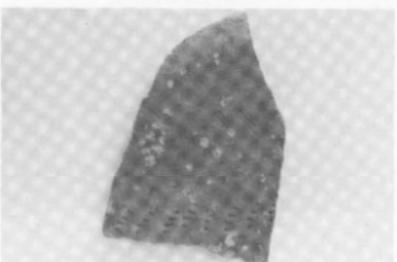
第87土坑出土遗物



第89土坑全景



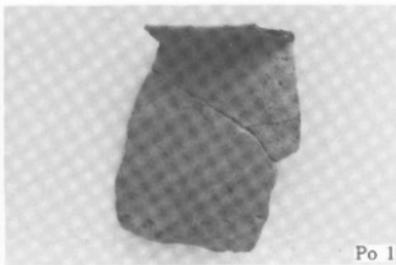
第90土坑全景



第90土坑出土遗物



第91土坑全景

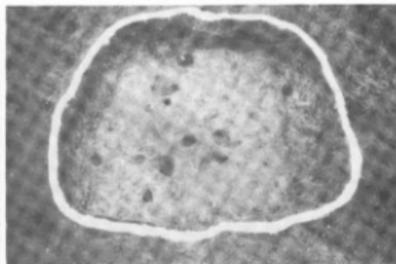


第91土坑出土遺物

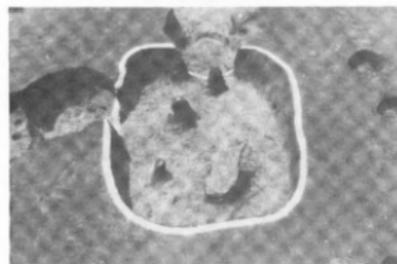
Po 1



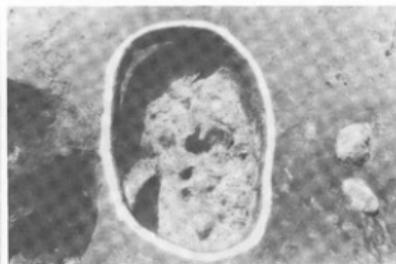
第92土坑全景



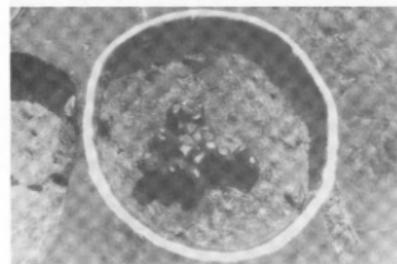
第94土坑全景



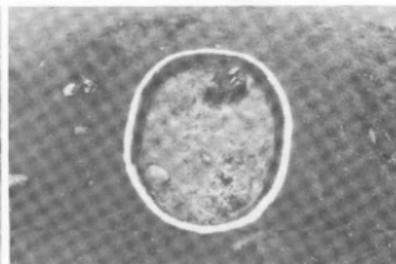
第95土坑全景



第97土坑全景



第98土坑全景



第99土坑全景

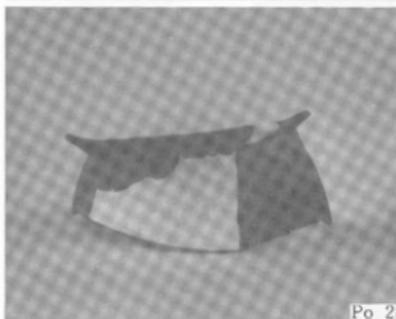


Po 1



Po 1

Po 2

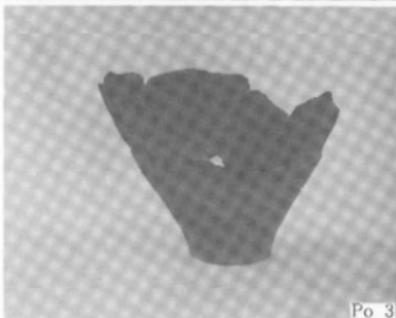


Po 2



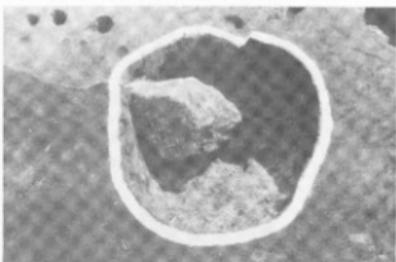
Po 3

第99土坑出土遺物

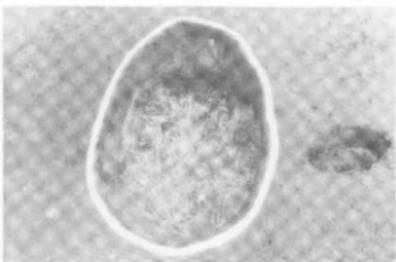


Po 3

第98土坑出土遺物



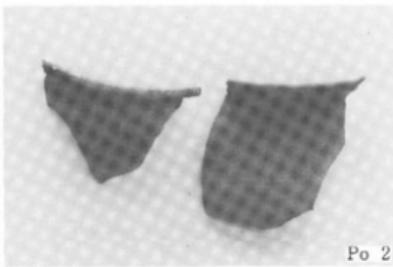
第100土坑全景



第101土坑全景



Po 1



Po 2

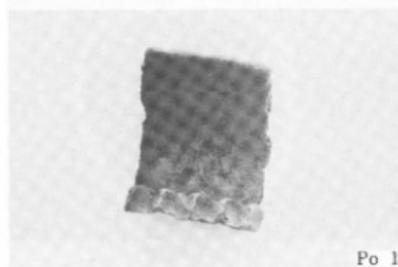
第101土坑出土遺物



第104土坑全景



第107土坑全景

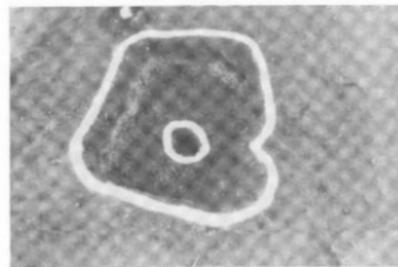


Po 1

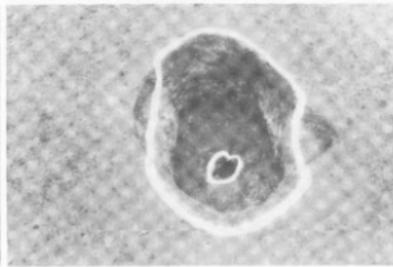
第107土坑出土遺物



第108土坑全景



第22土坑全景



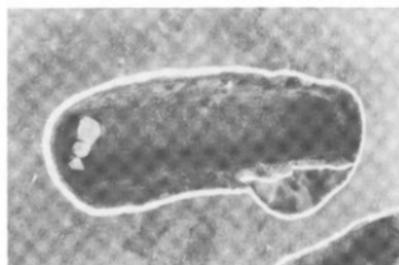
第39土坑全景



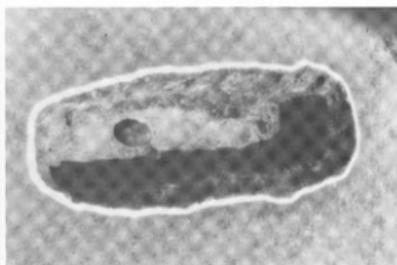
第40土坑全景



第44土坑全景



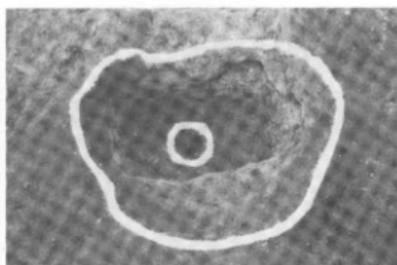
第45・46土坑全景



第47土坑全景



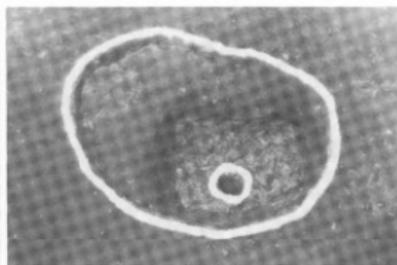
第44~47土坑全景



第48土坑全景



第49土坑全景



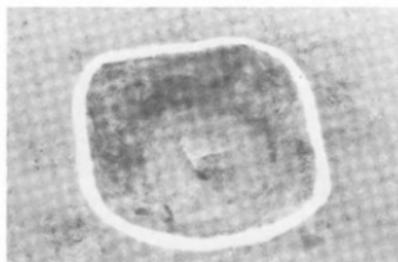
第103土坑全景



第10土坑全景



第14土坑全景



第15土坑全景



第15土坑遺物出土状況



第15土坑遺物出土状況

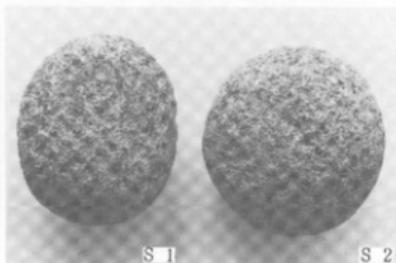
第15土坑出土遺物→



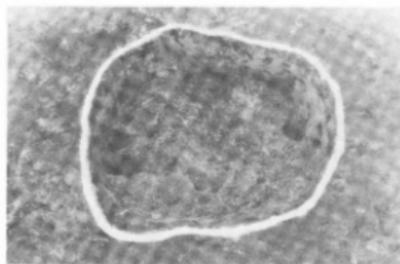
Po 1



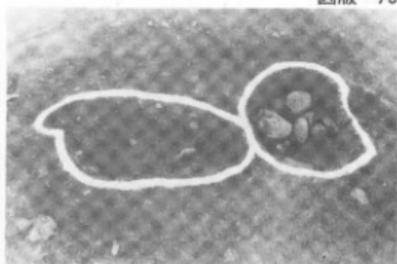
第17土坑全景



第17土坑出土遺物



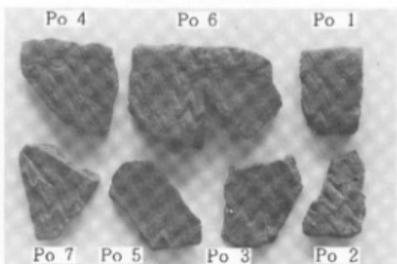
第18土坑全景



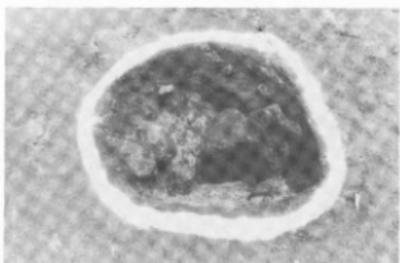
第19・20土坑全景



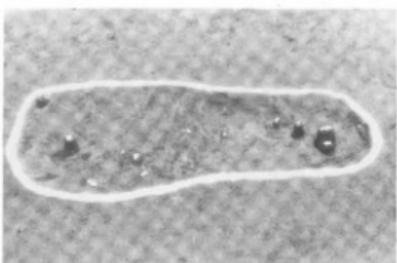
第25土坑全景



第25土坑出土遗物



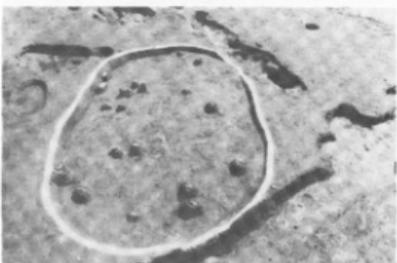
第26土坑全景



第28土坑全景



第51土坑全景

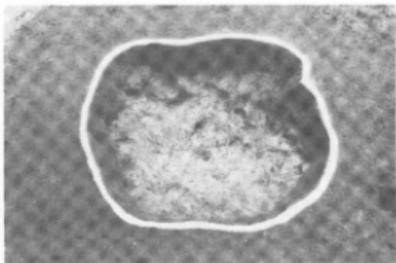


第62土坑全景

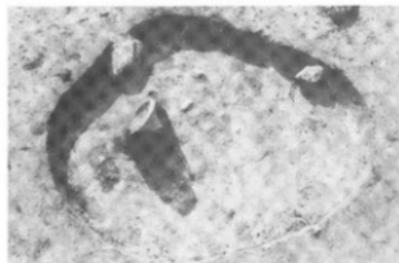


Po 1

第62土坑出土遺物



第66土坑全景

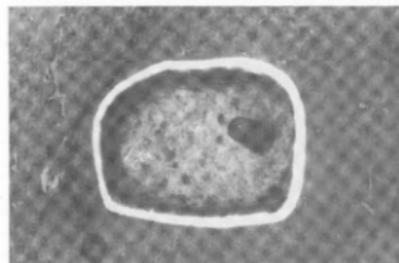


第74土坑全景

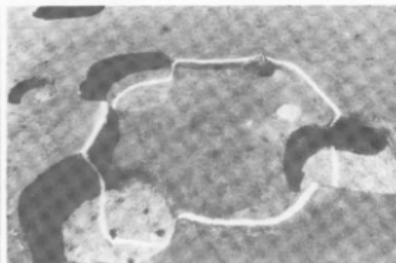
第74土坑出土遺物→



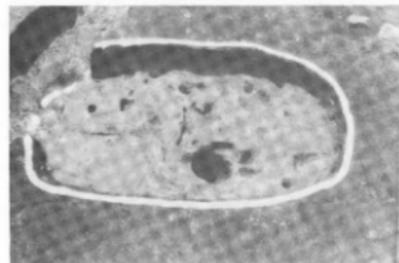
Po 2



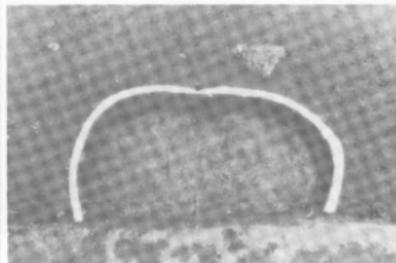
第76土坑全景



第88土坑全景



第96土坑全景

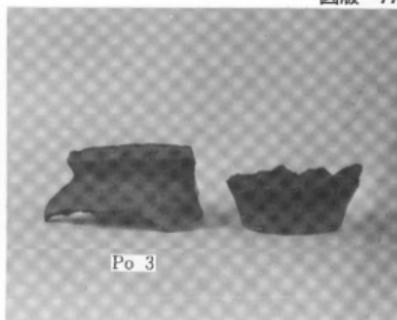


第106土坑全景



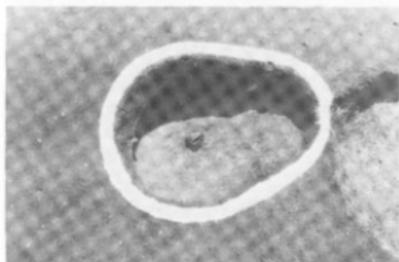
第88土坑出土遗物

Po 1

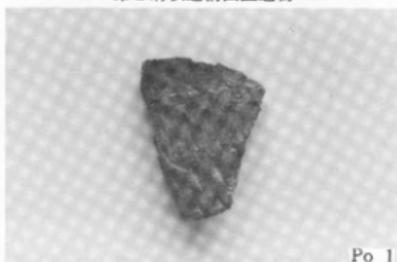


Po 3

第2 溝状遺構出土遺物

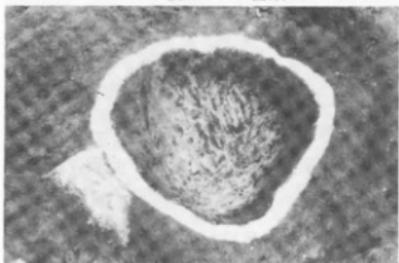


8 H地区P-1 全景



Po 1

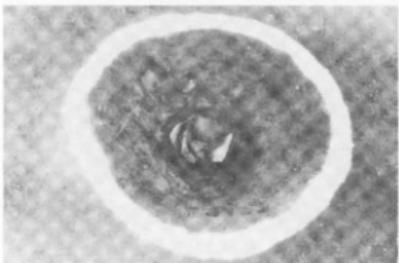
8 H地区P-1 出土遺物



14J 地区P-1 全景



14J P-1 集石状況



16K 地区P-1 全景



Po 1

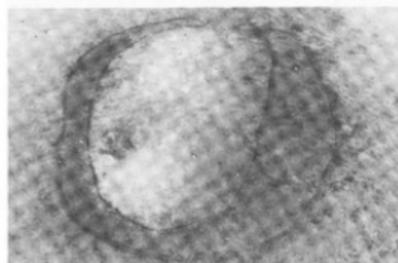
16K 地区P-1 出土遺物



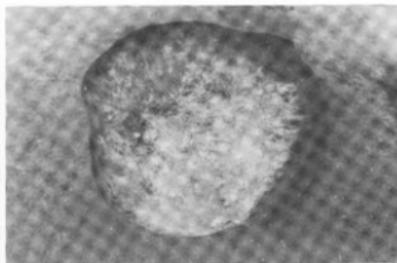
第3土坑全景



第4・5土坑全景



第11土坑検出状況



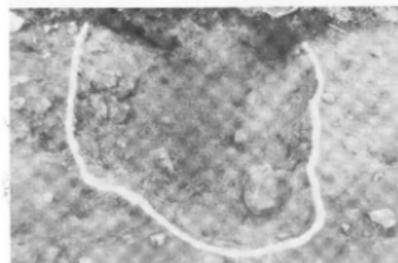
第11土坑全景



第12土坑全景



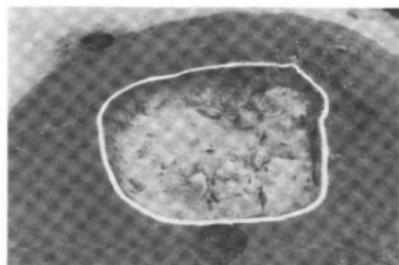
第13土坑全景



第16土坑全景



第24土坑全景



第27土坑全景



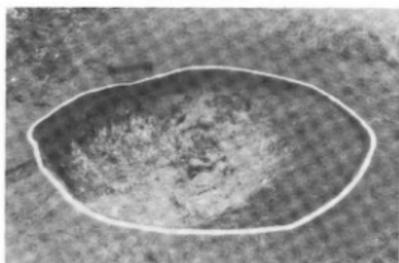
第33土坑全景



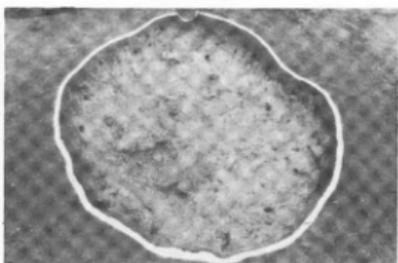
第34土坑全景



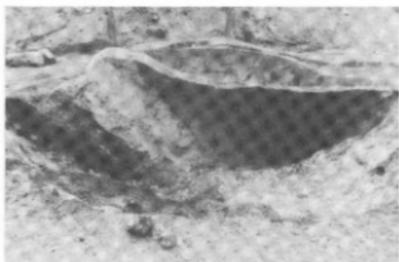
第37土坑全景



第38土坑全景



第42土坑全景

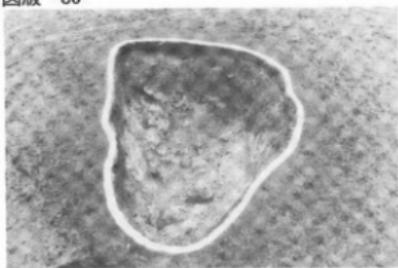


第42土坑断面

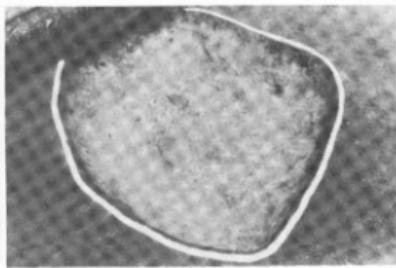


第42土坑出土遗物

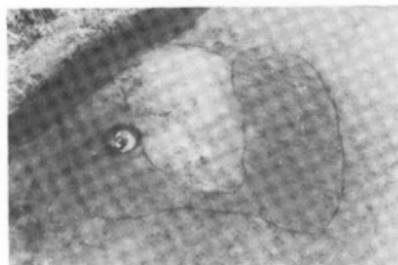
Po 1



第43土坑全景



第50土坑全景



第50土坑檢出狀況



第50土坑土器出土狀況

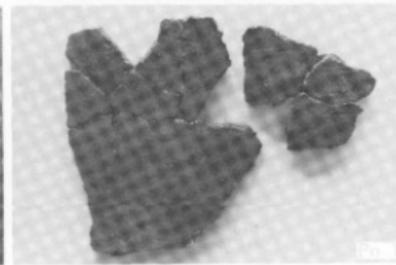


第93土坑全景

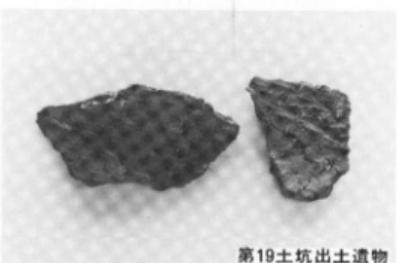
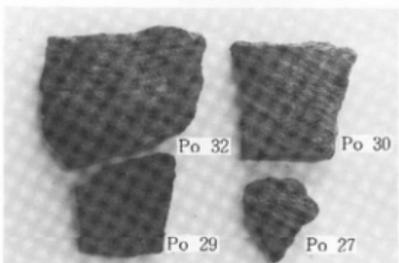
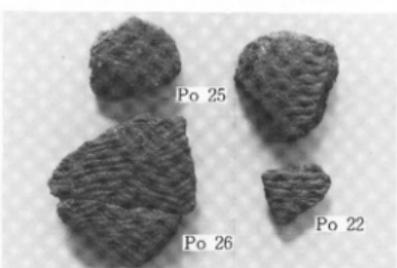
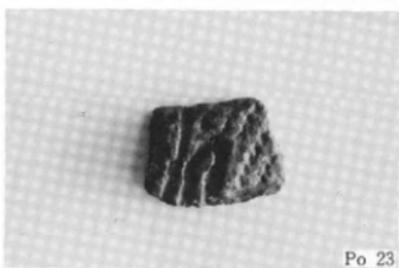
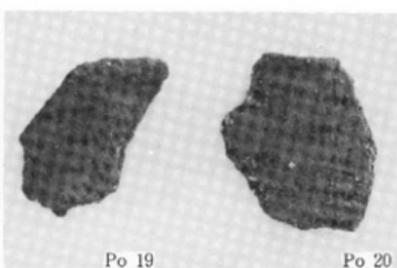
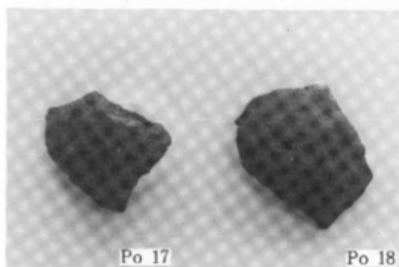
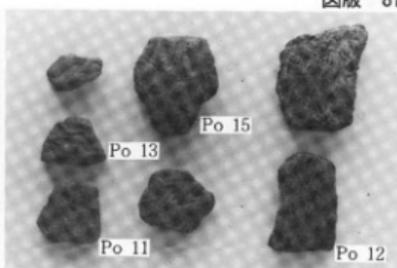
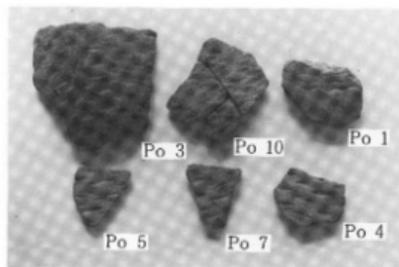
Po 1 ← 第50土坑出土遺物



第102土坑全景



第102土坑出土遺物



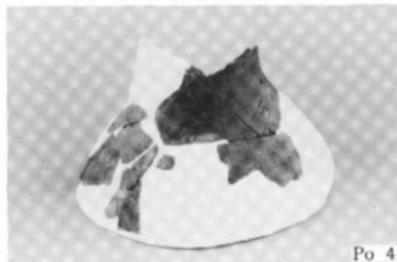
遺構・遺構外出土の縄文土器



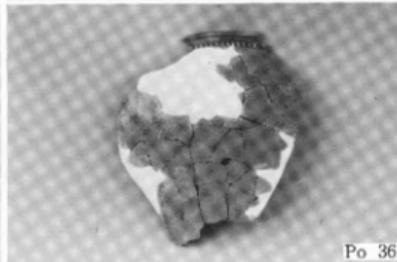
Po 4



Po 5

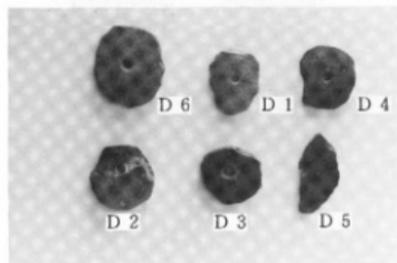


Po 4



Po 36

遺構外出土の弥生土器

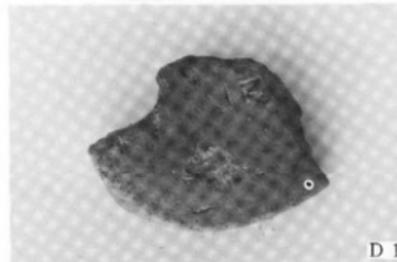


遺構外出土の紡錘車



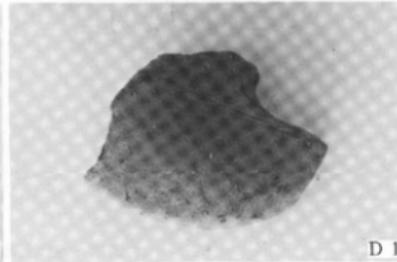
D 2

分銅型土製品



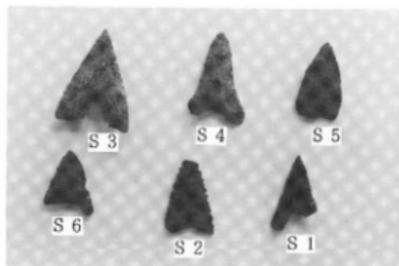
D 1

分銅形土製品 表



D 1

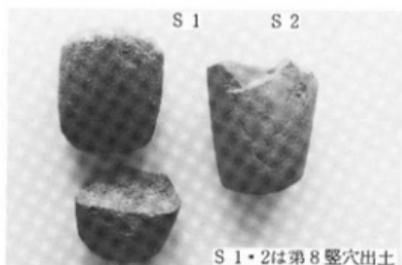
分銅形土製品 裏



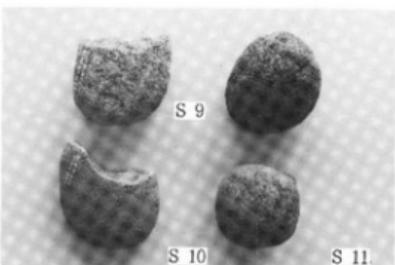
石 鏃



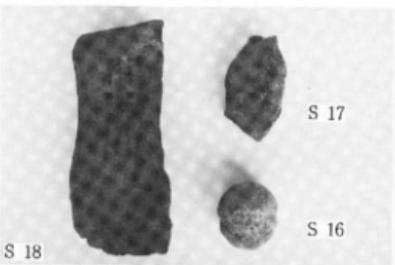
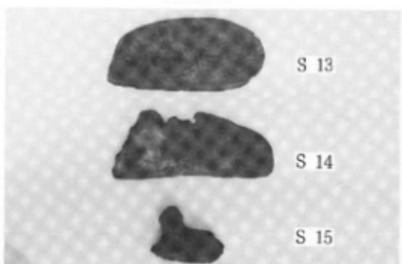
局部磨製石斧



S 1・2は第 8 壜穴出土  
磨製石斧



磨 石



岸本町教育委員会保管遺物（林ヶ原遺跡出土）



発 掘 風 景

久古第3遺跡・貝田原遺跡・林ヶ原遺跡  
発掘調査報告書

中国横断自動車道岡山・米子線建設工事及び  
主要地方道名和岸本線道路改良工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 昭和59年(1984年)3月  
編集 財団法人鳥取県教育文化財団  
〒680 鳥取市扇町21番地  
発行 同上  
印刷 日ノ丸印刷株式会社  
〒680 鳥取市寿町915番地